
人外魔境戦記譚

天城蒼古

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人外魔境戦記譚

【Nコード】

N4299V

【作者名】

天城蒼古

【あらすじ】

最終戦争によって荒廃した世界から異界の大陸へと流れ着いた、帝国陸軍少将神蓮。だが、その世界において、ヒトは絶対の支配者たる魔族の奴隷や家畜として扱われていた。

蓮は圧政を敷く魔族の軍勢を相手取り、人々を率いて戦争を開始する。悪鬼はびこる人外魔境の地にて、今、戦乱の火蓋が切られたSF対ファンタジーをテーマに描いた架空戦記です。現在、第四章掲載中。

登場人物紹介簡易版（前書き）

簡単な登場人物紹介です。

ネタバレは少ないですが、未読者の方は回避推奨

登場人物紹介簡易版

『第一章』

榊蓮

主人公。SF側の主人公に当たる。

黒髪黒目の長身でカーキ色の軍服と軍帽がトレードマーク。

強化人間であり、身体能力が高く、頭も切れる。性格はやや冷酷。

ベルナット・クーガ

解放軍のリーダー。ファンタジー側の主人公でもある。

金髪金眼の長身。頭に月桂冠を被っている。年齢は21歳。

指揮官としての実力は蓮に及ばないがある種のカリスマ性を持つ。性格は温和。

ルシユア・ロット

解放軍の一員。ベルナットの副官。

金髪碧眼の女性。美女だが性格は男勝り。

年齢は19歳。大人の女性と少女の中間の位置。

デイーノ

解放軍の一員。やせぎすの男。

狡猾で打算に長ける。

ライゼル

解放軍の一員。禿頭の大男。

見た目はいかついが実際には気が弱い。

スクローファ

獣人種『巨亥の一族』の族長。

二足歩行のイノシシ。短気で激昂しやすい性格。

『第二章』

如月

黒い肌の巨馬。種族は馬ではなく魔獣の一種であるナイトメア。

要氷堂

榊蓮の副官。なにかと苦勞人。

黒髪黒目で童顔に眼鏡をかけているのが特徴。蓮と違って帽子、外套はなし。

レオパルト

魔人種『鍊鋼の一族』の族長。四軍将の一人。

見た目は豹面の兜を被った板金鎧。身長は2m以上。腕力も高い。また、自らの半身たる武器として長剣ステインガーを持つ。

ゲパルト

魔人種『鍊鋼の一族』の副長。レオパルトの補佐を務める。

ニユート

獣人種『赤守の一族』の族長。赤い肌をした二足歩行のイモリ。

鉦山都市テッセラリウスの統監兼守備隊長。同族の副長にマダラとハナダがいる。

ライム

魔人種『冰雪姫の一族』の族長。賢者の国ケントリオンの出身。

青い髪に青い瞳。学士風の姿をした若い女性。魔族であり、体温は人間よりも低い。

『第三章』

シヤム

獣人種『灰色猫の一族』とのハーフ。元剣闘士であり、現在はケツトシーの部下として活動中。

外見は黒い猫耳を生やしただらしない格好の男。性格はやや軽薄。

サラシナ

獣人種『大王猫の一族』とのハーフ。『黒い仔猫亭』の店主。

エプロンドレスを着た猫耳の女性。性格は面倒くさがり。

ケツトシー

獣人種『大王猫の一族』の族長。プリマス最大の商会『黒猫商会』の会長。

見た目は巨大な二足歩行の黒猫。性格は典型的な商売人。

エイブラムス

魔人種『鍊鋼の一族』の族長。四軍将筆頭。

錆びた青銅の色をした禍々しい意匠の板金鎧を身に纏う。身長は170cmほどと、鍊鋼の一族にしては矮躯。

自らの半身たる武器として大剣タスクブレイドを持つ。

フレットナー

魔人種『鍊鋼の一族』の副長。エイブラムスの補佐を務める。

ハーフ。背中から羽根の生えたミミズク頭の板金鎧。半身たる武器は長槍。

ブラッドレー

魔人種『鍊鋼の一族』の副長。エイブラムスの補佐を務める。

ハーフ。下半身は馬で上半身は甲冑。半身たる武器は戦斧。

ドローティア

古代種『千識板の一族』の大王。ルガル帝国政務長官。

皇帝バシレウスの腹心であり、レギオニール地方へ調停役として派遣された。

プロローグ？

北アフリカ戦線と呼ばれるエジプト『カイロ要塞』の地下作戦司令室から、男はナイル川流域の氾濫原を眺めていた。

正確に言うと、男が眺めているのはナイル川ではなく、かつてナイル川と呼ばれていた場所だ。

太古の昔、人類が興ったとされるこの場所も、今は氷土に覆われた死の土地と化している。

舞い上がる灰塵。凍った大気。太陽の見えない仄暗い空。

それらは最早、この世界にとって馴染みとなった光景だった。

「……まるで地獄だな」

思わず、率直な感想が漏れた。

作戦司令室の高台に置かれた席に腰を降ろしているのは、背の高い、筋肉質な体を持つ男だ。

幾つもの勲章が縫い込まれたカーキ色の軍服を身に纏い、その上からは厚手の外套を羽織り、黒鞆に収められた軍刀を帯びている。

目深に被った帽子の下から見えるのは針金染みた黒髪と、薄暗い色をした切れ長の瞳。

掘りの深い顔立ちは二十代前半ほどだろうか。端然としていながらもどこか冷たく、亡霊のような印象を受ける風貌だった。

彼の名は帝国陸軍少将、さかきれん榊蓮。

アフリカ方面軍において総司令を務める百戦錬磨の古兵である。

「失礼します」

ふいにかすかな排気音と共に、作戦司令室のスライドドアが開く。扉の向こうから現れたのは線の細い、童顔の男だ。視力を簡単に回復できるこの時代には珍しく、フレームの細い眼鏡をかけている。

「司令、部隊の脱出が完了しました」

「ああ、御苦労だった。ところで一人逃げ忘れている奴がいるようだが？」

「気のせいでしょう」

あつさり言い放つて、男はそこが定位置であるかのように蓮の隣に立った。

「それに、まだ最後の仕事が残っています。司令にこの基地の自爆シーケンスを任せるのは自分としても不安ですから」

「だが、氷堂。お前にも家族が」

「いませんよ。恋人も子供も両親もね。残っているのは機械音痴の上官だけです」

「ああ、そうだったか。すまん」

悪びれもなく答えて、蓮は口元にうつすらと笑みを浮かべる。

要氷堂は長年、彼の隣で副官を務めている男だ。

突出した能力がないながらも優秀な軍人であり、蓮にとっては最も気心の知れた戦友でもある。

「それにしても、随分と寂しくなったものですね」

氷堂はがらんどうの司令室を見回し、ぽつりと呟く。

前線における兵甲の大半が無人性化されたとはいえ、本来この地下作戦司令室には多くの人員が詰め掛けているはずだった。

にも関わらず、広大な室内にはほとんど人の姿がない。どころか、基地に務める兵士は既に高速地上艇で外部に脱出している。

そのため、現在この司令室に残っているのは蓮と氷堂の二人だけだ。

彼らには最後の仕事。この要塞を敵軍もろとも爆破するという役目が残っている。

「司令。正直、自分はこの命令に納得が行きませんよ」氷堂はおもむろに口を開いた。

「仮に、我々が刀折れ矢尽きた状態だというのならまだ納得も行きましょう。しかし、この基地は司令がいる限り安泰です。おまけに、つい先刻までここにはまだ十分な兵力が残っていた。……全く、私には上の意向がさっぱり分かりません」

「そう言うな。多分、連中はここいらで有利な条件のまま停戦協定

を結びたいのだろう」

「停戦協定ですか？」

「ああ。帝国議会が停戦を推し進めようとする背後には、国内の厭戦感情がある。今まで議会は国民に対して攻撃されつつあると言いつつ、平和主義者を愛国心に欠けていると非難し、国を危険にさらしていると主張してきた。だが、そんなペテンがいつまでも罷り通るはずもないのさ。いや、まあ百年近くも罷り通ってしまった後で、こんな台詞を言うのもなんなんだがな」

「……そう簡単に終わりますかね、この戦争が」

この、全世界を巻き込んだ大戦は百年以上もの長きに渡っている。その間、停戦の話が持ち上がり、潰れてしまったことも一度や二度ではない。

氷堂が疑心に満ちた言葉も漏らしてしまうのも無理はなかった。「共和国の連中も嫌がる国民の尻を鞭でぶつ叩くことに必死だ。この上、ハンニバルの機甲師団を失えば、あの石頭どもも停戦に応じざるを得なくなるだろう。」

氷堂、戦争は終わるさ。この戦いを最後にな

希望的観測とも取れる蓮の言葉に、氷堂は「は……」と短い首肯を返す。

司令部に設置された通信機が鳴り響いたのは丁度その時だ。蓮は怪訝そうに眉を寄せた。

「帝都からの通信か？」

「はい。……って、これ皇室専用の直通回線ですよ！？」

驚愕の声に蓮の表情が固まる。どこか悪戯を発見された少年のようだ。

「大本営の連中め、片手落ちだな。まさか、陛下に情報が漏れてしまつとは」

「司令、文句は後でいいですから早く通信に出て下さい」

「……ああ」

頷いた蓮は、それでも数秒ほどぐずぐず時間を浪費させた後で、

ようやく覚悟を決めて司令席の手すりにあるボタンを押した。

直後、彼の眼前に宙に浮かぶホログラムが投影される。十分のほどに縮尺された姿で映し出されたのは、歳の頃十五、六ほどの軍服を着た若い少女だ。

強い意志を宿した瞳に、凜とした顔立ち。全身に漂う張り詰めた秀囲気からは頑固そうな性格が伺える。

身長は170cmほどとやや高く、濡れ羽色の髪を後ろで一本に縛っていた。

『サカキ！ まだ、そこにいますか！』

「これは陛下、お久しぶりです」

気だるげに敬礼を返す蓮を見て、少女はたちまち美しく整った眉をつり上げた。

『「お久しぶりです」……ではありません！ もっと他に言うことがあるでしょう！』

「そうですね。陛下はまた可愛らしくなられた。大本営の連中を説き伏せ、この戦時下でありながら良政を敷いているという噂はこちらにも聞こえてきます。尽善尽美とはこのことだ」

『あ、ありがとうございます。……って、そんな話はどうでもいいんです！』

頬を染めつつ激昂するという器用なことをしながら、少女は言葉を続けた。

彼女はこう見えて、帝国軍の最高権力者 すなわち、皇帝である。

実権は大本営に奪われているものの名目上は全軍の長。つまりは蓮の上官だった。

とはいえ、蓮が彼女の教師を務めていた時期があったため二人の仲はそれなりに親しい。

上司と部下というよりはむしろ、兄と妹のような関係である。

『大本営での決定をつい先ほど私も耳にしました！ サカキ、あなたは破棄されるカイ口要塞にただ一人残るつもりですね！』

「ええ、なにしろ後始末の人員が必要ですから。ただ、自分だけでなく優秀な副官も残っていますよ」

『え？ 要さんもそこにいますか？』

「はい。なにやら恋人にふられて、生きる意味を見失ったようで」

「司令、勝手に嘘を吹きこまないでください」

迷惑そうな副官の声を、蓮は空気の如く無視した。

「まあ、なんというか、陛下の心配するようなことはなに一つありません。ただ、我々はもう帝都に帰還できませんから、後のことはよろしく願います」

『好き勝手言わないでください！ どうして、そんなにあっさり自分の命を諦めるんですか！』

「軍人はただ、命令に従うだけです。……いや、この言い方は少し卑怯ですね。正直なところ、自分はもうこの灰色の世界を見るのに疲れたんです」

本心から言っつて、蓮は司令室のモニターに映る氷の大地へと視線を向ける。

蓮が生まれた頃、世界はまだ死の灰に包まれていなかった。空には星の輝きがあり、海は青く、島は緑に覆われていた。

しかし、核の飛び交う大戦争がこの星を煉獄さながらの光景へと変えてしまったのだ。

そして、日ごとに荒廃して行く世界を蓮はずっと見続けて来た。

老化抑制を受けた肉体が朽ちることのない心臓を歯車代わりに動き続けていたとしても、彼の精神はとうの昔に擦り切れている。

『サカキ、あなたは……』

少女がなにか呟きかけた直後、薄暗い闇の中に瞬く光があった。

「氷堂、敵軍が動き始めたのか？」

「そのようですね。リーダーに反応あり。敵、機甲師団。前進を開始しました」

「よし。自動迎撃システムを稼働させる。わざわざ連中にここが空き家だと知らせてやる必要はないからな」

「了解です」

氷堂が操作パネルを叩き始めたのを見て、蓮は再び少女のホログラムへと向き直る。

「申し訳ありません、陛下。あまりお話している時間もないようです」

『待つて。一つだけ聞かせて下さい。もう私が止めても無駄なんですか？』

「はい。例え陛下の御命令であろうとも、自分はここで連中を道連れに玉砕する覚悟です。後の世界が争いのない、平和な代物となるよう祈っております」

『サカキ……』

ぐつと言葉に詰まりながらも、少女は真正面から死地へと向かう男を見た。

『サカキ、私、あなたのことを忘れません』

「忘れて下さい。死んだ人間のことなど記憶していたところで、陛下がお辛かったです」

『いいえ、決して忘れません。約束します。絶対に、死ぬまで、あなたの名を、顔を、手の平の温かさを、覚え続けていると』

「……相変わらず、頑固な方ですね。一体、誰に似たのやら」

『私は親を知りませんから、きつと恩師に似たのではないでしょうか』

「いやまったく、そいつの顔が見てみたいものですな」

冗談混じりの言葉に、少女はくすりと微笑む。

それを見て、蓮の心中に言いようのない罪悪感が沸き上がってきた。

長い間、妹のように思っていた少女を一人この世界に残さなくてはならない。

その事実が今更になって、蓮の胸に重くのしかかってくる。

「では、陛下。御達者で」

それでも、感傷を喉の奥に押し込み、蓮は帽子を目深に被り直し

た。

『……はい。サカキ、あなたも』

ぶつり、と。

そう返す少女の表情を見ぬまま、通信は途切れた。

プロローグ？

しばし、黙祷にも似た沈黙があった。

それを破ったのは、役目を終えたはずの通信機だ。

『あー、テス……テス……おい、聞こえてるか、サカキ』

ふいにハスキーな男の声が室内に響き、蓮は目をすがめた。

「その声、ハンニバル・バルカか」

今回の通信は声だけで、先ほどのように立体ホログラムが映し出されていかない。

それでも、蓮は相手の名と姿をはっきり脳裏に描くことが出来た。共和国陸軍少将。アフリカ戦線司令。通称『雷神』ハンニバル。

帝国軍側の司令である蓮と、一進一退の激戦を繰り返している宿敵である。

「で、共和国の東征將軍が直々に何のつもりだ？」

『つれんな。反抗期か？』

「御託はいい。さつさと用件を話せ」

『相変わらずの早漏だな。稀代の守将も一皮剥けばこれなのだから困る』

と、これ見よがしに漏らされるため息。

蓮は無言で通信機のスイッチへと手を伸ばした。

「切るぞ、ハンニバル」

『おい、待て。本題はこれから』

バチンッ。無情にも音声は途切れ、無言の沈黙だけが司令室に満ちる。

「良かったんですか、司令」

「どうせろくな話ではあるまい」

そう言っただけで冷たく切り捨てた直後、要塞全体を突然の震動が襲った。

司令部まで響く轟音に蓮は眉を寄せ、氷堂は慌てて戦況を示すモニターを確認する。

「氷堂、敵の総攻撃が始まったのか？」

「い、いえ、砲撃は一発だけです。どうやら、要塞前面第六ブロック上部に敵ユリウス級陸上戦艦の主砲が直撃したようでした」

「……あの阿呆が。やり方がたちの悪いセールスマンと変わらんのだ。呆れたように呟き、蓮は通信機を再び起動させた。

「ハンニバル、我が家の玄関に随分と乱暴な真似をしてくれたものだ」

『少将、おれはおたくのドアをノックしただけだぜ』

「ノックは二回だ、將軍」

『それは失敬』

ドンッ！ ドンッ！

「第五、第八ブロックに敵弾直撃！」

「くそつたれが」蓮は音を立てて舌打ちした。

「なあ、雷神殿。いい加減、我が家に入ってきてはどうか？ こちらには迎えの準備をしたまま待ちぼうけを食らっているのだが」

『ははは、嘘はよせ嘘は。お前が予備兵力はおるか主力まで退却させたことは、おれとてとうに気づいている』

「なんのことかな？」

『誤魔化さずともいい。大方、その要塞と引き換えにおれの機甲師団を道連れにするつもりなのだろう。自らの命も顧みずにな。お前にそれほどの愛国心があったとは驚きだ』

「貴様の妄言が真実だと仮定して、わざわざこちらに通信を入れてきた理由はなんだ？ 手向けの言葉でも送るつもりか？」

『まさか。おれはただ、一つだけ提案をしに来てやっただけさ』

ハンニバルはふいに真剣な口調で言った。

『なあ、サカキ。お前はここで死なすには惜しい男だ。ここで玉砕などせず、おれの下につかないか？』

「冗談だろう。今さら投降しろと？」

『違う。部下になれといつているんだ。勿論、身柄をどうこうするつもりはない。お前の優秀な副官の命も保証しよう』

ハンニバルは自信に満ちた声で、淀みなく言葉を続けた。

蓮はなんとなしに頭の片隅で、その提案を計慮する。

畏の可能性を無視すれば、良い いや、むしろ破格の条件だ。

「司令、ハンニバル將軍は本気なんでしょうか」

「恐らくな」

不安げな副官の声に蓮は無表情のまま頷く。

蓮はここエジプトでハンニバルと長期に渡って交戦を繰り返した経験があるから、この男が直情的で、奸計を嫌う性格だということをよく知っていた。

それに、ハンニバルには元々、敵の將校を自陣に引き抜きたがるという悪癖があった。

現に彼のせいで帝国から共和国へと離反させられた指揮官も、一人や二人ではない。

蓮自身、何度か勧誘を受けていたものの、その答えは常に同じだ。「ハンニバル、悪いが俺も陛下に槍を向けることだけは出来ん。お前の提案は辞退させて貰おう」

『フ、身持ちの堅い男だ。それでは女も寄りつかんだろう』

「余計な御世話だ。話はそれだけか？」

『ああ、他に言うべきことはない。後は存分に戦場で語り合おう』
気障ったらしい台詞と共に通信は終わった。

蓮はなにか形容しがたい疲労を感じ、司令席の背もたれに体を預ける。

「なんというか、相変わらず奇抜な方ですね」

「全くだ。あれで百年に一人の天才だというのだから信じられん」

ふう、と蓮がため息を漏らしたところで、再度要塞全体が轟音と共に揺るいだ。

「始まったか」

「はい。今度は全力で来ています。一応、こちらも迎撃を出しまし

たが……」

「防衛機構の稼働率は最低レベル。敵の先鋒を叩ければ恩の字というところだな」

本来、カイ口要塞の迎撃システムは多くの人員を用いて管制する形で用いられる代物だ。

無人装置に任せて運用することも可能だが、それで本来の性能を発揮できるはずもない。

既に作戦司令室の中央モニターには、氷土を踏破してくる無人戦車部隊と、その後方に展開した複数の陸上戦艦が映っていた。

「やれやれ、ハンニバル御自慢の機甲師団もこれで見納めとは」

「突撃して来る機動戦車部隊バイタルバンタデーの数は全体の20%ほどですね。こちらの思惑が見切られてしまっているためでしょうか」

「まあ、当然か。一応、敵をギリギリまで引きつける。この際、要塞地上部の損害は気にせずとも構わん」

「了解です。せいぜい派手な花火を打ち上げてやるとしましょう」
にっと笑みを浮かべて、氷堂は軽快にコンソールのパネルに指を滑らせた。

既に帝国側の部隊は全て脱出しており、迎撃システムの管制すらままならぬ状態だ。

にも関わらず、そびえ立つカイ口要塞はそれから三度に渡り敵の進軍を跳ね返した。

そして、四度目。業を煮やしたハンニバルが戦車部隊の半数を突撃させたところで、ようやく要塞の防衛網は沈黙する。

これにより地上に露出したブロックは完全に破壊され、地下にある作戦司令室もほとんど機能を停止していた。

「……そろそろ、頃合いか」

鳴り響く警報の中。真つ赤な非常灯に照らされたまま、蓮は天井を見上げた。

衝撃は断続的に司令室を襲い、その度にパラパラと埃が彼の頭上に落ちていた。既に敵部隊がすぐ近くまで迫っているのだ。

「敵、戦車部隊は要塞内部に侵入。真つ直ぐ司令室へと向かって来ています。到達までは後十分ほどです」

「よし、いいタイミングだ。こちらの準備も今、終わった」

高台の前方に設置された操作盤の前で、蓮は小さく口元をつり上げる。

敵の進軍が始まってからというものの、蓮は迎撃システムの管理を副官に任せ、自らは自爆シーケンスを行っていたのだ。

既にプログラムは起動し、指紋と音声の認証も完了。後は残る最終工程　解除キーによる自爆装置の起動を行えば、この基地は跡形もなく吹っ飛ぶこととなる。

「そういえば、氷堂。俺も長年生きてきたが、自分の手で基地を爆破させる経験は初めてだよ」

「とちるような要素はありませんからね？　ここまで来て失敗しないで下さいよ？」

「誰にもを言っている。どうせ、後は鍵を突っ込むだけの簡単な作業だ」

言って、蓮は懐から取り出した銀色のカードキーを自信満々にスリットへ挿入した。

たちまち、音調を変える警報。甲高い悲鳴にも似た音に混じって、ガイドランスの機械音声が二人の耳に届く。

『プロテクト解除キーを承認しました。最終安全装置解放。【神風】起動を開始します。総員、速やかに基地から半径10km圏外まで退避して下さい。繰り返しします』

蓮と氷堂は顔を見合わせた。

「司令、なんかこれ自爆装置とは違うもののような気がするんですが」

「……俺のせいかな？」

「恐らく。と言いたいところですが、違いますね。どうやら自爆シーケンスを完了させた際に、別のプログラムが起動するようデータが書き換えられていたようです」

あつさり言い放つて、氷堂は向き直つた電子パネルに軽く指を滑らせる。

眼鏡越しの瞳がモニターを這い、次の瞬間、その顔色がさあっと蒼白に変じた。

「こ、これはまさか空間座標転送装置!?　なんでこんな物が要塞の中に!」

「空間座標?　要するにテレポート装置か。だが、あれはまだ実用化の目途が立つてなかったはずだが」

「そんな可愛らしいものじゃありませんよ!　この装置の通称は次元核　効果範囲内にある全ての物体を圧縮して異空間までふっ飛ばすっていう、中性子爆弾より危険な代物です!」

「……なんだと?」

流石にこれには鉄面皮で知られる蓮も顔色を変えた。

(テレポート技術を転用し、破壊に特化させたということか?　だが、俺の耳に届いていないということは、この兵器もまだ試作段階にあつたはず。それを一体誰が、何故カイロ要塞に……?)

数秒間の思索の後、蓮は小さく舌打ちを漏らした。

「裏で糸を引いているのは議会と大本営か。あの阿呆どもめ、つまらん真似をする」

「まさか、要塞の破棄を命じられた時からここまで仕込まれて……?」

「恐らく、そういうシナリオなのだろうな。連中はハンニバルとその機甲師団をここで全滅させるつもりらしい」

単に基地を自爆させた場合、共和国側に出る被害はせいぜい戦車隊の一部だけだ。

しかし、この次元核を用いた場合は極めて広大な範囲　警報の内容通りならば、半径10km圏内の物体全てが破壊尽くされかねない。

その場合は蓮たちのいるカイロ要塞どころか、前線に迫るハンニバルの機甲師団も一つ残さず飲み込まれ、消えてしまうこととなる。

逆に言えば、それこそが帝国議会と大本営の狙いなのだろう。
最低限の被害で敵の主力を殲滅し、後々有利な協定を結ぶ。

蓮と氷堂はそのための捨て駒として、体良く利用されたということだ。

「どうするべきでしょうか、司令」

堅い表情を浮かべる副官に、蓮はしばし眼を閉じ、黙考した後で尋ねる。

「装置の起動に介入は出来るか？」

「外部から特殊なプロテクトをかけられているらしく、不可能です。そもそも、この【神風】とやらが起動するまで後三分ほどしか時間が……」

「そうか。分かった」

蓮は小さく頷き、

「……悪いな、ハンニバル」

常のように、目深に帽子を被り直した。

恐らく、これは前々から入念に計画されていたことだ。土壇場で自身が足掻いたところでどうなる問題ではない。

『【神風】起動まで後、二分三十秒。総員、速やかに基地から半径10km圏外まで退避して下さい。繰り返します』

沈黙に包まれた室内を、壊れたレコードのように埋め尽くす音声。追って、微細な振動と爆音が司令室のすぐ真横から聞こえて来た。「さて、ハンニバルの戦車隊がここに辿り着くのと、装置が起動するのとどちらが早いのやら」

「三途の川の渡し賃でも賭けますか？」

「いい提案だ。ただ、残念なことにもう時間がない」

蓮は天井を見上げた。とうとう、カウントダウンが始まったのだ。

『【神風】起動まで後、十秒』

「ところで氷堂。人は死んだ後、どこへ行くと思う？」

『九、八、七』

「分かりません。天国か地獄か、まだ生きている人々の記憶の中でしよう」

『六、五、四』

「まあ、どんな場所だろうと、この世界と比べたらマシだろうさ」

『三、二、一』 【神風】 起動開始』

低く唸り声を上げる原動機。

その瞬間、世界が、ひしゃげ、ねじ曲がった。
断絶し、分解し、綺羅星となって砕け散った。
そして、またどこかで光を結び、再生をした。

プロローグ？（後書き）

数日後、共和国議会に北アフリカ方面軍情報通信部より伝えられた報告書より抜粋。

「突如現れた黒く渦巻く闇が、全てを呑み込みました。私はこれがすぐに帝国軍の新兵器であると確信しました。私たち通信兵は戦場の最も後方におりましたが、この闇は恐ろしい勢いで周囲の物体を飲みこみ、少し目を開くと、私のすぐ隣にあった車両までもが奈落の底に吸い込まれて行くところでした。この現象の中心地は帝国軍の要塞でした。少将（ 1 ）は私たちよりずっと前にいたはずでしたが、既にアレックス（ 2 ）は船尾の先まで闇の中に吞まれていました。それは端的に言って地獄でした。いったい何人が死んでしまったのでしょうか。百年生きてもこの数分間を忘れられないでしょう。ようやく黒い闇が消えた後、そこに残っていたのはまるで地面をスプーンですくい取ってしまったかのような、深い深いクレターだけでした」

1：当時の北アフリカ方面軍の総司令を務めていたハンニバル・バルカ少将（後に二階級特進により大将へ昇進）

2：当時の北アフリカ方面軍の旗艦、ユリウス級陸上戦艦アレクサンドロス

異世界での目覚め

その夜、柗蓮は鼻をつくかびの臭いで目を覚ました。瞼を開けば、薄暗い闇の向こうに太い木で出来た天井の梁が見える。

数秒間、瞬きを繰り返し、蓮は自分がログハウスに似た木造の建物の中で、寝台に寝かせられていることを把握した。

「……生きているのか」

唇の端から漏れた呟きは、はつきり音として三半規管を震わせた。間違いない。自分は生きている。その事実には蓮は安堵と失望を半々ずつ覚えた。

（俺はまた薄汚く生き延びたのか）

今一つ状況が飲み込めないが、おおかた空間座標転送装置とやらが誤作動を起こしたのだろう。そのせいで三途の河を渡りきれなかったに違いない。

蓮はそう当たりをつけ、寝台から跳ね起きた。硬直しかけている筋肉を軽く屈伸させた後で、周辺の様子を見回し、

「……なんだ、これは」

そこで思わず、呆然としてしまった。

窓のない室内は六畳間程度と手狭で、半ば倉庫扱いされているのか、用途の分からないがらくたが部屋の隅にごちゃごちゃと積み重ねられていた。

問題はそれがらくたの内容が、古びた壁時計や縁のかけた土器、折れた青銅の剣と、骨董品も同然の代物ばかりということだ。

（訳が分からんぞ）

蓮はいつものように頭へと手をやり、そこでようやく愛用の帽子がないことに気付く。

見れば、軍服の上下は着せられたままだが、帽子に外套。そして、士官用の軍刀が欠けていた。

恐らくは寝かせる時に邪魔になって、どこかへ片付けられてしまったのだろう。

つまりは人がいる、ということだ。

唸り声を上げた蓮は不安定な足取りのまま、部屋の外に這い出た。途端、肌寒い夜の風が吹きつけ、眉の辺りまで伸びた前髪をそよがせる。

今度こそ蓮は絶句した。頭の中が真っ白になり、途方に暮れてしまった。

(俺は夢でも見ているのか?)

蓮の眼前に広がるのは、氷の大地でも、粉塵に覆われた空でもなかった。

鬱蒼と生い茂る森林地帯と、その合間に軒を連ねている十数軒ほどの木造家屋だ。

住人は寝静まっているのだろう。人間の気配はするものの各々の家に灯りはない。

「夢ではない。夢ではないはずだが……」

自分自身に言い聞かせるかの如く呟きながら、蓮は薄暗い空に浮かぶ満月を見上げた。

夜空を見上げれば、星が見える。たったこれだけのことが、蓮にとっては素晴らしい奇跡に思えた。

「……ここはどこなんだ」

切実な疑問と共に、蓮は柔らかな腐葉土を踏みしめ、幽鬼のように辺りを彷徨い始めた。

持ち前の不景気な顔立ちと相まって、なにも知らぬ人間が見たら腰を抜かしそうな光景である。

もっとも、本人にはそんなことを気にしていられる余裕がない。

内心では混乱の極みに達しながらも、蓮は情報を収集すべく、並び立つ家々の中でもひと際大きな一軒家へと足を運んだ。

入口には不用心にも鍵がついていない。というより、これだけ小規模なコミュニケーションティならば、その必要性もないのだろう。

「これは……」

首尾よく室内に侵入した蓮は、暗闇に目を凝らした。

眼球に暗視能力を付加された瞳は、夜でも白昼の如く周囲の光景を見ることが出来る。

（書庫、か？）

目に付くのは板張りの床に山積みされている雑多な書物だ。壁には地図がかかり、窓際には古びた書机まで置いてある。

蓮は足元に転がっていた巻物を手に取り、ざらつく感触を指先で確かめた。

「紙媒体。しかも、羊皮紙と来たか」

かすかに口元を吊り上げる。奇想天外の出来事が続き過ぎたせいで、頭のネジが数本外れかけているらしい。

蓮は片手に巻物を持ったまま、散らばった書物を幾つか手に取って確認した。

それらは全て同じ文字、文体を用いて書かれていたが、蓮の知る言語ではない。

母音の数は七、子音の数は二十六。インドヨーロッパ語に似ているが、少々こちらの方が複雑だ。

恐らく、長い時代を経て洗練されていないのだろう。蓮は文明のレベルからそう判断をする。

（とりあえず、学習機を起動させておくか）

蓮は脳内に埋め込んだ生体コンピューターに幾つかのソフトウェアを常駐させている。

学習機はその中でも最もポピュラーな代物だ。分かり易く言えば、一度見たものを決して忘れないようにする装置である。

更に脳の処理速度も上昇させるため、その気になれば丸一日で五ヶ国語全てを習得することも出来た。

もつとも、長時間連続使用していると脳がオーバーヒートを起こし、廃人化する危険性もあるから、そうそう安易に使えるような代物ではない。

「さて」

それから約一時間。スポンジが水を吸い込むかのように書物の知識を吸収した蓮は、羊皮紙を束ねただけのレポートから顔を上げた。既にその足元には三十冊ほどの大小様々な本が散らばっている。単純に考えると、一冊につき二分前後のスピードで読破している計算だ。

おまけに、未知の言語を解析しながらの精読である。文字通り、人間業ではない。

（最低限の読解はなんとかあったな。後は発音が分かるといいんだが）

「ん、丁度いいものがあるじゃないか」
ざっと室内を見回した蓮は、児童用の語学書らしい一冊を手にとった。

広げられたページにはずらずらと文字が並び、一つ一つに「口をすぼめ、舌を突き出して発音する」だの、「歯の隙間から空気を漏らすような感じで発音する」だの、細かな注釈が乗っている。これを蓮は十秒ほどで頭の中に叩きこんだ。

「こんなところか」
あつさり言語の習得を終えた蓮は、窓の外に広がる森林へと視線をやった。

いつの間にか、木々の隙間から淡い日の出の光が漏れている。

その美しい光景を、蓮はしばし言葉もなく眺めていた。

（まさか、もう一度この風景を見ることが出来るとは……）

まるで百年間枯れ果てた砂漠を彷徨った拳句に、ようやくオアシスを見つけたような気分だ。

そうして柄にもなく心を奪われていたためだろう。ふと蓮が気付いた時には、書庫の入り口に長躯の人影が寄りかかっていた。

「寢床を抜け出してどこに行ったかと思えば、こんなところでなにをしているんだい？」

蓮が先ほど学習したばかりの言語が、涼やかな声と共に放たれる。

燭台を手にしたまま怪訝そうに眉を寄せているのはすらりとした体格の青年だ。

ネコ科の生物を連想させる金色の瞳に、肩までの長さの切り揃えられた同色の髪。

手製と思われる木綿の貫頭衣や、麻のズボン、月桂樹の若枝で編まれた冠などは蓮にとって馴染みのない代物である。

もっともそれはお互いさまなのか、青年の方も蓮の服装を上から下までじろじろと不思議そうに眺めていた。

「君、やっぱり妙な格好をしているな。見た目は人間ようだが、中身はなんだ？ 化け物かな？」

「いや、違う。分かり易い表現を使えば」
興味深そうに尋ねる青年に、蓮は言った。

「俺は異世界からやってきた人間だ」

アクリオンの村？

吟遊詩人のような姿をした青年の名はベルナット・クーガといった。年齢は若いながらも、この村において村長を務めているらしい。ベルナットの手から軍帽を取り戻した蓮は、帽子の位置を調整しながら尋ねた。

「ベルナット、念のために聞いておくがここはどこだ？」

「アクリオンの村だよ。いや、規模を考えれば村と言うより集落かな。今、ここには五十人くらいしか人が住んでいないから」

ベルナットは机の上に燭台を置いたところで、再び蓮へと向き直る。

警戒されているのか、彼の右手は腰から提げた銅剣の柄に置かれていた。

「とりあえず、君の名前を教えてもらっても構わないか？」

「帝国陸軍少将、榊蓮だ」

「帝国……？ ルガルのことか？」

「違う。さつき、異世界だと言っただろう。まあ、かいつまんで説明するのは面倒だからな。星の裏側にある、極めて遠い場所程度に考えておけばいい」

誇大妄想狂とも取れる返答に、ベルナットは呆れたような表情を隠さなかった。

「君は妙な男だね。髪の色も変だし、目の色も変だ。格好も変な上に、言動まで変だなんて」

「一々連呼するな。ところで、俺をここに連れてきたのはお前か？」

「森の奥で倒れたのを拾ってきたんだよ。あんなところだなにをやつてたんだ？」

「昼寝だ」

「……まじめに答える気はないらしいね。大体、君は異世界の人間だっていう割に、ちゃんとソフィアラ語で会話が出来ているじゃない

いか」

「さつき覚えたからな」蓮は淡々と事実を述べた。

「あともう一つ、黒い鞘に入った軍刀があったはずだ。あれはどこにやった？」

「あのへんてこな剣なら倉庫に置いてあるよ。君の武器なのか？」

「そうだ。返してくれ」

「悪いけど、それは出来ないね」

ベルナットはやや硬い声で答えた。黄金をはめ込んだ瞳には緊張の色が走っている。

「こつちはまだ君の素性に関してなんにも分かってないんだ。はっきり言つて、今の僕には君が単なる頭のおかしな男としか思えない」
「だろうな。それに、お前の認識は概ね合っている」

ふざけた調子ではない。蓮は至極、真面目にそう言った。

既に蓮は今の自分が置かれている環境について、ある程度見当がついていた。

周囲に生い茂る青々とした森林。現れた青年の格好。そして、その言動

なにより読破した書物の記述が、蓮のいる場所を明確に裏付けていた。

(空間移動テレポーションでも時間移動タイムリープでもない。恐らく、これは次元移動ディメンションワープだ)

原因は間違いなく、カイロ要塞で発動した転送装置だろう。

どういう作用が起きたのかは分からないが、蓮は地球と僅かに異なる並行世界へと迷い込んでしまったらしい。

実際、壁際にかかっている地図には蓮が見たこともない大陸が描かれていた。

あえて似通っているものを上げるとすれば、大戦前のオーストラリア大陸だろうか。

中央から北部にかけては大荒原と呼ばれる不毛地帯で、人間が生息しているのは南部の僅かな地域のみ。

その南部の大地も、西からミストリア、レギオニール、ルガルと

地方ごとに区切られている。

「この地図にアクリオンという村の名は書いてないが、どの辺にあるんだ？」

「ここだ。テッセラリウスの東北部」

「レギオニール地方の最北端か。辺鄙な場所だな」

「そう言う君は都会から来たのかい？」

「ここよりずっと技術の進んだ場所だ。しかし、この地図に俺の国は載っていない」

「だったら、なんで森の奥で倒れてたんだよ。てっきり、大荒原を越えてやって来たのかと思ったのに……」

「別に警戒せずともいい。少なくとも俺は人間で、お前たちにとっての敵ではないからな」

蓮は腰を屈めると、再び床に置かれていた本を手に取った。

「ベルナット、ここにある書物はお前のか？」

「……まあね」

ベルナットは目を逸らし、どこか気まずそうな顔で頷く。

その表情の意味が蓮にはすぐ分かった。恐らく、この書物は正規の手段で手に入れた代物ではないのだろう。

なにせ著者はバラバラだし、製本方法も多岐に渡っており、その上、内容に関しても種々雑多である。

もっとも、蓮にとってはこちら方がありがたい。おかげでこの世界の知識も常識程度のレベルまでは身に着けることが出来た。

（文明の発達度合いはおおよそ中世初期。場所によっては古代レベルまで遡るようだ。動植物に関しては一部例外はあるものの、ほとんど地球と同じだな。いや、かつての地球、か）

蓮のいた世界において、人間以外の生物はほぼ全てが絶滅していた。

辛うじて地球上に残っていたものと言えば、バイオテクノロジーによって管理される家畜や食用魚類くらいなものだ。

となると、並行世界へ移っただけでなく時間軸も過去へ移動して

いるのだろうか？

(いや……そうとも限らないのか)

例えば、硝子の球体で囲った箱庭を二つ作ったとしよう。

この中にそれぞれいくらかの知的生命体を閉じ込め、発展の度合いを計測したとしても、全く同じになるとは限らない。

生命体の数や球体内の環境。はたまた偶然や運命の悪戯によって、進化の速度は左右されてしまうだろう。

(まして、この世界では根本から人類を取り巻く社会体制が異なっている……)

蓮は広げた本のページへちらりと視線を落とした

今、蓮が手にしているのは東の国、ルガル帝国の律法を描いた書物だ。

そこには明確な文章として人間の立場が規定されていた。

『ヒト、人間と呼ばれる種の生物。これらは皇帝、諸侯及びその眷族に隷属するものである』

この世界において人間とは奴隷、ないしは家畜の立場であった。

アクリオンの村？

アクリオンは人口五十名程度の小さな村である。

北部大荒原の南、針葉樹が立ち並ぶ森林地帯の奥まった場所であり、そこに住む人々は畜産や採集、狩猟によって生計を立てていた。この村に、奇妙な男が住み着き始めたのは今から一週間ほど前のことだ。

住人の多くは彼のことをよく知らない。どうも村長の友人らしいという話は伝わっているものの、それ以上の情報は全くの不明だった。

もっとも、その村長　ベルナット・クーガですら、男の正体に關してはまるで見当がっていない。

彼に出来たことといえば、この異様な風貌の男を書庫の中に軟禁しておくことだけだった。

「この村に鉄の錠前のついた牢屋があれば良かったんだけどな」
ベルナットは半ば本気でそう漏らした。

ここ数日間、見たこともない衣服を身に纏ったこの男は、書庫に閉じこもって延々と本のページをめくっている。

軟禁というのも実際のところ本人がここを動かないだけで、見張りや鍵はなく、その気になればいつでも書庫から抜け出せた。

その証拠として、蓮の片手にはどこからか調達して来たらしいリソゴが握られていた。

真つ赤なそれを齧りながら悠々と本を読む様は、まるでこの部屋の主のようにも見える。

(全く、とんでもない拾い物をしたもんだ……)
貴重な労働力になるかと思つて連れ帰つたものの、結局は書庫の置物となつているだけだ。

ベルナットとしては少々、当てが外れた気分である。

「なあ、サカキ。君はいつまでそうやって本を読んでいるつもりだ

よ

ベルナットは蓮が巻物を読み終えた所を見計らって声をかけた。

「ひよっとして、学者にでもなるつもりか？ それなら、ケントリオンか東の帝国にでも行けばいい。戦争ばかりのレギオニール地方に留まっている必要はないだろう」

「そうか。ところでベルナット」

「なんだい？」

「この村の書庫はここだけか？」

「……相変わらず人と会話をする気がないね、君は」

毒づくベルナットの前で、蓮は微かに笑った。

「ベルナット、戦場で重要なことを一つ教えてやる。それは情報だ。どんな大兵力であろうとも、敵に情報を知られていては烏合の衆と変わらん」

「ああ、そうかい」ベルナットはがりがり頭を掻き毟った。

「だから、君はここに閉じこもって本を読み続けてるって？ それで、一体誰を相手に戦争をするつもりなんだよ」

「さあな。つい先日までなら共和国の肥えたブタどもと答えているところだが、どうもこの世界に連中はいないらしい」

「例の異世界人って話か。正直、信じられないね。君の頭は正常なのか？ それとも狂っているのか？」

「正常だ。だが、狂っていると思われるのも無理はないな」

どこか人を食ったような物言いに、ベルナットは何度目かのため息をこぼした。

ここ一週間、ベルナットはどうか男の素性、ないし目的を探ろうとしているのだが、結局はのれんに腕押しで終わってしまう。

(せめて、人間だっていう確証だけでも欲しんだが……)

ベルナットは内心で苦々しげに呟いた。

と、ふいにそこで書庫の扉がノックされる。「ベルナット」と名を呼ぶ声は女のものだった。

「ん、ルシユアか？」

「ああ、入るぞ」

開いた扉の向こうから現れたのは、セミロングの金髪を靡かせたうら若い娘だ。

体つきがスレンダーな割に、背は平均よりかなり高く、透き通るような白い肌と、薄紅色の瞳が周囲に鮮烈な印象を与えている。

ただし、その格好は淑女に似合うであろうドレスではなく、男物の上着に皮鎧という戦士の出で立ちだった。

「……っ」

一端、書庫を見回した彼女はそこに軍服姿の蓮を認めると忌々しげに視線を逸らす。

あまりにもあからさまなその態度に、ベルナットはつい苦笑を浮かべてしまった。

「ルシユア、どうしたんだい」

「狩りの準備が出来たから呼びに来たんだ。みんなもう外で待つてるぞ」

「あ、もうそんな時間か……。じゃあ、サカキ。僕はちょっと出かけてくるよ。君も来るかい？」

「動物を追い回すだけならついて行くのだがな。お前たちの狩りに付き合うつもりはない」

「そうか。なら、せいぜいここで読書に励んでくれ」

諦め果てたかのように肩を竦め、ベルナットは身を翻す。

書庫から離れた彼は、そこで隣を歩く金髪の娘へと声をかけた。

「なにか言いたそうな顔をしているね、ルシユア」

「……当たり前だろ」

ルシユアと呼ばれた娘は実に不機嫌そうな表情で口を開いた。

「あんな訳の分からない男、どうしていつまでも村に繋ぎとめておくんだ。さつさと森の外にでも追い出してしまえばいいだろう。ここ一週間、ずっと書庫に籠もってるだけで、働く様子もない。ただ飯を食らいの怠け者を、この村に置いておく余裕なんてないんだぞ」

……なるほど、溜まっていたものがあつたのは自分だけではな

つたらしい。

内心の鬱憤をぶちまけるルシユアに、ベルナットは小さく頷いて見せた。

「確かに、君の言う通りだ。けれど、もしあの男が魔族どもの軍にこの村の場所を話してしまっただらどうする」

「だったら、あいつの舌を切り落としてから追放すれば、余計な情報を喋る危険性もないんじゃないか？」ルシユアは顔色一つ変えずに言い放った。

「そもそも今の時点でも十分怪しいんだ。あの男、奴らの放った間諜かもしれない」

「その可能性は僕も考えた。でも、もしスパイならあんな行動を取らないはずだ。むしろ、積極的にこちらの懐へ入り込もうとするだろう」

「なら、さっきの言葉はあの男を試すつもりで？」

「その目的もあつただけだね。どうも裏の裏まで見抜かれていたようだ」

ベルナットは足を止める。眼前では逞しい葦毛の馬が、出発を待ちわびるかのように鼻息を荒く足踏みをしていた。

村の入口へとやってきたベルナットの周囲に並ぶのは、狩りのために集まった三十名ほどの村人たちだ。

皆、皮の鎧を纏い、堅い樹の幹で作り上げた剣や槍、弓矢を手に持ち、死地に向かう戦士の面構えをしている。

「みんな、よく集まってくれた」

ベルナットは朗々と響く声を、村人たちに向かって張り上げた。

「いよいよ今日、デクリアの村に襲撃をかける。このまま魔族どもの暴虐外道を見過ごすわけにはいかない。奴らを放っておけば、あの村に住む同胞たちは苦しむばかりだ。……誰かが救わなくてはならない」

ごくりと唾を飲む音が聞こえた。村人の間に緊張が走る。

彼らが『狩り』と呼ぶのは森林の中で鳥獣を追い掛け、仕留める

ことではない。

「圧政を敷く支配者の軍勢、特に奴隷や物資の輸送隊へと、襲撃をかけることだ。」

「つまるところ、ここアクリオンは反体制ゲリラの拠点だった。」

「村民が林間に隠れ住んでいるのも、支配者たちの目を誤魔化すためである。」

「敵は決して弱くない。もしこの作戦が失敗すれば僕たちは死ぬだろう。だが、正義はこちらにある。例え、我ら解放軍が砕け散ろうとも、他の誰かが必ず僕たちの意志を継いでくれるはずだ。……みんな、その覚悟は出来ているな」

「この台詞に頷かぬ者はいなかった。」

「少なくとも表向き、彼らは一致団結していた。強い決意によって統一され、闘志をみなぎらせていた。」

「ベルナットはそんな村人たちを満足そうに眺める。」

（よくぞここまで来たものだ……）
「当初、支配者の脅威に怯え疎んでいた人々を扇動し、発破をかけたのはベルナット自身だ。」

「その後、僅かだった賛同者は徐々に増え、小さな軍隊は精強さを増し、ここで一つの節目を迎えようとしている。」

「今まで彼らが標的としていたのは街道を行く輸送隊。それも護衛の少ない小規模な部隊だけだった。」

「だが、今回の狙いは違う。アクリオンの南西にあるデクリアの村すなわち、一つの拠点である。」

「ここを解放すれば抑圧に苦しむ人々の希望となり、やがてこの地方全体に蜂起の芽を息吹かせることが出来るだろう。」

「そのためにも、ベルナットはここで挫ける訳には行かなかった。行くぞ、みんな。この戦がレギオニール解放の烽火になると信じて！」

「葦毛の馬に飛び乗ったベルナットは剣を振り上げ、村人たちに号令をかける。」

追って、幾重にも重なった鬨の聲が林間の村に響き渡った。

その夜、アクリオンの村に住む男たちのほとんどが森の中へと姿を消した。

村の住民は彼らがどこへ、なんのために出発したのか、老若男女全てに至るまで知っている。

だからこそ戦に出ず、村に留まった者たちはひた待ちにしていた。戦士たちが彼らの敵を討ち、同胞を解放して、勝鬨と共に帰還してくる、その時を。

アクリオンの村？

事の顛末に関する報告が来たのは翌日の昼前である。

書庫の本を平らげた蓮は見張り役のベルナットがいないのいいことに、村の中をぶらぶらと見回っていた。

当然、他の村人から好意的な顔はされない。若い男達がおらず、神経がささくれ立っているような状態では尚更だ。

とはいえ、そんな村中の張りつめた空気を気にするような蓮でもなかった。

(しかし、学習機を停止させていたとはいえ、案外時間がかかってしまったか)

気付けば、書庫にあった百二十三冊の本を読破している内に、一週間もの期間が経過していた。

もっとも、これほどまで手間取ったのは彼自身が電子媒体に浸かりきりで、紙媒体に慣れていなかったせいもある。

ただ、その億劫さ、不便さは蓮にとってむしろ心地の良いものだった。

「ふむ」

村の端から端までを見終わったところで、蓮は顎に手を当て、黙考した。

この村には奇妙な点があった。田畑がないのにも関わらず、穀物庫に豊富な穀類が蓄えられているのだ。

交易によって仕入れているにしては商人の姿や見えないし、なにより数が多過ぎる。

(となると、やはり『狩り』のせいだな)

既に蓮はベルナット達の言う『狩り』がどういう代物なのか、見当がついていた。

当初、蓮が目覚ました部屋に置いてあった骨董品。それに加えて、書庫の中に押し込められていた雑多な書物。

恐らく、どちらも他所から略奪してきたものだろう。その証拠に蓮が読んだ書物には血痕の残っている代物もあった。

とはいえ、ベルナットや村人の纏う雰囲気は荒んだ山賊のものとは違う。

思うに、あれは強い使命感に突き動かされた人間。それも自身の行動を正義と信じているタイプだ。

「つまりは義賊、か」

蓮は村の入り口ではたと足を止めた。

見れば、樹林の間に築かれた獣道から逞しい葦毛の馬が駆けてくるのが目に入った。

(あれは……)

森の中に目を凝らしたところで、蓮は眉を寄せる。

馬上でぐったりとしている人影には見覚えがあった。ベルナットの副官で、ルシユアと呼ばれていた娘だ。

しかも、彼女は手綱を握ったまま気絶しているらしい。このままでは、間違いなく馬上から振り落とされてしまうだろう。

「仕方がないな」

蓮は小さく呟くなり、地面を蹴って葦毛の馬に肉迫した。

カーキ色の軍服姿が一瞬で村の中から掻き消え、滑るような速度で馬の真横に並ぶ。

蓮はすれ違いざまに太い首筋へと手を当てると、一息でその背に跨った。

ひひひひん！

突然倍増した重量に、馬はいななきを上げて仰け反った。

全身から汗を飛び散らせ、ふいこのように鼻息を荒くする。

とはいえ、その程度で振り落とされる蓮ではない。ルシユアの背後から手綱を握り、興奮する馬を制御する。

「どつどつ」

きつく手綱を引かれた馬は徐々に走る速度を緩め、落ち着きを取り戻し始めた。

ルシユアが目を覚ましたのは馬が村の入り口を抜け、中央広場の付近に差し掛かった頃だ。

「う……ここは……」

「おい、お前。一体、外でなにが起きた？」

尋ねる蓮に対し、ルシユアは目をしばたかせた。

「お前は書庫の男？　ここはどこだ？」

「アクリオンの村だ。自分の住処を覚えていた賢い馬に感謝するんだな」

「アクリオン……」

「ところでベルナット・クーガはどうした？　一緒に村の外へ出たのだろうか？」

「え？　あ……そ、そうだ！　ベルナットが！」

ルシユアは馬上からばね仕掛けの人形のような勢いではね起きた。

「報告しなければ！　村は！　村のみんなは！？」

「そこにいる」

蓮は広場を見渡す。既に、周囲には騒ぎを聞きつけた住民が集まっていた。

彼らの顔に浮かぶのは困惑の色だ。たった一騎で帰還して来たルシユアに、戸惑いを隠せないでいる。

「ルシユアよ。一体、どうしたというのだ？」

代表として進み出るのは色あせた長衣を身に纏った村の長老だ。

対し、馬上から飛び降りたルシユアは苦渋の表情で口を開いた。

「……我らは敗北しました」

その一言に、村人達の間からどよめき上がる。

「なんだと！　それはどういうことだ！？」

「デクリアの襲撃は奴らに知られていたのです。村に到着した私達を出迎えたのは百人以上にも及ぶ武装した軍勢でした。村の戦士達はあの忌々しい連中相手に粘り強く抗戦したものの、最終的には散り散りになってしまつて……私はベルナットの判断で一人だけ逃がされたのです。この村に我々の敗北を伝えるために」

「で、では、ベルナット達は今どこに？」

「デクリアの村に捕らえられているか、最悪の場合は」
ルシユアは悔しげに目を伏せる。噛み締められた下唇から朱色の血がこぼれ落ちた。

村人達の反応は更に顕著だ。顔色どころか手足の先まで真っ青にし、中には病人の如く体を抱きしめ、小刻みに震える者まで出る始末である。

「だ、だからやめた方がいいって言ったんだよ！ どだい連中相手に戦争を吹っかけようなんて、無茶な話だったんだ！」

泡を吹きながら一人の男が吠え、その隣に佇んでいた女性は赤子を抱いたまま泣き崩れる。

大小の違いこそあれ、村人達の反応はみな不可避の絶望に直面した人間のそれだ。

阿鼻叫喚と化した村人達の中で唯一、冷静さを残した老人が怪訝そうに尋ねた。

「だが待て、ルシユアよ。何故、デクリアへの襲撃が奴らに漏れていたのだ？」

ルシユアははっと目を見開いた。

「まさか、村の中に内通者が」

思考から結論へと至るまでの時間はほんのわずかだ。

ルシユアは顔を蒼白にし、馬上の蓮を睨みつけた。

「お前か！？」

「違う」蓮は一言で切り捨てた。

「少しは頭を冷やして考えることだな。俺が間諜であるなら、目的を達した時点で村を離脱しているだろうが」

「だ、だがっ！」

「こちらからも一つ、質問させて貰おう。お前の言うデクリアとやらはどこにある？」

「……そんなことを聞いてどうするつもりだ？」

「ベルナットの奴には借りがある。それを返すいい機会だ」

飄々と言い放つ蓮に、ルシユアは顔色を失った。

「まさか、連中とやり合うつもりなのか……？ 私達、解放軍を全滅させた連中と？ たった一人の軍隊でなにか出来るというのだ！」
「御託はいい。デクリアの村はどこだ？ あいにく、書庫の地図には細々した村の場所が載っていないくてな」

「……ここから真つ直ぐ南西の方角だ。だが、一人で行くつもりなら 悪いことは言わない。やめておけ。お前も知っているとと思うが、連中の力は人間と比べ物にならないんだ。その上、奴らの数は百人以上。戦いにすらならないぞ」

忠告にしては棘のある言葉だが、蓮にはルシユアが本気で自分を引き留めるつもりでいることがよく分かった。

恐らく、この娘は単純に人が良いのだろう。あれこれ悪口を言いながらも、他人が傷つくのを黙って見過ごすことが出来ない性格なのだ。

そういう意味ではお人好しのベルナツトと似た者同士である。

「ルシユア、しばらくこの馬を借りるぞ」

蓮はほんの僅かな苦笑と共に馬の手綱を引いた。

「ま、待て！ 本気で連中の所に攻め込むのか！？ それなら私も！」

「悪いが足手纏いはいらん。その体でまともに動けるとは思えないからな」

冷たく断じられ、ルシユアはぐつと押し黙る。

それでも彼女は棒立ちのまま蓮を送り出すことはなかった。

「分かった。それなら、お前に一つだけ渡しておくものがある！」
「なに？」

蓮が怪訝そうに眉を寄せた。その時にはもう、ルシユアは居並ぶ村人達を掻き分け、村の端にある武器庫へと駆け込んでいる。

数秒後、武器庫から戻った彼女の手に握られていたのは、蓮がかつての世界で所持していた軍刀だ。

ルシユアは再び蓮の前に立つと、息を切らしながらも黒塗りの鞘

を差し出した。

「これを持って行け！」

「……いいのか？ 俺はこのまま村から逃げ出すかもしれないんだぞ。何故、わざわざ武器まで提供してくれる」

「お前を信用した訳ではない。ただ拾った剣を元の持ち主に返しただけだ」

「それに」「口ごもりながらも、言葉が続けられる。

「借りを返すといったお前の言葉が、私には嘘でないように思えた」
暗く、陰鬱な雰囲気にも包まれた村人達の中で、ルシユアは顔を俯けた。

その表情を過ぎるのは、無力な自分に対するどうしようもない歯がゆさだ。

本来ならばルシユア自身が敵地に飛び込み、ベルナットや仲間達を救いたいのだろう。

だが、彼女にはそんな力も策もない。戦場から命からがら脱出し、こうして敗戦の報を村に持ち帰ることが精一杯である。

「……ベルナットを頼む」

万感の思いを込めて放たれた言葉と共に、蓮はルシユアの手から自らの愛刀を受け取った。

「心得た」

手綱を引かれ、胴を蹴られた馬が、嘶き声と共に駆け始める。

風を切る。最早振り返ることなく、馬は疾走をする。

眼下を滑る大地。流れる風景。遠ざかる村。

そうして、榊蓮は再び戦場を目指した。

デクリアの戦い？

デクリアの村はアクリオンと同じく、森林の狭間に建つ小村だ。

鉦山都市テッセリウスからほど近いこの村に住む人々は、武器鍛造のための燃料となる材木の伐採を強制されており、村内には住民たちの仕事つぷりを監督するための役人まで常駐していた。

今回ベルナットら解放軍が起こした軍事行動は、この監督官を撃破し、村人たちを強制労働から解放することが目的である。

元々、村に駐留している監督官は数名しかいないため、ベルナットたちに負ける要素はないはずだった。

しかし、現実はそう甘くない。

村へと奇襲をかけた彼らを出迎えたのは完全武装の魔族による軍隊だ。

おまけに、その兵数は百名以上。たった二十名程度の人間たちが勝てるような相手ではない。

ベルナット率いる部隊は抵抗を続けたものの、やがて散り散りになり、拳銃の果てには縄で縛り上げられ、罪人の如く村の中へひき立てられてしまった。

手痛過ぎる敗北。最早、取り返しがきかないほどの惨敗。

こうして、彼らの蜂起はまずその第一歩から挫折に終わったのだ。

日がとつぷり暮れ、森の中を暗闇が覆い出したにも関わらず、デクリアの村には煌々と眩い光が灯っている。

住人の消え失せた村内に我が物顔で居座っているのは、鎧を着込

んだ二足歩行のイノシシたちだ。

彼らは広場の中央で篝火を焚きつつ、車座になって酒杯を打ち交わし、汁の滴る骨付き肉にかぶりついていた。

「全く、人間つてのはバカばかりで困る。圧倒的な力の差すら理解出来んとはな」

その中で一際巨体を目立たせているのは、豪奢な銀杯を手に持った怪人である。

『巨亥きよがいの一族』が族長スクローファ。周辺地域では豪腕で知られる魔族の一人だ。

炎のように真っ赤なたてがみを持つ彼の傍らには、痩せぎすの男が一人、引きつった愛想笑いを浮かべたまま酒壺を抱えていた。

「いえ、全くその通りで。ただ、あつしは旦那様らに盾突こうなんて思っちゃんいませんよ。だからこうして、お先に報告させて頂いた次第でして、ハイ」

「いい心がけだな。お前のような知恵の働く人間ばかりであったら、我らの統治も楽であったろうに」

「へへ、ありがとうございます。旦那の賢さには敵いませんがね」

おべっかを使いつつ、男は空になった銀杯に壺の中身を傾ける。

その姿を、縄で縛られたベルナットら解放軍の戦士たちは忌々しげに眺めていた。

「ディーノ……何故、魔族に情報を売り渡すような真似を」

苦渋の思いと共に尋ねるベルナットに、ディーノと呼ばれた男は嘲るような笑みを返した。

「ベルナット隊長、悪いけど俺はもうあんたのやり方について行けなくなっただんだよ」

「なんだって」

「今までみたいに隊商を襲うだけなら良かったんだ。でも、あんたは俺たちに解放軍なんて名前をつけて、魔族全体と戦おうとした。

それじゃあ、困るんだよ。あんたは魔族の恐ろしさを理解してない。勝ち目の薄い勝負なんかには、これ以上付き合い切れないさ」

「……怖気づいたのか、デイーノ」

「まあね。俺も命は惜しい。だから、こうして保身に走らせて貰ったってわけだ」

悪びれた様子もなく言い放つデイーノに、ベルナットは内心で歯噛みする。

(くそつ、この男の矮小さをもつと考えておくべきだった)

デイーノは元々打算に長けた男だった。それでも、ベルナットは魔族に尻尾を振るような真似だけはしないと置いていたのだ。

魔族。

現在、この大陸を支配しているのは人間ではない。ヒトより遙かに強大で、残虐な性格を持つ悪魔だ。

人間の三倍近い戦闘力を持つとされる彼らは総称して魔族と呼ばれるものの、その氏族は多岐に渡っている。

今回、ベルナットたちと交戦したスクローファ率いる巨亥の一族もその中の一つだった。

そして、人間の立場は魔族に服属する奴隷、または家畜だ。

ゲリラとして活動するベルナットたちのような僅かな例外を除き、ほとんどの人々は鎖で繋がれ、労働や工作に従事させられるのが常だった。

(……そういえば)

ふとベルナットは気付く。

デクリアの村では五十名前後の村人が林業に携わっていたはずだ。にも関わらず、村の中に人影はない。ベルナットが奇襲をかけた時も、元々の住人の姿を見受けることは出来なかった。

「なあ、族長。ちょっと聞きたいんだが」

「んあ？ なんだよ、負け犬が生意気な口を聞きやがるな」

不機嫌そうに鼻を鳴らしつつも、スクローファは酒の肴になると思ったのか、獣臭い顔をベルナットへと突き出した。

「ま、いい。俺は今、機嫌がいいからな。簡単な質問にだつたら答えてやる」

「なら聞くけど、この村の住民たちはどうしたんだい？ テッセラ
リウスの鉱山に連れて行ったのか？」

「ああん？ そんな面倒なことするかよ」

「だったら、何故この村には誰もいないんだ。まさか、どこかに幽
閉して」

「当たらずとも遠からずつとこだな。連中なら、ほら、そこに入
ってる」

スクローファが指差した先にあるのは、穀物庫の横に並べられた
数十ほどの長細い壺である。とても人間が入れるような大きさでは
ない。

「それ、ひよつとして冗談のつもりかい？」

眉を顰めるベルナットの前で、スクローファは楽しげに巨体を揺
らした。

同調するかのようには、篝火を囲むイノシシ面の怪物たちが粘つい
た笑みを浮かべる。

「あいつらの数は五十四。そして、俺の軍隊の数は百十二だ。二人
に一匹くらいで丁度いい計算になるだろ？」

「……え？」

その瞬間、ベルナットは全身からさつと血の気が引くのを感じた。

(まさか)

ベルナットは再び陶器製の壺へと目をやり　そして、ようやく
理解する。

丸く開いた壺の口に、真新しい血液が付着していることに。

「スクローファ、貴様！？」

「俺たちは丁度、腹が減ってたんだ。そして、目の前に食糧があっ
た。だったら後は、言うまでもねえよ」

げっげっげっ、とカエルのように喉を鳴らしつつ、スクローファ
は焙られた肉へかぶりついた。

「ああ、お前らは殺さないから安心していいぜ。死んだ連中に代わ
って木を切る作業に加わって貰う。そういう風に、この村の監督官

とも話がついてるからな」

「この外道っ！」

「おう、そうだ。後で、お前らのお仲間も回収してやらないと。デ
イーノ、アクリオンの村つてのはどこにあるんだ？」

「ここから真つ直ぐ北東です。……おつと旦那、酒が空になりやし
たね。ちよつと換えを持ってきますよ」

空っぽになった壺を抱えて立ち上がるデイーノに、スクローファ
は「待て」と声をかけた。

「そういえば、お前に褒美をくれてやるという約束があつただろう
「え？ ああ、そうですね。そんな話もありましたね」

そしらぬ様子を装いつつ、デイーノは期待の表情を隠さない。

スクローファはおもむろに立ち上がると、腰に刷いた鞘から鋼鉄
の直剣を抜き放った。

「見る、デイーノ。こいつは素晴らしい逸品だと思わないか？ 数
か月ほど前、辺境で起きた反乱を鎮圧した際、錬鋼の御大将から直
々に頂いた代物だ」

「へへ、あつしに武器のことは分かりませんが、いい輝きをしてま
すなあ」

「うむ。そこでだ。こいつの切れ味をお前にも味あわせてやろう」
「……へっ？」

デイーノは不思議そうに首を傾げる。その時にはもう、彼の頭部
は一刀の元に切り飛ばされていた。

血を噴き出し、どつと音を立てて倒れる男の胴体を、スクローフ
アは邪魔そうに蹴り飛ばす。

「クズめが。俺様が直々に剣をくれてやったんだぞ。礼の一つも言
えんのか」

地面に転がる首に、ぺつと吐きかけられる唾。

変わり果てた同胞の姿から、ベルナツトは思わず目を逸らしてし
まった。

(デイーノ……魔族の恐ろしさを理解していないのはお前の方だよ。

連中は僕たちのことなんて、地面を歩くアリ程度にしか思っていない（というのに）

じわじわと間近まで広がる血液を見て、縛られた男の一人が頬を引きつらせる。

「た、隊長」

「大丈夫。村へはルシユアを使いに出した。今頃は村長がみんなを纏めて、どこかへ逃げ出している頃だ」

「ですが、それでは自分たちは……」

「怒り狂った連中に殺されるかもしれないが、まあ、仕方ないな」

小声で答えつつ、ベルナットは平静を装って肩を竦める。

デクリア村の襲撃が露見した時点で、自分たちの運命は決まっていたはずだ。

今、彼らが生きながらえているのは単なる神の気まぐれに過ぎない。

「なに、寿命が二、三十年ほど縮まるだけだ。みんなだって、その覚悟が出来てたはずだろ」

「そ、そりゃそうですけど……」

いかにも納得が行かない風に、男は口ごもった。

しかし、ここにいる戦士の多くはアクリオンの村に妻子を持つ者たちである。

一人者だったディーノと違い、自らの命可愛さに村の情報を売り渡すことなど、到底出来るはずもなかった。

「おおし、それじゃあ今日のところはここで一泊して、明日の朝になってからこいつらの村を攻撃するでしょう」

スクローファの言葉に、篝火を囲む豚面の眷族たちは一も二もなく賛同の声を上げる。

流石に彼らとて、一戦を終えた後で休息もなしに行軍を続けたくはない。

なにより今は夜だ。森林地帯に不慣れな彼らが、暗闇の中を突っ切って進むのは困難だった。

「見張りは今回の戦いで功のあった者だけ免除する。それ以外の奴らは一時間ずつの交代で」

続けて命令を出そうとしたスクローファは、そこでふと言葉を切った。

車座の中央で焚かれていた篝火に、外からなにか丸い物体が投げ込まれたのだ。

「あん、なんだ？」

ぱちり、と弾ける火の粉。豚面の一人が怪訝そうに篝火へと視線を向ける。

やがて、その中から転がり出た物体を見て、一同は揃って声を失った。

「……こいつは」

呻き声を漏らすスクローファの前にあるのは、たき火の中で半分ほど焼け焦げた豚面の頭部だ。

丁度、切り落とされたディーノの首と並ぶ形になったそれを見て、スクローファは赤みがかった顔に憤怒の表情を浮かべた。

「おのれ、何者だ！」

衝動的に立ち上がったスクローファは、ようやくそこで村の周辺に置かれた歩哨が一人残らず地面に倒れ伏していることに気付いた。と、同時に焼けつくような怒りの感情がスクローファとその眷族を襲う。

生粋の戦闘集団である彼らが、ここまでこけにされたのは初めての経験だ。

巨亥の族長は禿げあがった額に、幾本も太い血管が浮かび上がった。

「くそつ、許さん！ 全員、森へ出る！ 賊をブチ殺せ！」

族長の指示を待つまでもなく、豚面の兵士たちは襲撃者の姿を求め、夜の森へと飛び出す。

その蜂の巣をつついた様な騒ぎを、ベルナットは地面に横たわったまま眺めていた。

(敵襲だつて？ まさか、ルシユアが戻つて来たのか……いや)

脳裏に浮かんだ考えを、すぐにベルナットは否定する。

確かに、ルシユアはまだ若い娘でありながら優秀な戦士だ。

しかし、完全武装の魔族を奇襲し、音もなく打ち倒せるほど人間
離れした能力は持っていない。

「一体、誰が……」

呟くベルナットの前にその男が姿を現したのは、スクローファたち
が森の中へ消えてから数分後のことだった。

デクリアの戦い？

「さて、と」

森の中に生い茂る樹木の一つ。そのてっぺんに身を潜ませた蓮は、デクリアの村から軍勢の大半が出払ったのを見て、おもむろに木の上から飛び降りた。

族長スクローファを始め、多くの兵士が襲撃者の搜索に向かったものの、未だ村内には十名ほどの武装した魔族が周囲を警戒している。

だが、蓮はなんの気負いもなく歩を進め、村の入り口へと姿を現した。

最初の犠牲者となったのは、付近の警邏に当たっていた一族の兵士である。

「きつ、様!？」

「悪いな。死んでくれ」

蓮は咄嗟に声を張り上げようとした兵士に向かって、軍刀を一閃させた。

たちまち稲穂の如く首を刈り取られ、崩れ落ちる豚面の魔族。

当然、この襲撃は他者へと知れ渡ることになったが、その隙にも蓮は近場の敵兵を一人、電光石火の速さで切り倒していた。

「これで二人か」

踏み出された軍靴が、血に濡れた砂利の上で乾いた音を立てる。

まるで散歩でもするかのように村の門前へと現れた蓮に、一族の兵士たちは一様にぼかんとした表情を浮かべた。

彼らには目の前の光景が信じられなかった。精強さで知られる巨亥の一族が人間相手に手も足もでないなど、悪夢としか言いようがない。

「な、あいつ……!」

「てめえ、よくも!」

やがて、いち早く呆然自失の状態から脱却した二人の兵士が、憤激の声と共に蓮へと討ちかかる。

ただ、この場合は相手が悪過ぎた。一方の兵士はすれ違いざまに腹を裂かれ、もう一方は声を発する間もなく首を飛ばされてしまう。蓮が現れてからここまでかかった時間は、僅か十秒足らず。

それでも、豚面の兵士たちが彼の脅威を認識するには十分な時間だった。

「くっ、包囲しろ！ 全員でかかるぞ！」

その場に残っていた部隊の副長が、すかさず周囲の同胞へと指令を送る。

しかし、これが彼の命運を決めることとなった。敵軍に指揮官の存在を見て取った蓮は、すかさず副長目掛けて突進を仕掛けたのである。

泡を食った副長は腰に佩いていた剣を抜き放ったものの、すぐさま利き腕を切り落とされ、返す刀で喉を貫かれて沈黙した。

こうなってしまうと、あとに残っているのは屈強な肉体を持ち、全身を重武装で固めただけの烏合の衆だ。

体内に組み込んだ神経加速装置によって体感速度を遅延させていた蓮にとっては、ただの木偶の坊でしかない。

「これで終わりか」

十数秒後、最後の敵兵を切り倒した蓮は軍刀を虚空に一閃させ、刀身に張りついた生々しい体液を振り払う。

その足元では縄で拘束された解放軍の面々が、一用に唾然とした表情を浮かべていた。

「運がいいな、ベルナット。まだ生きてるとは」

「サカキ……か？」ベルナットはなにか信じられぬものを見たかのように、目をしばたかせた。

「驚いたな、あの巨亥の一族を子ども扱いだなんて。ひよっとして君、人間じゃなかったのかい？」

「前にも言っただろう。俺は人間だよ。ただ、人間の性能を限界ま

で極めているだけだ」

軽い調子で答え、蓮はベルナットを縛っていた縄を軍刀で切った。こうして再び自由になった解放軍の戦士たちだが、その顔に浮かんでいるのは狂喜の色ではなく、狐につままれたかのような表情だ。「……ありがとう、助かったよ。でも、どうして君がここに？」

怪訝そうに尋ねるベルナットに、蓮は言った。

「ベルナット、戦場で重要なことはなんだと思う？」

「こんな時になぞなぞかい？ 確か、答えは情報だろう？」

「そうだ。その点、お前は自軍の情報を流出させ、敵の奇襲を食らってしまった。唯一、評価出来るのは途中で仲間を村まで逃がしたことだな。おかげで俺も、このデクリアに辿り着くことが出来たのだから」

「ひよつとして、君はルシユアから話を聞いてここへ来たのか？」

「ああ。お前には幾つか借りがあある。それを返しに来た」

蓮は無表情のまま、片腕を差し出す。

「立て、ベルナット。反撃を開始するぞ」

「反撃だつて？ ここから逃げるんじゃないのかい？」

「忘れたのか。この近辺にはまだ敵の主力がうろついている。今、村の外に出たところで奴らとはち合わせるだけだ」

「だったら、どこかに隠れて戻って来る連中をやり過ぎした方が…

…」

「やり過ぎすか、奇襲をかけて息の根を止めるか、まあどちらかだな」

平然と物騒な台詞を口にする蓮に、ベルナットはしばし言葉を失った。

「が、すぐさま愉快そうに口元を吊り上げ、差し出された腕を握り返す。」

「そいつは魅力的な提案だね」

立ち上がったベルナットは地面にしゃがみ込む仲間たちを見渡した。

その瞳には既に、強い意志の力が戻っている。

「ほら、みんな。ぼんやりしている時間はないぞ。早く立つんだ」

「ま、待って下さいよ、ベルナット隊長。ひよっとして、まだ連中とやり合うつもりなんですかい？」

「その通り。なにしろ、僕たちは最初から連中と戦争をしに来たんだ。ここですぐすこと引き下がる理由がどこにある？」

当然の如く言い放つベルナットだが、戦士たちの反応は鈍い。

なにせ、彼らはい先ほど手痛い敗北を被ったばかりだ。

加えて、デクリアの住民が辿った凄惨な末路までも目にしている。「か、勘弁してください。さつき、俺たちがあいつらに手も足も出なかったことを忘れた訳じゃないでしょう？ 相手はまだ百人近く残っている。少し数が減っただけで状況はなんも変わっちゃいないんだ。どだい、連中とやり合おうだなんて無茶な話だったんですよ……」

弱々しい声を漏らす禿頭の大男を前にして、ベルナットはふと膝を折り、蓮によって切り倒された兵士の手から鉄の剣を取り上げた。

「なあ、ライゼル」

ぶんつ。突然、振り下ろされた白刃に、ライゼルと呼ばれた大男は目を瞑る。

だが、ベルナットの剣はライゼルの耳の真横で止まっていた。

突き出された刀身が指し示しているのは、地に転がるディーノの生首だ。

「奴らに恭順したディーノはどうなった？ 首を切られて死んでしまったさ。」

暴政に屈していたデクリアの人々はどうなった？ 今は奴らの胃袋の中だ」

「た、隊長……」

青白い顔をしたライゼルを前に、ベルナットは淡々と言葉を続ける。

「次に犠牲となるのはアクリオン。僕たちの村だ。君自身はおるか、

君の妻や子供だつて殺されてしまう。……君は、それでいいのか？
「そんなこと！」

「分かつてるはずだろう、ライゼル。僕たちにはもう抗うより他に道はないんだ。既に村の場所は知られている。もしこの場から逃げれば、奴らはアクリオンを襲うはずだ。例え逃げたとしても、女子供を連れたままでは遠くへ行けない。いつかは見つかつて殺されてしまう」

「ごくろり。飲み込まれる唾の音が周囲に響いた。

「生き残るためには、戦うしかない。生き残るためには、勝つしかない。……それでも尚、奴らから逃げ延びようだなんて考えを持っているのなら、そいつはただの臆病者だ。負け犬だ。どこへなりとも消え去ってしまえ！」

幾多の視線を一身に受けながら、ベルナットは片手に携えた剣を頭上へと振りかざす。

「さあ、立て！ 立つんだ、アクリオンの戦士たち！ そして戦え！」

「う、お……お、おおっ！」

強烈な叱咤を受けたライゼルは、歯を食いしばり、獣染みた咆哮と共に立ち上がった。

その姿を見た他の村人たちも、一人また一人と武器を手に取り、身を起こす。

そして、全員が決起した時。その場にはもう、暴虐に怯える人々の姿など欠片もなかった。

「大したものだな、ベルナット。どうもお前は煽動家の才能を持っているらしい」

「褒めてるのかい、それは？」

意外そうな様子の蓮に、ベルナットは苦笑を返す。

「ところで君は一応、僕らの仲間ってことでもいいのかな？」

「まあな。一度助けてその後、死なれましたじゃ俺も寝覚めが悪い」

「……そうか。正直、僕は君のことを単なる頭のおかしな変人だと

勘違いしてたんだ。でも、本当の君は義に厚い人間だったんだな。

改めて礼を言っよ」

「気が早いな、お前は。戦いはまだこれからだというのに」

「分かってる。外に出た敵が戻って来る前に早くどこかへ隠れよう」

ベルナットは金色の瞳に、暗い怒りの色を浮かべた。

「今度こそ、連中に目にもものを見せてやる」

デクリアの戦い？

それから数分後、無為な搜索の果てに村へ戻ったスクローファが目の当たりにしたのは、変わり果てた同胞たちの姿だった。

「……なんだこれは」

スクローファは怒りよりも先に愕然としてしまった。

村のそこいらには一族の兵士たちが、無惨な格好でうち捨てられている。

首を切り落とされた者。腹を裂かれた者。頭から股間まで真つ二つにされたもの

みな、冷たい屍となって死んでいた。

「なんだこれはア！」

激昂の余り、スクローファは真つ赤な鬘を針金のように逆立てる。村内の異変は兵士たちが切り殺されていただけではない。

恐らくは襲撃者の手で解放されたのだろう。拘束していたはずのベルナツトラアクリオンの住民までもが消えていた。

「ふざけるな！ ふざけるな！ なんだこれは！ どうして、人間風情に俺たちがここまでこけにされなくてはならん！ くそつたれめ！ 許さんぞゴミ虫ども！ 殺せ！ 絶対に逃がすな！ 一人残らず皆殺しにしろ！」

族長の怒声を受け、たちまち一族の兵士たちは泡を食って夜の森へと踵を返した。

しかし、百人近くの人員を使った大搜索は結果として徒勞に終わる。

元々、巨亥の一族は戦闘に特化した集団だ。深い暗闇の中、足場の不確かな森林内で、逃げ出した捕虜を追うのは至難の技だった。

「くそつ！ 何故だ！ 何故、一人も見つからん！」

憤死しかねない勢いで吠えたてるスクローファに、部下の一人が恐る恐る声をかけた。

「族長。これ以上の搜索は時間の無駄ですぞ。連中を探すなら明日の朝にした方が」

「俺に意見をするなっ！」

ぐしゃり。振り下ろされた剣に脳天を叩き割られ、豚面の兵士は地面へと倒れ伏す。

もしスクローファが冷静で、分別を残した状態だったのなら、部下に陳情されるまでもなく自分たちの行動の無意味さに気付いただろう。

だが、今の彼は怒りに我を失っていた。周囲の言葉など火に油を注ぐだけで、耳に入るはずもない。

「もう一度、森の隅々まで焙り出せ！　ぐずぐずするんじゃないっ！　奴らをひっ捕らえて来るんだ！」

こうして激憤するスクローファにより、一族の戦士たちは三度目に及ぶ無意味な搜索へと駆り出された。

「あの阿呆め。ようやく寝静まったか」

スクローファが搜索を打ち切ったのは、草木も眠る丑三つ時になった頃のことだ。

同胞を殺した襲撃者と逃げ出した人々を捕えることは渋々諦めたものの、腹の虫の収まり切らないスクローファは村中の酒瓶を空にした後で、不貞寝するかの如く眠りについていた。

「でも、さっきは危なかったね。危うく酒壺を探しに来た連中に見つかるどころだったよ」

それに倣い、十名ほどの見張りを除く敵兵も全員が鎧を脱ぎ捨て、高いびきをたてている。

無茶な命令を受け、重装備で森林を駆け回った彼らはすっかり疲

れ果てていた。手足を投げ出し、兜を枕代わりに爆睡してしまうのも無理はない。

「てつきりすぐ追っ手を引かせると思っただが、ここまで粘られたのは予想外だったな。この状態で搜索を強行するとは馬鹿としか思えん。連中の知性はそれほど高くないのか？」

「魔族つてのは基本的に性格が悪いけど、その中でも巨亥の一族はとりわけ粗暴で短気なんだ。怒ると冷静な考え方が出来なくなる」

「ふむ。出来ればいつか、氏族ごとに詳しい性格や傾向を調べたいものだ。まあ、今回は状況がいい方向へ転がったから良しとしよう」
囁くような声と共に、蓮は立ち上がった。

組み上げられた材木の隙間からは、篝火の燃えかすに照らされたデクリアの村が見える。

既に兵士の大半は寝静まっており、村の外縁に立った歩哨も注視しているのは森の中だけ。

当然、穀物庫の中に隠れ潜む二十名ほどの人々にはまるで気付いていない。

「行くよ、みんな。頃合いだ」

ベルナットの号令に従い、鹵獲した武器を手に手に携えた戦士たちは村の方々へと散らばった。

それは息を静め、足音を殺し、闇に紛れた静かな戦争だ。

あらかじめ蓮から柔らかい首元を狙うように指示されていた解放軍の戦士たちは、さながら暗殺者の如く、眠りに耽る豚面の敵兵を次々殺害して行く。

その作業は、村の周辺を囲む見張りが内部の異変に気付くまで延々と続いた。

ガチンツ！

人々が行動を開始してから数分後、一人の男が狙いを誤って、兵士が枕代わりにしていたヘルムへと刀身をぶつけてしまう。

途端、甲高い金属音が鳴り響き、夜の森を眺めていた歩哨は背後へと振り返った。

「なん……だああ!？」

ぎょつと目を見開く彼の瞳に映ったのは、闇の中を蠢く複数の人影である。

すぐさま兵士は大きく息を吸い込み、声を張り上げて、その頭部を閃く刃に勿ね飛ばされてしまった。

「気付かれたか」

舌打ち一つ漏らして、蓮は村の内部を見渡す。

暗夜の奇襲によって兵士の数は半分まで減っていた。

それでもまだ、解放軍の戦士たちと比べれば二倍近くの敵が生き残っている計算だ。

(こういう場合はまず、頭を落としておくべきだが……)

そうは言っても、スクローファの姿は篝火の周辺にない。

おおかた、どこか家の中でベッドに沈んでいるのだろう。

もし外でのうのうと眠りについていたのなら、蓮が見逃すはずもなかった。

「見つかったぞ! 殺せ!」

数人が寝ぼけまなこを擦りつつ起き上がるのを見て、ベルナットは周囲の村人へと号令を放った。

たちまち隠密行動から解き放たれた戦士たちが、剣を振りかざして敵兵へと襲い掛かる。

本来なら圧倒的強者である一族の兵士も、夢うつつの状態ではろくな抵抗が出来ず、次々と脆弱な人間たちの手で討たれて行った。

「へへっ! 見たか、豚足ども! 人間様を舐めるなよ!」

この奇襲で四人目の敵兵を仕留めた男が、己の力を誇示するかのようになを張り上げる。

しかし、それが彼にとつての遺言となった。突如、頭上から振り下ろされた剣が、男の身体を袈裟掛けに捌いてしまったのだ。

ずるりと上半身を滑らせ、倒れる彼の背後から現れたのは、全身を怒気で赤く染め、鬘を天に向かって逆立たせた巨亥の族長である。

「ゴガアアアアアッ!」

激昂するスクローファは猛獣そのものの咆哮を上げるなり、片手に持った長剣で無茶苦茶に周囲を薙ぎ払った。

運悪く近場にいた数名の戦士が犠牲となり、更に一族の兵士たちまでもが巻き込まれ、共に細切れのベークンと化す。

「出たな、スクローファ！」

「あの豚め、敵も味方もおかまいなしか。早く仕留めた方が良さそうだな」

蓮は小さく呟くと、全くの自然体のまま暴走するスクローファの前へと立ちはだかった。

血走った野獣の目はその姿を見逃すはずもない。みすばらしいなりをした村人たちの中。一人だけ格好の違う蓮に、スクローファは口元から泡を飛ばして吠えだてる。

「貴様か！ 貴様か！ 俺たちに喧嘩を売ってきたのは貴様か！

見つけたぞ、虫けらめ！ 今すぐその脳味噌をぶちまけてやる！」

「そうか。早速で悪いが、死んでくれ」

長剣を振りかざすスクローファに対し、蓮は逆袈裟の軌道で刃を切り上げた。

鈍色の刀身と刀身がぶつかり合い、闇夜に眩い火花が散る。

同時に、スクローファはにやりと口元をつり上げた。

「バカめ！ これは錬鋼の一族によって産み出された名剣中の名剣！ 貴様のなまくらとは違うのだ！」

勝ち誇る声が響き渡った直後、スクローファの剣は磨き上げられた刃によって根元から真っ二つに叩き折られていた。

ぎよつと瞠目する間もなく、再度白刃が煌めく。スクローファの野太い両腕が、血飛沫と共に宙を舞った。

「う……げ！？ 俺の剣が！？ 俺の腕があ！？」

「零式軍刀真改。俺の世界では時代遅れの中古品だがな。鉄器ごときに後れは取らんさ」

刀を振り抜いた体勢のまま、蓮は淡々と答える。その言葉通り、強化炭結晶の刀身には刃毀れ一つない。

一方、武器と両腕を失ったスクローファは顔面を蒼白にして、ぐくりと地に膝をついた。

「ま、待て！ ゆっ、許してくれ！ もう人は食わん！ 二度とお前たちに乱暴を働かないと約束する！ だから……！」

「駄目だな」

必死に命乞いをするスクローファに対し、蓮は容赦なく軍刀を一閃した。

勿ね飛ばされる豚面の頭部。宙を舞ったそれが、村の中央でボトリと音を立てる。

混戦の中、勝負の趨勢を見守っていた両軍の戦士たちはこの結末に揃って目を点にした。

「あ、あのスクローファが」

「……秒殺かよ」

呆然とする人々の中、いち早く平静さを取り戻したのはベルナツトだ。

「族長は死んだぞ！ 総員、敵の残党を討ち取れ！」

残党 その言葉に一方は自らの勝利を知り、もう一方は自らの敗北を察した。

この時点でも、単純な数字の上でならばお互いの兵数は同等だ。しかし、巨亥の一族は不意打ちを食らい、部隊の八割を殺された拳句、族長までも討ち取られ、戦闘に耐えるだけの士気を維持することが出来なくなっていた。

その結果は見るも無残な壊走である。一族の兵士たちは先を争ってその場から逃げ出そうと、村の入り口に殺到した。

「族長が死んだぞ！ もう無理だ！」

「逃げる！ 逃げる！ 早く行け！」

そして、怒りに燃える解放軍の戦士が、その好機を逃すはずもない。

「追え！ 追え！ 一人残らず殺せ！」

「殺されたデクリアの住人の恨みを思い知れ！」

どつと押し寄せた軍勢は逃亡者たちの背中に大蛇の如く食いつき、鉄の刃を突き立て、全身をずたずたに引き裂いてしまう。

悲鳴と怒号が木霊する中、掃討戦と化した戦況を眺めつつ、蓮はぼつりと呟く。

「終わったな」

その隣で、ベルナツトは感嘆のため息を漏らしていた。

「驚いたよ。まさか、本当に五倍近い魔族の軍団に打ち勝てるとは思わなかった」

「そうか？ 一万対五万なら絶望的な戦力差だが、二十対百では大して変わらんさ」

「いや、魔族は人間の三倍近い力を持っているって言われてるんだよ？ それをこうも一方的に蹂躪出来るなんて……」

「力で劣っているのならば知恵で補えばいいだけだ。人は古来から、そうやって繁栄を続けて来たのだから」

淡々と答えつつ、蓮は白みかけた東の空を見て、微かに目をすくめた。

（だが、そうやって繁栄を続けた結果、人は力を求めた意味すら忘れてしまった）

この世界に来てから、もう何度目かになる日の出を見つつ、内心で呟く。

明けの光は森の中に逃げ込んだ一族の兵士から、暗闇の加護を奪い取った。

こうなると短足で鈍重な巨亥の一族が、身軽な人間から逃れる術はない。

やがて、数分後。全ての敵を討ち果たした戦士たちは拳を頭上に突き上げ、一斉に勝ち鬨を上げる。

この日、ヒトは絶対的であった支配者から、人類解放へ向けて最

初の
一歩を
勝ち取
った。

乾杯

激動の一夜が明け、満身創痍ながらも晴れ晴れした顔でアクリオンの村へと戻ってきた解放軍の戦士たちを、住人たちは歓呼と共に出迎えた。

村民が全滅したため、デクリアを解放するという当初の目的は達せられなかったものの、巨亥の一族を打ち破ったのは紛れもない戦果だ。

熱狂に包まれた人々は、日が沈んだ後も口々に勝利を讃え合い、篝火の周りに車座を組んで、互いに祝杯を交わしていた。

「サカキ、隣いいかい？」

草場に腰を降ろしてぼんやりと篝火を眺めていた蓮は、ふと真横からかけられた声に顔を上げる。

眼前に立っているのは両手に酒杯を持ったベルナット・クーガだ。特に断る理由もなく、蓮は無言で頷いた。

「これ、去年の秋に採れたブドウを発酵させたものなんだ。君も一杯どうかな？」

「貰おう」

ベルナットの手から木製の杯を受け取り、口元に紫色の液体を近づける。

やや熟成が進み過ぎているのだろう。つん、ときついアルコールの匂いが鼻をついた。

蓮は杯の中身を一口分だけ口に含むと、しばらく舌の上で転がした後で飲み干した。

「旨い」

「だろう？」ベルナットは嬉しそうに口元をつり上げる。

「君の世界にもお酒はあったのかい？」

「ないな。酒という名の小便ならあったんだが」

蓮はもう一度、杯の中身を傾ける。じわり、と喉から胃に広がる

熱が心地よい。

「俺のいた場所では酒類が贅沢品として規制されていた。その上、口に出来るのは九割が醸造アルコールの安物ばかりだったから、こんな旨い酒を飲んだのは久しぶりだ」

「そう言つて貰えると嬉しいよ」

ベルナットは満足そうに杯の中身を半分ほどまで一気に飲み干す。
「ねえ、サカキ。君のいた世界つてのはどんな場所だったんだい？」

酒杯の中で揺れるぶどう酒を見つめたまま、蓮は一言で答えた。
「地獄だ」

しん、と辺りの音が静まり返る。

「俺のいた場所では百年以上も長い戦争が続いていた。世界は帝国と共和国、その他の雑多な国々に分かれて争い、互いの国土を焼き尽くしたんだ。結果、空は燃え、地は裂け、海は凍った。……分かるか、ベルナット。俺のいた世界では人間以外の全てが絶滅した。木々も、動物も、星の光までもが消え失せるほどにな」

蓮は我知らずの内、杯を持つ手に血管が浮くほど力を込めていた。眼をつむれば、脳裏に浮かぶのはあの荒廃した世界の光景だ。

誰があんな結末を望んだのか。何があの終焉を導いてしまったのか。

今となつてはもう誰にも分からない。後に残つたのはただ嘆きと絶望の声だけだった。

「そして、俺はその世界で百年以上もの間、軍人として働いていた」
「百年以上つて……あの、君つて今何歳なんだい？」

「忘れた。確か、百三十かそこらだ。俺のいた世界では老化抑制技術が発達していたから、ほとんどの人間は五百年近くまで寿命があった。もっとも、百年生きる前に戦禍で早世する者が大半だったんだがな」

「凄まじいね。僕の知っている常識と大分違う」

「当然だ。文明のレベルが千年単位で異なる。俺がこの世界へ辿り着いたのも、行き過ぎた科学技術の結果。もしくは神の悪戯だ」

小さく息をつき、蓮はぶどう酒で乾いた唇を湿らせる。

ふと空を見上げれば、青白い月が暗い夜空に輝いているのが見えた。月見酒である。

「ベルナット、俺にとってこの世界は天国に思える。防塵スーツもなしに地面の上を歩けるなど、それだけで夢のようだ」

「じゃあ、君は元の世界に戻りたいとは思わないのかい？」

「まあな。そもそも、俺は自殺紛いの行動を取ってこの世界へ来ている。あの地獄へ戻るのなら死んだ方がマシだ」

「ただ」と蓮はかすかに目をすがめ、

「あの世界に一人だけ、俺が忠誠を誓った人を残してきてしまった。今となってはそれだけが心残りだ」

くしゃり、と頭に被った軍帽に手を伸ばした。

既に蓮は縁者を全て戦争で失っている。その上、未婚で恋人もいない。

結局、彼の周りに残っていたのは副官である要氷堂と、皇帝の位を押し付けられた少女の二人だけだ。

「……君はこれからどうするつもりだい？」

「特に考えていない。が、いずれケントリオンに行こうと思っっている。あの街では人間と魔族が対等に近い関係を結んでいると文献にあった。真偽のほどはともかく、一度顔を出してみるのも悪くないだろう」

「そうか。まあ、確かに君ならあそこに行っても食うに困らないかもな」

ベルナットはどこか遠い目ではしゃぐ村人たちの姿を見ながら、ぼつりと呟いた。

「サカキ、君はさつきここが天国に見えるって言ったね。でも、僕の目にはこの世界が地獄に映るよ」

くぴり。酒杯が大きく傾けられ、紫色の液体がみるみる内に減っていく。

「人間は常に死と破滅の恐怖に怯え、残酷な悪魔たちによって自由

を束縛されている。デクリアの住民たちがどうなったかは君も知っているだろう？ ああいう事例はこの大陸じゃ決して珍しくないんだ。人が死ぬのも生きるのも連中の気分次第。これを地獄と言わずしてなんと言う！」

酔いが回って来たのか、ベルナットはやや荒々しく酒杯を地面に叩きつけた。

しかし、金色の瞳は未だに澄んだまま、煌々と燃える篝火を映している。

胸の中の激情を抑えつけるかのように、ベルナットは熱っぽいため息を漏らした。

「サカキ、君の世界にも魔族はいたのかい？」

「いや、いなかった。どうも、お前たちが魔族と呼んでいる生物はこの世界独自の生命体らしい」

蓮は昨夜交戦した巨亥の一族 知性を持った野獣の姿を思い出す。

「俺のいた世界とこの世界はよく似ているが、いくつか相違点がある。魔族というのはその中でも最たるものだ。俺の世界で人間は霊長の王だった。しかし、この世界では奴らが支配者として君臨している」

「その通り。ただ、ある意味それも仕方ないことなんだよ。人間はあいつらよりずっと弱いんだ。……本来ならね」

ふいに金色の瞳が、正面から蓮の顔を見据えた。

「なのに、君は圧倒的劣勢だったにも関わらず、あのスクローファの部隊を倒してしまった」

「剣を手にしたのはお前たちだ。俺はその手助けをしたに過ぎない」
「けど、戦場で指揮を執っていたのは君だろう？ 僕たちだけじゃ、とても奴らに勝てなかつたはずだ」

言って、ベルナットはきつかけ代わりにぶどう酒を飲み干す。

「サカキ、無理を承知でお願いする。君も僕たちの目的を手伝ってくれないか。昨夜の戦いで理解した。僕ら解放軍は今のままじゃ、

とても魔族の軍勢に勝てない。君の力が必要なんだ。奴らを倒し、このレギオニール地方を解放するためには！」

力強く断定する声。これ以上ないほど率直な物言いに、蓮はしばし返す言葉を失ってしまった。

元々、彼がデクリアの戦いで解放軍に手を貸したのは、ベルナットに恩義があつたためだ。

そもそも、異邦人である蓮はこの世界の人間に対して思い入れらしい思い入れもない。

もつとはつきり言ってしまうえば、他人が死のうが生きようがどうでも良いのだ。

「ベルナット、お前は他所から来た素性不明の男に部隊を任せる気か？ それでは村の連中も納得しないだろう」

「いや、そんなことはないさ」

はぐらかすような台詞をこぼす蓮の前で、ベルナットはかすかに口元をつり上げる。

と、そこでふいに頭上から差す影。二人の前に現れたのは酒壺を抱えたルシユアだ。

「こら、二人とも！ どうしてそんな物陰でこそこそ話してるんだ！」

「この娘、大分出来あがつてるな」

「元々、ルシユアはあんまり酒に強くないんだよ。なのに、祭の時はいつも人一倍飲みたがるから……」

足元をふらつかせているルシユアを見て、蓮とベルナットは小声を交わす。

が、ルシユアはそんな男二人にたちまち眉をつり上げると、どっかり草地に腰を下ろした。

「宴の時にはしゃひでにゃにがわりい！」

「呂律が回ってないよ、ルシユア」

「いいから、飲め！ ほら、サカキ殿も！」

完全に酔っ払いと化したルシユアに絡まれ、蓮は渋々酒杯にぶど

う酒を受ける。

「どうにかしろ、ベルナット」

「無茶言わないでくれ。泥酔したルシユアは巨亥の一族なんかより、よっぽどおっかないんだぞ」

苦笑を浮かべつつ、ベルナットは再び満杯になった杯へと口をつける。

一方、ルシユアは空になった壺を傍らに置いた後で、きっと正面から蓮に向き直った。

「サカキ殿、私は感服した！」

「なにがだ」

「あなたはあのスクローファまで討ち取ってしまっほどの勇士だ！なのに、私は今まであなたのことをただのろくでなしだと思ってきた！」

ルシユアは熱っぽく語ると、おもむろに勢い良く頭を下げた。

「申し訳ない！ 浅はかなのは私の方だった！ どうか、この馬鹿を許して欲しい！」

「……………」

蓮は助けを求めるかのように、隣へ視線をやる。

「どうにかしてくれ、ベルナット」

「ルシユアは真っ直ぐな性格だからね。褒めるのもけなすのも、齒に衣を着せない。それはこの村の住民もそうだ。外の人間に対しては冷ややかだが、一度仲間と認められた者に対してはどこまでも親身になれる」

気づけば、ルシユアの大声に引き寄せられたのか。十数名の村人たちがわらわらと蓮とベルナットの周りにやって来ていた。

「サカキ殿、飲んでますかあ!？」

「おっ、案外行ける口なんですな！」

「よし、ここはいつちよ飲み比べと行きましょっや！」
と、騒々しいことこの上ない。

元々、蓮は大人数に囲まれるのが不慣れだ。酔っ払いの言葉を適

当に受け流しているだけで、すっかり疲れ果ててしまった。

そんな蓮の様子を横目で眺めつつ、ベルナットは小さく笑みを浮かべる。

「サカキ、君のことを余所者だなんて思っているのは多分、君一人だけさ。村のみんなはとうの昔に君のことを同胞と認めているよ」

「ベルナット、お前はよほど俺を戦場に立たせたらしいな」

「まあね。それに僕は君が素晴らしい指揮官というだけでなく、善人で、信用に足る義士だと思っている。君と一緒にならば、きつこのレギオニールに平和を築くことも出来るだろう」

「……平和、か」

蓮は酒杯を傾けつつ、その言葉を口に出して呟いた。

(平和、自由、正義。どれも、あの世界で聞き慣れたものだ)

そんな言葉に騙され、一体どれだけの人間が死んだだろうか。

ベルナットが口に行っていることは、蓮の知る支配者たちとなんら変わらない。

ただ違うのは、彼が本心から人々の自由と解放を望んでいることだ。

それはこの場に集まったアクリオンの住民たちも同様である。

「ベルナット、杯を出せ」

「……？」

首を傾げつつも、ベルナットは酒杯を差し出す。

蓮はそこに自らの杯を、こつんと軽くぶつけた。

「サカキ、今のは？」

「『乾杯』という、俺の国での風習だ。仲間と共に前途を祝して、杯の中身を飲み干す」

簡潔に答え、なみなみと注がれたぶどう酒を一息にあおる。

やがて、ふうと唇から漏れる熱い吐息。空の酒杯を眺める眼差しは、どこか吹っ切れたかのような。

「いいだろう、ベルナット。お前に力を貸してやる。今まで俺が耳にしてきた『平和』という言葉は全て欺瞞だったが、お前の台詞か

らは確かな信念を感じた。真に自由と解放を志す人間が一体どこへ行き着くのか。俺もその行く末を見させて貰おう」

その答えにベルナツトはぱっと表情を輝かせ、周囲を取り囲むルシユアらアクリオンの住人たちは歓声を上げる。

「それじゃあ、新たな仲間を祝って」

『乾杯！』

がつん、がちん、とあちこちで乱暴に打ち合わされる酒杯。

その日の酒宴も夜が更け、空が明るみ始めるまで続けられた。

そして、この日、この時、本当の意味で、アクリオンの『解放軍』は結成されたのだった。

乾杯（後書き）

こんばんは、はじめまして。筆者のあおこです。

この小説を読んで頂きありがとうございます。

人外魔境戦記譚は空想世界へ迷い込んだSF世界の住民を描く架空戦記です。

とりあえず、第一部までは掲載しようと思っています。お付き合い頂ければ幸いです。

9/23追記：

三章からは一週間毎の更新になるかと思えます。気長にお待ちください。

大荒原の魔獣

やがて、記念すべき勝利から数日が過ぎた。

先日まで行われていた祝宴は未だ村の中に祭の余韻を残し、行き交う人々の間には活気が満ちている。

そして、その熱に引き寄せられるかのように、アクリオンの住人は徐々に増えていた。

蜂起した解放軍とその勝利の噂は数日もせず森林地帯に隠れ住む人々へと広まり、いくつかの集落は自ら志願して軍の一員として加わっていたのだ。

そのため、アクリオンの村の人口は以前と比べて大きく膨れ上がっている。数で表すならば、およそ五百名。かつての約五倍だ。

「しかし、面倒なことになったな」

村の中の喧騒を眺めながら、蓮は不景気そうな顔で呟いた。

デクリアでの戦い以降、蓮は解放軍の参謀とでも言うべき位置に収まっている。

その隣では名実ともに解放軍のリーダーを務めるベルナット・クーガが、怪訝そうに首を傾げていた。

「面倒？ どうしてだい？ だって、こんなに仲間が増えたんだよ。ありがたいことじゃないか」

「ベルナット、戦場で重要なことを一つ教えてやる。それはな、練度の低い兵なんざ、ただの足手纏いにしかならんということだ。むしろ、練度が低いだけならまだマシだな。連中が昨日まで鍬と鋤しか持ったことがない素人に過ぎん。仮にも解放軍を称しているお前らとは剣の腕も、心構えも違う」

「サカキ、君の言いたいことは分かるよ。でも、最初から全員に兵士としての力を求めるのは難しいさ。これからじっくり訓練を行えばいいじゃないか」

「その暇があればいいんだがな」蓮は常のようにくしゃりと軍帽を

押さえた。

「ともあれ、一つ火急の問題がある」

「ああ……武器の件だね」

今度ばかりは楽観的なベルナットも眉を寄せる。

前回、最初の襲撃でベルナットたちが敗北したのは待ち伏せされたことによる動揺。単純な兵数の差以外にも、扱う武器の質が原因だった。

現在、五百いる解放軍の中で実際に戦闘員として数えることが出来るのは二百名ほど。

その内、半数は巨亥の一族が所有していた鉄剣をそのまま装備しているものの、もう半数が武器として用いているのは鋭く削り出した木の槍や、石の鏃を取りつけた弓である。石器時代も同然だ。

「まあ、そうはいつても急に鉄の武器を拵えるのは不可能だ。この村には鍛冶場もなければ職人もいない。せめて、武器代わりに使えるような代物があるといいんだけど」

「ううん。でも、なにかあったかな」

首を捻りながら周囲に視線を彷徨させたベルナットは、そこで「あ」と声を上げた。

「ルシユア、丁度いいところに」

「ベルナット？ それにサカキ殿もか。一体なんの用だ？」

丁度、近く通りかかったルシユアは肩に担いでいた水甕を地面に置き、二人へと向き直る。

「いや、実は魔族との戦争でなにか使えそうな武器を探してるんだ。心当たりはないかな？」

「使えそうな武器というと……要するに竹槍とか、尖った石とかのことか？」

「別に直接的な武器である必要性はない。なんなら油や毒草でも構わん。油は火計に用いることが出来るし、毒草も鏃に塗れば毒矢として使えるからな」

「……サカキ、君やっぱ結構えげつない性格してるね」

「そうでもないさ。元々、この世界の人間は力で他種族に劣っているんだ。その溝を埋めるためには使える物をなんでも使うべきだろう」

正鵠を射た蓮の言葉にルシユアはにべもなく、ベルナットは今一つ納得が行かない風ながらも頷いた。

「分かった。とりあえず、他のみんなにも話を聞いてみるよ。大勢の意見を聞けば、なにかいい案が出るかもしれない」

「それなら、私は森の中を回って来よう。……サカキ殿、あなたは どうする？」

「少し気になることがあるんでな。一旦、村を離れる。夕方には戻るつもりだ」

「了解。ただ、あまり北の方角には行き過ぎないでくれよ」
「北というと……大荒原の近くか」

蓮は書庫で見た地図を頭に思い浮かべる。

丁度、大陸を二つに割った内の北半分は広大な荒野となっている。通称、大荒原。人はおるか魔族ですら寄りつかぬ不毛の大地だ。

「あそこは凶暴な魔獣の生息地でもあるんだ。普通の人間が近付くのは危険だよ」

「ああ、気をつけよう」

蓮はベルナットの忠告をしかと胸に刻みつけた。

それから一時間後、蓮は北の大荒原からほど近い林へとやって来ていた。

本来、人間の足ならば半日以上はかかるはずの距離なのだが、身体能力が強化されている蓮にとってはぶらりと散歩に行つて帰つて来れる程度の行程だ。

この辺りになると風景も変わって、葉花のない痩せた裸木が並び、それに伴うかのように、乾いてひび割れた大地が北の大荒原へと繋がっていた。

「降水量が極端に少ないせいか……まるで死の大地だな」

どこか懐かしさを覚える光景を眺めながら、蓮は荒野を歩いて行く。

彼がわざわざ危険な大荒地の付近を探索しているのは、とあるものの探索が目的田だ。

そのとあるものというのは要するに、自身と一緒にこの世界へ飛ばされてきたであろう機器、武装、そして人間である。

（冷静に考えれば、俺だけこの世界へやって来たという可能性は低いはずなんだが）

僅かに隆起した地面に立ち、蓮は周囲を見回す。

次元核が起動した際、蓮は要塞の中にいたし、その隣には副官である氷堂が立っていた。

にも関わらず、そのどちらもアクリオンの近辺には見当たらない。既に村から見て東、南、西にかけての範囲は探索が終わっており、残すはここ大荒原近くの北部のみだ。

「が、ここも無駄足か」

延々と続く荒れ果てた大地に、蓮は僅かな落胆を覚えた。

要氷堂は共に長い間、前線で轡を並べた戦友である。自分と同じくこの世界へ飛ばされているのならば、是非とも救い出して仲間に加えたいところだったが、いないのであればどうしようもない。

「ん……？」

と、そこで蓮は荒地の彼方に黒い湖にも似た地形を認めた。

常人の目には遠すぎて豆粒程度にしか見えない距離だが、視力を強化されている蓮は地形の詳細まで鮮明に読み取ることが出来る。

気になって近づいてみると、たちまち炭化水素独特の石油臭が鼻をついた。

（まさか、油田か？）

蓮は悪臭に顔をしかめつつ、地面からこんこんと湧き出る黒い液体をすくい取る。

途端、べたりと指の間に張りつく不快な感触。蓮は確認のつもりで手を伸ばしたことを軽く後悔した。

「本物だな」

小さく呟き、指の間から原油をこぼす。

（しかもかなり質がいい。一応、こんなところまで来た甲斐もあったか）

蓮は手を払って、腰を屈めていた状態から立ち上がった。

そして背後に振り返り、荒野の中に佇む漆黒の影へと向き直る。

「さて、次はこっちだな」

蓮の視線に応えるかの如く、荒い鼻息を鳴らすのは黒い肌と白い鬣を持つ不気味な巨馬だ。

口元からはちろちろと細く炎を吹き、銀色の蹄が地面に打ち付けられる度、燃え上がる火の粉が逞しい馬体の周囲を覆った。

ナイトメア。北部大荒原に生息する魔獣の一種だ。姿形は馬によく似ており、千里の距離を一日で走るとされる脚力は、魔獣の中でも最上位に位置している。

ただし、その性格は凶暴かつ獰猛。飼育には向いておらず、屈強な魔族ですら幾人もその蹄の犠牲になっているという噂だった。

「ま、軍馬は無理でも食料にはなりそうだな」

不敵に笑う蓮の前で、ナイトメアは馬身を大きく仰け反らせ、いらないた。

一步、銀色の馬蹄が踏み出された瞬間、既にその巨体は漆黒の風となっっている。

真っ正面から突っ込んでくるナイトメアに対し、蓮は腰から抜き放った軍刀を一闪させた。

ひひひひん！

が、巨馬は真横に振り抜かれた刃の軌道を、跳躍によってあっさり飛び越えてしまう。

凄まじい脚力と反射速度に、蓮は思わず感嘆の声を上げた。

「やるな！　しかし……！」

地面を転がり、振り上げられた前足の一撃から逃れながらも、蓮は続く攻撃に備えるべく刀を脇に構える。

そうして迎撃の態勢を整えた彼の目に写ったのは　自ら油田に飛び込み、溺れかけているナイトメアの姿だ。

必死に前足で宙を掻くその様を、蓮は刀を手に携えたまま、拍子抜けした気分で眺めた。

（……なるほど。足は速くとも頭の中は文字通り『馬鹿』というところか）

原油の海は粘り気があり、逃れようとするナイトメアを蟻地獄よろしく奥へ奥へと引きずり込んでいる。

恐らく、後数分もあれば巨馬の全身を呑みこんでしまっだろう。さしもの強大な魔獣もこうなってしまうては無力だ。

しばし、油田の端で足掻くナイトメアを傍観していた蓮は、やがてため息一つ漏らして羽織った外套に手をかけた。

次なる戦場

「やあ、遅かったねサカ　うおっ!？」

突如、森の暗闇から現れた馬面に、ベルナットは盛大に身を仰け反らせる。

「さ、サカキ！　そいつはナイトメアじゃないか！　どうしてそんな危なっかしい生き物を連れてくるんだ！」

「なつかれたんだよ」

日が暮れた所であろうやく村に辿り着いた蓮は、心底疲れ果てた表情で答えた。

その背後では、黒の巨馬が暇そうに蹄を鳴らしている。このナイトメアは油田に沈みかけていたところを助けられてからというもの、ずっと蓮の後ろに付いて来ているのだった。

とはいえ、超人的な身体能力を持つ蓮でも、原油の海から自分の数倍近い体躯を持つ巨馬を引き上げるのは至難の技だ。

どうにか油田から上がったときには日も沈み、蓮の全身は真っ黒に染まっていた。

「いや、しかし驚いたな。そもそもナイトメアを狩って食べようだなんて、普通の人は思い付かないよ」

事の顛末を聞いたベルナットは頬を引きつらせる。

一方、蓮は言葉の意味を取り違い、小さく首を傾げていた。

「こいつ、ひよっとして不味いのか？」

「それは分からないね。今から解体してみるかい？」

冗談混じりの台詞を聞いて、黒い巨馬は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「お、すごいな。人の言ってることが分かるのか」

「あまり怒らせるなよ。踏み潰されても知らんぞ」

「分かってるって。ところでこいつ、なんていう名前なんだい？」

「名前？」　聞き返す蓮の前でベルナットは力強く頷いた。

「そうさ。ちなみに僕が飼ってる章毛の馬はマレンゴっていうんだ

ぜ」

「いや、別に聞いてないんだが……」

言いつつ、気だるそうにナイトメアの馬面を一瞥して、

「ま、名前をつけた方が呼びやすいのは確かだな。よし、今日からお前の名は如月だ。かつて、俺が乗艦していた船の名前をくれてやる」

蓮は自らの頭にある名簿から、まともと思われる名称を選択する。かくして如月と名付けられた巨馬を、ベルナットは眩しそうに見上げた。

「良かったな、如月。いい名前を貰えて。……あ、ちなみにその船、最後どうなったんだい？」

「轟沈した」

平然と言い放つ蓮の背後で、如月はまた不機嫌そうに鼻を鳴らした。

その後、村近くの小川で体と服を洗った蓮は、ベルナット　　つ　　まりは村長の家である邸宅へと向かった。

先ほどまで黒ずんでいた軍服はざつと水洗いしただけにも関わらず、もう新品同然の色を取り戻している。

油汚れはおろか、洗濯によって濡れていた部分ですら、すっかり乾き切ってしまった。

「あれ、サカキ。その服ひょっとして二枚持ってたのかい？」

「いや、さつきまで着てたものと同じだ。こいつは特殊な生地であって、どんな汚れも水だけで洗い流せるし、ずぶ濡れになっても数分経てばすぐに乾く」

「……君の世界にはそんな便利な素材があるのか。羨ましいな」

「じきにここでも作れるさ。多分、後千年はかかるだろうが」
皮肉とも冗談ともつかない台詞に、ベルナットはがりがりと頭を引っ掻いた。

「とりあえず、今日一日村を回って使えそうなものを集めてきたんだ。他のみんなにも協力して貰ってね」

「なるほど。その結果がこれらということか」

蓮は部屋の中央に置かれたテーブルへと視線を落とした。

卓の上には蔓で編まれた縄。赤茶色の枯れ草。鋭く尖った金属片などが置かれている。

電子機器に囲まれて生きていた蓮にとっては、どれも馴染みのない代物ばかりだ。

「順々に説明してこうか。これは赤金樹あかがねじゅの蔓で編んだ縄だ。鉄の剣でもなかなか切れないくらい丈夫で、よく馬車を引く綱なんかにも使われている。本来は戦いの場以外に使われるものだね」

「戦場で使うとしたら投げ縄か。小型投石機スリングを作ること出来るな」
「うん。それじゃあ、次は」

ベルナットはテーブルから赤茶色の草を取り上げた。

「ケムリ草。火をつけると大量の煙を発生させる性質を持っている」
「煙幕か。悪くない。使いようによつては効果的だ」

「でも、結局どっちも殺傷力がないんだよね。後は倉庫から使えそうなのを適当に持ってきたんだけど、ちゃんとした武器がないとま
ずいよ」

「分かっている。そのためにはやはり、敵軍に武器を供給している
拠点を襲撃するべきだな」

さらりと放たれた台詞に、ベルナットは顔をこわばらせる。

敵軍。すなわち、レギオニール地方を支配する魔族たち。

彼らが統治している鉄の一大生産拠点が、アクリオンの南西にあ
った。

「……鉾山都市テツセラリウスか」

ベルナットは苦い表情を浮かべた。

テッセラリウスは鉱山の麓に建てられた都市であり、良質な鉄鉱石の産出地として知られている。

しかし、一方で採鉱のために人間の奴隷を酷使し、次々使い潰しているという話も広く伝わっていた。

現にアクリオンの隠れ村に住む人々の内、大半はこのテッセラリウスから逃げ出してきた者たちだ。一際、思い入れは深い。

「そういえば、ベルナット。お前もテッセラリウスの出身なのか？」

「いや、僕はもっと南のプリマスって都市で剣闘士をやっていた。

あそこは人間の扱いも他と比べたら大分マシだったね。命の危険はあったけど三食はちゃんと出たし。僕も都市から逃げた訳じゃなくて、稼いだ賞金で奴隷身分から解放されたくらいだから」

「……それでマシなレベルなのか」

「まあ、ね。テッセラリウスに住んでいる人たちは朝から晩まで鉱山に派遣されるんだ。その上、休みなく働かされているからいつもガリガリにやせ細っている。食事は常に腐りかけのパンと水っぽいスープ。しかもそれが一日に一回だけしかない。まるで使い潰しの道具だよ」

言葉の端々に怒りを滲ませつつ、ベルナットはテーブルの上に視線を落とす。

「実は解放軍を立ち上げた当初も、みんなの間からテッセラリウスを攻撃しようって話は何度も出たんだ。でも、僕はその意見を全て封殺してきた。たった二十人ぼつちの仲間だけじゃ、あの街を落とせるはずもないからね」

「テッセラリウスの守備隊は？」

「数は五百。テッセラリウス総督、『赤守の一族』の長ニユートが守備隊の隊長を兼任している。当然、部隊は全員が奴の眷族だ。正直、今の僕たちでも勝てる見込みは少ないと思う」

「そうでもないさ。前回、戦った連中が五倍の規模でいるだけだろ
う」

「でも、あの時は奇襲だったじゃないか。おまけに、テッセラリウ

スには戦車もあるんだよ」

「戦車……ああ、チャリオットか」

「ふむ」と蓮は口元に手を当てた。

戦車を数頭の馬に牽引させるチャリオットは古代における兵器の中でも、とりわけ凄まじい破壊力を誇る代物だ。

ただその反面、幾つか構造上の欠点を抱えている。車輪による走行を行う関係で荒地や沼地では大きく機動力が制限されるし、車体自体も見えた目よりずっと脆い。

「ベルナット、そのチャリオットはどんな形をしている？」

「ええと、車体は鉄製で前面にはシールドがつけられてるね。騎獣も鎧でガチガチに固めちゃってるから、矢や槍がほとんど利かないんだ」

「そいつは重チャリオットだな。戦車としては後期のタイプか」

車体と馬を装甲で覆い、重量と防御力を増した戦車は特に重チャリオット、ないしは戦用チャリオットと呼ばれる。

一たび戦場に出れば、御者台からの射撃やポールウエポンによる攻撃以外にも、直接その車輪で相手を引き潰す戦法まで可能という代物だ。

「まあ、チャリオット本体はともかくそれを引く馬は臆病な性格だ。どうしても対策は立てられるさ」

「……馬？ いや、馬は使わないよ。蜥竜せきりゅうがいるじゃないか」

さも当然とばかりに言い放つベルナットの前で、蓮は怪訝そうに眉を寄せた。

「蜥竜……？ ああ、そういえば書庫の図鑑に記述があったな。力の強い、二足歩行の爬虫類だったか」

「そうそう。サラマンダーなんて名前で呼ばれることもあるね。性格は獯猛で馬より力も強いから、戦場でよく使われるんだ。むしろ、馬なんて斥候とか伝令とかにしか与えられないんじゃないかな」

「なるほど。元々、戦争向けの獣がいたために、軍馬の開発が進んでいない訳だ。ベルナット、その蜥竜とやらにはなにか欠点がない

のか？」

「欠点が……。ぱつと思いつくのは馬より足が遅いことかな。大体全力で走った人間より少し速いくらいのスピードだと思うよ。それと火に対して臆病なこと。あとは冬場に冬眠しちゃうこと。まあ、これは今の時期だと関係ないんだけどね」

丁度、大陸の季節は初夏に差し掛かった頃である。むしろ、生き物が活発さを増してくる時期だ。

ベルナットの説明を聞いた蓮はしばしの間、床の木目を見つめながら思索にふけていた。

「……ま、その程度ならどうにかなるか」

「サカキ、なにかいい作戦でも思いついたのかい？」

「いや、作戦といえるほどのものはないな。手持ちの札でどうにかやりくりするしかあるまい」

蓮はそう言つて、小さく嘆息した。

丁度そこで扉がノックされ、軽装に身を包んだルシユアが顔を見せる。

外を歩き回っていたためか、艶やかな金髪には数枚、湿り気を帯びた青葉が張り付いていた。

「ベルナット。あ、サカキ殿もここにいたか。少し話が　っ!？」

ふいにルシユアはぱつと身を翻した。その眼前で、彼女の髪に手を伸ばしかけていたベルナットが不思議そうに首を傾げる。

「……？　あ、ごめん。頭に葉っぱがついてたから」

「も、森の中にいたからかな。言ってくれればいいのに」

顔を真っ赤にしつつ、ルシユアは慌てた様子で髪に絡まった葉を払いのける。

「そういえば、武器を探してたんだっけ。なにかいいものでもあった？」

「いいものかどうかは分からないんだが……とりあえず、外に置いてあるから見てくれないか？」

「外？」

蓮は思わず尋ね返してしまった。森の中にそれほど巨大な物体があるとは思わなかったのだ。

果たして、室外に出た蓮はそこで言葉を失った。

村の入り口に鎮座しているのは、人が腰かけられそうなくらいの大きさをした金属塊である。

色はくすんだ灰色。表面にはところどころ円状に焼け焦げた跡が残っていた。

「へえ、妙な金属だな。これ、どこから拾ってきたんだい？」

「すぐそこ。なんか地面に埋まっててさ。掘り出してきたんだ」

「地面に？ でも、今までこんな変てこなもの見たことないぜ？」

「ベルナットでも分からないか……。とにかくこの金属、重くて硬いんだ。これくらいの大きさでも、村まで運んでくるのに十人がかりだったからな」

「そりゃすごい。ぶん投げて使えば錬鋼の一族でもぺちゃんこだ。」

まあ、問題は投げようとした方が先に潰れるってことだけだ」

「……うん。やはり、武器として使うのは難しいか。サカキ殿、あなたはこの物体についてなにか知らないか？」

投げ掛けられた質問に、蓮は棒立ちのまま答えない。

ただじつと、緊迫した面持ちで謎の金属塊を眺めているだけだ。

「サカキ？」

ベルナットが怪訝そうに尋ねると、蓮は固い表情のまま口を開いた。

「……これはカイロ要塞の防壁だ」

「要塞の防壁？ それにしては妙な材質だけど」

「耐熱・耐レーザ加工された特殊合金だからな。この世界にはまだ存在していない」

「え？ それじゃあ、君の世界の物体がこの世界に紛れ込んでいたってことなのか？」

「既に俺という前例がある。別に驚くことでもないが」

蓮はこつんとつま先で砕けた防壁を蹴り上げた。

高熱に晒された痕跡があるため、これが自分のいた戦場から紛れ込んだ代物であることは間違いない。

つまりは『榊蓮』に続く、次元から次元へと渡った二つ目の事例である。

（だが、地面に埋まっていたということはまさか転送の際に空間の座標がランダムに決定されているのか？ ……いや、まだ断定するのには早い。俺と要塞の破片。この世界に漂着しているのは、まだこの二つしかないのだから）

しかし、1と2の違いは大きい。これで要氷堂がこの世界に来ている確率はかなり高まった。

問題は彼が地中に埋まっていたり、空から落ちて死んでいる可能性もあるということだ。

「……ま、どうせあいつのことだ。どこかで面倒事にも巻き込まれているのだろう」

楽観的な台詞を自らに言い聞かせ、蓮は常の如く、くしゃりと軍帽に手をやった。

三穂槍平原の戦い

数日後。

鉦山都市テッセラリウスより西。レギオニール地方の中央に広がる三穂槍平原を貫く街道の端で、二つの軍勢が衝突していた。

一方はここ半月ほど、街道を行き交う隊商を襲撃していた人間たちの勢力二百余名。

そして、もう一方は五人の族長と千の眷族から成る魔族の討伐軍である。

魔族の戦闘力が人間の約三倍という通例を考えれば、まともな戦闘にすらならないほどの戦力比だ。

にも関わらず、脆弱な人間の部隊は奇策妙計を用いて奮戦し、敵軍の半数以上を打ち倒していた。

そう、緒戦は圧倒的に人間側が優勢だったのだ。少なくとも、緒戦においては。

「くそ……こんな、ことが……」

しかし現在、人間たちの陣地は無残に蹂躪され、壊滅状態に陥っていた。

辛うじて剣を取り、立ち向かっているのは十数名。その先頭に立つのは、カーキ色の軍服を身に纏った中肉中背の優男である。

男の名は要氷堂。かつては北アフリカ戦線で神蓮の副官を務めていた歴戦の軍人だ。

だが、その氷堂もことこの状況に至ってしまっただけで手も足も出せなかった。

(……化け物め)

部隊を取り囲む鎧甲冑の魔族たちを睨みながら、氷堂は小さく歯噛みする。

この世界に辿り着いた氷堂が最初に目の当たりにしたのは、人外の異形によって虐げられる人々の姿だ。

これに衝撃を受けた彼はゲリラ活動に身を投じ、街道を行き来する物資を襲う部隊の指揮を執っていた。

氷堂率いる部隊が魔族の討伐隊と遭遇したのも、丁度その折である。

当初、人間たちは敵の軍勢を森に引きずり込み、落とし穴やスパイクを始めとした数々のブービートラップで大打撃を与えることに成功していた。

事態が急変したのは敵将の率いる親衛隊が動き始めてからのことだ。

親衛隊百名を構成するのは『鍊鋼の一族』。極めて頑強な鎧甲冑の肉体と、怪力を併せ持ったレギオニール地方の支配者である。

彼らは氷堂たちの用意した罠を瞬く間に食い破ると、飢えた虎の如く部隊の本陣へと急襲をかけてきたのだ。

こうなると地力で劣る人間軍は脆い。幾人かはしぶとく抵抗を続けたものの、ほとんどは文字通り鎧袖一触され、残った者たちも一族の兵士に取り囲まれてしまっていた。

「やれやれ、ようやく片付いたか」

居並ぶ鎧甲冑の中で、一際背の高い板金鎧が声を上げる。

腰に長大な剣を佩き、頭に豹面の兜を被った異形の名はレオパルト。

鍊鋼の一族における族長であり、レギオニール北部方面軍の軍將を務める男だ。

「しかし、族長を四人もぶつ殺されるたあ思わなかったぜ。こんなんじゃ、またエイブラムスの野郎にどやされちまう。一々細かいんだよな、あのチビ助」

レオパルトはため息混じりに呟き、兜の側面をがりがり引っかいた。

結果的に人間たちを撃破することが出来た討伐隊だが、彼らも無傷とは行かない。

むしろ、数だけならば人間側より遥かに被害が甚大だ。ほとんど

の者はなにかしら体の一部に傷を負っており、酷い場合は四肢のどれかを欠損していた。

「まったく、どいつもこいつも脆すぎるんだ。人間の仕掛けた罠くらいで殺されやがって、情けないっいたらありやしねえ。少しは俺たちを見習って欲しいもんだぜ」

レオパルトの台詞に答え、彼の背後に控えた鎧甲冑たちが兜の奥でがらがらと金打ち音を上げる。

その言葉通り、レオパルト率いる一族の兵士は多くの罠に襲われたにも関わらず、かすり傷一つ負っていないかった。

錬鋼の一族はその見た目通り、鋼鉄のように硬い表皮を持つ。生半可な攻撃が通用する相手ではないのだ。

（見くびっていた。連中の強みは鉄の刃すら通さぬ鋼の肉体だ。熱線銃ラスターでもあるならともかく、この時代の武器ではとても太刀打ちできない……）

氷堂は錬鋼の一族と矛を交えた後、死んだ魚のような目になってしまった仲間たちを苦い気持ちで見やる。

彼らはこの一戦で理解してしまったのだ。人間と魔族の間には越え難い　いや、決して越えられない壁があることに。

「か、カナメさん」

戦士としての矜持を失い、怯え切った表情を見せる仲間たちを氷堂は一瞥する。

勝負は決した。最早、逆転の芽は何一つとしてない。賢い者ならば両手を上げ、降参の言葉を口にするだろう。

だが、要氷堂は一度死を覚悟した人間だ。今更、無意味な生にしがみ付くつもりはなかった。

「あなた方は逃げる。ここは自分が食い止める」

静かに剣を構える氷堂の背後で、人々は息を飲む。

一方、思わぬ抵抗にあつたレオパルトは楽しげに喉を鳴らした。

「ハツハハツ！　俺たちに立ち向かう気か？　てめえ一人で？

ピエロと自殺志願者を同時に演じるとは大した役者だぜ！」

「黙れ。言いたいことはそれだけか」

臆することなく言い返す氷堂に、人々をとり囲む一族の兵士がじわりと殺気を放つ。

だが、レオパルトはそんな同胞たちを片手で押し止め、自ら氷堂の前に立ちはだかった。

「てめえ、人間どものリーダーだろ？ 名前はなんつうんだ？」

「帝国陸軍中佐、要氷堂」

「そうか。いいぜ、カナメ。俺は強い奴が好きなんだ。俺と戦って三分間耐えられたら……てめえら全員、見逃がしてやるよ！」

レオパルトはやおら腰から長剣を抜き放つなり、氷堂目掛けて振り下ろした。

反射的に神経加速装置を起動させた氷堂は、紙一重で迫る凶刃を回避し、更にレオパルトの膝頭目掛けて剣を振り抜く。

だが、手元に返って来るのは巨大な石を斬りつけたかのような手応えだ。あまつさえ刃毀れしてしまった刀身を見て、氷堂は呻き声を漏らした。

「駄目か……！」

鍊鋼の一族の防御力は全魔族の中でも頭一つ飛びぬけている。普通の武器では致命傷を与えるどころか、傷一つつけることすら出来ない。

自らの攻撃が通用しないのを確認すると、氷堂はすぐさま背後へと飛び退いた。

一拍遅れて、頭上から叩きつけられた剣が勢い任せに地面を抉る。もし数秒でも反応が遅れていたら、氷堂の体は丸太の如く真っ二つにされていただろう。

（こちらは神経加速装置を使ってるというのに！）

どろりとした汗が氷堂の背筋を伝った。

今の氷堂は反応速度を人間の限界まで速めている。にも関わらず、レオパルトはその動きを正確に追っていた。

理由は明快である。元々、氷堂はデスクワーク専門で荒事に慣れ

ていない。

単純な戦闘経験の差が、ここに来てはつきり表れていた。

「ジャアツツ！」

「くっ!？」

僅かな隙を突き、暴風染みた勢いで迫る剛剣。

氷堂は辛うじて剣の刃で受け止めたが、その瞬間。鉄の剣は木っ端微塵に砕け、細かな鉄片となって宙に散ってしまう。

衝撃に氷堂の体は毬の如く吹き飛び、背中から地面へと叩きつけられた。

「がっ、は!？」

「阿呆。そんな棒きれで俺の剣を受け止めようとするからだ」

呆れきった声を漏らし、レオパルトは傍らに立つ副官に向き直る。

「おい、ゲパルト。今、何分経った？」

「は……一分十二秒ほどですな」

「ほお、記録更新だな。人間相手に一分以上持ったのは初めてだ」
悶絶する氷堂を見下ろしながら、レオパルトはがらがらと喉を鳴らした。

一方、追い込まれた人々は絶望の表情を浮かべ、縮こまることしか出来ない。

やがてその中から一人の少年兵が飛び出し、氷堂の足元にすがりついた。

「カナメさん！ 大丈夫ですか!？ ……あっ!？」

しかし、すぐさま真上から伸びた鉄の腕がひよいと彼の体をつまみ上げる。

宙に浮かぶ自らの体を見て、少年は顔を青ざめさせた。

その口から悲鳴が漏れるより早く、レオパルトは少年の耳元に豹面を近づける。

「うあ……」

「おっと、叫ぶなよ。人間のガキを殺さないようにつまみあげるってのはな。年代物のワインを扱うより難しいんだ」

「レオパルト、貴様！」

「そう怖い顔をするな。なに、少し質問をさせていただけた」

片手で人形の如く少年の体を弄びながら、レオパルトは氷堂に尋ねた。

「お前、このへんでイノシシ顔の豚足どもも見なかったか？ あいつら、人間討伐に出たまま帰ってこねえんだよ。おかげでわざわざ俺が出張る羽目になって、面倒だったらありやしねえ。つたく、あのチビは俺を下働きの奴隷かなにかと」

「レオパルト、あなたは質問をしたいのか？ それとも愚痴を言いたいのか？」

「両方だ、クソ野郎」

レオパルトは不機嫌そうに答えた。

「……分かった。で、そのイノシシ顔の豚足どもとやらはどの程度の規模なのだ？」

「確か、百人ちよつとだ。そいつら巨亥の一族ってのは頭は悪いが腕は立つ。おまけに全員武装してたはずだから、人間に容易く負けるはずはねえんだが」

「こちらも百人程度の部隊とは交戦していない。自分たちが襲撃したのは極めて小規模な隊商だけだ」

「つつてもな。それを向こう一年間チクチク繰り返されりゃこつちはたまんねえよ」

「……向こう一年間？」

氷堂の率いる一党が隊商を襲い始めたのは、彼が部隊の指揮を執り始めた半月ほど前からのことだ。一年前にはまだ組織として結成されてすらいない。

（となると、彼らはアクリオンの解放軍と自分たちを一緒くたにしているのか）

ここ最近、人々の口に名が上がっているのは『金狼』ベルナット・クーガ率いるアクリオン村の一派である。

彼らは少数ながら幾度も街道を襲撃して魔族側に被害を与えてお

り、先日にはとうとう五倍近くの規模を持つ敵を撃破したなどという、荒唐無稽な話まで伝わっていた。

（だが、もしこれが真実だとしたら、彼らは百人近くの魔族を殲滅した計算になる。レオパルトの言う巨亥の一族が消息を絶ったのはこの時か？ しかし、ただの人間にそんなことは出来まい。ただの人間 に？）

その時、稲妻のような閃きが氷堂の脳裏を過った。

二十対百の戦い。それも人間対魔族。勝負になる、ならない以前の戦力差だ。

だが、それでも。その圧倒的差を覆すことの出来る男の存在を氷堂は知っていた。

「……まさか、サカキ司令？」

思わずその名を口に出してしまったことに、氷堂は心臓を凍らせる。

案の定、レオパルトは興味深そうに身を乗り出していた。

「自分たちに覚えはなくても、心当たりはあるみてえだな。そうか、お前らの他にも隊商を襲ってる連中がいたって訳だ。スクローファの馬鹿をぶっ殺したのはそいつらか……」

レオパルトは楽しげに呟くと、宙吊り状態だった少年を地面に放り出し、傍らの副官を呼びつけた。

「ゲパルト、怪我の酷い連中をオプティアに帰せ。俺たちはテッセラリウスに行くぞ。捕虜を鉱山に預けてこなきゃならねえからな」

「は……了解です。その後は？」

「キツネ狩りの続行だ」

そう言って、鍊鋼の族長は豹面の奥で獰猛な笑みを浮かべた。

鉾山都市テッセラリウス？

鉾山都市テッセラリウス。

レジオニール地方の中央に広がる三穂槍平原。その東北に位置する小都市である。

人口の規模は約三千。内訳としては鉾山働きの奴隷が九割を占め、残る一割は鍛冶屋や技師によって構成されている。

都市の周辺は草木の生えていない平野だが、少し離れると未だに開拓の進んでいない部分もあり、特に街の北部と東部には広大な森林地帯が広がっていた。

ここでは主に燃料として使われる木材が伐採され、日々街の内部へと運び込まれている。ベルナットが襲撃をかけたデクリア村などもその中の一つだ。

「サカキ、着いたよ。ここがテッセラリウスだ」
馬上で揺られながら、ベルナットはそびえ立つ大鉾山を睨みつけた。

鉾山都市の名前通り、テッセラリウスの町並みは山に組み込まれたような形をしている。

要塞染みだ石造りの家が山の中腹まで広がり、麓の平原には溶鉾炉の煙突がいくつも並んでいた。

現在、ベルナットら少数の斥候隊が潜伏しているのは鉾山からほど近い林の中だ。

早朝にアクリオンの村を出発した彼らは、デクリアから続く曲がりくねった街道を通過して、昼過ぎにテッセラリウス近郊まで辿り着いていた。

先導するベルナットのすぐ後ろ。一際目立つ漆黒の巨馬に跨った蓮は、周辺の地形を見て満足そうに口元をつり上げる。

「森に囲まれた平地か。悪くないな。主戦場になるのは都市周辺、場合によっては森の中まで退却する形になるか」

「退却？ まさかここまで来て逃げるのかい？」

「戦略的撤退というやつだ。とはいえ、出来れば初手で敵の守備隊を叩いておきたい。そのために、わざわざあんな代物まで持ってきたのだから」

「ああ……」ベルナットはかすかに眉を寄せた。

「それにしてもあれ酷い臭いだね。行軍中、鼻がもげそうだったよ」「我慢しろ、としか言えないな。その代わり効果は保証する」

今回のテッセラリウス攻撃に際して、蓮はアクリオンの北部で発見した原油を枯れ草に浸し、樽詰めにして持ち込んでいた。

もつとも、悪臭を放つそれを数時間近くかけて輸送したのはベルナットら解放軍の戦士たちだ。

蓮自身は乗馬である如月が油田で溺れかけた経験からか、徹底的に油の臭いを嫌がったため、一人だけ難を逃れていた。

「でも、サカキ。冬の草原ならともかく、こんな草木の生えてない場所に火なんかつけても効果があるのかな。今日は風だってそう強くないし」

「とりあえず、空気が乾いていれば十分だ。今回は直接、相手を殺傷する必要性は薄いからな」

「火攻めなのに相手を殺傷する必要はない？ それ、どういう意味だよ？」

「ああ、要するに」

蓮は口を開きかけたところでふと言葉を切った。

「……？ どうしたんだい、急に押し黙って」

「なにか来る」

短く答えて、蓮はテッセラリウスから続く西の街道へと目を凝らすやがて、地平線の向こうから現れたのは甲冑を身に纏った小部隊だ。

一見、その軍勢は武装した人間たちのようにも見えるが、実態は異なっていた。

あれは甲冑を身に纏った人間ではない。甲冑そのもの　つまり

は鋼鉄の体躯を持つ生物なのだ。

「……鍊鋼の一族か」

がちゃがちゃと音を鳴らす巨大な金属鎧を見て、蓮はぼそりと呟いた。

このレギオニール地方で最も強大な魔族はなにかと尋ねられれば、ほとんどの者はこう答えるだろう。

すなわち、鍊鋼の一族。鋼の皮膚に身を包んだ、青い血を持つ戦場の悪魔である、と。

このおぞましい一族は数多くいる氏族の中でも、その戦闘力の高さ故、別格の存在として扱われている。

鎧甲冑そのものの姿をした彼らは、みな恐竜を小型化させたような騎獣に跨り、照りつける太陽の下を整然と行進していた。

その先頭には、豹面の兜を被った一際背の高い板金鎧の姿がある。ベルナツトはごくりと唾を飲み込んだ。

「サカキ。あいつ、四軍将のレオパルトだ」

鍊鋼の一族は他の氏族と比べても数が多く、四人の族長とその上に立つ王を抱えている。

そのため、レギオニール地方に君臨している一族の魔王ウォーデン 通称『軍神』は各族長に將軍の位と独自の指揮権を与え、各地を統治させていた。

レオパルトはその中の一人だ。レギオニール北部の鎮守を担当しており、平時は本拠である田園都市オプティアの統監を務めている。「四軍将だと？ そんな大物が、たった三百騎程度の部下を連れて鉦山都市へ来たのか……？」

蓮は細く目をすがめた。

レオパルト率いる部隊の内訳は鍊鋼の一族による蜥竜騎兵せきりゅうが百と、その後ろから続く雑多な種の混じった歩兵が二百だ。

更に、隊列の最後尾には荒縄で手足を縛られ、うめきを漏らしつつ歩く百名ほどの人々の姿があった。

「……ひどい。ひよっとして、あいつらまた余所から奴隷を連れて

きたのかな」

「いや、違うな。よく見ると歩兵の大半は怪我人だ。縛られている人間たちも傷を負っている者が多い」

「じゃあ、どこかで人間が魔族と戦って捕虜にされたってことかい？　ここいらで僕たち以外に積極的な行動を起こしてる連中にはいなかったはずだぜ？」

「しかし、四軍将が直々に動いている以上、戦闘があつたのは間違いないはずだ。恐らく、奴らはテッセラリウスの近郊で人間たちと一戦を交えた後、捕虜を鉾山に預けるためここに寄つたのだろう」
「なるほど。それなら筋も通るね」

頷きつつも、ベルナットは不安げに眉を寄せていた。

「でも、厄介なことになつたな。わざわざこのタイミングで鍊鋼の一族がテッセラリウスの守備隊と合流するなんて」

「厄介？　そいつは逆だよ、ベルナット。敵の幹部が自分からこちらの目の前にやってきてくれたんだぞ。おまけに手勢もたかが三百飛んで火に入る夏の虫とはこのことだ」

「冗談だろう。相手は鍊鋼の一族。それも四軍将のレオパルトだぜ？　あいつらまともな武器が一切効かないんだ。なにせ、鉄の剣ですら弾き返されるくらいだからね。普通の魔族は人間の三倍近い力を持つてるっていうけど、あいつらに限っては十人がかりでも倒せる気がしないよ」

「それがどうした。いずれ戦わなくてはならない相手だ。今日、その日が来ただけさ」

「……勝機は？」

「なくはない」

相変わらずの人を食つたような台詞に、ベルナットは肩をすくめた。

そうこうしている内にレオパルト率いる一隊は、開け放たれた門から次々、街の中へと飲み込まれていく。

人間の捕虜たちは奴隷となる身の上を知ってか、しきりに泣き叫

び、地面にかじりつかんばかりの勢いで抵抗を始めた。

しかし、結局は鞭や棍棒を振り上げた魔族たちに背中や尻をぶつ叩かれ、羊の如く追い立てられてしまう。

「あいつら……！」

「落ち着け、ベルナット。連中に吠え面をかかせるのはもう少し後でいい」

そのやり取りを無表情のまま眺めていた蓮は、ふと悲嘆に暮れる人々の中に一人だけ場違いな黒い髪の男がいることに気付いた。

（ん、あれはまさか）

蓮の視力は素の状態で双眼鏡並みだ。少し目を凝らしただけで、その人物の服装から表情まで確認することが出来る。

柔和な顔立ちにフレームの細い眼鏡。そして、カーキ色の軍服とくれば、該当する人間はそう多くない。

ぎぎつ、と重い音を立ててテツセラリウスの門扉が閉じた後で、蓮は小さく舌打ちを漏らした。

「……あの阿呆め。むざむざ捕虜になるとは、一体なにをやっているんだ」

「どうしたんだい、サカキ。ひょっとして、あの中に知り合いでもいたのか？」

「まあな。かつて俺の副官を務めていた男だ。名を要氷堂という」

「え？ ってことは、そのカナメも君と同じ世界に住んでいた人なの？」

「そついうことだ。一応、百年来の戦友だからどうにか助け出したいものだが……」

「戦友 ああ、君がさっきから妙に嬉しそうなのはそのせいかな」
得心が行ったように頷くベルナットの隣で、蓮はふと口元に手を

やる。

つり上った唇の感触。どうやら、自覚のないまま笑みを浮かべていたらしい。

「む……」

蓮は誤魔化すかのようにくしゃりと帽子を押さえ、如月の手綱を引いた。

「本隊と合流するぞ。レオパルトが留まっている内に、テッセラリウスに攻撃を仕掛ける」

「分かった。でも、そのカナメって人を助けるのは？」

「ついででいい」

ぶっきらぼうな言い方に、ベルナットは苦笑を浮かべた。

鉦山都市テッセラリウス？

「これはレオパルト様。よくお越し下さいました」

鉦山都市の内部に到着したレオパルトらを迎え出たのは、ぬめぬめした赤い肌を持つ二足歩行のイモリだ。

『赤守の一族』の族長、ニユート。革の鎧を身に纏い、腰に青銅の剣を佩いた彼は、テッセラリウスの総督と同時に守備隊の隊長まで務めている。

立派な体躯の蜥竜から飛び降りたレオパルトは、久方ぶりに顔を合わせる戦友にかちやりと片の籠手を上げた。

「よう、ニユート。久しぶりだな。三年前の中央で起きた反乱以来か？」

「そうですね。あの戦いの後、小生はこの街の総督に任命されてしまいましたから。近年はめつきり戦場から離れております」

「ここ最近はでかい争いもないしな。毎日毎日、人間どものゴミみてえな軍隊を潰す作業ばっかだ。退屈したらありやしねえ」

ニユートの案内を受け、レオパルトが向かう先は鉦山の山腹に建てられた迎賓館だ。

既に配下の部隊は傍らに残る副官以外、全員が宿舎へと預けられている。

一方で、共に連れてきた人間の捕虜は一先ず牢屋へと運び込まれていた。

「しかし、ここはいつ来てもくせえな」

レオパルトは不快そうに豹面の鼻頭を押さえた。

鉦山の麓には鍛冶屋、工房、守備隊の兵士が寝泊まりしている宿舎が建てられており、少し山を登り始めると奴隷たちの住処も目に入る。

住処、といっても彼らが寝起きしているのは山を削りだして作られた横穴の中だ。入り口は鉄柵で覆われているから、むしろ牢屋の

ような形に近い。

当然、洞窟には風呂場や寝床はおろか、排泄所すら用意されておらず、周囲には糞尿の悪臭が立ちこめていた。

この中で日々を過ごす奴隷たちは飢餓のために手足が痩せ衰え、腹の突き出た異様な格好をしている。

暗闇でぎらぎらと双眸を輝かせる様子は、知性を失った獣によく似ていた。

「この街の奴隷も少し扱いを変えるべきなのでしょうがな。何分、人間たちにくれてやる食糧の余裕などないもので……」

「もう少し飯を寄越せつてか？ だがなあ、オプティアの方もこれで一杯一杯なんだよ。西の方には御大将の軍勢がいるから、そっちに優先して兵糧を送らなきゃならねえ。ここの人間どもには悪いが、しばらく飢えていて貰うしかないな」

「まあ、人間は使い潰しの利く労働力です。今回また新たな補充要員が来たことですし、しばらくは持つでしょう」

家畜を見るかのような目が、横穴の中に転がる人間たちを一瞥する。

いや、厳密に言うならば彼らにとって人間とは知性のある家畜程度存在なのだ。

繁殖力は魔族より遥かに高いものの、脆弱で、戦う力などろくにもない一族。

それがこの大陸に生きる者大半の、人間に対する認識だった。

「ところで、將軍。歓迎の宴の前に一つご報告が」

奴隷たちの住処を抜けたところで、ニユートはふいに声をひそめた。

「先日、行方不明になっていた巨亥の一族の百人隊がデクリアの村で発見されました。しかし、既に族長を含む兵士たちは何者かに斬り殺され、住民たちももぬけの殻だったようです」

「ほお、つまりはどこぞの人間どもが連中を殲滅し、住民を解放したと？」

「いえ、それが後で調査の者をやったところ。住民は壺詰めになされておりました」

「あア？ ってことはあの豚足、住民を食っちゃったのか？ 貴重な労働力だぞ。監督官はなにをやったんだ」

「スクローファらと共謀して、住民の数を誤魔化そうとしたようですね。後々、減った数だけ反乱を起こした人間で補充つもりだったのでしよう。実は今回の件で報告が遅れたのも、監督官が報告を怠っていたためです」

「とんだボケナスどもだな。おい、そいつらは今どうしている？」

「自らの行いを反省したのか、酷く静かにしております」

ニユートが指差す先には首を切り落とされ、軒先にきちんと並べられているトカゲ面の頭部があった。

これを見て、レオパルトはつまらなそうに鼻を鳴らし、

「ニユート、お前は仕事が早すぎる」

「申し訳ありません」赤守の族長はそう言って、深々と頭を下げた。「スクローファを討つたのは、北部の森林地帯に隠れ住んでいる人間どものようです。明日にでも討伐隊を送り込む予定ですが」

「それには及ばねえよ。俺が部隊を率いて出る」

「レオパルト様が直々に？ それはそれは」

ニユートは飛び出た眼球をせわしなく回転させた。

「人間どもに同情しますな。よりにもよって將軍が率いる錬鋼の一族が相手とは。小生でしたら失禁脱糞しながら逃げ出すところです」

「そいつはお世辞のつもりか？」

「お世辞でしたらもう少し上品な言い方をしております」

「だろうな。食えん奴め」

レオパルトはくっく喉を鳴らした。

カン！ カン！ カン！ カン！

丁度その時、山の中腹からけたたましい鐘の音が鳴り響いた。

やや遅れて、見張り台に登っていた兵士の声が街中を駆け巡る。

「敵襲！ 敵襲　！」

これにレオパルトは「お？」と声を上げ、ニユートはぎよろつく目をしばたかせた。

「噂をすればなんとやらですな。わざわざ將軍がいらっしやるときに攻撃をかけて来るとは不幸な連中です」

「そいつはどうか。奴らめ、俺がここにいると知りながら仕掛けてきたのかもしれないぞ」

「はは、閣下は御冗談がお上手だ。人間というのはあれで小賢しい知恵の働く生き物です。まさか、四軍将相手に正面から挑みかかるほど向こう見ずではありませんよ」

「そうか？　だが、街道で戦った人間どもにはなかなか手を焼かされたぜ？」

「とはいえ、それで死んだのは配下の一族でございましょう？　小生の目には將軍ご自身にも、錬鋼の一族の方々にも傷一つないように見受けられますが」

「フム……まあ、そうだな。俺に挑んでくるとしたら余程の馬鹿か、命知らずくらいか」

レオパルトはごりごり音を立てて兜のこめかみをなぞった。

例え、敵側に巨亥の一族を倒したという実績があっても、レオパルト率いる親衛隊は百戦錬磨の精鋭だ。

鉄器すら持たない人間たちに負ける可能性は限りなく低い。いや、皆無といつてもいい。

「皆様はお疲れでしょうから連中への対応は小生らが致します。將軍は屋敷から麦粒の引き潰される様をゆるりとご覧下さい」

「よし、まずはお前たちで相手をしてみる。それと、牢にぶちこんだ人間どもの中に黒髪の男が一人いた。あいつをここに連れてきてくれ」

「承りました。ところで、コックの準備は……」

「いらねえよ。別にとって食おうって訳じゃねえからな」

「了解です」と頭を下げ、ニユートは引き下がる。

遠ざかる細い影。街中を満たし始めた軍靴の音を聞きながら、レオパルトは傍らの副官に尋ねた。

「ゲパルト、あいつ生きて帰ってくると思うか？」

「は……敵兵の数は多くとも五百程度でしょう。これに対し、テッセラリウスの守備隊は同数。その上、チャリオット隊まで用意しております。これで負けるとは思えませぬ」

「だが、敵の指揮官が俺たちを苦しめた黒髪の男と同等の実力を持っているとしたら？」

「それは……」

口ごもるゲパルトの背を、レオパルトは籠手の平で叩いた。

「出撃準備だ。場合によっちゃ、俺たちの出番もあるぜ」

「は……了解です」

さつと身を翻したゲパルトは、兵士たちが駐留している麓の宿舎へと向かう。

レオパルトはその後ろ姿を見送った後、籠手の尖った指先で楽しみに顎を撫でた。

「さて、双方お手並み拝見と行こうか」

テッセラリウスの戦い？

「さて、まずは本命を釣り上げるための露払いだな」

鉱山都市内部から鳴り響く警鐘の音を聞きながら、蓮は小さく呟いた。

北部の森林から現れた解放軍側に対し、テッセラリウスの守備隊は五百ある兵力のほぼ全てを平野に展開し始めていた。

その中でも特に目立っているのは、敵軍の前列で轡を並べているチャリオット隊だ。

守備隊が擁するチャリオットの数は二十台。車体を覆う鈍色の装甲には、引き潰されてきたのであろう人間の血の跡が生々しく残っていた。

更にチャリオット隊の後背には皮の鎧と鉄槍を装備した二足歩行のイモリやトカゲがずらずらと並び、一部には蜥竜に跨った騎兵の姿も見える。

「サカキ、やつぱりこれ全軍で来た方が良かったんじゃないかな」
愛馬の背から敵軍の陣容を眺めたベルナットは、わずかに頬を引きつらせた。

五百の敵軍に対し、平原に集まった戦士たちの数は二百に届かない程度。

この内、半数はデクリアの戦いで魔族から奪取した鉄の剣を装備しているものの、もう半分は木刀に狩猟用の石矢という貧弱な装備である。

しかもただでさえ兵数、装備で差があるというのに、蓮はルシユアらごくごく少ない戦闘員を後方に残していた。

「忘れたのか、ベルナット。俺たちはこいつらの後でレオパルトの部隊とも戦わなくてはならないんだぞ。伏兵を配置したのはそのためだ」

「……冷静に考えれば正気の沙汰じゃないね。本来なら、テッセラ

リウスを落とすだけで一杯一杯のはずなのに」

「ここまで来てなにを言っている。指揮官の感情は配下の部隊に伝播するんだ。弱音を吐くなら戦いが終わった後にしろ」

「分かっている。分かっているよ、サカキ。僕が怯えを見せればみんなが浮足立つ。それは分かっているんだ」

ベルナットはぐつと下唇を噛みしめた。

そうは言っても彼自身、まともな部隊同士の戦闘はこれが初めてである。デクリアでの戦いでは双方奇襲から戦端が開かれてしまっ
たし、隊商を襲撃していた頃は敵が圧倒的少数だった。

要するに、ベルナットは指揮官としての経験が圧倒的に不足しているのだ。

「……敵軍になにか動きがあるな」

一方で動揺の欠片も見せていない蓮は、如月の背に揺られたままふと眉を寄せた。

やがて、一人だけ戦列から離れて両軍の間に姿を見せたのは、トサカ付きの蜥竜に跨った赤い肌の蜥蜴人間である。
リザードマン

「こんにちは、人間諸君」

ざらざらした聞き取りにくい声が、テッセラリウス周辺の平野に響いた。

「小生はテッセラリウス総督、赤守の一族が長ニユートだ。小生は諸君らに投降を呼びかけたいと思う。何故なら貴軍は見るからに数が少なく、脆弱であり、装備も劣っている。このまま戦ったところで勝敗は明白だ。であるならば、互いに無意味な争いをする必要もないだろう。もう一度言う。投降したまえ。諸君らの処遇は小生が保証しよう」

胸を張って演説を終えたニユートだが、人間側の反応は冷ややかだった。

というのも、彼らのほとんどにはテッセラリウスで鉱山奴隷として働いていた過去がある。

その時、率先して奴隷たちを鞭打っていたのは今、目の前で妄言

を並び立てている赤守の族長だ。そんな男の言葉など信じられるはずもない。

「……なあ、みんな」

ふつふつと怒りを煮え立たせ始めた同胞に、ベルナットは声を投げかけた。

「確かに奴の言う通り、僕たちは敵に対して数で劣り、装備で負けているかもしれない。しかし、それがどうしたっていうんだ？ 今奴らは驕り高ぶり、自らの勝利を確信している。拳句の果てに、投降しろだなんて台詞まで飛び出す始末だ」

朗々とよく通る言葉が、乾いた大地に降る雨のように人々の間へと染み込む。

「僕らはなんのためにここへ来た？ 間違っても、戦わずして奴らに降伏するためじゃない。連中を打ち負かし、テッセラリウスでくびきに繋がれている同胞たちを解放するためだ。……さあ、みんな剣を抜け、戦争を始めるぞ！ 奴らの首を斬り落として、地面に叩きつけてやれ！」

「応！」と戦士たちの喉から迸る叫び声が、大気を震わせる。

これを見て、ニユートは不愉快そうに蜥竜の手綱を引いた。

「愚か者どもめ。そんなに死にたいのなら結構だ。 総員、攻撃準備。遠慮はいらん。皆殺しにしる！」

族長の号令を受け、相對する敵軍から人間たちに負けんばかりの雄叫びが上がった。

奮い立つ両軍の様子を見ながら、蓮は満足そうに口元をつり上げる。

「土気の面ではこちらも負けていないな。普通、ここまで数に差があるややる気を失って逃亡する輩が出てくるものだが」

「それが分かっているのなら、君も励ましの言葉一つくらい言ってくれよ」

「檄を飛ばすのは苦手なんだ。大体、この部隊にはお前がいる。こ」と鼓舞に関して、その才能はたぐいまれだからな」

「そうかな？ 正直、そこまで自惚れることは出来ないんだけど」

「ベルナット・クーガ、お前には指揮官としての経験が不足しているが将の才能はある。この俺が保証しよう」

「……ありがたいね」

ベルナットはくすぐったさそうに答えた。

そうこうしている内に、敵軍が変化を見せ始める。先鋒であるチャリオット隊が動き出したのだ。

（なるほどな。チャリオットでこちらの前線を崩した後、歩兵隊で残存兵力を殲滅するつもりか。確かに効率のいい戦い方だが）
所詮は教科書通りの戦法である。海千山千の老将たる蓮に通用するはずもない。

「よし、敵の動きは予想通りだ。総員、準備は出来ているな？」

呼びかけに対し返ってくる、威勢のいい返事。

蓮は自身の声が部隊に行き渡るのを確認した後で、如月の馬首を反転させた。

「では全軍、後退を開始する」

指揮官からの命令を受け、人間たちの軍勢は一斉に下がり始める。これに目を剥いたのはニユートだ。將軍であるレオパルトが見ている前で、みすみす敵を取り逃がすことなど出来るはずもない。

「おのれ！ チャリオット隊は敵を追い立てろ！ 奴らを森の中に逃がすな！」

すかさず突撃を開始するチャリオット隊だが、彼らは気付いていなかった。

解放軍の戦士たちは後退しつつも、地面にある物体を置き捨てていたのだ。

戦場に点々と残る黒く湿ったそれは、石油の浸された藁束である。「では、まず最初の一手から始めようか」

蓮はあらかじめ用意してあった松明を兵士から受け取ると、おもむろにチャリオット隊の鼻先へと放り投げた。

たちまち松明の火は藁束に引火し、敵軍の眼前に真っ赤な炎の壁を作り出す。灼熱の舌に焙られ、チャリオットを引く二頭の蜥竜は

甲高い鳴き声と共に身をのけぞらせた。

これに慌てた御者は手綱を操って動きを抑えようするも、混乱した騎獣相手では上手くいかない。

結果、チャリオット隊は一部では横転し、一部ではパニックを起こした蜥竜に引きずられ、あらぬ方向に駆け出してしまっていた。

「なるほど。直接、相手を殺傷する必要はないってこういうことだったんだね」

壊乱する敵部隊を傍観しながら、ベルナットは納得が行ったように頷く。

半数ほどのチャリオット隊は炎の壁を踏み越えて進撃して来たものの、速度を失っている状態ではただの的にしかならず、解放軍の戦士たちに四方から投げ縄を浴びせられ、たちまち無効化されてしまった。

「でも、これからどうしようか。厄介なチャリオットは封じたけど、敵の数はまだこちらの二倍以上だよ」

「そうだな。敵軍の数が多き時は正面から当たっても勝てる見込みはない。ましてこちらは素人が多く、相手は人間より屈強な魔族の軍勢。出来れば敵を分断し、各個撃破したいところだ」

「簡単に言うけど、それは難しいよ。一体、どうやって敵を分断するつもりだい？」

「なに、別段策を弄するまでもないさ。どうやら敵軍は二手に分かれ、左右からこちらに進撃して来ているらしい」

「……それって要するに挟み撃ちにされかかっているってことじゃない？」

「まあ、見方を変えればな」蓮はあっさり頷いた。

「ベルナット、戦場で重要なことを一つ教えてやる。戦況を有利に進めたいのであれば、常に敵より多くの戦力を維持することだ。敵が戦力を分化させた現状は、こちらにとってもありがたい」

「なるほど。つまり一方を倒してから、もう一方に攻撃をかけるんだね」

「まさか。そんなことをしていたら、戦ってる最中にもう一方から挟撃を食らうのがオチだ。狙うなら敵の数が一番少ないところだな」
「え？ でも、そんなところ……」

怪訝そうに眉を寄せるベルナットに、蓮は言った。

「ベルナット、お前にはやって貰いたいことがある。左右からやって来る敵がそのまま合流するのは望ましくない。一方を攪乱し、一時的に軍としての機能を喪失させる」

「部隊を分けるのかい？ でも、それじゃあ多数で少数に当たると戦法が取れないよ」

「ああ、だからお前が率いる兵は十人程度だ。この班で東から来る二百名以上の部隊を足止めしてもらおう」

「……冗談だろう？」

流石のベルナットもこれには顔色を失った。

いくらなんでも戦力差があり過ぎる。三倍の戦闘力を持つ相手が、十倍以上の規模でいるのだ。これに挑むのはただの玉砕行為ではない。

もっとも、蓮としてはなんら無茶なことを言っているつもりはなかった。

「ベルナット、蜥竜の扱いに長けた者を十人選べ。ここには丁度いい小道具があるだろう」

「え？ ……あ、そういうことか！」

ようやく得心が行ったように頷くベルナットの前で、蓮は淡々と指令を発した。

「総員、武器を取れ。敵軍の攻略を開始するぞ」

テッセラリウスの戦い？

初手でいきなりチャリオット隊を失った赤守の族長だが、彼はスクローファなどとは違い、激昂して理性を失うような真似をしなかった。

「ふ、うむ」

それでも、押し殺した唸り声を上げてしまうのは致し方ない。

ニユートは突き出た目をぎよるぎよると動かしながら、平原からもうもうと立ち昇る黒煙を見上げた。

空気が乾燥していることもあって、未だに火の勢いは弱まる様子がない。さしもの強靱な肉体を持つ魔族でも、あの中を突破するのは無謀だ。

「人間どもめ、猪口才な手を使いおる」

ざわつき始めた配下の眷族を一睨みして黙らせつつ、ニユートは冷静に考えを巡らせた。

先鋒のチャリオットを失ったのは痛手だが、まだ戦力は守備隊の側が大きく上回っている。

となれば、ここは戦の常道に従うべきだろう。

自軍が敵に対して二倍の兵力を持っている際は挟み撃ちを仕掛けるべし

以前、大陸中央で戦場を駆け回ったニユートがレオパルトら軍将たちから学んだ兵法だ。

「よし、部隊を二つに分ける。ハナダは東から、マダラは西から二百の兵を率いて奴らに攻撃をかける。一兵たりとも逃がすなよ。支配者たる我々に立つてつくことの愚かさを、骨の髄まで叩きこんでやれ！」

族長の号令を受け、赤守の眷族たちによる兵は氣勢を上げつつ、側面から敵陣へと回り込んだ。

後に残されたのはニユートを含む五十名強の小隊だ。族長の中に

はスクローファやレオパルトのように自ら先陣を切って戦う者もいるが、ニユートは後方で戦況を眺めていることの方が多かった。もっとも、今回は戦場の中央で焚かれている火と、それに伴う煙が邪魔でろくに部隊の様子も伺えない。

かすかにニユートの元まで届くのは兵士たちの喚声と、鉄の打ち合う響きだけだ。

「ふむ、始まったか」

音の方角から察するに、どうやら人間たちは東側から進軍した部隊を集中して攻撃しているらしい。ニユートにとっては狙い通りの展開である。

「愚昧どもめ。小手先の計略程度ではどうにもならぬ、圧倒的な実力差というものを思い知らせてやる」

勝利の確信と共に嘯くニユートだったが、その余裕も長くは続かなかった。

異変の前兆を捉えたのは、戦場の後方に残っていた歩兵の一人だ。ぼんやりと燃え盛る炎を眺めていた彼は、ふと煙の中でなにか黒い影がうごめいていることに気付いた。

「あ、んん？」

「おう、どうした兄弟」

「いや、なんか炎の向こうで動いてないか？」

「はあ？ お前、なにを言って」

横に並ぶ同僚は呆れたような声と共に、目をぎよろつかせる。

その飛び出た眼球に、黒曜石の鍔が突き刺さったのは直後のことだ。

「なっ、何事だ!？」

たちまち部隊のそこかしこから上がる悲鳴と狂乱の声。

突如、降り注ぎ始めた矢の雨にニユートは泡を食って吠えたてた。

「なに、伏兵だと!？ ……いや、バカな!？」

テッセラリウスの周辺は兵を隠すことの出来ない平野である。奇襲を受けることはまずありえないはずだった。

「くそつ！ 落ち着け！ 落ち着け！ 単なる石の矢だ！ 臆することはない！」

冷静に考えれば、相手の武器は貧弱そのものだ。余程当たりどころが悪い限り倒れる者はいなかったが、混乱はそう簡単に収まらなかった。

もつとも、この程度はまだ序の口に過ぎない。矢の雨が止んだ後、更に信じられぬような出来事が起きた。

戦場で揺らめく炎の中から、人間たちの軍勢が忽然と彼らの前に姿を現したのだ。

「なんだとお！？」

これには流石のニユートも目を剥いた。

戦場の中央には人間たち自身の手によって炎の壁が作られていたはずだ。にも関わらず、連中はそのど真ん中を突っ切ってきたのである。

……不可解なことだ。

下手をすれば、いや、下手をせずとも丸焦げになって死んでしまう。炎の勢いはまだ強く、魔族の軍勢ですらあの中を突破するのは無理だろう。

だが、現実として人間たちの軍勢はニユートの目の前まで迫っている。

しかも、雄々しく呐喊とっかんするその姿は多少煤に汚れているだけで、火傷に苦しんでいるような気配は微塵もなかった。

「お、落ち着け！ 落ち着け！ 迎撃しろ！ 奴らをこれ以上、近づかせるな！」

現れた人間たちの数は二百弱。兵数だけならば五十数名のニユート率いる小隊より遙かに上だ。

おまけに、守備隊側の兵士は突然の奇襲にすっかり浮足立っていた。いくら、魔族の戦闘力が人間の三倍とはいえ、これで十分な実力を発揮できるはずもない。

結果、押し寄せた人間の部隊によって、力で勝るはずの魔族たち

はろくな反撃も出来ず、次々に打ち倒されてしまふ。

「落ち着け！ 落ち着け！ 戦列を維持しろ！」

その中で、蜥竜に跨ったニユートは自ら剣を振るいつつ、崩れかけた部隊を必死に纏めようとしていた。

しかし、人間たちの軍勢は既に彼の間近まで肉薄している。迫る人々の先頭には指揮官と思しき、漆黒の巨馬に跨った男の姿があった。

「きゃあつ！ ナイトメアだ！」

「逃げる！ かつ、勝てる訳がない！」

馬上で剣を閃かせる軍服姿の男に対し、兵士たちは蜘蛛の子を散らすかの如く逃げ惑う。

中には槍を構えて突撃する兵もいたが、そういった者たちは例外なく黒馬の蹄に踏み倒され、あるいは男の振りかざす白銀の刃によつて首を切り落とされていた。

「くつ、なにをしている！」

ニユートはあまりの不甲斐なさにきつく奥歯を噛みしめた。

部隊は既に壊滅一步手前だ。本来ならば、逃げを打っていてもおかしくない場面である。

(だが、今はレオパルト様が見ているのだぞ……！)

圧倒的な戦力差がありながら人間に負け、おめおめ逃げ帰ったとなれば、あの苛烈な性格の將軍は自分を生かしておかないだろう。

最早、ニユートに取れる選択肢は数えるほどもなかった。

「おのれ！ かくなる上は一騎討ちだ！ 敵将、覚悟！」

乾坤一擲の突撃をかけるニユートに対し、男は真正面から黒馬を走らせることで答えた。

やがて、すれ違った両者の間から刎ね飛ばされた首が一つ、くるくると宙を舞う。

数秒後、乾いた音を立てて地面を転がったのは、赤守の族長の頭部だ。

悶絶の表情と共に息絶えた敵將を見下ろし、蓮は感情のない声で

眩いた。

「その選択は間違いではない。ただ、その選択に至るまでの状況を作ってしまったのがお前の敗因だな」

戦況は決した。最後の砦たる族長を失った部隊は無残に雪崩を打って崩れ始める。

逆に勢いづいた人間は算を乱した守備隊に対し、容赦なく剣を振り上げ、襲いかかった。

積みもり積もった人々の恨みは、魔族たちに逃げることにすら許さない。

苛烈を極める残党狩りの後、生き残った魔族は誰一人としていなかった。

テッセラリウスの戦い？

「あーあ、ニユートの奴あっさり殺されちまったよ。あいつ、あんなに弱かったっけ」

鉦山の中腹に築かれた石道から戦場を眺めていたレオパルトは、ぺしゃりと額に手をやった。

高所からの視点を持つレオパルトには戦況の推移がよく分かった。一言で言うと、赤守の族長はしてやられてしまったのだ。

初手で人間側が戦場に置き捨てた藁束。あれが最初の仕掛けだった。

「一見、戦場の真ん中には炎の壁が出来たように見えたが、実際は部隊を通過させることが出来る程度の隙間が空いてた訳だ。これを利用して相手の主力を回避し、本隊に急襲をかけたのか……。あの指揮官、嫌な性格してんな！」

がらがらと笑い声を上げるレオパルトの隣では、一時的に牢屋から出された氷堂が両腕を後ろ手に縛られた状態のまま、石畳の上で膝を折っている。

氷堂は目を丸く見開いたまま、戦場を駆ける黒馬を。厳密にはその上に跨る人影を、愕然とした気分で見つめていた。

（間違いない。あれはサカキ司令だ。あの方もこの大陸に辿り着いていたのか）

自身が生き延びていることから決してその可能性は低くないと思っていたが、実際目にすると言いようのない感動があった。

元より神蓮は殺しても死ぬような人種ではない。伊達に大戦初期から百年近くも生き延びてきた訳ではないのだ。

「で、カナメ。あいつはお前の言うサカキとやらなのか？」

ふいに兜をめぐらせたレオパルトの前で、氷堂は慌てて口元を引き締める。

「さあ、どうだろう。ここからではよく見えないな」

「おいおい、ようやく飼い主に会えた忠犬みたいな顔してたくせに下手な誤魔化し方するんじゃないやねえよ」

「……自分はそんな顔などしていたつもりはないが」

「ここに水盤かがみがないのが悔やまれるね。まあ、あの指揮官の正体は分かった。どこの出身だかしらねえが、てめえの同類とは面白いじゃねえか」

板金鎧の首元から、金属を爪で引つ掻いたかのような音が漏れる。どうやら喉を鳴らして笑っているらしい。

「さて、ニユートは死んだが守備隊の大半はまだ生き残ってるぜえ？ あいつはここからどうする気だ？ まさかこのテッセラリウスを直接狙う気かあ？」

興味深そうに呟くレオパルトの隣から、氷堂も戦場の様子を伺う。

(司令……)

黒馬に跨った蓮はじつと戦場を睨んだまま、次の一手を考えているかのようだった。

「ライゼル、こちらの被害は？」

「しつ、死者二名。重傷者一名。軽傷者十三名です！」

蓮の後ろで幾本も火のついた松明を抱えていた禿頭の大男が、太い喉からかすれた声を漏らす。

奇襲で押し切り、早々に指揮官を討ち取ったこともあって、人間側の被害は極々少数だった。

むしろ、炎の中を強行突破してきたせいで軽い火傷を負っている者の方が多いくらいだ。

(少々強引な切り口だったが、その甲斐はあったか)

蓮は馬上から平原に散らばる敵兵の死骸をざっと眺め回した。

損害軽微の自軍とは対照的に、敵は退却の機を掴めず、全滅に至っている。

そもそも奇襲を受けた場合は一度部隊を下げて戦線を立て直すベきなのだが、敵の指揮官はそれをしなかった。

「……いや、厳密には出来なかつたというべきか」

蓮はテッセラリウスの中腹を見上げる。そこには眩い光に照らされ、鈍く装甲を輝かせる板金鎧の姿があった。

レオパルトは先端が開かれた当初から観戦者を気取っているものの、ニユートが討たれた後も一向に動く気配がない。

あの様子では守備隊が全滅するか、テッセラリウスにでも攻め込むかでもない限り、傍観に徹するつもりだろう。

ならば、こちらは先に残る兵力を粉碎するだけだ。

「よし、次は西側から回り込んだ部隊へと攻撃をかける。擲弾班^{てきだん}は火の準備をしておくように」

短く指令を発した蓮は、ニユートを撃破したことで士気を倍増させた兵を率い、半々に分かれた守備隊の一方へと襲いかかった。

その頃、副長マダラ率いる西隊二百余名は戦場の中ほどで停止していた。

当初、彼らは副長ハナダ率いる東隊と敵軍を挟み撃ちする予定だったのだが、その途中で本隊が奇襲を受けたという報が入って来たのだ。

マダラは困惑した。そもそも、本隊は奇襲を受けるような位置にいなかったはず。にも関わらず、後方からは鬨の声上がり、剣戟の音が響いている。

結局、マダラは方向転換して本隊の救助へ向かおうとしたものの、その時にはもう解放軍の戦士たちが部隊の後方に食らいついていた。「擲弾班、放て！」

両軍が接触した直後、蓮はすかさず背後の兵に指示を放った。

解放軍は装備の異なる兵がそれぞれ百ずついる。その内、木と石の武器を備えた百人隊は鉄剣の代わりに腰から陶製の瓶をぶら下げ

ていた。

陶瓶の口に突っ込まれているのは導火線の代わりに羊皮紙（書庫から持ち出したものだ）。そして、瓶の中に封入されているのは大荒原で産出された原油。これに松明で火を灯せば立派な武器となる。後方の擲弾班は大きく腕を振り被ると、この即席の火炎瓶を敵陣の中央目掛けて投げつけた。

予期せぬ襲撃を食らい、混乱の最中にあつた守備隊の兵にはたまつたものではない。次々に炸裂する紅蓮の花の中で悲鳴と断末魔の声の木霊する。

もつとも、彼らにとっての地獄はまだそこが入り口に過ぎなかつた。

「全軍、突撃！」

馬上で剣を振り上げる蓮に率いられた解放軍の戦士たちは、炎に巻かれて崩れかけた戦列目掛けて喊声と共に斬り込んだ。

混乱の最中、怒涛のように押し寄せる部隊に、さしもの屈強な魔族もろくな抵抗をすることが出来ず、次々と地面に引き倒されて首を切り落とされてしまう。

「くそつ、こいつら調子に乗りやがつて……！」

「ハナダの部隊はまだか！ こつちはもう持たないぞ！」

押され始めた西隊にとって、唯一の希望は未だに姿を見せない友軍の存在だ。彼らと合流すれば、二百にも満たない敵兵など一気に殲滅出来るはずだった。

しかし、その東から回つた部隊がいつまで経つても現れない。結果、軍勢はじりじりと数を減らし、中には耐えきれず逃亡し始める兵まで現れる始末だ。

（よし。ベルナットの陽動は成功したようだな）

蓮は必死の抵抗を続ける敵軍を他所に、戦場の東部へと首をめぐらせていた。

敵に増援が現れていないのは策が上手く機能している証拠だ。東西に分かれた部隊が合流する前に、この戦いは決着するだろう。

そこで再び戦場に眼をやった蓮は、一部の敵兵が強引に前線を突破しようとしているのを見た。

「どうやら敵将はいつまで経っても現れぬ援軍に焦れて、無理矢理こちらの指揮中枢を叩きに来ているらしい。」

「なるほど。族長が族長ならば、その部下も考えることは同じか」
蓮は小さく呟くと、先ほどの交戦で敵兵から強奪した槍をおもむろに構えた。

直後、その片手が閃き、空を駆けた槍が狙い違わずマダラの頭部を貫く。

もんどり打って倒れたマダラは、そのまま二度と起き上がることはなかった。

「指揮官は倒れたぞ。一齐にかかれ！」

蓮の号令に従い、解放軍の戦士たちは屠殺機の如き容赦のなさで敵兵を蹂躪する。

戦場の西側から守備隊の兵士が消えたのは、それから数分後のことだった。

「ほお、やるなあいつ。ニユートの奴があっさり殺されるわけだ」
山腹から戦場を眺めていたレオパルトは、蓮の手際に感嘆の息を漏らした。

現状、西側から回り込んだ部隊は副長マダラを含む半数以上が殺され、僅かな兵のみがテッセラリウスの麓へと逃げ帰っている。

その上、ようやく煙の向こうから姿を見せ始めた東軍も、何故か一戦交えた後のような半壊状態となっていた。

「なんだありゃ？ 東側の部隊がボロボロになってやがる。連中、まさか伏兵を仕込んでやがったのか？」

怪訝そうなレオパルトの言葉を、氷堂は内心で否定する。

(いや、司令は無意味に兵力を分散するのを嫌う。もし伏兵を使うとしたら、西側の部隊を前後から挟み撃ちする形で用いただろう。それが無いということは、解放軍の兵力は今見えているものでほとんど全てのはず。東側に回った部隊はなにか足止めの策を食らっていたに違いない)

その単なる足止めの策に敵が甚大な被害を受けているのも、氷堂にとっては見慣れた光景だ。

少数の兵力を活用し、絶大な効果を発揮させるのは神蓮の最も得意とすることだった。

やがて、敵を打ち破った解放軍は勢いに乗ったまま、新たに現れた部隊へ猛然と襲いかかった。

戦法は先ほどと変わらない。先鋒が接触した直後、後方の兵が次々と敵陣に火炎瓶を放り込む。

そうして混乱した相手に対し突撃をかけ、一挙に粉碎する。敵が疲弊していた分、その効果は割り増した。

山腹まで届く阿鼻叫喚の中。戦いの結末を見届げる前に、レオパルトは高台から身を翻した。

「レオパルト、最後まで見ないのか」

「ふん、どうせこの勝負は守備隊の負けさ。お互いの残存兵力は同程度だが、指揮官の質が違いすぎる。大方、残った連中もニユートの二の舞だろう。これ以上は見る価値なんてねえよ」

楽しげに笑うレオパルトの前には、既に彼の副官が直立不動の体勢で立っていた。

「よう。ゲパルト、出撃の準備は出来たか？」

「は……現在、部隊は街の入り口付近に集結しております」

「上出来だ。今回は怪我人抜きで戦うぞ。連中の手の内は大体分かったし、流石にこのテッセラリウスを無防備にしておくことは出来ねえからな」

「は……了解です。では我ら親衛隊のみで出ると致しましょう」

大仰に頷く副官と連れ立って、レオパルトは石道を降りて行ってしまう。

残された氷堂はもう一度、戦場を見下ろした。レオパルトの推測通り、戦況は解放軍の圧倒的優勢だ。決着もそう遠くない。

「そうか。ならば、自分もやるべき仕事が出来るといふものだ」

背の高い板金鎧が完全に見えなくなったところで、氷堂は石畳から立ち上がった。

いつの間にか、その両腕は拘束から解かれている。地面に投げ捨てられたのはばらけた荒縄だ。

（連中め、ボディチェックが甘いな。はなから人間の力を舐めているからだ）

軍服の懐に隠し持っていた短刀を手の中で弄びながら、氷堂は鉞山の麓へと向かった。

目指すは人間の奴隷たちが囚われていた檻である。彼らを解放、扇動すればレオパルト不在の守備隊程度なら制圧することが出来るだろう。

「司令が戦っているというのに、副官の自分が捕まったままでなどいられないからな」

自嘲を交えた笑みと共に、氷堂は小さく呟いた。

テッセラリウスの戦い？

「ライゼル、こちらの被害は？」

「死者十八名。重傷者三十一名。軽傷者五十七名です！」

「そうか、まずまずだな」

戦場に積まれた敵兵の屍を眺めながら、蓮は軍刀に張りついた血糊を宙に振り払った。

決して少なくない被害だが、戦力比を鑑みればこれが最低限の損失だ。

とはいえ、蓮自身はこの段階で五十名の兵士が残ればいい方だと思っていた。

その想定が外れたのは、解放軍側の士気が予想以上に高かったためだ。

「勝った！ 勝ったぞ、俺たちが勝ったんだ！ 解放軍万歳！」

「ざまあみやがれ、ニユートのクソ野郎！ 今まででかい顔しやがって！」

「おい、まだ息してる奴がいるぞ！ 殺せ！ 殺せ！」

戦いが終わった後も、興奮さめ切らぬ人々は執拗に生き残った魔族を探し出してはその首を剣で掻き切っていた。

現状、解放軍を構成する兵士の大半はテッセラリウスで鉦山奴隷だった過去を持っている。

今回の戦いで自軍の士気が高かったのもそのためだろう。復讐心ほど人々を結束させるものはない。これに正義や自由といったスパイスを加えれば最高である。

「……どこの世界でも人間の本性は変わらない」

蓮は暴徒と化した人々を一瞥した後で、そびえ立つ大鉦山へと向き直った。

テッセラリウス守備隊との戦いは所詮、前座だ。本命はまだこれからである。

「サカキ殿、俺たちやこれからどうするんです？ テッセラリウスに攻め込むんですかい？」

「いや、撤退準備だ」

返り血のついた顔で詰め寄ってきた禿頭の兵士　ライゼルに、
蓮は短く答える。

途端、さざめきにも似たざわつきが人々の間から上がった。

「て、撤退？　ここまで来て撤退だって！？」

「そつだ。これから戦うのは錬鋼の一族。さつきまでの雑魚どもとは違う。真正面からぶつかって勝てる見込みはない」

「じゃ、さつきみたいに一旦下がって、その後、攻撃を……？」

「まあな。もつとも、今回下がるのは北部の森林地帯までだ。少々、強行軍になるから、今の内に休息をとっておけ」

この言葉にはライゼルも顔をひきつらせた。

なにせ彼らは今までに三度の戦闘を経ている。体力的にはもう限界だ。

この上、長距離マラソンでもさせられようものなら心臓が破裂しかねない。

「参りましたぜ。サカキ殿は本当に容赦のない人だ」

「かもしれないな。だが、血反吐を吐く程度で勝利を掴めるのなら安いものだろう」

「そりゃそつですが……」

「ああ、それと敵が出現した瞬間に逃げを打つと罠の存在を怪しまれる可能性がある。一旦は敵の突撃を受け止め、その後に退却するぞ」

「ほ、本気ですか！？　相手はあの錬鋼の一族なんでしょう！？」

あいつら、全身が鉄の塊みたいなもんなんですぜ！？」

「知っている。だから、今の内に覚悟を決めておけよ」

「……死ぬ覚悟を、ですかい？」

「いや、生き残る覚悟を、だ」

蓮は軽く黒馬の手綱を引いた。

丁度、その頃。テツセラリウスの外周部でも動きがあった。

固く閉じられていた門扉が開き、レオパルト率いる親衛隊がとうとう戦場に姿を見せ始めたのだ。

（予想より早い。奴め、既に出撃の準備をしていたか）

幾名かから聞いた話によれば、レオパルトは突撃好きの猪武者と
いうことだったが、なかなかどうして先見の明がある。

普通、攻撃に特化した武將は絡め手に弱いものだが、こういった
タイプは勳が鋭く、異様にしぶといのが常だ。

「流石にハンニバルほどではないにしろ、氷堂を倒しただけの実力
は持っているらしいな」

敵軍は全部で百名前後。構成員は鎧甲冑の姿をした錬鋼の一族で、
なおかつ全員が立派な体躯の蜥竜に騎乗している。

これを見た人々は勝利の熱狂を忘れ、総身を縮み上がらせた。先
ほどまで矛を交わしていた敵が可愛く見えるほどの重圧を、肌越し
に感じてしまったのだ。

「よし、全員適当に散らばれ。敵はこちらへ突撃をかけてくるはず
だ。これを一度いなしてから北部の森林地帯に逃げ込むぞ」

今度ばかりは反論もなかった。むしろ、今すぐ持ち場から離れた
そんな顔をしている者がほとんどだ。

それでもかろうじて戦場に留まっているのは、人間としての意地
に他ならない。

「お、俺たちはニユートの奴をぶっ倒したんだ。あいつらだって…
…！」

「錬鋼の一族がなんだ！ 四軍将がなんだ！ 人間の力を見せてや
る！」

震える手で剣を握り締め、やせ我慢としか思えないような氣勢を
上げる戦士たち。

それに応えるかの如く、レオパルト率いる親衛隊も槍と盾を銅鑼
代わりに打ち鳴らす。

「来るぞ」

蓮の短い眩きが放たれた直後、五重の陣を敷いた敵兵は怒涛の勢いで突撃を始めた。

先頭に立つ蓮は眉一つ動かしていないものの、その背後に佇む人々はとても平静でいられない。

地響きと共に迫る敵軍に身を竦め、きゅつと唇を絞り、悲鳴を噛み殺すので精一杯だ。

(さて、この戦で何人が生き残るか……)

内心で非情な考えを巡らせながら、蓮は軍刀の先端を敵軍へと差し出す。

「迎え討て」

やがて、激突した両軍の間から悲鳴と怒号が響き渡った。

「ふん、屑どもが。最初からそうしてりゃいいものを」

散り散りになって逃げ出す人間たちを見て、レオパルトは小さく鼻を鳴らした。

一族の部隊を迎え撃った解放軍の戦士たちだが、彼らは先ほどの奮戦が嘘だったかのように呆気なく打ち負け、遁走していた。

レオパルトの側からしてみると、予想より手応えが薄く、肩すかしをくらったような気分だ。

ただ冷静に考えてみると、どうにも敵軍の対応には引っかかる部分がある。

二十の兵を五列に並べて突撃する横陣は破壊力に優れ、相手を高波の如く飲み込むのが常だったが、今回レオパルトらが仕留められた敵兵は全体の四分の一にも満たなかった。

(連中め、まともに戦う気がなかったのか？ それなら、さっさと逃げてりゃ良さそうなんだが……。いや、待て待て。相手はカナ

メの同類だ。なにか策を用意していてもおかしくねえな)

数秒、逡巡にとらわれたレオパルトだが、結局すべきことは変わらない。

どうせ、人間の持つ武器では自分たちを倒すことなど出来ないのだ。現に今の交戦でも傷を負った者は皆無だった。

「ゲパルト、連中の後を追うぞ。あの黒髪の指揮官だけは殺すなり捕まえておくなりしておかねえと、後々面倒なことになりそうだ」

「は……了解です」

重々しく頷く副官の隣で、レオパルトは蜥竜の手綱を引いた。

人間たちが逃げ込もうとしているのは北部に広がる森林地帯だ。

殿には黒髪の指揮官。未だにその乗馬であるナイトメア共々健在である。

それどころか、両者にはレオパルトらの突撃を受けたにも関わらず、怪我一つ見受けられなかった。

(交錯の際にこっちの攻撃をいなしやがったのか。厄介な奴だぜ)
頭ではそう思いつつも、レオパルトは言いようのない高揚を感じていた。

元々、錬鋼の一族には強者を好む性質がある。中でも、レオパルトは特にその傾向が強い。

豹面の奥で笑みを押し殺しながら、レオパルトは逃げる人々に向けて槍を突き出した。

「そらっ、追ったてろ！ 一人たりとも生かして帰すなよ！」

先頭を走る族長に続き、鎧甲冑に包まれた部隊が平野を駆け抜ける。

とはいえ、彼らの騎乗している蜥竜は馬に比べると鈍足だから、全力で逃げる人間たちとの差はなかなか縮まらない。

それでも、疲労に負けて脱落した数名の戦士はたちまち後続の騎兵に押し潰され、見るも無残な挽き肉と化していた。

「走れ！ 走れ！ 死にたくなければ、走るんだ！」

黒髪の指揮官は最後尾で部隊を叱咤していたが、結局、彼らが森

に逃げ込む頃には更に十数名の人々が犠牲となっていた。

しかも森に入ったからといって安泰とは限らない。流石に木々の生い茂る中で横陣を構えることは出来なかったものの、レオパルトとその眷族は個々に散開し、逃げ惑う人々へ槍を振り下ろし始めたのだ。

「ひゃあ！ いい獲物だ！」

「人肉！ 人肉う！」

無残な人間狩りが行われる中、友軍の撤退を支援していた黒髪の指揮官は、ふいに口元へ折り曲げた指を押し当てた。

ピイイイイツ！

直後、甲高い指笛の音が森の中に響き、追走していたレオパルトは怪訝そうに眉を寄せた。

「なんだあ？ 何かの合図か？」

「は……もしかや罷かもしれません。ここは一度、隊を集めて警戒した方が……」

ゲパルトがそう忠告しかけたところで、異変は起きた。

指笛の音が鳴ってしばらくもせず、森の奥から突如発生した白い煙が発生したのだ。

白煙は逃亡する人々と、それに追いつがる魔族たちを纏めて飲み込み、彼らの視界を封じてしまった。

「ちっ、煙幕だと！？ 奴らめ、小癩な真似を！」

一瞬で狭まった視界に、レオパルトは苛立たしげな舌打ちを漏らす。

人間たちに追撃をかけていた鍊鋼の一族の兵士も、こうなっては戦うところではない。

それどころか上手く蜥竜を走らせることができず、真正面から木に衝突する者まで始めてしまう有様だった。

「全員、速度を落とせ！ さっさとこの煙幕を抜けるぞ！ この先の街道で部隊を立て直す！」

すかさず放たれる号令。それと被る形で、二度目の指笛は鳴り響

いた。

同時に、レオパルトは言いようのない悪寒が背筋に走るのを感じた。

例えるならば、首元に剣を突き付けられたような感覚。喉笛が斬り裂かれるまで、ほとんど猶予はない。

「いかん！ 全体、止まれ！」

半ば反射的に声を振り絞ったレオパルトだが、それも一手遅かった。

既に後方で待機していた伏兵たちによって、密生する木々の間には頑丈なロープが堅く張り巡らされていたのだ。

その結果、錬鋼の一族を乗せていた蜥竜は足払いをかけられ倒れる形で転倒し、騎手を地面へと投げ出してしまった。

「ぬわっ！ 何事だ！？」

「うぎゃあ！」

丁度、金属製の鍋ややかんを金槌で叩いたかのような音が、そこかしこで響き渡る。

一方、部下たちより早く伏兵の存在に気付いたレオパルトは、蜥竜から転落しつつも素早く受け身を取っていた。

「くそっ！ あいつら、やってくれるぜ！」

彼らが投げ出された先は街道のど真ん中だ。どうやらロープは街道の手前。森と森の切れ目に設置されていたらしい。

わざわざこの場所を選んだのは森の腐葉土よりも、踏みしめられた街道の土の方が、落馬した相手に致命傷を与えられると見込んでのことだろう。

(……が、残念だったな。サカキとやら)

レオパルトら錬鋼の一族は鎧甲冑の肉体を持つ魔族である。地面と衝突した程度ならばどうということはない。

衝撃にうめきつつも、煙幕の中から次々立ち上がる同胞の影を、レオパルトはざっと見渡した。

「ふん、してやられたか。あいつらめ、この隙に逃げやがったな」

「は……どうやら最初から伏兵を仕込んでいたようです。煙幕を張りつつ、罠で足止めする。なかなか効果的な手段ですな」

族長の傍らまでやって来たゲパルトは、兜に張りついた土を片手で払い落とした。

「今回は痛み分けといったところですか。我らは赤守の族長とテッセラリウスの守備隊を失いましたが、きやつらの部隊もこの戦いで半壊状態になったはず。これではらくは連中も動けませんまい」

「まあな。だが、問題なのはあの黒髪の指揮官を逃がしちまったことだ」

「は……ですが、後の楽しみが増えたと考えれば良いのではないのでしょうか」

「おいおい、ゲパルト。お前は俺が戦争を楽しむような人間に見えるのか？ ああ、その通りだよ。よく分かっているじゃねえか」

がらがら喉を鳴らしながら、レオパルトは副官の背を籠手で叩く。

「ま、いい。今日の戦はここまでだ。各自、蜥竜を回収しろ。テッセラリウスに引き上げるぞ」

『了解！』

族長の指令を受け、一族の兵士たちは揃って帰り支度を始める。

街道を覆う煙幕の中から、低く沈んだ声が放たれたのはその時のことだ。

「なんだ、もう帰るつもりか。もう少しこの場に留まっていればいいものを」

背後から響く声を受け、レオパルトはびたりと足を止めた。

振り返れば、目に入るのは白い煙幕の中にぽっかり浮かんでいる人影。

翻る外套の形からして、ニユートらを斬殺した黒髪の男であることは間違いない。

「よう。てめえ、尻尾を巻いて逃げたんじゃなかったのか？」

挑発的な台詞を放つレオパルトの前で、男は軽く笑ったようだった。

「いや。ただ、少し時間が欲しくてな。こうして足止めに来た訳さ」

「時間だった？ そいつはどういう」
言いかけたレオパルトは、そこでふと微かな地響きの音に気付いた。

最初は遠く、やがて徐々に近くへ、地面を揺らす振動と共にそれは接近してくる。

（これは。まさか。いかん。まずい！）

たちまち、脳裏をよぎる悪魔的な閃き。

長年に渡って戦場に立っていた経験が、自軍に襲い来る脅威の正体をレオパルトに察知させていた。

「ぜつ、全員、逃げろ！ 大急ぎでこの場から離れるんだ！」

悲鳴染みた号令をかけるレオパルトだが、既に地響きの源は彼らの間近まで迫っていた。

刹那、街道に満ちる煙幕を切り裂いて現れたのは、分厚い鋼鉄に覆われた鈍色の車体だ。

濁流の如く討ちかかって来た重チャリオットに、一族の兵士たちは成す術もなく呑み込まれてしまった。

テッセラリウスの戦い？

「やれやれ、どうにか上手く行ったか」

街道の端で重チャリオットの突撃を回避した蓮は、塵芥の如く引き潰される敵兵を無感動な眼差しで眺めていた。

この重チャリオットは戦端が開かれた当初、テッセラリウスの守備隊から鹵獲したものだ。

遊撃隊となったベルナツトら十名ほどの戦士たちはこれを操り、守備隊の東軍を攪乱した後、街道に残るレオパルトたちへと急襲をかけたのだった。

頑強を誇る錬鋼の一族も、煙幕からの不意討ちの上、個々に散らばった状態ではなんの抵抗も出来ない。

結果、超重量の戦車による走行は容赦なく彼らを粉碎し、蹂躪し、れきさつ轢殺していた。

「やったのか……？」

チャリオットが街道の向こうへ消えてから数秒後。伏兵として街道付近に身を潜めていたルシユアらと、逃げたと見せかけていた解放軍の戦士たちが、蓮の後ろから恐る恐る顔を覗かせる。

煙幕が晴れた後、街道に残っているのはひしゃげ、原型を留めていない鎧甲冑ばかりだ。

チャリオットの猛威にさらされた一族の兵士たちは、大半が物言わぬ屍と化していた。

しかし、運良く致命傷を逃れた数名の魔族は、未だに息を残している。

その中には、兜の豹面を醜く歪ませたレオパルトの姿もあった。

「ふ、ふざけやがって！ てめえら、よくも俺の同胞を！ 御大将から預かった兵士たちを！ ……許さんっ！ 全員、ここから生きて帰れると思うなよ！」

ひび割れた鎧の下から青緑色の血を流しながら、レオパルトは激

怒の咆哮を上げる。

鬼気迫る勢いに押され、街道の端に集まった人々はびくりと身を竦めた。

「サカキ殿、あいつまだ生きて！」

「ああ、大した打たれ強さだ」

蓮が冷静に状況を分析している間にも、生き延びた一族の兵士たちは次々に立ち上がり始めていた。

確かに、重チャリオットの急襲は敵部隊に壊滅的な被害を与えた。しかし、その全てを沈黙させることは出来なかったのだ。

「くつ、しぶとい！ 火炎瓶隊、奴らの息の根を止めてやれ！」

すかさず号令を放つルシユア。同時に火のついた陶瓶が幾つも宙を舞う。

放たれた火炎瓶は狙い変わらず生き残った兵士に直撃し、彼らを火達磨へと変えた。

しかし、一族の兵士は全身を焼かれているにも関わらず、まるで応えた様がない。これにはルシユアもぎょっと目を剥いた。

「効かない！？」

「やはりダメか。この程度の火力ではびくともせんな」

錬鋼の一族が身に纏っているのは単なる外骨格ではない。正真正銘、鋼鉄の鎧だ。

恐らく溶鉱炉に投げ込みでもしない限り、彼らを焼き滅ぼすことは出来ないだろう。

最後の切り札と呼べるものが消え　しかし、蓮の表情に動揺の色はない。

「てめえ……なにを余裕ぶってやがる。お前の策はもう種切れだろうが！ 貧弱な人間風情が俺たちに！　錬鋼の一族に！　敵うとも思ってたのか！」

レオパルトは体に纏わりつく紅蓮を振り払いながら、腰の剣を抜き放った。

族長に続き、抜剣した一族の兵士は全部で十名強。個々の戦闘力

を考えれば、これだけでも解放軍の残存兵力を虐殺するには十分な数である。

「サカキ殿、敵が来るぞ！」

「そうだな。こうなつては仕方あるまい」

ざわめき始める人々の前で、蓮は軍刀の鯉口を切った。

「俺が出る」

鈍色の刃が素早く抜き放たれ、討ちかかる鎧甲冑をすれ違いざまに切り捨てる。

一撃で胴を撫で斬りにされた一族の兵士は、上下に肉体を分割されたまま地面を転がった。

「なっ、てめっ!？」

瞠目するレオパルト。その間にも、蓮は切り返した刃で迫る二人目の敵を股間から頭頂部まで両断している。

元々、錬鋼の一族は頑強な肉体こそが最大の武器であり、動き自体は人間よりも鈍重だ。

加えて、負傷によつて全力を出せない状態ならば、零式軍刀を携えた蓮の敵ではない。

「こ………の!？」

大上段に剣を構えて打ちかかったゲパルトは、彼自身にも気付かぬ内にその両腕を切り落とされていた。

ないはずの腕を振り抜こうと体勢が崩れたところで、強烈な回し蹴りが鎧の胴部に放たれる。

ゲパルトは堪え切れず背後の味方に衝突し、仰向けに倒れた。その胸板に鈍色の刃が突き立ったのは直後のことだ。

続く一族の兵士たちも、首を刎ねられ、胸板を裂かれ、鋼鉄の甲冑をいとも容易く寸断されて、うつぶせにばたばた倒れていく。

結局のところ、彼らの死は数秒遅いか早いかに過ぎず、最終的にはチャリオットの難から逃れた兵士も一人残らず蓮の手で斬り殺され、街道に無残な屍を晒すこととなった。

「う、お、あ………」

一方、無敵を誇る軍勢を全滅させられたレオパルトは、言葉も出せない。

悶絶する鍊鋼の族長に、蓮は軍刀の先端を突き付けた。

「降参しろ、レオパルト。お前には色々聞きたいことがある」

「ふっ、ふざけるな！ こんなことが……こんなことがあってたまるか！ 俺たちは鍊鋼の一族だぞ！ このレギオニールの覇者だぞ！ それが、たかが一個の人間に……！」

「一個の人間ではないさ。お前をここまで追い詰めたのは群の力だ。レオパルト、お前は自分の一族の力を過信し、人間の力を舐めた。その結末がこれだ」

「ほざけ！ てめえら人間が俺たちに勝っている部分なぞ、一つもねえだろうが！」

「かもな。だが、強者が必ずしも勝者になるとは限らない。お前も將軍ならば、そのことは百も承知のはずだ」

淡々と放たれた台詞に、レオパルトはぐっと押し黙った。いくら叫ぼうが喚こうが、既に勝敗は決してしまっている。

所詮、蓮からして見ればレオパルトの主張など、負け犬の遠吠えに過ぎない。

「……まだ、俺たちは負けた訳じゃねえ」

だが、レオパルトは蓮の言葉を否定するかの如く、己の剣を正面に構えた。

「鍊鋼の一族は最強だ！ 例え俺一人になろうとも、てめえらをブチ殺すには十分なんだよ！」

「やる気が、レオパルト。無駄な足掻きを」

「黙れ！ てめえだけは……！ てめえだけは生かして帰さん！ 軍將の名にかけて、あの世に送ってやる！」

怒号と共にレオパルトは上段に剣を振り被り、全身の力を込めて叩きつけた。

鍊鋼の一族の筋力は人間よりも遥かに高い。これを正面から受け止めた蓮は、勢い余って街道の中央から端まで跳ね飛ばされてしま

う。

その隙を追って振り抜かれる凶刃。巻き込まれた木々と解放軍の戦士たちが、揃って稲穂の如く伐採される。

「サカキ殿！」

「離れている！ 死ぬぞ！」

身を屈めて剣撃をかわした蓮は、下段から軍刀を逆袈裟に斬り払った。

しかし、レオパルトは素早く刀身をかち合わせ、そのまま鏢迫り合いに持ち込む。

単純な腕力勝負では流石に不利だ。じわりと重いプレッシャーが、蓮の全身を覆い包んだ。

(ちっ、この真改とまともに打ち合えるとは……)

本来、蓮の零式軍刀は鉄の塊程度なら容易く両断してしまうほどの切れ味を秘めている。

にも関わらず、レオパルトの剣は幾重打ち合ってもまるで応えた様子がない。恐ろしい頑丈さだった。

「く、はは、俺たち一族の肉体をぶった切った剣も、このステインガーには敵わないらしいな」

額同士がぶつかりそうなくらいの距離まで豹面を迫らせながら、レオパルトはがらがらと喉を鳴らした。

「錬鋼の一族はその生涯に渡って、一振りだけ己の半身となる武器を生み出す！ この武器は朽ちず、折れず、砕けない！ そこいらにある凡百のなまくらとは出来が違うんだよ！」

「そいつはすごい。後でベルナツトにでもくれてやろう」

感心した風に呟きながら、蓮は噛み合う刀身を滑らせた。

刃を弾き、距離を取ったところで、今度は平突き形で軍刀を突き出す。

レオパルトはそれを真上から叩き落とすと、捻るようにして刀身を跳ね上げた。

対する蓮は喉元を狙う刃を迎え撃って、真横から胴を払いにかか

る。

しかし、真改の先端はレオパルトの甲冑を浅く切り裂いただけに終わった。

「ハツハハハツ！ いいぞ！ 緑青の血が燃える！ もつとだ！ もつと本気を出せ！」

けたたましい笑い声を上げながら、レオパルトは幾度も剣を打ちつける。

一方、蓮は力任せに押しこまれる連撃を、技量と速度で受け流していた。

息をつく間もない凌ぎ合いの中、競り勝っているのはレオパルトの方だ。

人間としては最高峰の身体能力を持つ蓮だが、それでも魔族との間には越えられない力の差がある。

「……仕方がないな」

蓮は小さく呟き、真横に振り抜かれた刃を後方宙返りで回避した。続いて、斬り倒されかけた木の幹を蹴り、空中で刃を横一閃させる。

飛矢の如き勢いで放たれた斬撃を、それでもレオパルトは難なく剣の腹で受け止めた。

「どうした！ お前の力はその程度か！」

レオパルトは哄笑しつつ、背後へ降り立った蓮に向け、剣を掲げる。

その瞬間　レオパルトは振り向きかけた態勢のまま、ずるりと足を滑らせた。

別段、地面がぬかるんでいた訳ではない。厳密に言えばそもそも足を滑らせたのとも違う。

本人も気付かぬ内に、レオパルトの脚甲は膝から下にかけて綺麗に切断されていたのだ。

「う、お！？」

バランスを崩し、どう、と音を立てて上半身から倒れ込むレオパ

ルト。

彼が自らの肉体に生じた異変を知ったのは、その時のことだった。「なっ!?! い、いつの間に!」

「鈍い奴め。今頃気付いたのか」

蓮は刀の背で肩を叩きながら、軽い調子で答える。

「上からの攻撃に気を取られている間に、両足を払ってやったんだよ。お前の眼には見えない程度の速度でな」

「なんだと……!?! てめえ、まさか今まで本気を出してなかったのか!?!」

「いや、無傷で捕虜を確保したかったただけだ。困難なようだから諦めたが」

「それを手抜きって言うんだろぅが!」

「手抜きはしていない。手加減はしていたがな」

「ぐ、う、お……!」レオパルトは豹面の奥から怒りと屈辱の混じった呻きを漏らした。

「な、舐めやがって! 貴様の思い通りになどさせるか! 俺にも武人の意地がある!」

咆哮と共に、自らの胸板目掛けて愛剣の先端を突き出すレオパルト。

だが蓮はそれを許さず、軍刀を一閃させるなり、レオパルトの右腕を肩から斬り飛ばしてしまった。

「がっ!?!」

「勝手な真似はやめて貰おうか。敵情を得る前に、將軍であるお前を死なせる訳には行かん」

「くそっ! 殺せ! 殺せよ! てめえに武人の心はないのか!?!」

「ない。俺は武人ではなく、軍人だからな」

全身から青緑色の血を撒き散らしながら喚き散らすレオパルトに、蓮は冷たく言い放った。

一方、街道から離れた場所で様子を伺っていた人々は、戦いが終わったことではやくやく姿を見せ始める。

その先頭には、驚きに目を見開くルシユアの姿があった。

「すごい……。まさか、四軍将の一人をこうもあっさり倒してしま
うなんて。その気になれば、あなた一人でも一族の兵士全てを制圧
出来たんじゃないのか？」

「冗談だろう。その前に体力が尽きてしまっさ」

苦笑交じりに答え、蓮は額に浮かんだ汗を拭った。

一応、平静を装っている蓮だが、その内情は見た目ほど穏やかで
はない。

そもそも、蓮が用いている神経加速装置には幾つかの欠点がある。
その一つは神経、ひいては肉体に対する負担が激増することだ。
(最初の守備隊との交戦時も含め、合計稼働時間は五分弱といった
ところか……。一応、まだ余裕はあるな)

神経加速装置の最大稼働時間は約十分。それ以上の連続使用は肉
体に障害を残す危険性もある。

もし蓮一人で百の軍勢と戦えば、例え勝てたとしても廃人と化し
てしまうだろう。

現にたった五分間稼働させただけでも、蓮の体には抗いがたい疲
労感が溜まっていた。

「ともあれ、これでレオパルトとその親衛隊は制圧した。後はテッ
セラリウスに残る兵を倒すだけだ」

「……そうか。そういえばまだ鉾山には敵が残っているのだったな」
勝利に浮かれかけていたルシユアは、気を引き締め直した。

「まあ、守備隊を倒し、錬鋼の一族を撃破した以上、テッセラリウ
スに残っているのは負傷兵がほとんどのはず。恐れることはない。
ベルナットと合流した後、一気に畳みかけるぞ」

「応！」

蓮の号令に応える人々の顔には疲労の色が残っていたものの、そ
の声に宿る力は一向に衰えていなかった。

テッセラリウス解放

その後、チャリオット隊を率いるベルナットと合流し、テッセラリウスへと迫った解放軍の戦士たちだが、結果的にその戦意は空回りすることとなった。

彼らが鉱山へ到着した頃には、既に内部からの反乱で残る守備隊も全滅していたのである。

代わりにテッセラリウスの麓で蓮とベルナットたちを出迎えたのは、フレームの細い眼鏡をかけた軍服姿の男だ。

「お待ちしておりました、サカキ司令」

丁重に頭を下げる男の前で、蓮はナイトメアの背から飛び降りた。久しいな、氷堂。まさか、また生きて会えるとは思わなかったぞ。かつての戦友との再会で、普段の仏頂面には珍しく笑みの表情が浮かんでいる。

一方、ベルナットを除く解放軍の面々は、蓮とよく似た格好の男を前に小さく首を傾げていた。

「サカキ殿、知り合いか？」

「かつての副官だ。名を要氷堂という」

「……カナメ？ 変な名前だな」

ルシユアの正直すぎる台詞に氷堂は顔をひきつらせる。

姓名が前後逆転しているような名前の作りは、彼自身のコンプレックスの一つでもあった。

「司令、そちらの方々は？」

「ベルナットとルシユアだ。紆余曲折あって共に戦っている」

「なるほど。となると、やはりアクリオンの解放軍を率いているのは司令だったんですね」

納得した風に頷く氷堂だったが、蓮は隣に佇むベルナットにちらりと視線を向け、

「そいつは間違った情報だな。俺は作戦の指揮をしているだけだ。」

事実上のリーダーはこいつさ」

「『金狼』ベルナット・クーガですか……。自分もゲリラ活動を続ける内に、あなたの名前は聞き及んでいます。いつか、こうして会いたいと思っていた」

「ああ、ありがとう。これからよろしく、ってことでいいのかな」
さつと差し出された手の平を、ベルナットは握り返す。その口元には苦笑が滲んでいた。

「でも、懐かしいよ。まさか、剣闘士時代の二つ名をもう一度聞くことになるなんて」

「ベルナット、あなたの名は蜂起した人々の中で最も有名だ。いわく、人類の希望の灯だ」と

「よしてくれ。僕はサカキがいなければ死んでいた人間だ。解放軍のリーダーだって形だけみたいなものさ」

謙遜の言葉を漏らすベルナットの姿に、氷堂はどこか既視感を覚えた。

目鼻立ちのはっきりした顔。優しげながら芯の強さを感じさせる声。

ベルナット・クーガは、かつて氷堂と蓮が忠誠を誓っていた少女にどこか似ているのだ。

「ところで、氷堂。テッセラリウスの蜂起を指導したのはお前だな？」

「は、はい」

横合いから投げかけられた蓮の言葉に、氷堂は慌てて頷く。

「ただ、自分のやったことなど微々たることですよ。主力は外で司令が片付けてくれましたから、後は人々を扇動し、中に残った敵兵を捕縛するだけでした。相手は怪我人がほとんどでしたし、その上、このテッセラリウスでは武器の確保に困りませんからね」

「なるほどな。しかし、お前は今までどこでなにをしていたんだ？」

「その話は街の中ではありませんか？ 外で立ち話というのもなんですし」

この提案に反対する者はいなかった。なにせ解放軍の戦士たちは蓮やベルナット、ルシユアといった指揮官格も含め、激戦に次ぐ激戦ですっかり疲弊してしまっていたからだ。

氷堂の先導を受け、人々は重い足を引き摺りつつテッセラリウスの門扉をくぐった。

やがて、短い石造りのアーチを抜けたところで、眩い光が彼らを照らし

直後、鉦山の麓に広がる街中から割れんばかりの歓声が響いた。

「来たぞ！ アクリオンの解放軍だ！」

「ありがとう！ テッセラリウスは自由だ！」

「万歳！ 万歳！ 解放軍万歳！」

街の広場に集まり、解放軍の面々を出迎えたのはみすばらしい身なりの鉦山奴隷だ。

体は痩せ、手は細り、体に身に纏っているのはぼろの布きれと鉄の手枷のみ。

にも関わらず、その表情には満面の笑みが浮かんでいる。繰り返される「万歳」の声に終わりはない。

周囲を覆い包むかのような大歓声に、ベルナットら解放軍の戦士たちは眼を丸くした。

「すごいや、まさかここまで歓迎されるだなんて……」

「手でも振ってやれ。喜ぶぞ」

「え？ こうかい？」

ベルナットが蓮の言葉に従って手を振ると、人々の歓声はより熱狂さを増した。

中には感極まって泣き出す者までいる始末である。元々、騒がしいのが好きではないルシユアなどは、むしろ居心地悪そうに顔をひきつらせていた。

「慣れないな、こういつの。それにしても、どうしてこの街には女がないんだ？」

「住人の大半が奴隷だからですよ。鉦山労働に力の弱く、体力のな

い者は不要とされているんです。女性や子供、老人はむしろ、オプティアに送られることの方が多いですね」

「田園都市オプティア。テッセラリウスの西。三穂槍平原の中央に建てられた都市か。レギオニール地方最大の農業地帯という話だが……」

一歩引いた位置に立っていた蓮は、そこでふと門前に集まった人々へと視線をやった。

丁度、眼前では解放軍の兵士たちが民衆の中でもみくちやにされている。

ベルナットに至っては最早、人波にさらわれて見えなくなっただけまっていた。

「凄まじい熱狂だな、しかし」

「司令、この世界の人間は今まで魔族によって抑圧される日々を送ってきたのです。奴隷として扱われようと、家畜として殺されようと、人々にとって錬鋼の一族は絶対的強者で、抗う術もなかった。それが今日、初めて一矢報い、勝利を掴むことが出来たのです。彼らにとってはこの日は歴史に残る一日となるでしょう」

氷堂は沸き立つテッセラリウスの街を眺めて、感慨深そうに呟く。ぼろ雑巾と化したベルナットが民衆たちから解放されたのは、それからしばらく経ってからのことだった。

「カナメ、早くどこか屋根のある場所に行けないかな？ いい加減、身の危険を感じて来た」

と、流石のベルナットも疲労の色濃く浮き出た顔で提案する。

「それでは鉱山の中腹にある迎賓館に向かいますか。あそこにはレギオニール地方全体の地図もありましたから、今までの、そして、これからのことを話すには丁度いいはずです」

「分かった。案内してくれ」

一行は氷堂を先頭に、蓮、ベルナット、ルシユアの三人は群衆の垣根を通って、山道を登り始めた。

鉱山の麓から中腹にかけては山肌を抉って作られた牢獄が並んで

いたが、今は元々の住人である人間たちに代わって、生き残った魔族の捕虜が閉じ込められている。

丁度、テッセラリウス陥落を前後に立場が逆転した形だ。一行が牢獄の前を通ると、たちまち怨嗟と罵りの声が鉄格子越しに響いて来た。

「そういえば、あのレオパルトを捕虜にしたと聞きましたが、今はどこにいますか？」

「麓で治療を受けさせている。あのまま放置して死なれても困るからな」

傍から響く声を一顧だにせず、蓮は淡々と答える。

「本来は無傷で確保したかったが、予想以上に手間取ってしまった。あの鍊鋼の一族というのはかなり厄介だ。お前が一度敗北しただけある」

「お恥ずかしい話です。しかし、この大陸に生息している鍊鋼の一族は、二千とも三千とも言われています。テッセラリウスで撃破したのはまだほんの一部に過ぎません」

「早急に強力な兵器を開発する必要があるな。でなければ、これから奴らと戦っていくのは難しいだろう」

蓮は足を止め、鉾山の中腹に建てられた石造りの屋敷を見上げた。鍊鋼の一族の質実剛健を尊ぶ気質から、レギオニールにおいて贅沢な装いや華美な飾りは忌避されている。

そのため、建築物のほとんどは機能性のみを重視した無骨な様式だ。切り出した石材を積み上げて建てられた屋敷は、どこか砦のようにも見える。

「ここが迎賓館なのかな？　むしろ要塞みたいだけど」

「正確に言えば迎賓館として扱われている屋敷、ですね。このレギオニール地方では軍事的な施設以外が建てられることは滅多にありません。鍛冶場や製鉄所にしても、日々の暮らしに使われる道具ではなく、あくまで武器を作り出すためのものなのです」

「まるで総動員令をかけられた戦時下の国家だな。連中は余程戦争

が好きなのか？」

「そうですね。元々、錬鋼の一族は大陸に多くある氏族の中でも、飛びぬけて好戦的な種族です」

「ただ、それだけが理由ではありません」氷堂は屋敷の重い鉄扉を押し開けつつ、言葉を続ける。

「司令はこの大陸に『王』と呼ばれる存在がいるのはご存じですか？」

「ああ……確か、複数の族長を束ね、広い領土を保持している強大な魔族のことだったか。このレギオニール地方にも二人、王と呼ばれている者がいたはずだ。ケントリオンの冬の女王と、レガティアの『^{ウォーデン}軍神』。四軍将を取り纏める、錬鋼の一族の頂点に立つ存在で

す。彼はその名の通り、戦場から戦場に渡り歩く習性を持っていません。そして、かの王は力こそ全てと考え、それ以外の付属品を全て情弱な代物と切り捨てているのです」

「なるほど。友達にはいて欲しくないタイプだな」

「上司にもいて欲しくありませんね」

冗談に冗談を返しつつ、一行は屋敷の奥へと進んだ。

屋敷の内装は外観と同じく、家具や装飾品が見当たらない。おかげで、手入れ自体はきちんと行き届いているものの、どこか寂れた印象を受ける。

絨毯のない石畳を歩き始めてから十数秒後、屋敷の最奥に辿り着いた一行が目にしたのは、広い部屋の中央に配置された古木の丸テーブルと、壁にかけられた大陸の地図

そして、椅子に腰かけたまま分厚い本を広げている人影の姿だった。

「どうも」

不景気そうな顔で一行を見やったのは、学士のようなガウンと角帽を身に付けた若い女性だ。

青い髪に青い瞳。更に人形染みた顔立ちと、どこか人間離れした

風貌をしている。

肌の色も青白く、見た目は病人か幽霊のよう。耳の先端は三角形の形に尖っており、目元まで伸びた長い前髪の向こうではガラス玉の瞳が瞬いていた。

「……？ 誰だ、お前は？」

怪訝そうに眉を寄せつつ足を踏み出しかけたルシユアを、蓮は片手で制す。

「待て、ルシユア。この女、人間じゃない」

「えっ？ 人間じゃないって、どういう……」

「彼女の体温は常人より遥かに低いんです。これじゃあ、まるで死体だ」

警戒心を露わに、氷堂は青髪の女性を睨みつけた。

蓮と氷堂の眼球にはステルス兵器感知用の熱画像装置が組み込まれている。サーモグラフィ

これで体表温度を確認すれば、女性の肉体が常人と異なっているのは一目瞭然だった。

「何者です、あなたは？」

「ケントリオン最高学士府長官兼ソフィアラ大学学長。名をライムと申します」

すらすら自己紹介の言葉を述べた後で、ライムと名乗った女性はぱたりと本のページを閉じる。

一方、彼女の言葉を聞いた蓮は壁にかけられた地図を横目で一瞥していた。

「ケントリオン 通称、賢者の街か」

賢者の街ケントリオン。知識こそ至上の力と考える『冬の女王』によって統治された都市国家だ。

地理的にはテッセラリウスのやや東に位置しており、年中雪だらけの土地として知られている。

（冬の女王を始め、ケントリオンを支配しているのは『冰雪姫の一族』と呼ばれる者たちだったはず。一応、ケントリオン国内では人

間に対して、魔族と平等の権利を認めていると聞いたが……)

蓮は油断なく学士風の格好をした女を観察した。

青い髪に青い瞳。そして、恒温生物にはあり得ないほどの低い体温。

恐らくは彼女もケントリオンを統べる『氷雪姫』の内の一人なのだろう。

「で、そのケントリオンの学長が何の用だ？ 物見遊山にここまで来た訳ではあるまい」

「少し違いますが、似たようなものです。アクリオンで蜂起した解放軍は次にここを狙うと踏んで、見物に来ました」

「……まさか、僕たちの動きを読んだのか？」

「普通に考えれば、敵の生命線であるテッセラリウスを狙うのは当然の判断ですよ。読むまでもありません」

冷ややかに答えた後で、ライムはかすかに眉を寄せる。

「ただ、あなた方がレオパルトに勝ったのは意外でしたね。まさかあの戦争狂いが、人間に倒されてしまうなんて」

「酷い言いようだな。お前ら氷雪姫の一族は錬鋼の一族と仲が悪いのか？」

「ええ。とても」ライムは無表情のまま頷いた。

「彼らは度々、我がケントリオンの領土にも侵入してきています。人間は魔族と呼んで私たちを一括りにしますが、実際は氏族ごとの関係は複雑に入り組んでいて、仲の良い氏族もあれば、互いに殺し合うほど仲の悪いものもいるのです。我々、氷雪姫の一族と錬鋼の一族の場合は後者ですね。私たちにとってベルヴェルクは怨敵といつても過言ではありません」

「ベルヴェルク？」

「錬鋼の一族を率いてる大王の名です。『ベルヴェルク・ウォーデン軍神』ベルヴェルク……

あなた方は、自分たちが戦っている相手の名前も知らないのですか？」

蔑むような視線を向けてくるライムを前に、蓮と氷堂は顔を見合

わせた。

「氷堂。思うにこの女は俺の苦手なタイプだ。後は任せたまえ」

「司令！　そうやって面倒事を自分に押し付けしないで下さいよ！」
とはいえ、氷堂もトラブルの解決には慣れたものだ。

渋々ライムに向き直り、フレームの細い眼鏡をくいつとかけなおした。

「ええと、ライムさん？　あなたはどのようにして自分たちの前に姿を現したんです？　それもただの興味本位ですか？」

「いえ、我が主、冬の女王から伝言があります。万が一、人間がテッセラリウスを陥落させたのであればこの書状を渡せと」

言つて、ライムは懐から取り出した封筒を、氷堂に差し出す。

氷堂は封筒に施されていた封蝋をペーパーナイフで切り開くと、中に折りたたまれていた書状を蓮に手渡した。

「司令、ソフィアラ語の読解は出来ますか？」

「問題ない」

蓮は書状を受け取り、さっと目を通す。

最初に季節の挨拶が始まり、戦勝を祝う言葉が続く。

次いで、自己紹介が入り、その後は自らの身辺に関する情報が

「……前置きが長過ぎる」

「本題は多分、八ページ目くらいにあります」

「お前のところの女王は無駄話が好きなのか？」

「いえ、単に話を纏めるのが天才的に苦手なだけです」

無表情のまま淡々と答えるライムだったが、その声からはかすかに疲れが滲んでいた。

ライムの言葉通り書状の八ページ目に目を通した蓮は、文章の末尾まで読み終えたところで小さく息をつき、くしゃりと羊皮紙を握り潰した。

「サカキ、一体なにが書いてあったんだい？」

「同盟だ」

「えっ？」

「冬の女王はケントリオンと解放軍の間で、同盟を結ばないかと提案している」

蓮の放った一言は、広い会議室にしんと響き渡った。

ケントリオンからの使者

同盟。その言葉は会議室に集った四人から様々な反応を引き出した。

無表情の蓮。ぱつと顔を輝かせるベルナット。不可解そうに首を傾げるルシユア。

氷堂に至っては、あからさまに眉を寄せている。

「すごいじゃないか。ケントリオンが仲間に加わってくれるなんて」

「……そう能天気な解釈していいものかな。なにか裏があるんじゃないだろうか」

「裏もなにも、我々を矢面に立たせようという考えが見え透いていますね」

氷堂に言われるまでもなく、蓮もケントリオン側の意図はおおむね読めていた。

元よりアクリオン村から発生した解放軍と、都市国家であるケントリオンでは人口面でも軍事面でも対等ではない。

仮に同盟を結べば、解放軍側はケントリオンの勢力に組み込まれ、錬鋼の一族に対する都合のいい駒として扱われてしまうだろう。

「ライムとやら。一応聞くが、お前たちは我々を支援するつもりはあるのか？」

「はい。ただ、我がケントリオンの軍備もそれほど余裕がある訳ではありません。軍事的な援助は望めないかと」

「ならば、お前たちはこの同盟で我々になにを提供するつもりだ？ 武器か？ 資源か？ それとも食糧か？」

「いえ、知識です」ライムは簡潔に答えた。

「我々、ケントリオンの賢者は常に知識を糧として生きています。同盟が結ばれた暁には多くの賢者が、あなた方に軍師として力を貸すことでしょう」

「悪いが軍師ならば足りている。必要のないものを貰ったところで

どうしようもない」

「数は足りていても頭の中身は足りていないのではありませんか？
軍師というものは粗悪品だけ揃えても仕方ありませんよ」

「っ……貴様！」

度を超えた暴言に身を乗り出しかける氷堂だが、蓮はそれを片手で押し留めた。

「よせ、氷堂」

「しかしですね！」

「ケントリオン側の意志は分かった。だが、その条件ではとても同盟など結べないな」

「何故です？」

「決まっている。戦場では血の臭いを知らぬ頭でっかちの賢者など、ただの物置にしかならんからだ」

舌鋒鋭い返答を受け、ライムはかすかに目を細めた。

ケントリオンは著名な賢者が多く住まう街だ。その学識は大陸最高峰と称されており、住人もその誇りと自負を抱いて生きている。

それ故、『頭でっかちの賢者』などという台詞は、ライムを始めとした学士にとって最も許せぬ侮言だった。

「……所詮は人間か。物を知らぬ土人に世の道理を分からせるためには、小細工も必要ということですね」

か細い声で放たれた独り言だが、聴力を強化された蓮と氷堂にはしっかり聞こえてしまっている。

そうとも気付かぬライムは席を立つと、テーブルの端に積まれていた木版を一つ手に取った。

「その帽子を被ったお方。名前を聞かせて貰ってもよろしいですか？」

「神蓮。今は解放軍の参謀を務めている」

「……そうですか。それは好都合です」

にやりと極寒の微笑みを浮かべたライムは、テーブルの上に木版を置く。

木版には碁盤目が刻まれており、傍らには数種類の駒があつた。恐らくは会議室を利用していた魔族が、暇潰し用に持ち込んだ品だろう。

「サカキさん、『死の遊戯』はご存知ですか？」

「この大陸で最も有名なボードゲームだろう？ お互いの駒を交互に動かし、王を取られた方が負けというルールだったはずだ」

「そうです。そこまでご存知ならば話が早い」

ライムはテーブルの上に素早く駒を並べた。白と黒とに塗り分けられた駒が、盤上で乾いた音を立てる。

「ここは一つ勝負と行きませんか？ このメメント・モリで私が勝てば、我々との同盟を受け入れて頂きたいのです」

「ほう。で、俺が勝った場合はどうするつもりだ？」

「そうですね。万が一こちらが負けた場合には、この学長ライムがあなた方に手を貸しましょう。こう見えても、私は冬の女王に次ぐケントリオン第二の賢者です。軍師として使えずとも役に立ちますよ」

「ふむ」

蓮はおもむろに口元へと手を当てた。

別段、なにか考え込んでいた訳ではない。ただ、向き合った相手に笑みの表情を見られたくなかっただけだ。

(……こいつは好都合)

蓮はまだこの大陸の情報に疎い。今まではベルナットになにかと尋ねていたが、いずれ彼の知識ではカバーしきれぬことも出てくるだろう。

その時には『頭でっかちの賢者』が知恵袋として必要になる。要は使いようの問題、ということだ。

「構わん。その条件で勝負を受けよう」

「え、大丈夫なのかい？ サカキ、このゲームはやったことあるの？」

「いや、ない。書庫で見たからルールは知っているがな」

「さ、流石にそれはまずいんじゃない……」

「大丈夫ですよ」不安そうな顔のベルナットに氷堂は言った。

「司令はボードゲームの天才ですから。自分の知る限り、あの人が盤上遊戯の類で負けたことは一度もありません」

「それは奇遇ですね。私もこのメモント・モリで、我が主以外の者に負けたことはないのです」

ライムは不敵に口元をつり上げつつ、骨片で作られた六面ダイスを手に取った。

「さて、それでは始めましょうか、死の遊戯を」

一時間後、そこには王を除く駒全てを全滅させられ、愕然とするライムの姿があった。

「うそ……私がこんな一方的に弄ばれるだなんて」

「チェックメイト。勝負ありだな」

かつん。蓮の手によって、盤上で黒の兵士ポーンが乾いた音を立てる。

対面の駒が壊滅している一方で、蓮の盤上には未だ半分以上の駒が残っていた。

ライムからして見ればぐうの音が出ぬほどの惨敗だ。最後に残った駒の前に、ライムはすっかり頭を抱えてしまった。

「……私の負けです。でも、どうということなの？ あなたは本当にこのゲームをやったことがないのですか？」

「ああ。ただ、このメモント・モリはチェスというゲームによく似ていてな。そっちはかなりやり込んでいる」

それこそ百年以上だ。元々ボードゲームを得意とする蓮からしてみれば、負けるはずのない勝負だった。

ライムはなおもしばしの間、納得が行かぬ風に盤上を睨んでいた

が、やがて諦めたかのようにため息を漏らした。

「仕方ありませんね。負けは負けです。あなた方に手を貸しましよ
う」

「もっとごねるかと思ったが案外素直だな。女王にはなんと報告す
るつもりだ？」

「正直にお伝えしますよ。どの道、私は同盟が破局してもあなた方
と一緒するつもりでした。私は個人的に鍊鋼の一族に対して恨み
があります。あの戦争狂いどもだけは地獄に突き落としてやらな
ければ、気が済まない」

凍えた声でライムは言った。前髪越しに見える瞳には押し殺した
怒りが渦巻いている。

本来ならば、ここは過去の事情を聞くべき場面なのだろう。

だが、蓮は大して興味を示すこともなく、「そうか」と頷くだけ
だった。

「氷堂、この娘に適当な仕事を与えてやってくれ」

「……司令、丸投げは勘弁してくださいよ」

「遠慮するな。以前、補佐が欲しいと言っていただろう」

「いつの話をしているんですか。十年くらい前ですよ、それ」
毎度のことでありながら、氷堂はつい渋面を浮かべてしまう。

もつとも当事者であるライムは我関せず、深々と頭を下げると、

「これからよろしくお願ひします、氷堂さん」

「……ええ、よろしくお願ひします」

憤まじやかな挨拶に、氷堂は強張った表情を返すことしか出来な
かった。

この日から、アクリオンの解放軍は鉦山都市テツセラリウスを拠
点に活動を始める。

その航路は一見、順風満帆に見えたかもしれない。

されど、未だ大陸中央の諸都市にはレオパルトを除く四軍将の部隊が留まり、レギオニール地方最果ての地には、一族の大王『軍神』ベルヴェルクが二万の軍勢と共に息を潜めていた。

作戦会議？

数日後、テッセラリウス山腹に築かれた屋敷の会議室にて。

蓮、氷堂、ライムの三名は、テーブルの上に並べられた帳簿を囲んだまま額を突き合わせていた。

首尾良くテッセラリウスを陥落させ、多くの武器・防具を手に入れた解放軍だったが、ここでまた新たな問題が浮かび上がって来たのだ。

「武器の次は食糧か……全く、次から次へと面倒事が沸いてくるな」
数字の刻まれた安っぽいパピルス紙をつまみ上げた蓮は、兵糧の残高を見て唸り声を漏らした。

現在、テッセラリウスの人口は元々の住民三千名に加え、アクリオン村から移住してきた面子が約千名。

更に周辺地域から集まって来た人々が千名ほどあり、その上に魔族の捕虜二百名が加算されていた。

「つまり現在、この街の人口は約五千名。テッセラリウスの穀物庫が空っぽになるまで、三日ほどという計算ですね」

「氷堂、各地から届けられた食糧は計算に入れているのか？」

「勿論です。移住してきた方々が持ち寄った干し肉、果物などがなければ、我々は今頃解放軍ではなく、盗賊団などと呼ばれていたかもしれません」

「人の心を繋ぎとめるためには衣食住を保證せよ、か。しかし、ここまで兵糧が圧迫されるとはな」

蓮はくしゃりと軍帽に手をやった。

その向かいでは帳簿を手にとったライムが、記入された数値を見て顔をしかめている。

「これは酷い。解放軍が占領する前から、テッセラリウスの食糧事情は火の車だったようですね。オプティアから回される穀物はごくごく少数。これでは守備隊の兵糧分にも足りません」

「だが、守備隊の連中が飢えている様子はなかったぞ。元々足りない分はどうしていたんだ？」

「書類には書かれていませんが、恐らく現地調達していたのでしょう。麓の土蔵に塩漬けされた肉がありましたから」

「ああ……」と、蓮は不快そうに眉を歪めた。

要するにテツセラリウスを支配していた魔族の面々は奴隷として送られた人間を屠殺し、その肉を喰らって腹を満たしていたのだ。

その証拠として、土蔵の奥には人間を丸ごと密封した甕がいくつも並べられていた。

「ライム。一応聞いておくが、お前らにも人肉食いの習慣はあるのか？」

「まさか。我々をあのような蛮族と一緒にしないで頂きたい」ケントリオンの長官は唾棄するかの如き口調で言った。

「そもそも、私たち氷雪姫の一族は人間とよく似た姿をしています。そのため、古来から人肉を口にすることは忌み嫌われていたのです」

「そいつは良かった。俺も昔、若気の至りでプラスチック爆弾とダイナマイトを食ったことはあるが、流石に人間の肉にまで手を出した経験はないな」

「……司令、それはある意味、人肉よりも問題ですよ」

氷堂は上司の悪食っぷりに口元を引きつらせた。

プラスチック爆弾にはセルロース。ダイナマイトにはグリセリンが混じっているため、噛むと僅かに甘い風味がする。

特に大戦の最中では物量統制が行われ、甘味など滅多に前線に回って来なかったから、堪え切れなくなった兵士がこれらを食べてしまう事例があったのだ。

おまけに肉体を強化された人間は混入している毒物もほとんど通じないから、爆弾の食べ過ぎで除隊処分になった者まで出る有様だった。

「とはいえ、このままでは我々が飢え死にするのも時間の問題だ。安定した食糧供給なしに軍隊を維持しようなど、正気の沙汰ではな

い

「腹が減ってはなんとやら、ですね。しかし、我が軍に自給能力がない以上、どこか他の場所から食糧を調達するしかないのですが……」

言いつつ、氷堂は向かいに座る学士姿へと視線をやる。

暗に尋ねられたライムはしばし考える様子を見せたものの、やがて力なく首を横に振った。

「無理ですね。ケントリオンは極寒の地。大地の実りは少なく、自国の民ですら毎年飢えに喘いでいます。そのため、学府では大学で作成した書物を輸出し、他国から食糧を得ているのですが、近年は街道を荒らす賊のせいで収入も少なく――」

「責めるような視線でこつちを見るな。大体、お前らの本を略奪したのはベルナツトで、俺は関与していない」

青い瞳にじつと睨まれ、蓮は小さくため息をこぼした。

一年ほど前から街道を行き来する魔族を襲っていたベルナツトたちだが、実のところ、彼らは人間に対して友好的なケントリオンの商隊にまで攻撃をかけていたのだ。

そもそも、襲う側から見ればどの商隊がどの街から出発したかなど分からないし、いざ蓋を開け、荷台に書物がぎつちり積まれていたとしても、ケントリオンまで返却しに行くことなど出来るはずもない。

その結果がアクリオンの書庫に溜まった百巻以上の本である。あれらは元々、ケントリオンから輸出された代物なのだった。

「しかし、サカキさん。私の目にはあなたが実質的な解放軍の指導者に見えるのですが」

「俺がアクリオンの解放軍に参加したのは半月ほど前。ベルナツトたちが行商を襲撃していたのはそれ以前の話だ。今度あいつに会ったら恨み言でも言つてやれ」

「相変わらず息をするかの如く他人に面倒事を押しつけますね、司令」

「氷堂……戦場で重要なことの一つはな、自分以外の人間でも出来る仕事は極力他人に任せることだ。でなければ、指揮官は多くの作業に忙殺されてしまうし、部下は上官任せにして自分から働かなくなる」

「では上官が働かない時はどうすればいいのでしょうか」
「諦める」

身も蓋もない台詞に氷堂はがつくりと肩を落とした。

と、そこでタイミング良く外に出ていたベルナットが会議室に姿を見せる。

ベルナットやルシユアを始めとする北方森林地帯の住民は、獵師として優れた弓の腕前を持っていたため、少しでも食糧を確保しようと森へ狩りに出ていたのだ。

その甲斐はあったのか、ベルナットは会議室に入るなり両手を大きく広げて見せた。

「やあ、ただいま。今日はこんなにおつきいノシシが取れたよ。それにしても、この前サカキから貰った剣はやたらとよく切れるな。丸太で試し切りしたら、見事真つ二つに」

「ベルナットさん」

不意に横合いから冷たい声をかけられ、ベルナットはびくりと肩を震わせる。

「な、なんだい、ライム」

「いえ、その、唐突で申し訳ないんですが、その四角く開いた窓から山道に飛び降りていただけませんか。こう、頭を下にした体勢で」

「えっ……ちょ、ちょっと、僕なにか悪いことした!? 遠回しに死ねって言われてるよね!？」

「まあ、要約すればそのような意味になりますね」

淡々と言葉を続けるライムを前に、ベルナットは助けを求めるような視線を彷徨わせた。

「あの、ごめん。誰か事情を説明してくれると嬉しいんだけど」

「アクリオンの書庫に大量の本があっただろう。どうもあれはケン
トリオン産の品物だったらしい」

「あー……やっぱり、そうだったんだね。僕も薄々気づきかけて
うおっ!？」

慌てて身を伏せたベルナットの頭上で、氷を固めて作られたダー
ツが石壁に突き刺さる。

ライムは間一髪氷弾を回避したベルナットを見て、小さく舌打ち
を漏らした。

「ちっ、はずしたか」

「ま、待つてくれ! 今、殺す気で放たなかったか!？」

「いえ、脊髓反射的に体が動いてしまいましたから。殺す気だった
かどうかはちよっと」

「余計に性質が悪いよ!？」

「すいません」

ライムは台本に書かれた文字を読み上げるかのような口調で言っ
た。

丁度そこでベルナットの背後から、外套をひっかけた格好のルシ
ユアが顔を出す。

ルシユアは床に屈んでいるベルナット、壁に突き刺さっている氷
の矢、どこか不機嫌そうな雰囲気のライムへと順々に視線を移した。

「二人ともなにをやっているんだ？」

「あなたは……」

「アクリオンのルシユア・ロットだ。古くから解放軍に参加してい
る」

「ルシユアさん、ですか。女性みたいな名前ですね」

「女だからな」

ぶつきらぼくに言い放つルシユアを前に、ライムは目をしばたか
せた。

「失礼しました。どうも私は人間の性別を見分けることが不得意な
のです」

「いや、ルシユアは元々、男の子っぽい顔立ちをしてるから」

「ベルナット、女顔のお前に言われたくない」

「……………」

「なんにも言い返せず項垂れるベルナットの肩に、同じく童顔の氷堂はぼん、と片手を置いた。」

作戦会議？

その後、五人はテッセラリウスの食糧問題について一時間ほど討論を続けたものの、名案と呼べるような代物は出なかった。

「とりあえず、ここで一度、状況の整理をしておきましょうか」

手元に氷のステッキを作り出したライムは、出来の悪い生徒に言い聞かせるかのように、壁際の地図をこつこつ叩いた。

会議室にあるレギオニール地方全体を描いた地図には、いくつもの街が名前付きで掲載されている。

冬ヶ岳連峰ふゆがたけの麓。東の果てにあるのは雪に囲まれた賢者の街『ケントリオン』。

そこから西に行くくと三穂槍平原みつほやりの端、鉦山都市『テッセラリウス』に辿り着く。

更に西へと赴けば平原の中央。農業が盛んな田園都市『オプティア』。

逆にテッセラリウスから南へ進むと、海に面した貿易都市『プリマス』に到達する。

オプティアの先にあるのは人形の街『トリブヌット』と城塞都市『プレフェクタ』。

そして、その向こう。白刃山脈はくじんを越えた果てによく錬鋼の一族の本拠地である、技師の街『レガティア』を望むことが出来た。

「今のところ解放軍が占拠している都市はテッセラリウスのみです。我がケントリオン、そして、沿岸部一帯を支配するプリマスは中立を保っています。テッセラリウス西側にある都市の内、オプティアからは完全に敵の勢力圏内にあると思って下さい」

ステッキの先端が、オプティアからレガティアにかけての範囲を指し示した。

広大なレギオニール地方だが、その大部分を支配しているのはベルヴェルク・ウォーデンを頂点とする錬鋼の一族だ。

特に大陸中央から西側にかけての主要都市は、ほぼ全てが彼らによって押さえられている。

「地理的に見た場合、我々が次に攻略すべき目標は田園都市オプティアになります。ここは四軍将レオパルトが統監を務めていた都市ですから、彼がいない今ならば付け入る隙もあると思いますが……」

「ライム、オプティアに駐留している軍隊の規模は？」

「私の知る限りでは二千名ほどですね。とはいえ、レオパルトはここから討伐軍を徴兵したため、残るは千名だけになります」

「おっ、それならどうにか落とせそうだな。今の僕たちが動かせる兵力も同じくらいじゃなかったか？」

呑気に提案するベルナットに、ライムは冷ややかな眼差しを向けた。

「論外ですね。そもそも、兵はあってもパンがありません。もしオプティアに軍隊を動かせば、兵士が途中で飢え死にしています」

「でも、三日分の兵糧はあるだろうか？」

「『三日分の兵糧しかない』んです。テッセラリウスからオプティアまで行軍するとなると、三穂槍平原を突っ切る関係上、丸二日近くもかかってしまいます。その上、都市を攻略することになればより多くの時間が必要となるでしょう。三日分の食料ではとても足りません」

再度、ステツキの先端ががりがり音を立ててテッセラリウスとオプティアの間をなぞる。

兵糧というのは軍隊にとって最も重要な要素の一つだ。これが足りなければ兵の士気は下がり、酷い時には軍全体が空中分解してしまう。

ベルナットの隣で地図を睨んでいたルシユアは、困り果てたかのように唸り声を上げた。

「結局は食糧問題か。中央の食糧庫であるオプティアさえ落とせば、食糧問題は解決できる。しかし、そのための食糧がない……」

「ジレンマですね。いっそのことオプティア近郊の麦畑を適当に略

奪しますか？」

「氷堂さん、今は夏ですよ。実りの季節である秋からは最も遠い時期です」

「……ああ、そういえばそうでした」

異世界人である蓮や氷堂にとって、四季の感覚というのは非常に薄い。

なにせ、あの荒廃した大地には季節の移り変わりというものがまるでなかったのだ。

蓮自身、ライムの言葉でようやく秋に穀物が実り始めるという事実を思い出していた。

「面倒だな。例えこの時期にオプティアを落としたとしても、穀物庫が空っぽという事態が起こりかねんわけだ」

「勘弁して欲しいね。暴動が起きるよ」

「でも、東も駄目。西も駄目としたら後はもう……」

ルシユアはテッセラリウスから南に続く街道の先。プリマスと名の書かれた都市へと視線を向けた。

貿易都市プリマスは海に面したレギオニール地方最大の港町だ。

その名の通り商業が盛んで、東西の他地域と積極的に交易を行っている。

「プリマスから食糧を仕入れてくるしかないんじゃないか？ ここは錬鋼の一族の支配下じゃないはずだし」

「名案ですね。ところで聞きますけど、この軍の軍資金は？」

「ゼロだな」

「そうですね。では、まず錬金術の研究をしませんと」

皮肉とも冗談ともつかない台詞を口にするライムだったが、それが他の面々に理解されることはなかった。

一方、プリマスの出身であるベルナットも難しそうに眉を寄せ、

「僕も少しだけ貯蓄はあるけど、五千人分の食糧をまかなうには流石に足りないな」

「ベルナット、プリマスで使われている貨幣はどんな代物なんだ？」

「え？ ああ、帝国銀貨のことだね。元々は東のルガル帝国から入ってきたもので、こんな形をしている」

ベルナットは懐から小袋を取りだすと、テーブルの上に数枚の貨幣を並べた。

細工に僅かな違いがあり、大小二種類に分かれているものの、どれも蛇と王冠の紋章が刻まれた銀貨だ。

作りは精巧で、表面の輝きから極めて純度の高いことが分かる。

蓮はその内の一枚を手に取り、ぴんと親指で弾いた後、宙を舞う硬貨を手の平で受け止めた。

「銀の含有率は九十%くらいか。場合によっては偽造もやむなしと思っただが、これでは難しいな」

「資金がないのなら物々交換です。幸い、このテッセラリウスから質のいい鉄鉱石が採れ、麓の倉庫にも多くの武器や防具が備蓄されています。これをプリマスに輸送し、食料と交換すれば良いのではありませんか？」

「鉄鉱石は構わんが武器は駄目だ。このテッセラリウスに置かれた武器は全て実用品。そして、商人というのは剣や鎧を買っても本来の用途に使わん」

「……ああ、そういうえばそうですね。私としたことが少々目先の事柄に囚われていたようです」

納得が行ったように頷くライム。その隣で、氷堂も「なるほど」と相槌を打っている。

反面、ベルナットとルシユアは蓮の言葉の真意が分からず、揃って首を傾げていた。

「えっと、サカキ。つまりはどういうことなんだい？」

「出来れば私たちにも分かるよう、説明してほしいんだが……」

「説明もなにも、少し考えれば分かることだ。本来、武器は戦場で扱われるものであって、飾られるものではない。もし我々が商人に多くの武器を流せば、奴らはそれをより高値で他所へ売り飛ばそうとするだろう」

「そうか。その場合、候補となるのは」

「武器の供給地を奪われた錬鋼の一族だろうな。こちらとしては敵に武器を流すような真似は出来るだけ避けたいんだ」

「ただ」と蓮は言葉を続ける。

「物々交換という方法は悪くない。武器以外になにか候補はないか？」

「なら、アクリオンから持ってきた本なんてどうかな。ほら、ベルナットが書庫に集めてたやつ」

「え？ あれって今、テッセラリウスにあるのかい？」

「アクリオンに残ってた連中がこっちに移って来る時、本とかがらくたとかも一緒に運んできたらしい。といつても、ここじゃ文字を読める奴なんてほとんどいないからな。鍛冶屋の親父が燃料に欲しがってたくらいさ」

なんとなしに放たれたルシユアの一言に、ライムは絶句した。ただでさえ白い顔が、さあつと蠟のようになる。

「なっ、冗談ではありません！ 今すぐやめさせて下さい！」

「言われなくともやめさせたよ。大体、羊皮紙ってのはすぐ燃え尽きちゃうから火種には使えても、燃料には向かないんだ」

「そういう問題ではないでしょう！」

いつになく憤慨した様子で、ライムはテーブルに両手を叩きつける。

本というのは人類の英知の結晶だ。それを薪代わりに使うなど、彼女からしてみれば書に対する冒瀆以外の何物でもない。

「そもそも、あれら書物はケントリオンの学士たちが精魂込めて製本したものののですよ？ 言うなれば、同じ重量の銀より価値のある代物なのです。燃料よりももっと他の使い道があると思いませんか？」

「ああ、そういえばこの時代の書物というのは高値で売れるのだったな。交易品としては好都合じゃないか」

「……サカキさん、私はそういうことが言いたい訳ではないのです

が

「だが、あれは元々ケントリオンからプリマスに輸出されたものなのだろう？　ならば、売って金に換えるのもまた本来の用途だ」

そう言われてしまうとライムも反論できない。不満そうな顔をしつつも、渋々引き下がるしかなかった。

「しかし、司令。本の代金だけで五千人もの人口を養うのは難しいですよ？」

「分かっている。確か、アクリオンの倉庫には本以外にも調度品の類がいくつもあったはずだ。それに大荒原で採れた石油、天然アスファルトの類も売れば金になるだろう」

「なんだ。案外どうにかなりそうじゃないか」

「三日という時間制限がなければな」

付け加えられた一言に、一同は再び頭を抱えてしまった。

もしプリマスで食糧を得ようとすれば、街から街への往復。商品の販売。食糧の購入を三日以内に済ませなくてはいけない。

モノが僅かならばそれも可能だろうが、現在彼らが必要としているのは五千人分の食糧。

それも一日ではなく、長期間に渡って住民を養うことが出来る程度の量は必要となる。

氷堂はうめき声を上げつつ、ベルナットに尋ねた。

「困りましたね。ベルナットさん、そちらでなにか心当たりは？」

「なくはないけど、大量の食糧をすぐさま用意できる豪商ということかなり数が限られてくるよ。おまけに向こうの商人つてのは全員魔族だから、人間と取引してくれる人なんてほとんどいないし」

「両方の条件を兼ね揃えた者が一人でもいればいいんです」

「……うん。まあ、いるっちゃいるんだけどさ」ベルナットは苦い表情で言った。

「その人はかなり性格が悪いんだ。好きなものは生き物の苦しむ姿と他人の断末魔。自宅には自分のハーレムを作って、人間の女の子を百人単位で困ってる。その癖、財貨に対しては貪欲で他人に施

しなんて一切しない。金の亡者とはあの人のことだね」

「ベルナット、そいつの名前は？」

「『大王猫の一族』の族長ケットシー。財力でプリマスを支配している貿易王さ。闘技場の経営なんかもやってて、昔は僕も彼の下で剣奴として働かされていた」

ベルナットは無意識の内に、頭に被った月桂冠へと手を伸ばしていた。

月桂樹の冠は勝利と栄光の証だ。これは無敗の剣闘士だった彼が、オーナーであるケットシーから送られた代物だった。

しかし、ベルナットにとってこの冠は剣奴として働かされていた過去の象徴でもある。そこに込められた思いを簡単に言葉で表すことは出来ない。

「一応、僕もあの人に会うつてはある。交渉を受け入れてくれるかどうかはまた別の話だけだね」

「十分だ。元より他に道がないのなら仕方あるまい」

テーブルの上をこつんと一度叩いた後で、蓮は一同を見回した。

「行くぞ、プリマスへ。その金の亡者とやらの顔を拝んでやろう」

貿易都市プリマス

貿易都市プリマス。テッセラリウスから南西に一日ほどの距離にある港町である。

軍事方面に傾倒したレギオニール地方ではさほど商業が盛んではないものの、東のルガル帝国、西のミストリアは積極的に交易を行っており、両者の中間にあるプリマスは東西貿易の中継地となっていた。

とはいえ、この地方の諸都市から輸出されている品物もあった。鉄鉱石や石材、材木などの天然資源。各都市で生産される武器、書物、剥製、器械道具などがそれだ。

逆にルガル帝国から入ってくるものは金銀宝石を始めとした宝飾品や、ワイン、タバコ、コーヒー、砂糖などの嗜好品が大半を占め、ミストリアから入ってくるものは食糧や家畜、奴隷などが多い。

これら諸地域から集められた様々な代物がプリマスでは販売されている。ほとんど区画もされていない迷路のような通りにはいくつもの露店が顔を並べ、派手な服を身に纏った店番がしきりに呼び込みの声を上げていた。

「西平原から仕入れた羊肉の燻製だ！ 一頭、大銀二つで持ってけ！」

「今日仕入れたばかりの銀細工だよ！ そこのお兄さん、彼女にどうだい！？」

「果物安いよ！ なんと三つで小銀一だ！」

「よく働く奴隷！ 力の強い奴隷！ いりませんかあ！？」

様々な種の魔族、人間が集まった港湾は常に多くの人々が行き交い、街全体が異様な熱気に包まれているかのようだ。

おまけに今は大暑の季節。通りを歩く人々の顔には汗が浮かんでいた。

「久しぶりだな、このむし暑さも。なんだか懐かしいよ」

雑踏を慣れた足取りで歩くベルナットは、騒々しい通りを眺めつつ、時折目を細めていた。

その後ろに続く蓮はこの気温にも関わらず、軍服、軍帽、外套という普段通りの服装である。

傍から見れば暑苦しいことこの上ないが、元より蓮は気候の変化に悩まされるような体をしていない。

一方、最後尾を歩くルシユアは普段着用している革鎧を脱ぎ、ベージュ色に染め上げられた袖なしの貫頭衣という涼しげな格好に変わっている。

「……しかし、サカキ殿。私まで付いてくることはなかったんじゃないか？」

ルシユアは露わになった細腕で、額に浮かぶ汗を拭った。

夜の内に書物・調度品などを馬車に乗せ、テッセラリウスを出発した一行がプリマスの街へ到着したのは昼過ぎのことだ。

今回、プリマス行きメンバーは交渉を行う蓮に加え、案内役のベルナット

そして、最後の一人はどうして自分がここへ連れて来られたのかもよく分からないルシユアである。

「なんだ。テッセラリウスで留守番の方が良かったのか？」

「い、いや。そういう訳じゃないんだが……」

ちらりとベルナットを盗み見るルシユアに、蓮は言った。

「安心しろ。別に恋する乙女を想い人から引き裂きたくなかった、という訳ではない」

「はっ？ えっ？ な、な！？ さ、サカキ殿、一体なにを!？」

「気付かれていないとでも思ったのか？ 流石に一カ月近くも共に行動すれば、誰が誰を好いているかくらい分かるさ」

「いや、しかし、その」

「ああ、ちなみにお前を連れてきた理由はちゃんとある。別段、他意がある訳ではない」

「あ……うん。そ、それならいいんだ」

ルシユアはもう一度、額に浮かぶ汗を拭う。暑さとは違う熱のため、すっかり体温が上がってしまった。

一方、ベルナットはようやく背後のやりとりに気付いたのか、振り返ったところできよとんとした表情を浮かべ、

「ルシユア、どうしたんだい？ 顔が真っ赤だけど」

「……お前のせいだよ」

「えっ？」

と呑気に首を傾げている。あまりの朴念仁っぷりに、流石の蓮も呆れてしまった。

「そういえばベルナット、お前とルシユアはいつからの付き合いなんだ？」

「ええと、二年前に僕がこの街を飛び出してからだね。ルシユアはアクリオンに古くから住んでいて、あの村に辿り着いた僕に色々融通してくれたんだ」

「融通、って言っても大したことしてないけどな。あの時のベルナットがあまりにも頼りないもんだから、つい放っておけなくなっただけだし」

辛辣な言葉を放つルシユアに、ベルナットは「はは……」と乾いた笑い声を返すことしか出来ない。

「まあ、当時の僕はプリマスを出たばかりの世間知らずだったからな。世の中の情勢を知っていても、それを本当の意味で理解していなかったんだ」

言って、ベルナットはプリマスの町並みへと金色の瞳を向けた。

多くの人々がすれ違う表通りだが、よくよく見れば豪華な衣装を身に纏っているのは異形のヒト型ばかりで、ほとんどの人間は布地の擦り切れた粗末な格好をしている。

通りに並ぶ街商にしても、大きな店を構えているのは魔族だけだ。人間の店は小さなものがぼつぼつあるだけで、品揃えは悪く、当然、客足も鈍い。

「このプリマスでも人間と魔族は平等じゃない。それでも、この街

で暮らす人々には希望がある。いつか底辺から這い上がり、成功してやるといふ希望が。他の地域に比べたら大きな違いさ」

ベルナットの台詞はどこか自嘲的だった。

確かにプリマスではテッセラリウスなどと比べて人間たちの扱いがマシだが、それでも決して良好な訳ではない。

あくまでベルナットの見方は相対的なものだ。蓮の眼にはこのプリマスの人々も抑圧されているように思える。

(いや、だが結局は俺も同じなのか)

蓮のいた世界では徴兵によって自由を奪われることはあっても、奴隷と呼ばれるような存在は一切いなかった。

しかし、それはあくまで憲法の制定された近代国家での話。人間の君主すらいらないこの世界で受け入れられる考え方ではないのだ。

「……どうしたものかな」

蓮が眉を寄せて考え込んでいる間にも、ベルナットは街の奥へ奥へと進んでいた。

表通りは賑やかなプリマスだが、少し裏に回るといかがわしい店の立ち並ぶ一角へと差し掛かる。

派手な外観の娼館。怪しげな肉を売る店。毒々しい色の薬を並べた薬局。幼い子供ばかりを揃えた奴隷市

男女関係に対して潔癖症のきらいがあるルシユアなどは、街頭に立つ派手な化粧の売春婦を見てあからさまに眉をひそめていた。

「ベルナット、本当にこんなところにケットシーとかいう商人がいるのか？」

「いや、先に面会予約をしなきゃいけないからね。まずはケットシーの部下に会いに行こうと思っている。あいつも僕がいた頃と同じ生活を送っているなら、昼間はこの近辺。夜は黒い仔猫亭って酒場にいるはずなんだけど」

「その知り合い、どういう男なんだ？」

「名前はシャム。人間と『灰色猫の一族』の間に生まれた奴で、元々は僕と同じ剣闘士だったんだ。引退後はプリマスに留まって、今

はケットシーが経営している商会の手伝いをしているらしい」

「ほう、混血種か。実物を見るのは初めてだな」

蓮も一応、知識の中では人間と魔族のハーフがいることを知っている。

大陸の社会において二つの異なる種族同士が性交し、子供を産むのは稀だ。

例外として、魔族と人間の間では比較的容易に子供を作りだすことが出来るが、結婚や恋愛を通じて出生まで至る事例は極めて少なく、ほとんどの場合は魔族から人間へ一方的な性行為が行われ、結果、望まれぬ子供が生まれてしまう。

当然、彼等に対する風当たりは強く、生まれた子は人間と魔族の両方から疎まれるという話だった。

「混血の人間には魔族の特徴が出るというが、実際にはどんな姿をしているんだ？」

「うーん。それは多分、本物を見て貰った方が早いんじゃないかな」
苦笑を浮かべつつ、ベルナットは通りの一角にある賭場の扉を押し開けた。

プリマス裏町の賭場は、百名ほどの収容人数を持つ大規模な代物だ。

小汚い外装に反し内部は意外と清潔で、フロアの半分にはテーブルが並べられ、もう半分には闘鶏、闘犬用の小さな舞台が広がっている。

店内で賭け事に興じているのは身形の粗末な人間ばかりで、魔族の姿は全くといっていいほど見えない。

その代わり、中には明らかに人間とも魔族とも思えないような、中途半端な姿の者がいた。

「よう、いらっしや……つて、ベルナット・クーガか!？」

三人が賭場に入った直後、テーブル席の奥から立ち上がったのは頭から猫の耳が生えた背の高い男だ。

甘い顔立ちに加え、いかにも遊び人といった雰囲気の良いシャツ

に黒いズボン。体格は細身だが絞り込まれており、野生動物染みた印象を受ける。

よくよく見れば瞳孔がやや細く、ズボンからは長い灰色の尻尾が飛び出ており、顔立ちもネコに似ていた。

「久しぶり、シヤム。相変わらずだね、君も」

「お前こそ変わってないな。もう何年振りだ？　最後に顔を合わせってから二年は経っているんじゃないか？」

シヤムは満面の笑みを浮かべつつ、大仰に手を広げた。

「まさか、この街でまたお前と会えるとは思わなかったぜ。今日はどうしてここに？」

「買い物だよ。少しでかい取引がしたくってね。君の御主人様に会いたいんだ」

「へえ、ケットシーさんに？　ひょっとして商売でも始めるつもりか？」

「いや、別にそういう訳じゃない。ただ食糧を買いたいだけさ」

「あー、うん。なるほどな。その後ろにいる連中がなんか関係してる訳か」

シヤムはベルナットの肩越しに蓮とルシユアの顔を盗み見た。

蓮は相変わらずの無表情だが、ルシユアは興味深そうにシヤムの頭から生えた耳を眺めていた。彼女も半魔族を目にするのは初めてだったのだ。

「この二人はサカキとルシユア。僕の同僚みたいなものだよ」

「同僚？　お前、今なんか仕事やってんの？」

「まあね。あんまり、大きな口で言えるような仕事じゃないんだけど」

「ふーん。ま、いいや。とりあえず、ケットシー様に会いたいんだな？　お前、あの人に気に入られてたから、多分明日には会ってくれると思うよ」

「明日？」ベルナットは怪訝そうに聞き返した。

「急ぎの用事なんだ。今日面会するのは難しいかな」

「そいつは無理だよ。元々、あの人の予定は一週間前から決められてるんだ。どう頑張ったって、会えるとしたら明日以降になる」

この台詞にはベルナットもルシユアもすっかり困り果ててしまった。

テッセラリウスからプリマスまでは往復するだけでも最低、二日はかかる。

今日、面会を取れなかった場合、品物の売買にかかる時間を含めると、三日の上限を越えてしまいかねない。

「シャム、そこを曲げて頼みたいんだ。どうにかならないか？」

「ならないね」

食い下がるベルナットを、シャムはぱつさり切り捨てた。

「そもそも今日はちょっと特殊な客が来てるんだ。連中を後回しにしたら、このプリマスが焼け落ちかねないぜ」

「……それってまさか」

「鍊鋼の一族のお偉いさん、四軍将筆頭のエイブラムスだよ。三日くらい前からこの街に留まってたんだけど、なんでも東のテッセラリウスが解放軍を名乗る人間たちに落とされたって話が広まってね。ケットシーさん相手に武器が買えないか交渉してるんだ」

シャムの言葉に、ベルナットとルシユアは顔を見合わせた。

鍊鋼の一族の存在は、蓮にとっても計算外だ。電報もないこの時代、本来ならばテッセラリウス陥落の報が他の都市に広まるまで、まだ数日の余裕があるはずだった。

（となると、解放軍の内部に間諜が入っていたのか……？）

テッセラリウスにはレギオニール地方の各所から人が集まって来ている。

その中にプリマスの密偵が混じっていたとしても、誰一人気付くまい。

元より解放軍の主敵は鍊鋼の一族を始めとした魔族だ。人間に対しての警戒が緩くなってしまうのは、仕方のないことだった。

「ああ、そつういえばよ」

ふいにシヤムはにこやかな笑みをたたえたまま口を開く。

蓮はその微笑みの裏に、なにか黒い感情がよぎるのを見た。

「その解放軍のリーダーもベルナット・クーガって名前らしいんだが……お前、ひよっとして知り合いか？」

何気なく放たれた台詞に、ベルナットは息をのむ。

気付けば、つい先ほどまで賭け事に興じていた客全員が席から立ち上がり、冷たい殺気を身に纏ったまま、三人を取り囲んでいた。

ベルナット・クーガ？

プリマスの街には商店の次に宿屋（売春宿も含む）が多いとされている。

主な客層は取引を終えた商人、航海の最中に一休みをした船乗りたちで、中にはしばしば遠方から買い物に来た客も混じる。

その日、黒猫商会の経営する旅籠に宿泊していた客も、大半はその三者のどれかだった。

唯一の例外は三階、大通り側の大部屋を取っていた三人組である。蓮、ベルナット、ルシユアの三人は賭場でシヤムと会った後、半ば拘禁されるような形でこの宿へと押し込まれていたのだった。

「面倒なことになったな」

壁にくりぬかれた小窓から外の通りを眺めつつ、蓮は感情のない声で呟いた。

夕焼けに照らされ、閑散となりつつある街中には、見張り番の男たちがぼつぼつ佇んでいた。

恐らくはシヤムと同じケットシーの部下だろう。単なる商人の用心棒にしては身に纏う気配が鋭過ぎる。

（『大王猫の一族』が族長ケットシーか。予想以上に面倒くさそうな相手だ）

窓際から離れ、室内に目を移せば、寝台に腰かけたベルナットがすっかり頭を抱えてしまっていた。

「……すまない。まさか、こんなことになるなんて」

「あのシヤムとかいう奴、とんだ食わせ者じゃないか。最初から猫を被ってたんだけ」

ベルナットの対面。蜥竜の赤皮を張って作られた椅子に座ったルシユアが、不機嫌そうに吐き捨てる。

「でも、ケットシーの狙いはなんなんだ？ 賭場の客に囲まれた時は、てつきり殺されるのかと思ったのに」

「恐らく、奴は俺たちと錬鋼の一族とを天秤にかけているんだ。そして、より自分の利益が大きくなる方につくつもりなのだろう。実に商売人らしい思考回路だな」

「じゃあ、前向きに考えれば、まだチャンスはあるってことかい？」
「後ろ向きに考えれば、いつ刺し殺されてもおかしくない状況なんだけ」

蓮の一言にベルナットはがくりと肩を落とした。

そうでなくとも、今回の件でベルナットはすっかり意気消沈していた。

解放軍の前途を決める場面で、友人と思っていた人物に裏切られ、窮地に陥ってしまったのだから仕方のない話でもある。元々責任感が強い分、落ち込み方も激しかった。

(いかな、言いすぎたか)

蓮はこういう時に気の利いた慰めの言葉をかけるのが苦手だ。

元々、人生の大半が戦場暮らしで、人との付き合いが不器用な男である。

慰めの言葉をかけたつもりが、逆に相手を精神的に追い込んでしまふことなど珍しくなかった。

「ルシユア」

「な、なんだよ」

ふいに蓮から声をかけられ、ルシユアはどもりつつも返事をする。
「俺は少し外の空気を吸ってくる。後のことは頼んだぞ」

「えっ？ そんな丸投げ　って、サカキ殿!？」

慌てて呼びとめようとするルシユアの声を無視して、蓮は素早く室内から抜け出した。

元々、この街にルシユアを連れて来たのは、蓮自身に単独行動をする予定があったからだ。

なにかにつけ人の良すぎるベルナットを一人にしておくのは不安だが、慎重な性格のルシユアを付けておけば一応、釣り合いが取れる。

(まあ、半ば面倒事を押しつける形になったが仕方あるまい)
蓮はそう結論付けると、背後の扉を一瞥し、音もなくその場を離れた。

「あ、あの人は……！」

(まさか、こうなることを予測して私を連れてきたのか!?)

一方、困り果ててしまったのは部屋に残されたルシユアである。ベルナットとはそれなりに付き合いの長い彼女だが、彼がここまで落ち込んでいるのを見るのは久しぶりだった。

本来、ベルナット・クーガは窮地に陥っても決して諦めようとせず、とことんまで足掻くタイプの人間だ。

しかし、今のベルナットはテッセラリウスに残る五千人全ての命を預かってしまっている。これで責任を感じるなという方が無理な話だろう。

「……ベルナット」

恐る恐る声をかけたルシユアの前で、ベルナットはかぶりを振った。

「ごめん。落ち込んでいる場合じゃないってのは分かってるんだ。でも、僕は自分の力不足が情けないよ。結局、こうしてみんなに迷惑をかけることになって。きっと、サカキも呆れてしまったんだろうな」

「そんなこと言うなよ。サカキ殿は多分、何か用事があつたんだ。ひよつとしたら、ケットシーとの交渉を上手く進めるための材料でも探しに出たのかもしれない」

「そうか。僕がだらしなればかりに彼には苦勞ばかりかける」

はあ、と重々しいため息を漏らすベルナットを前に、ルシユアは

なにも言えなくなってしまうた。

ベルナットと立ち位置の近いルシユアには、彼の気持ちがなんとなく分かる。

デクリアでの戦いの時から、自分たちはサカキに助けられてばかりだ。テッセラリウスの解放だって、彼なしには成しえなかった。

別段、ルシユア自身はそれだなにか思うことはない。だが、解放軍のリーダーを務めているベルナットはそうもいかなかったのだらう。

ベルナットはじつと床の木目を見つめたまま、力ない声で言った。「ルシユア。正直なところ、僕は随分前からサカキに解放軍の全権を任せた方がいいんじゃないかと思っている」

「……別に今のままでいいじゃないか。なにか不都合でもあるのか？」

「不都合はなくとも、僕がづらいんだ。どう考えても今の僕はみんなの期待に応えられていない。そうでなくとも、組織の頭が無能な奴つてのは問題だろ？」

自嘲混じりの笑みを浮かべるベルナットを見て、ルシユアは急に激しい苛立ちを覚えた。

違う。と、心の中でもう一人の自分が叫ぶ。こんなのは私たちの望むベルナット・クーガではないと。

少なくともルシユアの知るベルナットは常に活力に満ち溢れ、一度や二度の失敗で挫けるような性格ではなかったはずだ。

「ベルナット！」

「……ごめん。ちょっと外で頭を冷やしてくるよ」

思わず椅子を蹴り倒してしまったルシユアの前で、ベルナットは逃げるようにベッドから立ち上がる。

だが、ルシユアはその体に飛びかかると、半ば無理矢理マットレスの上へと押し倒してしまった。

まっさらなシーツが波打ち、寝台の脚が二人分の重みを受けて軋み上げる。

ルシユアは金色の瞳を丸く見開いたベルナットの前で、すつと息を吸った。

「ふざけるな、ベルナット・クーガ！」

全身から絞り出した大喝が、びりびりと天井が震わせた。

「どうしてそんな情けないことを言うんだ！ 解放軍の旗頭はお前だろう！？ みんな、お前が先頭に立っているから後について来ているんだ！ 確かにサカキ殿は私たちに魔族と戦い、勝つための方法を教えてくれたかもしれない！ だがな、連中と戦うための意志をくれたのはベルナット、お前なんだ！ そのお前が……！」

頭に上った血が限界に達し、ルシユアは握った拳で駄々っ子のようにベルナットの胸板を打つ。

胸が一杯になり、喉がつかえ、言葉が外に出て行かない。

代わりにルシユアは顔を俯かせたまま、ベルナットの頬にぼたぼたと涙をこぼした。

「頼むよ、ベルナット……。そのお前がそんな情けないことを言わないでくれ。私たちはみんなお前に憧れて剣を取ったんだ。お前がアクリオンに来るまでは、誰もあの化け物どもに立ち向かおうだなんて勇氣を持てなかった。お前がいたから、私たちはあいつらと戦えたんだ……」

どん、と打ちつける拳にはもう力がこもっていない。

「辛いことも苦しいことも一杯あったけど、私たちはここまで来れたじゃないか。なのに、たかが一度や二度の失敗がなんだっていうんだよ。転んだのならまた立ち上がればいい。ただ、それだけの話だろう……？」

「……ルシユア」

ベルナットはマットレスから身を起こし、嗚咽を漏らすルシユアの頭をぎゅっと抱え込んだ。

とくん。間近から心臓の音が聞こえ、ルシユアは反射的に身を固

くする。

彼女は男性との肉体的な経験が皆無だ。それでも、ベルナットの胸板は『男』を感じさせるには十分だった。

「ごめん、ルシユア。泣かないでくれ。僕は君を泣かせたい訳じゃなかったんだ」

謝罪の言葉を口にしながら、ベルナットは抱きしめる腕に力を込める。

途端に、ルシユアは頭を上った血が急速に顔面へと集まるのを感じた。今になって自分の台詞が、妙に気恥しく思えたのだ。

「こ、こら、痛いって、ベルナット」

「あ、すまない」

弱々しい抵抗を受け、ベルナットは慌てて腕をほどいた。

そこで真正面から向き合う形になり、ルシユアは慌てて顔を俯ける。

(くそつ、サカキ殿が変なことを言うから妙に意識しちゃうよ……)

ルシユアはベルナットを尊敬し、憧れてはいるが、異性として見たことは 少なくとも、本人はないつもりだった。

だが、二人きりの状況。ベルナットの弱さとも言える部分と接したことによつて、ルシユアはなにか胸の内での一つの感情が膨れ上がるのを感じていた。

「この人の役に立ちたい」ではなく「この人を支えてあげたい」という想い。

恋慕の入り混じったそれは、胸につつかえたまま、なかなか消えてくれない。

「ねえ、ルシユア。少し、話を聞いてくれないか」

「は、話？」

ふいに真剣な顔をするベルナットに、ルシユアはどもりつつ答えた。

「この街で生まれ、剣闘士として生きた後、故郷を去ったベルナット・クーガという男の話だ」

くりぬかれた窓の外から、港町の喧騒が部屋の中まで微かに響いている。

だというのに、二人の回りは酷く静かだ。ルシユアは涙の滲んだ目でベルナットを見上げた。

「……聞かせてくれ。私ももっとお前のことを知りたい」

「分かった。といつても、大して面白い話じゃないんだけど」

「ぎしりとベッドを軋ませながら、ベルナットは天井の木目を見上げた。

長い話になるのだ。ルシユアはなんとなしにそう思った。

ベルナット・クーガ？

「元々、僕の父さんは僕と同じ剣闘士だったらしくてね」

静まり返った空間。かすかに響く潮のさざめきの中で、ベルナットはぼつぼつ昔語りを始める。

「それが商屋の下働きの娘と結婚して生まれたのが僕らしい。その後、父さんは闘技場で命を落とし、母さんも病に倒れて、そのまま亡くなってしまった。これが確か一歳くらいのことだったかな。人から伝え聞いたことだから、本当かどうか分からないんだ」

金色の瞳が過去の情景を思い返すかのように宙をさまよった。

「その後、みなしごになった僕はプリマスの顔役であるケットシーの元に引き取られた。僕の父親はそれなりに有名な剣闘士だったそうで、僕自身も剣闘士として生きることが望まれていたんだ。ケットシーの元には僕以外にも身寄りを亡くした孤児や、親に捨てられた子供たちが集められていてね。みんな剣闘士の養成所みたいないなところに預けられて、毎日剣の訓練をしていたんだよ」

例えば、混血故に人間社会からはじき出されたシャムなどもその中の一人だ。

魔族とのハーフは基本的に人間からも魔族からもそつばを向かれてしまう。彼の母親は幼いシャムをプリマスの裏路地に置き去りにしてしまっただの。

そこを奴隷商に拾われ、ケットシーがたわむれに買い取った。こういう例はプリマスではそう珍しくない。

「最初に闘技場に立ったのは確か十四の頃だったかな。そこから約五年間、僕は剣奴として働いていた」

「五年間って……そんなに長い間？」

「まあね。はじめの内は本当に嫌だったさ。闘技場の外じゃ多くの人々が自由を満喫しているってのに、僕ら剣闘士は殺し合いの毎日だ。とにかく、肉を切る感覚になれなくてね。あの頃の僕は、自分

が世界で一番不幸な人間だと思っていた」

「だから、憎んだよ。外の世界の全てを」ベルナットは押し殺した声で言った。

「特に闘技場の観客席から僕ら剣闘士を見下ろし、街中ででかい顔をしている魔族の連中が大嫌いだった。奴らに復讐するため、僕は戦って、戦って、戦って……多くの仲間を殺し、その屍を踏み越えて、プリマスを出た」

「だけどね」と自嘲気味に笑って、ベルナットは頭にかげられた月桂冠をきつく握りしめた。

「そうしていざ外の世界に出てみれば、目に映ったのはゴミのように扱われている人々の姿だ。テッセラリウスの鉱山で働かされている人がどういう生活をしているのか僕も知っていたけど、いざ目にするまではとても信じられなかった。いや、信じられなかったのかもしれない。あの闘技場の中が恵まれた環境だなんて、思いたくなかったんだ」

ぎゅと噛みしめられた奥歯が乾いた音を立てる。

「そして、僕はこの時、復讐の理由を失った。いわば、小さい頃から生きるための支えとしてきたものをなくしてしまっただ」

ぼつぽつと語られる独白を聞きながら、ルシユアは妙に納得していた。

(そうか、だからお前は……)

ベルナット・クーガは魔族に憎悪を抱き、復讐心のまま戦っている人々とは違う。

むしろ、ルシユアの眼にはベルナットが強い使命感に突き動かされた人間に見えた。

だからこそ、彼に率いられている人々も自らの行いを正義と信じることが出来るのだろう。

「ただ」

ベルナットは小さく息を漏らした後で、おもむろに天井を仰いだ。「復讐という目的を失っても。いや、失ったからこそ、僕は自分の

目指したものが間違いだとは思わなかった。この大陸じゃ人間は常に魔族の支配下だ。僕はその現状を変えたかった。プリマスやケントリオンではなく、北部森林地帯のアクリオンへ向かったのもそのためだ。今の世界に疑問を持ち、抗う手段を模索している人ならば、きつと僕に協力してくれると思った」

そこで突然、深い金色の瞳にじつと覗き込まれ、ルシユアはつい顔を赤くしてしまった。

「思い出したよ、最初の決意を。一度は自分で決めた道だ。それを他人任せにしようだなんて、甘い考えだったな」

「……ベルナット」

再び精悍さを取り戻した男の横顔に、ルシユアはしばし見とれる。それは確かに彼女が憧れたベルナット・クーガの姿だった。アクリオンの隠れ里で細々と生きていた人々が見た、希望の光だった。

（ああ、そうか。私はこの人が）

ふいに理解が及び、胸のつつかえがとれたような気がした。

私はこの人が欲しいのだ。どうしようもなく。自分にはない輝きを持つているが故に。

ルシユアは誘蛾灯に引き寄せられる蝶のような動きで手を伸ばすと、ベルナットの胸にべたりと手の平を置いた。

「……ルシユア？」

「ベルナット、お前は強いな」

「ど、どうしたんだよ急に」

「分からない」ルシユアは小さく首を振る。

ただルシユアは触れていたかったのだ。自分が恋い焦がれた男の体に。

手の平から伝わる体温が、心臓の鼓動が、ひどく心地良く感じる。ルシユアはぼんやりした思考のまま、ふと思った。

もっと触れ合えば気持ち良くなれるのではないだろうか

シーツの上に皺を作りながら、ルシユアは身を乗り出し、ベルナットの胸に体を寄せる。

すると、まるで大樹の幹に背を預けているかのような安心感があつた。

「……ルシユア。本当にどうしたのさ」

困り果てた様子で、しかし、振りほどくことも出来ず、ベルナツトは細い肩に手をやる。

ベルナツト自身は女性経験が皆無という訳ではないものの、異性との触れ合いにさほど慣れていない訳ではない。

頭の片隅では、ひよっとして慣れない土地のせいで風邪をひいてしまったのか などと、とんちんかんなことを考えていた。

「ごめん、ベルナツト。私は……」

ルシユアは潤んだ目で男の顔を見上げる。

とん、とん、と。

唐突に部屋の扉がノックされたのは、丁度その時のことだ。

「おい、お二人さん。ちよつといいかい？」

返答する間もなくドアが開き、頭に猫の耳を生やした男がひよいと姿を見せる。

突然の闖入者に、ルシユアとベルナツトはベッドで身を寄せ合った体勢のまま、揃って硬直してしまった。

一方、部屋を覗き込んだシャムはしばし沈黙した後、額にぺしやりと手をやり、「あちゃあ」と声を上げ、

「悪いな。お邪魔だったか」

などと言つて、にやけた笑みを浮かべて見せた。

ルシユアはそこでようやくやく意識を取り戻し、慌ててベルナツトの前から飛び退いた。

自分の顔が真っ赤に染まっているであろうことは、確かめるまでもなく理解していた。

「なっ、おっ、お前……！」

金魚のように口をぱくぱくさせているルシユアの隣で、ベルナツトはかつての友に慥然とした顔を向ける。

「シャム。また僕の前に姿を現すだなんて命知らずだな。一体なん

の用だよ」

「いや、ちょっと聞きたいことがあるんだ。ほら、お前の連れに変な格好したのがいただろ。あいつ、どこに行つたか知らない？」

「ひよつとして、サカキのことを言ってるのか？ 確か、外の空気を吸ってくるつて出たきりだったはずだけど」

「ああ、そうなの。参つたな。この旅籠の周りは鼠一匹逃げ出せないように塞いでたつてのに」

シヤムは困り果てた様子で、かりかりと猫耳の付け根を搔く。

そこでようやくベルナツトとルシユアも、なにかおかしなことが起きているらしいと気付いた。

既に蓮が出てから三十分近くが経っている。『少し外の空気を吸ってくる』にしては妙に帰りが遅い。

「シヤム、一体なにがあつたんだ？」

怪訝そうに尋ねるベルナツトの前で、シヤムは小さくため息を漏らした。

「あの人、いつの間にかこの旅籠の周囲から消えちまつたんだよ」

黒い仔猫亭？

丁度その頃、監視の目をすり抜けた蓮はプリマスの裏路地を通り、黒い仔猫亭と呼ばれる酒場にやって来ていた。

黒い仔猫亭は大衆用の酒場というより、シヨットバーという表現が似合う落ち着いた雰囲気の店だ。少なくとも、音程のはずれた舟唄を歌う親父や、酔っぱらって踊りだす陽気な若者はいない。

狭い店内には朽ちかけた木製テーブル以外にも流木を切り出して作られたカウンターが設置され、その中でエプロンドレスを身に纏った若い女性が暇そうにコップを磨いている。

店主らしき女性は短い黒髪から猫の耳が飛び出していた。恐らくはシャムと同じ魔族と人間のハーフなのだろう。

獣脂の蝋燭でオレンジ色に照らされた店内はやや寂れた雰囲気でカウンターに座る蓮以外の客はテーブル席にちらほら見えるだけであり、その客もどこか腹に一物を抱えてそんな顔をした者ばかりだった。

「聞いたか、テッセラリウスの話」

「ああ、なんでもアクリオンの解放軍が魔族の連中をぶっ倒したとか」

「しかも、リーダーはあのベルナット・クーガって話だろ」

「まさか闘技場の元チャンピオンが解放軍を率いてるとはなあ」

薄暗い酒場の中、小声で交わされる噂話を肴に、蓮はちびちびと青銅製の杯を傾ける。

蓮が飲んでいるのはアクリオンで飲んだぶどう酒よりも、ずっとアルコール分の高い『ワイン』と呼べる代物だ。

プリマスで販売されているこのワインは大半がルガル帝国からの輸入品である。荷揚げされたばかりの酒からは、ほのかに潮の香りがしていた。

「でも、最近ここいらを荒らしてる連中はなんなんだ？」

「流石に別物じゃないか？　一応あいつらも解放軍を名乗ってるけど」

「あーあ、クランの連中が動いてくれりゃいいんだが」

「どうかな。ケットシーの子飼いが、俺たち愚民のために働くとは思えないけどねえ」

酒場というのは情報収集に適した場所だ。蓮の聴力を持ってすれば、座ってるだけで人々の会話が自然と外から入って来る。

しかし、その中に彼の欲しい情報はなかった。そもそも、人の口から聞けるような代物でもないのだ。

やがて、夜が更けるにつれて客が一人減り、二人減り

新たな来客が黒い仔猫亭の扉が押し開けたのは、時刻が深夜にさしかかった頃のことだった。

「探したぜ、サカキとやら」

どすんとカウンターの丸椅子に腰を下ろしたのは、顔に疲労の色を滲ませた猫耳の男だ。

蓮は酒杯の中で揺れる深紅の液体を眺めながら、おもむろに口を開いた。

「遅かったな」

「まさか行きつけの店にいるなんて思わなかったんだよ。ランタンの足元暗しとはこのことだ」

「そうか。こちらとしては、分かりやすい場所で待っていたつもりだったんだが」

「今度からは伝言を頼むぜ。でないと、またプリマス中を探し回ることになる」

シヤムは疲れ果てた様子で肩を竦めた。

「で、こんなところでおれを待ってた理由はなんだい？　一緒に酒が飲みたかったって訳じゃないんだろ？」

「ああ。少しお前に聞きたいことがあってな」

「へえ？」　ぴくつと三角形に尖った猫耳が揺れる。

既に店内には彼ら以外の客の姿は見えない。残るは蓮とシヤム、

そしてカウンター内の店主だけだ。

その店主も二人の話を耳にしたためか、カップを磨いていた手を止め、

「シャム、私は外していた方がいいの？」

「いや、残っててくれ。それよりコロニア産のエールが欲しいな。確かいいのが入ってたたる？」

「相変わらず鼻が利くのね。猫のくせに」

店主はどこか楽しげに呟き、ビアマグ片手に店の奥へと消えてしまふ。

蓮はその後ろ姿をカウンター越しにぼんやり見送った。

「彼女は？」

「おれと同じケットシーさんの部下だ。この店も黒猫商会在オーナーなんだよ」

「案外、手広く商売をしてるんだな」

「まあね。あの人はこの街のドンみたいなものだから。商会の息のかかった店は腐るほどある」

シャムは運ばれてきたビアマグを受け取ると、褐色の湖面から立ち昇る豊潤な匂いを胸一杯に吸い込んだ。

ミストリア地方の都市コロニア産のエールはコクの深い味わいで有名だ。ホップの香りを楽しんだシャムは一息に酒杯を煽った。

やや細めの喉がぐびりと音を鳴らし、半分ほど中身の空けられたビアマグがカウンターの上で重い音を立てる。

「ふは、うめえ！ 蘇る！」

「店内では静かにしなさい」

じろりと店主に睨まれ、慌てて身を小さくするシャム。

「で、サカキ。おれに聞きたいことってのはなんだい？」

「我々の交戦している相手。錬鋼の一族の動向について教えて欲しい」

「はあ？ おれは密偵じゃないんだぜ。そんなこと知る訳ないだろ」
シャムは眉を寄せた。一体なにを言っているんだ、という表情だ。

が、蓮は相変わらずばんやりと酒杯の中身を眺めたまま口を開くと、

「商売というのは戦争に似ている。特に情報が重視される点で、なにが言いたい？」

「『大王猫の一族』の族長ケットシーは『クラン』と呼ばれる集団を飼っているらしいな」

「……聞いたこともないんだが」

「誤魔化さずともいい。戦場で重要なことの一つは情報だ。それは商いの戦とて同じだろう。俺はこのプリマスの港街を回ってる途中で、いくつか気になる噂話を耳にした。その中の一つが、ケットシー麾下の傭兵部隊だ」

傭兵といってもこの場合、戦場で槍働きをする者たちではない。

例えば中世の日本における忍者のような存在。情報の収集と操作を主な任務とした集団だ。

恐らく、賭場で蓮たちを包囲した面々も、大半がクランの構成員だったのだろう。

蓮は彼らの指揮をしていたシヤムを、組織の中でもある程度の立場にいる人間だと踏んでいた。

「あー、うん。そうか。おれが街中をうろろろしてる間、あんたもただ酒を飲んでるだけじゃなかったってことだな」

シヤムは困ったようにかりかりと耳の裏を引っ掻き、カウンター越しに佇む女店主を仰いだ。

「サラシナ、こういう場合はどうすればいいと思う？」

「別に教えてもいいんじゃない？ 私たちが困る訳じゃないし」

サラシナと呼ばれた女性は投げやりに答える。

この黒い仔猫亭も、元はと言えば商会に属するクランの拠点である。彼女もまた、組織の一員なのだ。

「けど、『クラン』は別にあなだか思っているようなスパイ集団じゃないわよ。諜報面での活動と言ったら、せいぜい港や街中で交わされている会話を選別して、上に報告しているだけに過ぎないわ」

「後はそうだな。裏街でこそ阿片を売ってる売人を取り締まったりとか、商會に属してない店からシヨバ代を回収したりとか、賭場の借金を払わない奴らのキリトリに行ったりとか……」

「なるほど、任侠組織の役割も兼ねている訳か」

「にんきよう？」

「ああ、こちらの話だ」小首を傾げる二人に蓮は言った。

「とりあえず、俺としては敵軍の情報を少しでも知りたい。別に確証のない情報だろうが、酔っ払いの妄言だろうが構わん」

「大分、切羽詰まってるね。まあ、おれもあのデカブツどもが吠え面かくのはいいい気分なんだが……」

そこでシャムはちらりとカウンター越しの店主に視線をやった。アイコンタクトを受けたサラシナはすぐさま外に出ると、しばし時間を置いて、店内に戻って来る。

「看板をかけてきたわ。今日はあなたたちが最後の客よ」

「ありがたい。これでゆっくり話が出来るってもんだ」

シャムは椅子を軋ませ、蓮に向き合った。

月夜の下。丸く開いた瞳孔を、オレンジ色に燃える蠟燭の火が照らしている。

「まだ自己紹介をしてなかったな。俺は黒猫商會所属、傭兵部隊『克蘭』第三隊長のシャム・シールだ」

「解放軍参謀、榊蓮。お前の友人、ベルナット・クーガの補佐をしている」

「友人？ あいつを裏切ったおれにそう呼ばれる資格があるとしても？」

どこか拗ねたような物言いをするシャムだが、蓮はなにも答えず、酒杯を傾げるばかりだ。

丁度そこで酒が切れたのか、蓮は空の杯をカウンターに乗せた。

「店主、次はこいつの飲んでいるコロニア産のビールとやらが欲しい」

「……あなた、見た目によらず『のんべえ』なのね。横で他人が美

味しそくに杯を傾けてたら、自分も我慢できなくなるタイプだわ」
「そうか？ 人として当然の心理だと思うが」

口元をつり上げる蓮に、サラシナは呆れた様子でビアマグを突き出す。

受け取った蓮は一口、二口、褐色の液体に口をつけ、小さく吐息を漏らした。

きつい酸味と唾内から鼻へと抜け出るような強い酒精。胃の奥がかつと熱くなる感覚が、なんとも心地よい。

「なるほど、これは悪くない。着飾っていない自然の味がする。いい酒だ」

「へえ、あんた結構いける口なのか。堅物そうなのに意外だな」

「俺が思うに、酒の味が分かる人間に悪人はいない」

「自分が善人だって言いたいのか？」

「いや、お前が理由もなく友人を裏切るような人間ではない、と言いたいだけだ」

シヤムはその言葉に、ビアマグを傾けかけていた手をぴたりと止める。

一瞬、反射的に唇が開き、しかし、放たれかけた台詞は無理矢理飲みこまれてしまう。

代わりに、シヤムは自嘲するかのような笑みを返した。

「おれの事情はどうでもいいさ。それより、あんたは錬鋼の一族の情報が欲しいんだろ？」

「ああ。特に気にかかっているのは、オプティアの情勢と錬鋼の一族主力の動向についてだ」

「ふーん、その程度ならこっちの耳にも入ってるけど……」シヤムは値踏みするかのように蓮を見た。

「ここはプリマス。商人の町だ。例え、米粒一つでもタダで渡すことは出来ねえな」

「金か？ 言っておくが銀貨の持ち合わせはないぞ」

「おれも金はいらねえよ。だから、こっちの情報を渡す代わりに解

放軍の現状を教える。後でケットシーさんに報告させて貰う」

「仕事熱心だな。しかし、解放軍のなにが聞きたい？」

「四軍将のレオパルトを捕虜にしたってのは本当なのか？」
身を乗り出すシャムの前で、蓮はほんの微かに眉を寄せた。

テッセラリウスで解放軍とレオパルト率いる討伐隊が交戦したことは、このプリマスにも広く知れ渡っている。

だが、レオパルトを捕虜にしたという情報はほとんどテッセラリウスの外部に漏れていないはずだった。

(やはり、解放軍の内部に間諜を送り込んだのはこいつらか)

サラシナはクランのことをスパイ集団ではないといったが、蓮はそんな台詞、はなから信じていなかった。

相手は情報という糧を貪り食らう怪物だ。一筋縄で行かないことは百も承知である。

「本当だ」

蓮は一拍の間を置いて答えた。

「今は牢屋に入ってるんだが、これが凄まじく強情な性格だな。こちらの欲しい情報をまるで話す様子がない。おまけに人間と違って表情が分からんから誘導尋問も難しいし、拷問しようにも針も鞭も効かんと来ている」

「要するにお手上げ状態ってことか。まあ、軍将の中でも筆頭のエイブラムスと北軍大将のレオパルトは大王に対して特に強い忠誠を誓ってるらしいしな。多分、自軍の情報を吐くくらいなら舌を噛み切って死ぬんじゃないか？」

「大丈夫だ。一度自殺しかけた事があったから、今は猿轡を噛ませている」

冗談にしては生々しい台詞に、シャムは頬を引きつらせた。

実際、蓮もレオパルトを捕虜にしたはいいものの、その扱いには困り果てていた。

隙あらば自害しようとする上に、水も食料も摂ろうとしない。いくら人間より遥かに体力のある種族とはいえ、あれでは遠からず衰

弱死してしまうだろう。

「そうだな。後、確認したいことと言えば」

「待て、今度はこちらから尋ねる番だ」続けて質問しようとするシヤムを蓮はさえぎった。

「先にオプティアの情勢を教えて欲しい。あそこは今、統監であるレオパルトが不在のはず。こちらがテッセラリウスを陥落させたところであつては平静でいられまい」

テッセラリウスからオプティアまでは人の足で約二日ほどの距離だ。

その上、オプティア側は三穂槍平原とテッセラリウスの戦いで、千の兵、五の族長、一人の軍将を失っている。

彼らからしてみれば、喉元に仲間の血で濡れたナイフを突き付けられているような気分だろう。

「……確かに今、オプティアは混乱してる」

ビアマグの中で揺れる気泡に目を凝らしたまま、シヤムは慎重に言葉を選んでい様子だった。

「錬鋼の一族の統治は力による支配だ。軍事の象徴である四軍將が討たれば、屋台骨が揺れる。なんでも旅商人から聞いた話によれば、オプティアじゃ既に反乱が起きかけてるらしい」

「ほう。で、魔族側の対応は？」

「オプティアに駐留している軍は右往左往してるだけで使い物にならないんだとか。その代わり、トリブヌットからルクレールが出たそうだ」

「ルクレール……レオパルトと同じ軍將の一人か」

『人形の街』トリブヌット統監ルクレール。大陸中央を管轄する、四軍將の一角である。

事前にライムから聞いた話によれば、ルクレールは猛將で知られるレオパルトと違い、軍師肌の武將らしい。

今まで目立った戦果を上げていないため一族の中では末席に置かれているものの、効率的に部隊を運用する能力に関して言えば、四

軍将でもトップクラスの實力を持っているはずだ。

（厄介なのが出てきたな）

正直なところ、蓮は軍将の一人が動くまでまだ余裕があると思っ
ていた。

レギオニール地方の各都市を支配する四軍将は、有事に際し独断
で駐留軍を動かす権限を持つ。

とはいえ、テッセラリウスが落ちてからまだ一週間も経っていな
い。恐らく、ルクレールは早馬でテッセラリウス陥落の報を聞いた
瞬間、オプティアで反乱が起きることを予測し、すぐさま鎮圧の兵
を起こしたのだろう。

「シヤム、トリブヌットを発った部隊の規模は？」

「二千程度って話だぜ。ただ、オプティアに着けば現地の駐留軍と
合流するだろうから……」

「合計三千か。少々面倒な数字だな」

現在、解放軍が動員出来る兵数は多く見積もっても三千名程度。
つまりは敵と同数だ。

これはテッセラリウスで働かされていた鉱山奴隷の大半が、労役・
兵役に適した成人男子であつたためだが、この三千という数字の中
で実際に戦場を経験した者は、全体の十分の一にも満たない。

対する相手は人外の魔族だ。例えば数値の上では同等の兵力でも、
素人に槍を持たせただけの民兵ではとても太刀打ちできないだろう。
（それに、我々がどれだけ急いでもルクレールのオプティア入りを
阻害するのは不可能だ。俺たちがこの情報と共にテッセラリウスに
戻り、軍備を整え、オプティアを目指すとなれば最低でも五日はか
かる）

その間、ルクレールは悠々とオプティアへ到達し、現地で軍を整
えるはずだ。

そこにろくな訓練も積んでいない兵を突っ込ませるのは、自殺行
為以外のなにものでもない。

「さて、それじゃあ今度はこっちが質問する番だな」

蓮の悩みを他所に、シヤムは褐色のエールをぐびりと飲み下し、
酒臭い吐息を漏らした。

黒い仔猫亭？

「先日、解放軍とケントリオンの間で同盟が結ばれたって情報がプリマスに流れてきた。これは本当の話なのか？」

「いや、間違いだ。ケントリオン側から使者が来たのは確かだが、同盟に関してはこちらから蹴った」

「け、蹴った？ どうしてだよ？」

「一々説明するのは面倒なんだが」

蓮は先日、テッセラリウスの会議室で交わされた会話を余さずシヤムに聞かせてやった。

ケントリオンの意図、目的。国力の差がある以上、対等な同盟にならないであろうこと。

そこまで聞いてようやく理解に及びついたので、シヤムは納得したように頷き、

「なるほどね。えらい人は色々考えてるってことか」

「単純に仲間が増えればそれでいいという訳でもないからな」

「ただ」と蓮は言葉を続け、

「いずれケントリオンとは手を結ぶ時が来るだろう。現時点でも最高学士府長官のライムがこちらの軍に加わっている。オプティアを制圧し、我々の勢力が伸長すれば、ケントリオン側も対等の立場として同盟を結ばざるをえないはずだ」

「じゃ、今んところは友達以上恋人以下。いずれは結婚を前提にお付き合いつて感じかな？」

「例え方は妙だが、そんなところだ」

蓮は生温いエールで喉を潤した。

実際のところ、解放軍とケントリオンはそこまで緊密な関係を結んでいる訳ではない。

ライムが解放軍に参加したのも彼女の独断によるもので、ケントリオンの首脳部は関与していないのだ。

蓮がわざわざ勘違いさせるような言い方をしたのは、シャムの向こうに今回の取引相手であるケットシーの姿を見据えているからに他ならなかった。

ケントリオンとの関係を強調しておけば、いずれ解放軍の利となるだろう。

「では、次はこちらの質問に答える番だ」

「鍊鋼の一族主力の動向だっけか？ それって要するに」

「今のところ解放軍が相手をしているのは各都市の駐留軍。いわば防御のために編成された軍であって、攻撃のための軍ではない。現在、大王ベルヴェルク・ウオーデン率いる一族の主力が、どこでどう動いているかを知りたいんだ」

「それを説明すると、また長い話になるんだが……サカキ、あんた『大陸四帝』^{テトラルキア} ってのは知ってるよな？」

「ああ」と蓮は小さく頷いた。

現在、この大陸は四つの地方に分けられ、それぞれ四人の魔王によつて分割統治されている。

『大陸四帝』^{テトラルキア} というのは元々その四頭体制に対する呼称だったが、やがては四人の魔王そのものを指すようになっていた。

その中の一人が、レギオニール地方の支配者。『鍊鋼の一族』が大王、『軍神』ベルヴェルク。

そして、もう一人はミストリア地方の支配者。『千枚翅の一族』^{せんまいばね} が女王、『飛蝗帝』^{ひこうてい} エルニシアだ。

エルニシアは大陸西部にはびこる蟲たちの王であり、残虐非道な性格と人肉を好む野蛮な嗜好で広く知られていた。

「一応、大陸四帝は四頭体制が出来た百年前から『相互領土不可侵』の盟約を結んでいたんだ。この盟約が崩れたのは、五年前にベルヴェルクがケントリオン攻めに取りかかった直後のことだな。一族の主力が東に向かったのをいいことに、エルニシアは東の国境から一気にレガティアへ攻め込んだんだよ」

シャムはビアマグを左の手から右の手へ滑らせる。

「おまけにこの時、ケントリオンに向かった部隊は冬の女王の策略で半壊状態になっていた。まあ、肝心の女王は戦の途中でベルヴェルクに殺されたんだけど……」

「殺された？」

「そうだよ。ちなみに殺されたのは三代目の女王だ。このせいでケントリオンの連中は相当、鍊鋼の一族を恨んでいるらしい。解放軍に同盟を申し込んだのも、私怨を晴らす機会だと思ったからじゃないかな」

なるほど、と蓮は内心で納得をする。

以前ライムは言っていた。自分は個人的に鍊鋼の一族に対して恨みがある、と。

その理由は恐らく、自身の主がベルヴェルクの手にかかって殺されたためなのだ。

「すると今の女王は……」

「四代目だ。ただ、中身は二代目のばーさんだけだね。娘の死後、彼女の母親が再び女王の座に就いたんだよ」

「三代目に娘はいなかったのか？」

「いたけどまだ生まれただけで、今ようやく五、六歳つてところじゃないかな？ 氷雪姫の一族は二十半ばで成人になるから、この娘が『冬の女王』を襲名するのは二十年後くらいになると思うぜ」

「話が逸れたな」と、シャムは脱線しかけた話題を本筋に戻した。「戦端が開かれた当初、レガティアへ殺到したエルニシアの軍は十万に上つたらしい。対する一族側は駐留軍と各地に散らばる兵をレガティアに集めたものの、合わせて五千にも満たない。つまり絶望的な兵力差がある上、増援もすぐには望めないってことだ。正直なところ、おれもレガティアの陥落は免れないと思ったね」

「……だが、レガティアは落ちなかった」

淡々と事実を口にする蓮に、シャムは「ああ」と頷き、ぐいと酒杯を傾けた。

この『東西戦争』と呼ばれる戦乱の際、前線で部隊の指揮をして

いたのは現四軍将筆頭のエイブラムスだ。

そもそもレガティアは『技師の街』と呼ばれており、器械道具特にバリスタやチャリオットのような軍事兵器。更にはカタパルトやマンゴネル、トレビシュットを始めとした投石機を多く製造している都市であった。

エイブラムスはこれら投擲兵器から大量の可燃物を発射し、更に燃え盛る藁の塊を投げ込んで、レガティアを包囲した敵部隊をことごとく焼殺したのである。

結果、エルニシア率いる軍勢は敵の本拠であるレガティアを前に二の足を踏んでしまった。

そこに襲いかかったのは、ケントリオンからとんぼ返りしてきたベルヴェルグ率いる鍊鋼の一族の本隊だ。

彼らは瞬く間にレガティアに群がる敵勢を駆逐すると、西の国境まで追い散らしてしまったのだった。

「んで、この戦い以降、ベルヴェルクとエルニシアは国境沿いで小競り合いを繰り返してって訳だ。だから、ベルヴェルク率いる一族の主力は西の果てから離れることが出来ないし、三年前に中央で大きな反乱が起きた時も、鎮圧したのはエイブラムスを始めとした四軍将の面々だった。ベルヴェルク自身はここ数年、レガティアから東に顔を見せてないんじゃないかな」

「なるほど。しかし、両者が再び休戦条約を結ぶような気配はないのか？」

「ないね。あいつらの仲の悪さは犬と猿のそれより酷いんだ。休戦なんて絶対にありえない……いや、ありえないはずだった、というべきか」

齒切れの悪い回答に、蓮は眉を寄せる。

「どついうことだ。お前の言い方はまるで、連中が休戦への道を辿りつつある、と言っているように思えるが」

「その認識は間違っていない。今までベルヴェルクとエルニシアの間には深い断崖が渡っていた。けど、そこに橋をかけようとしている奴

らがいるんだ」

「和平介入だと。一体、どこのどいつがそんな真似を
蓮はしばし黙考する。」

そもそも、二人の強大な魔王を相手取り、和平を結ばせるなどという荒技を扱える人物はそう多くない。

いや、もつと言えば大陸広しといえど、彼らと正面から渡り合えるのはただ一人だけだろう。

すなわち、彼らと同じ大陸四帝の一人。ルガル帝国の頂点に立つ『諸王の王』。

「……バシレウス・バシレオン。大陸東部を支配する四帝の一角か」

断定口調で放たれた台詞に、シャムは「ご明察」と笑みを浮かべて見せた。

「どうもエルニシアの側がいつまで経っても矛先を収めないベルヴェルクに辟易したらしく、バシレウスに助けてくれと泣きついたらしい。まあ、理由はそれだけでもないみたいなんだが……ともかくバシレウスは両者の調停役として、このレギオニール地方に自らの名代を送り込んだ。軍将筆頭のエイブラムスがわざわざこの街に来てるのも、海路を渡ってやって来た調停役を出迎えるためなんだよ」

四帝同士の争いを治めようとするならば、彼らと同列の者が出張るしかない。

となると、候補に上がるのは四帝の内の残り二名 東のルガル帝国を治めるバシレウス。もしくは北の大荒原に住まう獣たちの王だ。

この内、大荒原の『獣王』は大陸四帝の一人に数えられているものの、そもそも実在するのもかも不確かで、伝説でしか名の語られていないような曖昧な存在である。

大陸中に名の知られた大帝国ルガル。その支配者バシレウスに比べると、表舞台に出てくる可能性は極めて低かった。

(しかし、まずいことになったな……)

もし和平が結ばれ、西の果てからベルヴェルクが引き上げた場合、人間たちに奪われたテッセリウスは真っ先に彼らの標的となるはずだ。

おまけに兵糧に悩まされている解放軍とは違って、鍊鋼の一族は食事の心配をする必要が薄い。

彼らはいざとなれば各地で人間を徴収し、その血肉を嚼むことで生き永らえることが出来るのだから。

「だが、何故エルニシアは急に和平を？ 『理由はそれだけでもない』という言葉となにか関係しているのか？」

「まあね。これは多分、あんたやベルナットに対しても朗報だ。今、ミストリアではこのレギオニール地方と全く同じことが起きている」「なんだと？」

尋ね返す蓮の前で、シャムは暇を持て余していたサラシナにちらりと視線をやった。

「サラシナ、外の話は店にいる君の方が詳しいだろ。サカキに説明してやってくれ」

「分かったわ」

「あとなんかつまみくれないか。チーズがいいな」

「はいはい」

「店主、俺にもなにか食べる物を。干し肉があればそれで」

「……」

サラシナは無言でスライスされたブリーチーズと馬肉のジャーキーに乗せた皿を渡した。

酒飲み二人がそれを仲良くつまんでいる姿を眺めつつ、サラシナはカウンター越しに蓮へと声をかける。

「サカキさん、今ミストリアで『革命軍』って呼ばれてる人たちが魔族と戦っているのは知ってる？」

「いや、初耳だ」蓮は犬歯で硬いジャーキーをむしりながら答えた。

「だが、ミストリア地方でも人間の蜂起があったのか。人づてにエルニシアはベルヴェルクよりも人間の扱いが酷いと聞いたことはあ

るが」

「本当よ。そもそも、大陸の南西部にはまだ深い密林が多く残っていて、そこに暮らしている人たちの多くはここよりずっと原始的な生活を送っているの。そして、エルニシアは彼らを単なる動物として扱っていないわ。ミストリアの人々はある時には面白半分に狩り立てられ、またある時にはこのプリマスへ奴隷として送られてくるのよ」

「そういえば、ミストリア地方の主要輸出品は奴隷と食糧だったな」「ええ。単にあの国には他のものがないからなんだけけどね」

サラシナはどこか苦々しげな様子で、そんな台詞を口にした。

蓮自身、プリマスの街を回っていた時に、檻に入れられた少女や鎖に繋がれた若者の姿をちらほら見かけていた。

一説によれば、プリマスの港には日に百以上の人間が商品として流れ込んでくるという。

そのほとんどはミストリア地方出身で、彼らはオプティアやテッセラリウスへ送られた後、死ぬまで奴隷として働かされるのだ。

「サラシナ、その革命軍とやらが決起したのはいつ頃の話だ？」

「ええと、こつちに情報が流れてきた月日を逆算すると……多分、一節（十五日）くらい前の話だと思っわ」

「なに？ つい最近じゃないか」

「そうね。でも、革命軍を率いているリーダーはこの短期間で次々とミストリア地方の諸都市を落としているそうよ。正直、エルニシアが焦って和平を結ぼうとするのも無理はないわ」

「異常だな。ミストリア地方を支配する魔族とて、一筋縄ではいかん連中だろうに。そのリーダーとやら、どんな人物なんだ」

「正確な名前は知らないんだけど……」

サラシナはそう付け加えた後で言った。

「その人、『雷神』^{バルカ}って名で呼ばれているらしいわ」

瞬間、蓮の中であらゆる疑問と違和感が弾けるように霧散した。代わりに胸の内を覆ったのは、溢れんばかりの高揚だ。

四肢に満ちる興奮のまま、蓮は椅子を蹴って立ち上がる。
ぎよつとした表情を浮かべるシャムとサラシナの眼前で、蓮は小
刻みに肩を震わせた。

「そうか。そうか。そうか……」

つり上がった口元には、抑え切れぬ笑みが浮かんでいた。

「来たか、ハンニバル」

ミストリアの革命軍

その日、百年以上に渡る大戦のはじまりの日。

「八紘一宇」をスローガンとして掲げる『帝国』は、ヨーロッパを中心とする世界の大半を支配していた欧州連邦共和国に対し、ロシア方面・西アジア方面という二つのルートから、大規模な侵攻を開始した。

一方、共和国側は帝国に対し十分な警戒をしていたものの、宣戦布告なしで行われた奇襲により緒戦のほとんどを大敗し、特に西アジア方面は一気に北アフリカ、エジプト付近まで攻め落とされるという体たらくであった。

別段、両国の国力がかけ離れていた訳ではない。むしろ、単純な資源と人員の総量では共和国側が勝っていただろう。

共和国側は本国付近まで攻め込まれたものの、実際には伸びきった相手の補給路を叩き、戦線を押し返すことはそう難しくないはずだった。

だが、この時点で既に民衆の心は折れかけていた。戦争によって次々と人命が失われ、地球の環境が破壊されていくことに、嫌気がさしてしまったのだ。

折しも、開戦から一ヶ月も経たぬ内に帝国側からは停戦が打診されていた。言うまでもなく、その内容は停戦とは名ばかりの降伏勧告である。

しかし、国内の世論はそれを受け入れるのもやむなし、という方向に転がりつつあった。

なにか奇跡のような代物が 救世主となるような人物が必要だった。

神の奇跡を待つ余裕はない。それならば人の手で、英雄と呼べる

者を作り上げる。

共和国議会がその決断を下したのは、エジプト・カイロに築かれていた要塞が当時、帝国陸軍の大佐であった榊蓮の手によって陥落した翌日のことだった。

「人生を楽しく生きるコツは」

夜風に吹かれながら、男はブナの幹を削りだして作られた木杯を夜の月に掲げた。

眼下に広がるのは青々と生い茂り、収穫の時期を今か今かと待っている麦畑だ。

男は土壌の中から突き出た岩塊に腰かけ、酸味の強いエールをのんびりと傾けていた。

「いい酒を最高のつまみと共に楽しむことだ」

男は言った。眼前の光景を眺めながら。

麦畑の中に転がされているのは、どす黒い血をこぼす虫たち。成人男性の背丈ほどの大きさをした巨大蜘蛛だ。

その凄惨な有様を睥睨する男は、名工の手によって彫り上げられた彫像そのままの姿をしている。

僅かにカールした蜂蜜色の髪。淡い象牙色の肌。肉感的ながら均整のとれた肢体。

ただ、青く輝く紺碧の瞳と、肩から無造作に羽織った灰色の軍服が、男を偶像と異なる、この世の生物であることを証明していた。

共和国陸軍少将。『東征將軍』ハンニバル・バルカ。

それが彼の名。かつての世界から与えられていた称号だ。

「そして、この世にはどんな不味い酒でも、たちまち素晴らしい美酒へと変えてくれるつまみがある」

一筋、刻まれた口元から漏れる声には、舞台役者のようなハリがある。

軍服の肩に取り付けられた飾緒を弄びながら、ハンニバルは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「さて、そいつは一体……」

「『勝利』ですわね」

冷えた夜風に乗って、ハンニバルの横手から少女の声が響く。

台詞を遮られたハンニバルはしばし沈黙した後、ため息交じりに額を押さえた。

「おい、ジャンヌ。人が格好つけてんだから最後まで言わせるよ」

「申し訳ありません」

首をめぐらせるハンニバルに、少女は機械染みた動作でぺこりと頭を下げた。

ぱりつとした軍服の似合うスレンダーな体躯。風が吹く度に肩まで伸びた栗毛色の髪が、やわやわと震えている。整った目鼻立ちは、絶世の美少女と言っても過言ではないだろう。

ただ、その瞳は青く凍っており、感情らしきものはほとんど伺えない。

まるで氷で出来た薔薇だ。あるいは単なる人形か。

（全く、この無愛想がああ救国の聖女ジャンヌ・ダルクをモデルとして作られた人間だというのだからな。世の中はなにか間違ってるぜ）

鉄面皮の少女を前に、ハンニバルは人知れず嘆息した。

もつとも、彼自身。そう文句を言える立場でもない。

何故なら彼もまた、ジャンヌと同じく科学を母として、禁忌を父として産み落とされた『人造偉人』レジェンドモデルの一人

カルタゴの偉大な名將『ハンニバル・バルカ』の再来と呼ばれた男なのだから。

大戦初期の折、窮地に追いやられた共和国の内部で一つの計画が持ち上がった。

『L計画』と呼ばれるそれは、かつて歴史上に存在した偉人を遣伝子調整によってモデリングし、再びこの世に送り出すという計画だった。

いわば、人間の手で奇跡を、英雄を作り上げようと試みたのである。

もつとも、共和国議会の狙いはこの伝説の復興により、戦場における兵の士気を高め、国民の戦意を高揚させることであり、実際に作成されたレジエンドモデルが前線で指揮を執ることまでは想定されていなかった。

このL計画は一部では失敗し、一部では成功を収めることになる。

レジエンドモデルにおける失敗点。それは彼らが人間としての感情を持っていたことだ。

彼らの大半は再誕した英雄という自らの立場に困惑し、中には自身の存在意義に対して激しい葛藤を覚える者までいた。

そのためか、初期につくられた五人のモデルの内、首脳部の思惑通りの行動を取った者は一人としておらず、めいめい指揮官としての権限を与えられたのをいいことに、好き勝手兵を率いて戦場の各地で暴れ回り始めたのである。

特に東ヨーロッパ戦線へ向かったハンニバル・バルカは機甲師団による包囲殲滅戦で瞬く間に敵陣を攻略し、東征将軍と讃えられた。確実な勝利が積み重なるに連れ、国民の頭から降伏という言葉は消え去り、継戦の機運が高まったのだから、結果的に議会の狙いは成功したともいえる。

だが、それは百年以上に渡る戦争における、ほんの幕開けに過ぎ

なかった。

「あの世界では、こうして月を見ながら酒を飲むなんて夢のまた夢だったのにな。なんの因果か、こんな化け物だらけの大陸まで来てしまった」

誰に言うでもなく呟き、ハンニバルはぐびりと褐色の液体を喉に流し込む。

ミストリア地方の都市、草原の都コロニアで生産されたエールは強い風味と、胃の焼けるような酒精を持つ逸品だ。

ハンニバルが麦畑の広がるこの街に襲撃をかけ、支配者だった『闇蜘蛛の一族』の族長を殺害し、この美酒を掘り出したのはつい先ほどのこと。

奇しくもほぼ同じ時に、彼の宿敵であった榊蓮が同じ酒を堪能していたのだが、ハンニバル自身はそんな事実を知るはずもない。

「……一体、私たちの身になにが起きたんでしょうか」

酒をおおるハンニバルの傍ら、彼と共にこの異世界へ流れ着いたジャンヌが、玉を転がすような声に僅かな不安の色を滲ませる。

「あの時、サカキ司令がカイロ要塞と運命を共にした時、私たちは確かに一度死んだはずなのです。正直、私にはいま目の前にある光景が幻のように思えます」

「おれもだ。だが、少なくともここは天国ではないな。こんなおぞましいエデンの園があつてたまるか」

ハンニバルはぺっとエールの中に混じっていた大麦の粒を吐き捨てて。

ハンニバル、ジャンヌ、そしてその他数名の共和国に所属していた軍人は、あの『黒い核』の爆発に巻き込まれた後、この大陸へと流れ着いていた。

そこで彼らが遭遇したのは、巨大な虫の姿をした魔族と呼ばれる

化け物だ。

国土の大半を密林に覆われたミストリア地方では、土着の人間が原始的な暮らしを送っており、主に狩猟と採集、畜産などで生計を立てている。

ただ、彼らの中に王と呼べるような存在はいない。

この地で彼らを支配しているのは、おびただしい数の虫たちによる千の氏族

その頂点に立つのが『千枚翅の一族』が女王。テトラルキア大陸四帝の一角。
『飛蝗帝』エルニシアである。

「しかし、少将。本当にこれで良かったのですか？」

ふいにジャンヌは押し殺した声で、ハンニバルへと尋ねかけた。

「我々は単なる漂流者に過ぎません。それが革命軍などと名乗って戦乱を巻き起こすのは、この世界の理を捻じ曲げることに繋がるのでは？」

「世界の理？ そいつはなんだ？ 人ひとりの命より重いのか？」

「分かりません。どちらも天秤にかけられませんから」

「……まあ、確かにな」

どこか間の抜けた受け答えをする副官の前で、ハンニバルはがりがり頭を引つ掻いた。

「この世界はおれたちのいた世界と違って、人間が絶対的な上位者って訳じゃあない。それでも、魔族が上、人間が下、という形でそれなりに上手く回ってきたんだろう。この世界とおれたちの世界は、よく似ているようで根本的な部分が違う」

「そこまで分かっているのならば、何故その調和を崩すような真似を？ 弱者を食いものにすることなど、今まで人間が散々やってきたことではないですか」

「分かっている。そんなことはおれとて分かっているさ。だがな、ジャンヌ。おれたちは作られた偽物かもしれんが、それでも『英雄』だ。目の前で窮地に陥っている民がいるというのに、それを救わん理由がどこにある」

「所詮は押しつけられた役割です。少将がそれに振り回される必要はないのでは？」

「押しつけられた役割？ 結構じゃないか。なにせおれはな、今の自分をそれなりに気に入っているんだ」

「……でしたら、私に言うことはなにもありません」ジャンヌは無表情のまま引き下がった。

ハンニバルが人々を率い、革命軍として戦うようになったのは半月ほど前の話だ。

彼は最初に現地の住民たちを取り纏めると、即席の軍を編成し、遊撃隊によるゲリラで敵陣を攪乱しつつ、ミストリア地方西部の諸都市を次々と陥落させていた。

無論、これはハンニバル自身が超人的な兵士で、現代の戦略を操ることが出来たからこそその成果である。

その上、彼の手元には地球から流れ着いた軍事兵器が、少数ではあるものの存在していた。

（とはいえ、出来れば『ビスマルク』まで持ち出したくはないが……）

ハンニバルは自らが所有する兵器の中でも一際、凶悪な代物を脳裏に思い浮かべる。

もし『ビスマルク』ほどの兵器が戦場で猛威を奮えば、大陸全土の魔族を殲滅することも容易いだろう。

だが、過ぎたる力が人々を惑わせ、己の身を滅ぼし、最後には自らの星すら食いつくしてしまうことを、大戦初期からの軍人である彼はよく知っていた。

それにハンニバルは他者から与えられる自由に意味などないと思っっている。

自由とは 自らの手で戦い、勝ち取るべき代物なのだ。

「少将、そろそろお時間です」

金属製の古臭い懐中時計を眺めていたジャンヌが、囁くような声で言った。

本来、バイオチップによる生体コンピューターを埋め込まれた彼らは、脳内に時計機能を有しているから、わざわざ時刻を確認する必要はない。

にも関わらず、こんな骨董品を持ち歩いているのはジャンヌの癖のようなものだ。

円形の蓋を閉じた後で、ジャンヌは大切そうに懐中時計を懐にしまい込んだ。ちゃりり、と銀の鎖が胸元で音を立てる。

「よし、それでは出るとするか」

ハンニバルは立ち上がった。灰色の軍服が風に吹かれ、ばたばたと裾をはためかせる。

その後背には既に幾本もの燃える松明が掲げられ、コロニアを陥落させた彼の『軍団』を赤々と照らしていた。

野外にずらりと整列した兵の数、およそ五万。そのほとんどは顔面に色鮮やかな戦化粧を施し、頭に野鳥の羽根で作った冠を被った、戦士の装いをしている。

野山をかけるミストリアの民は、逞しい肉体と何事にも挫けぬ強靱な精神を持つ人々だ。

分厚い胸板の目立つ上半身は裸で、手に持った武器は石や木で作られた代物が大半だが、個々の力は完全武装した魔族にも見劣りしない。

背後へと振り返ったハンニバルは、張りつめた面持ちに意気を見なざらせる戦士たちを眺め、にっと満足気な笑みを浮かべた。

「さあて、行こうか諸君。戦争のお時間だ」

舞台俳優のように通りのいい声が、草原の隅々まで響き渡る。

「コロニアは落とした。次は連中の本拠を火攻めにしてやろう。諸君、足を止めるなよ。サンダルの底で奴らの死骸を踏み抜いてやれ。人間の強さがいかほどのものか、剣で連中の身に刻み込んでやれ。戦え。戦え。戦え。このミストリアに棲むウジ虫どもを一匹残らず駆逐する日まで。自由と解放をおれたちの手で勝ち取るために……」

「！」

ハンニバルの演説が熱を増していくに連れ、人々の口から次々に「雷神」の聲が上がる。

やがてそれは複数の唱和となり、盾と槍を打ちつける音、地面を足踏みする音と混ざって、大気をびりびりと震わせた。

戦機は満ちた。次なる目標はミストリアの中核、霊樹の都モンテイアナ。

草原を駆け抜ける稲妻は、立ち塞がる敵全てを焼き尽くすだろう。

「我らはこの世界の理に宣戦布告する者なり！ ミストリア革命軍出るぞ！」

高々と天に向かって突き上げられる拳。

追って、反攻者たちの雄叫びが人外魔境の地に遠雷の如く轟いた。

闘技場？

翌日の昼過ぎ、旅籠に泊まっていた蓮たちは商会から市街中央の闘技場へと呼び出されていた。

港湾から離れた地に建てられた闘技場は所謂コロッセオと呼ばれる円形の代物であり、遠くから見ると巨大な石鉢に見えなくもない。闘技場の観客収容人数は約一万。貿易都市プリマス全体の人口は十万程度だが、客席が満員にならない日はむしろ少なく、連日立ち見する者まで出るのが普通だった。

「で、サカキ。昨日はどこ行ってたんだよ」

裏口から続く関係者専用の薄暗い通路を歩きながら、ベルナットはちらりと蓮の様子を盗み見た。

結局、あの後もシャムと話し込んでしまった蓮は、朝になってようやくベルナットたちの留まる旅籠へと帰っていた。

無論、残された二人から無言の糾弾を受けたのは言うまでもない。朝帰りの上、全身からアルコールの匂いを立ち昇らせていればそれも当然のことだったが。

「サカキは昨日、おれと一緒にサラシナんところに行ってたんだよ。つたく、この人かなりの酒豪でさ。おれの二倍は飲んでたつてのにぴんぴんしてやがる」

蓮、ベルナット、ルシユアラ三人の前で灰色の尻尾を揺らすのは、上司に先導係を申しつけられたシャムだ。

ひどい二日酔いのためかその足取りに力はなく、アーモンド型の目の下には黒々としたクマまで出来ていた。

「あー、頭いてえ……それにしても、今日はなんて厄日なんだ。結局、酒場の代金も全部奢らされたし」

「飲み比べを挑んできたのはそつちだろう？ 負けた方が全額払いなどと言うからだ」

「そつただけどさ。あんたそもそも金持って来てなかつたし、最初か

らおれに奢らせる気満々だっただろ」

「まあな」

あつさり認める蓮の前でシャムは盛大にため息を漏らした。

一方、ベルナットは妙に仲のいい二人を見て、怪訝そうに眉を寄せ、

「君たちなんだか意気投合してるように見えるけど、昨日、酒場で一体なにを話してたんだい？」

「別に。ただ情報交換をしたただけだ」

「情報交換？」

「敵軍の動きを早い段階で知っておかなくてはならなかったからな。本来は自前の諜報機関があればいいんだが、流石に今の解放軍にそれを求めるのは難しい。だから、他所に頼らざるをえなかった」

「他所つて、ひよつとして商会の？」

「ベルナットは目をしばたかせる。」

「じゃあ、シャム。君、まさか『クラン』に入ったのか？」

「おう。今じゃ第三隊の隊長サマだぜ」

「そんな……第三隊つていつたら裏街の執行部隊じゃないか。なんであんな物騒なところに」

「腕っ節だけが取り柄の剣闘士が他に行けるとこなんてないだろ？」

商会の下働きとか船乗りの手伝いとかよりかは遥かに　ほら、

給料もいいしな」

「冗談めかして答えるシャムだったが、ベルナットは逆に眉を曇らせてしまっていた。

蓮にもベルナットの気持ちはなんとなく分かる。二人の立場が明確に異なっている以上、これからの交渉が決裂した場合は、敵味方に別れて争わなくてはならないのだ。

（そもそも、ケットシーは何故ここを会談場所を選んだんだ？）

当初、蓮は商会の拠点で商談が行われるものだと考えていたが、実際に呼び出されたのはこの闘技場の内部だ。とても交渉に向いた場所とは思えない。

だが、プリマスの港で集めたケットシーの評価は、狡猾で腹黒く、油断のならない人物というものがほとんどだった。

なにしろ、『大王猫の一族』の族長ケットシーは、『商会』と『克蘭』という二つの組織で貿易都市の表裏を支配しているばかりか、レジオニール、ミストリア、ルガルといった列強とも対等に取引を続けているほどの傑物だ。

恐らく、この舞台も考えなしに用意した訳ではなく、なんらかの企みがあるのだろう。

「ところで、ベルナット」

ふいに蓮は声をひそめ、隣を歩く男に声をかけた。

「どうも今朝から一人だけ様子のおかしい奴がいるんだが、昨日の夜なにかあったのか？」

「……」

ベルナットは沈黙した。代わりに、横目でちらりと背後を伺う。

話題の中心にあるルシユアは心あらずといった状態のまま、とぼとぼ石畳の上を歩いていく。

白い肌はほんのり紅潮し、足取りも不安定で、傍から見ると熱病にかかった病人のようだ。

黙りこむベルナットに代わって、シャムはにやけた笑みを浮かべた。

「なんだ。二人ともあれから、別々のベッドで寝ちまったのか？」

「つきり行きつくところまで行っちまうかと思っただがなあ。ベルナット、据え膳食わぬは男の恥だぜ？」

「……シャム」

たしなめるような声を上げるベルナットの顔には、内心の複雑な感情が浮き出していた。

こと恋愛方面に関しては朴念仁と違っていいベルナットだが、流石にルシユアが自分に対して単なる好意以上の感情を持ち始め、それを持って余しているということくらいは分かる。

ただ、彼にとってルシユアは異性である前に、かけがえのない友

であり、信頼出来る仲間なのだ。

おまけにベルナツトは幼い頃に両親を失い、その後すぐに男だけの剣闘士養成所に放り込まれたものだから、そもそも愛やら恋やらという感情がよく分からない。

ルシユアのこととは大切だ。それは間違いない。しかし、それが友人としての友情なのか、異性としての恋情なのが、ベルナツトには判別できなかった。

「サカキ……僕はルシユアをどう思ってるんだろう」
「知るか」

悩める青年に対して返って来たのは極寒の吹雪である。隣で様子を伺っていたシャムは、あまりに酷薄な対応につい吹き出してしまった。

そこでようやくこそこそ話をしている三人に気付いたのか、ルシユアは不思議そうに目をしばたかせ、
「三人ともなにを話しているんだ？」

「いやいや、別になんでもないぜ。それよりケットシーさんが待っているのはこの先だ。一応、武器の類はここで置いて行って貰おうか」

シャムは通路の上へと続く階段の前で足を止めた。

階段の奥には四角く切り取られた青い空が見え、吹き込む風に混じってかすかに歓声らしきものが聞こえた。同時に、甲高く鳴り響く剣戟の音も。

「この向こうは観客席か」

「まあね。といってもケットシーさんの専用だけど」

蓮から軍刀を、ベルナツトから長剣をそれぞれ預かったシャムは、三人を率いて階段を上り始めた。

果たして、上階に辿り着いた一行の前に広がっていたのは、一角を丸々壁で仕切られた客席と、闘技場の舞台の上につき出したバルコニーだ。

客席といっても平らな石畳には座れるような場所がなく、警護の

者と思しき皮の軽鎧を纏った人足も、長槍を杖代わりに立ちつぱなしの状態だった。

炎天下の元、汗を流す衛兵の数は二十あり、それぞれ階段からバルコニーまでの道の両脇を固めている。

その一方で、バルコニーには赤茶けた毛織りの絨毯が敷かれ、日を遮るビロードの幕が張られ、象牙細工の施された長椅子が置かれ、皮張りの団扇を持った奴隷まで控えていた。

ただ、肝心の主はといえばバルコニーの欄干に手をひっかけ、上半身から地面に転げ落ちそうなくらい身を乗り出していた。

「よしっ！ そこだ！ いけっいけっ！ …… あっ！ いかん！ ダメッ！」

妙に甲高い声が漏れる度、だぶついたズボンからこぼれる黒い尻尾がゆらゆら左右に揺れる。

蓮は闘技場の舞台へと視線をやった。丁度そこでは二人の剣闘士が激しく剣を打ち合わせているところだった。

遅い^{グラディウス}が遅い^{グラディウス}がたい^{グラディウス}を持つ一方が、ややひ弱そうに見える一方に猛然と闘士剣を振り下ろす。

だが、細身の剣闘士は手に持った円形の盾でその一撃を逸らすと、片手に携えた刃をぴたりと相手の喉元に押し当てた。

わっと観客席から歓声が上がリ、同時に、バルコニーで試合に食いついていた影が膝から地面に崩れ落ちる。

「うにゃああああああああっ……！ ま、またウチの剣闘士が白犬商会の連中に負けてしまったのだあ！」

地団太を踏みつつ立ち上がったのは、臙脂色のジャケットを身に纏った巨大な黒猫である。

背丈は長身の蓮とほぼ同じだが、横幅が人間の三倍近くあり、突き出した腹が上着のボタンをみしみしと軋ませている。体全体が丸みを帯びているせいで、遠目からではだるまのように見えなくもない。

頭に巻いた紫色のターバンから飛びだしているのは、三角形の猫耳だ。顔立ち是不細工ながらも愛嬌があり、首から胸元にかけて涎

かけのように白い毛が生えていた。

(……こいつが)

蓮は一目見ただけで、その人物が誰だか分かった。

『大王猫の一族』の族長ケットシー。貿易都市プリマスを支配する商人たちの王である。

闘技場？

しばし手すりに体を預けたままぶるぶる体を震わせていたケットシーは、勝者である剣闘士が手を振りながら舞台の外へと凱旋した後で、ようやく蓮たちに向き直った。

「やあやあ、待たせたね。お客人」

薄く目を細めたその顔は、既に商人のそれに切り替わっている。

ベルナットは酷くやりづらそうな表情のまま、かつての主に向かって小さく頭を下げた。

「どうも、お久しぶりです。ケットシーさん」

「ああ、久しぶりだね、ベルナット・クーガ。全く、困ったものだ。君やシヤムが引退してしまっただおかげで、商会の剣闘士はすっかり腑抜けばかりになってしまったよ」

ケットシーは重苦しいため息を漏らし、長椅子の上にどすんと腰を下ろした。

「それにしても君が解放軍なんてものを立ち上げたと聞いた時は驚いたなあ。まさかあの錬鋼の一族に立ち向かおうだなんてね。前々から頭の良くない子だとは思っていたが、本当の大馬鹿者だったとは」

「……っ！」

思わず足を一步踏み出しかけたルシユアを、ベルナットは片手で押し止めた。

ベルナットは剣闘士時代の経験で、人から馬鹿にされることにも、他者から見下されることにも慣れている。

今、大切なのは解放軍を動かすための兵糧を得ることだ。ベルナットはそのためならば、例え泥水でも啜る覚悟だった。

「ケットシーさん。今日はあなたにお願いがあつて来ました。僕たちの持つて来た商品と、商会の倉庫にある食料を交換して欲しいのです」

「うん。別に構わないよ」

あつさり放たれた返答にベルナットは目をしばたかせた。

「……すいません。いま何と？」

「『構わない』と言ったんだよ。ただまあ、条件が一つだけあるけどね」

団扇の風にひげをそよがせながら、ケットシーはごろごろと音を鳴らした。

「君たちと交易をするとなると、ウチは錬鋼の一族に睨まれるっていう危険を冒さなきゃならない。だから、その分の代金を取引に乗せて貰おうかと思って」

「代金？」

「ああ、つまりは取引に多少、色を付けて欲しいということだよ」「というと……」

「そうさなあ。とりあえず君たちが馬車でこの街まで引きずって来た商品。確かケントリオンの本とか、帝国の調度品とかだったかな？ あれを全部頂こうかね」

「全部、ですか」

「うん。加えてこちらの商品の値段を通常の十倍に設定させて貰おう。これでようやくリスクと報酬の釣り合いが取れるという訳だよ」

「はっはっは」と楽しげに笑うケットシーの前で、ベルナットは言葉を失う。

暴利にしても行き過ぎだ。こんな不当な取引ではテッセラリウスに残る人々の腹を満たすことが出来ない。

「このっ……！」

絶句するベルナットの背後では、とうとう我慢の限界に達したルシユアが握り拳を振り上げていた。

後ろから蓮に腕を掴まれていなければ、そのままケットシーの右頬を殴り飛ばしていただろう。

「止めるな、サカキ殿！」

「よせ、馬鹿。最初に高値を吹っかけるのは商人の常套手段みたい

なものだ」

蓮がちらりと背後に視線をやると、殺気立った槍持ちの兵たちとそれを制しているシャムの姿が見えた。

一触即発の雰囲気の中、ベルナットは己の気を落ちつけるかのように、大きく深呼吸をする。

「……すいません、ケットシーさん。今の僕らは早急に食糧を必要としているんです。馬車で持ってきた分の商品をあなたに渡してしまつと、手ぶらでテッセラリウスに帰る羽目になってしまつ」

「まあ、それもそうだね。ところで、君たちが持ってきた商品にはテッセラリウスで作られた武器がなかったな。あれはなかなか高値で売れるんだけど」

「僕たちは戦争をしているんです。敵に武器を売り渡すような真似は出来ません」

「にう。君がそこまで考えているとは意外だ。もしかケントリオンの賢者になにか吹き込まれたのかな？」

「いえ、それは」

一瞬、揺れた瞳の動きをケットシーは見逃さなかった。

長椅子に腰かけたまま、ぐるりと百八十度近くも首を回転させた大王猫の族長は、先ほどから交渉をベルナットへ任せきりにしている蓮を上から下まで事細かに観察した。

「確か君はサカキくんだったかな？ この地方の人間じゃないね。ルガルの出身かい？」

「いや、違う。俺はこの大陸の外からやつて来た」

「大陸の外？」ケットシーは細めていた目を僅かに見開いた。

「そんな場所があったとは驚きだなあ。僕も随分長く生きているが大陸の外なんて聞いたことがないよ？」

「信じるとは言わん。少なくとも俺の素性は今回の交渉に関係ないからな」

「僕が個人的に気になるのさ。それにケントリオンの賢者ではなく、君が解放軍の頭脳を司っているのだとしたら、どういう人物かも知

つておきたい。娘からはまあ、無愛想な奴だが悪人ではないと聞いているけど」

「娘？」

「サラシナだよ。昨日、あの子の店に行っただろう？」

蓮は振り返ってシャムを睨みつけた。そんな話、全く聞いていない。

だが、一方のシャムは悪びれた様子もなく笑みを浮かべて、

「知ってたか、サカキ。あの店、ケットシーさんの娘が経営してるから、黒い『仔』猫亭って言うんだぜ」

「なるほど、そいつは初耳だ」蓮はぶつきらぼうに言い放った。

「だがな、ケットシー。お前の娘の目は間違っていないぞ。俺は確かに悪人ではない。善人でもないがな」

「ふむ。つまり商売するにはうってつけの相手という訳だね」

ケットシーは楽しげにつき出た腹を揺らした。大王猫の体重を受け止めた長椅子が、ぎしぎし軋みを上げる。

丁度その頃、闘技場では次の試合が始まるうとしていた。

舞台の一方に立つのは片手に長剣を、片手に鉄盾を構えた若い男の剣闘士。

そして、その対面に佇むのは兜を被り、両手に長槍を携えた中年の槍闘士。

どちらも張りつめた雰囲気のまま、開始の合図を待っている。

「あ、次の試合が始まるよ。ほら、君たちも折角の特等席なんだ。前に来て見たらいい」

猫手に招かれた蓮とベルナットは、一度顔を見合わせた後でバルコニーの端へと足を進めた。

やがて、かぁんと場内に鳴り響く鐘の音が、二人の剣闘士に試合の始まりを告げる。

観衆たちの野次が響く中、盾を構えた剣闘士は突き出される槍の一撃を掻い潜って、相手の懐へと潜り込もうとしていた。

対する槍使いは上手く武器を扱って間合いを取り、敵の急所を貫

こうと立て続けに穂先を繰り出している。

「あの盾を持っていてる剣闘士は先ほどの試合でも出てたな」

「あれはウチのライバルである白犬商会の剣闘士でね。槍を持っている方は黒猫商会の闘士なんだよ。僕としてはウチの商会の剣闘士に勝って欲しいんだけど……」

祈るように肉球をこすり合わせるケットシーだが、勝負の趨勢は彼の望みとは真逆の方向に傾きかけていた。

連撃に攻めあぐねた白犬商会の剣士は無理な突撃を諦め、長物を振り回す相手が疲弊するのを待ち始めたのだ。

持久戦に追い込まれた槍使いは一層、無謀な攻撃を仕掛けるものの、鉄の円盾は突き出された穂先の全てを逸らし、弾き返してしまっただ。

やがて、相手の足が疲労でもつれ始めたところで、剣士は怒涛の反攻に転じる。

最終的に、槍使いは振りかざされた刃に自らの獲物を弾き飛ばされた挙句、頬を盾で強打され、場外まで吹き飛ばされてしまった。

ごろごろと地面を転がり、その上、後頭部をしたたかに打ちつけて、そのまま置き上がってこない。

あまりの情けない有様に、観客の間からどつと失笑が沸き上がった。

「……にゃんということだ」

担架で運ばれる商会の剣闘士を見ながら、ケットシーは頭を抱えた。

「これでまた白犬商会のワンコロに鼻で笑われてしまう。ああ、ウチに強い剣闘士さえいればこんなことにはならなかったのに」

「ちらちらこつちを見るな。こんなところを会談場所にしたことといい、要するにお前はなにが言いたいんだ」

「にう。せつかちな人だね」ケットシーは眉を寄せつつ、ぴすぴす鼻を鳴らした。

「別に大した目的がある訳じゃないよ。ただ、取引の条件が飲めな

いっていうんなら、代わりに少しだけ仕事をして貰おうかと思って「仕事？」

「うん。といっても大したことじゃない。かつてのチャンピオン、ベルナット・クーガに、白犬商会最強の戦士　今のチャンピオンをぶっ飛ばして欲しいってだけさ」

放たれた台詞にルシユアは息をのみ、蓮は目をすがめ、ベルナットは表情を強張らせた。

沈黙の最中、ベルナットはからからに乾いた喉の奥から、どうにか言葉を紡ぎ出す。

「ケットシーさん。あなたはもう一度、僕に剣闘士に戻れと？」

「この勝負に負けたら……そうだね、君にはもう一度商会の剣奴になって貰おうか。ただ、君がこの試合に勝ったのなら、取引を少しマシなものにしてあげるよ」

粘っこい笑みを前に、ベルナットはごくりと唾を飲み込む。

それは悪魔の囁きだった。例え罠だと分かっている、心が揺れ動いてしまう。

一方、傍で話を聞いていたルシユアはたちまち顔色を真っ青にして、二人の間に立ちはだかった。

「だっ、ダメだ！　そんなの！　ベルナットは……こいつは私たちに必要なんだから！」

「お嬢さん、あなたには聞いていないよ。僕は彼と話をしているんだ」

「でも！」

なおも食い下がろうとするルシユアを、蓮は「まあ、待て」と制止した。

「ルシユア。お前の言う通り、ベルナットは今の解放軍に不可欠だ。いくら知略を尽くそうとも、土気の低い軍隊では勝てる勝負も勝てん。特に民間人に毛の生えた程度の兵士が大半とあっては尚更だ。解放軍がこれから戦っていく上で、カリスマ性を持つリーダーはどうしても必要となるだろう」

感情任せではなく、理路整然とした蓮の言葉に、ルシユアはぱつと顔を明るくする。

だが、蓮はそこまで道理を並べたてたにも関わらず、薄く笑みを浮かべ、

「で、ベルナット。お前は どうしたい？」

「サカキ殿!？」

ルシユアはぎよっと目を見開いた。悪魔は自分の隣にもいたのだ。尋ねかけられたベルナットは、しばし目を瞑って黙考した。

悩んでいる訳ではない。必要なのは覚悟を決めるための時間だ。

ベルナットはゆっくり瞼を開くと、闘技場の舞台を見つめたまま、口元を真一文字に絞った。

「サカキ、僕が負けたら解放軍を頼む」

「断る」

蓮の返答は常に簡潔、明瞭だ。

二の句が継げなくなっただけはく口を開閉するベルナットに、蓮は呆れた様子で言った。

「忘れたのか？ 俺はお前に手を貸している立場の人間だ。お前が解放軍からいなくなるといふのなら、俺がこの世界で戦う理由はない。後はどこぞへ消えるだけだ」

「だから」と口を噤むことなく、言葉を続ける。

「必ず勝て、ベルナット」

「……サカキ」

それが不器用な激励だということもベルナットにも理解できた。言いたいことは腐るほどあった。だが、ベルナットはその全てを飲み込んだ。

励ましの言葉をかけられたのだ。ならば、答えるべき台詞は一つだけしかない。

「分かった。必ず勝って、帰ってくる」

「本当だな？ 負けたら私、お前のことぶん殴るからな」

不安そうな表情を隠せないルシユアに、ベルナットは背を向け、

ひらひらと手を振った。

そして、そのまま歩を進めると、バルコニーの外縁に足をかけ、舞台に飛び降りた。

「なっ
」

ルシユアは思わず声を失ってしまった。

このバルコニーから闘技場の舞台まではかなり距離がある。少なくとも、普通の人間が飛び降りて無事に済む高さではない。

慌ててバルコニーから身を乗り出したルシユアだが、ベルナットは特に怪我をした様子もなく、石畳の上で膝についた砂を払っていた。

「おお？　すげえな、誰だあれ」

「ベルナット……？　ベルナット・クーガじゃないか!？」

「『金狼』ベルナット!？　先代チャンピオンか!」

「まさか、この街に帰って来てたなんて！　今日はなんて素晴らしい日なんだ!」

たちまち先ほどの試合の熱狂も忘れ、ざわめき出す観客たち。

沸き立つ闘技場を眺めながら、ケットシーは満足そうに「ごろごろ喉を鳴らした。

「流石ベルナットだね。客への魅せ方というものをよく心得ている」

「本人に自覚はないんだろうがな。ある意味、あれも天賦の才だ」

「うん。正直、彼がいなくなった後で、ようやくその凄さというものが分かったよ。花形のいない舞台なんてゴミクズみたいなものさ。サカキくん、僕が彼を欲しがると気持ちも分かるだろう?」

「あいつの戦場を決めるのはあいつ自身だ。そして、ここはあいつの戦場ではなかったというだけの話だ」

「……惜しいね。実に惜しい。どうして人間は便利な不自由よりも、不自由な自由を選ぶんだろうか」

「自由でないこと以上に不自由なことはない。ただそれだけの話だろう」

どこか皮肉っぽい回答に、ケットシーはなににも言い返すことが出

来なかった。

一方、闘技場の石畳の上では再び古巣に舞い戻った剣闘士が、バルコニーに向かって片手を突き出していた。

割れるような歓声の中、ベルナットは負けじとばかりに声を張り上げる。

「シヤム、僕の剣をくれ！」

「あいよ！」

バルコニーから投げ込まれた長剣を、ベルナットは広げた手の平で受け止めた。

重い鉄拵えの鞘から抜き放たれる剣。かざされた白銀の刃が陽光を浴びてほのかに輝く。

準備は整った。ベルナットは剣を片手に、闘技場の舞台へと歩を進める。

そして、対戦相手である若い剣闘士もそれに合わせるかの如く中央へ歩み寄り

「じゃっ、後は頑張ってくださいね。ベルナットさん！」

「えっ？」

ベルナットの肩にほんと手をやると、そのまま闘技場の出口から消えてしまった。

後に残されたのはぽつんと舞台に佇むベルナットと、困惑しきった表情の観客たちだけだ。

流石の蓮も、この成り行きには怪訝そうな表情を浮かべた。

「おい、ケットシー。対戦相手のチャンピオンとやらはあの男ではないのか？」

「違うよ。あれは白犬商会の二番手。チャンピオンはまた別にいる」

「なっ……き、貴様、謀ったな!？」

「別に謀った訳じゃないよ。そっちが勝手に勘違いしただけじゃないか」

憤るルシユアの前で、ケットシーはぺろっと舌を出した。

そうこうしている内に、闘技場の舞台中央が音を立てて二つに割

れる。

開いた穴から吹き上がるのは白い煙幕だ。追って、大掛かりな昇降装置が稼働する音と共に、地下に眠っていたチャンピオンが舞台へと押し上げられてくる。

白煙の向こう。おぼろげに見えるシルエットは、折り畳まれた翼を持つ巨大なトカゲの姿をしていた。

「……おい、あれはまさか」

「ああ、ついでにもう一つ。僕はなにも、今のチャンピオンが人間だって言った覚えはないよ？」

直後、闘技場を吹き抜ける一陣の風が白煙を吹き散らし、王者の姿を露わにする。

それは一頭の竜だった。ほのかにくすんだ乳白色の鱗を持ち、皮膜のむしりとられた翼を悠然と広げる翼竜。

啞然とする観客たちの前で、ケットシーは言った。

「紹介しよう。あれが白犬商会所属のチャンピオン。『ホワイトワイバーン白翼竜』の
ニーズヘッグちゃんだ」

雲一つない空の下。蒼天を貫く咆哮が、闘技場の舞台に轟いた。

闘技場？

翼竜^{ワイバーン}は大荒原の奥地に生息する生物の中でも、とりわけ獰猛かつ狂暴な性格で知られた魔獣の一種である。

巨大な翼を用いて空を舞う彼らは、猛禽の如きかぎ爪で地を這う獲物 荒野に迷い込んだ獣や、ナイトメアを始めとした自らより弱い魔獣を捕えると、鋭い牙で首の骨をへし折り、その血肉を嚼ることで腹を満たす。

彼らの力は蜥竜、蛇竜などを含む多くの亜竜の中でも上位に位置しており、全身を覆う竜鱗は千枚重ねの鎧より硬く、口元から伸びた竜牙は鉄の剣を叩き折ってしまうほどの鋭さだ。

当然のことながら、ただの人間が勝てる相手ではない。

「でかいな……」

つんざくような鳴き声を上げる翼竜を、ベルナットはしばし呆然と見つめていた。

実のところ、ベルナットが翼竜と戦うのはこれが初めてではなかった。プリマスの闘技場では時折、人間と魔獣の試合が組まれることもあり、かつて剣闘士だったベルナットも翼竜と対戦して、これを倒したことがあったのだ。

しかし、その時に戦ったのはせいぜい獅子を一回り大きくした程度の幼竜だ。今ベルナットの目の前にいるような、巨大で獰猛な成竜ではない。

「ふざけるな！ こんな勝負があるか！」

聞きなれた怒声にバルコニーを仰げば、ケットシーに食って掛かろうとしたルシユアが衛兵たちの手によって地面に引き倒されている姿が見えた。

一方の蓮はそんなルシユアを助ける様子もなく、呑気に手すりから身を乗り出している。

「ベルナット、加勢が必要か？」

「いや、構わない」

「気負うことなく即答すると、蓮は相変わらざるの無表情で「そうかとだけ頷き、

「死ぬなよ、ベルナット。俺もお前に死なれるのは困る」

「ああ、善処するよ」

ベルナットは鞘を地面に投げ捨てると、抜き放った剣を正面に構えた。

一呼吸分だけ吸った息を丹田に留め、全身に気を充溢させる。

意識は明瞭に。視界は広く。精神を集中させ、周囲の雑音をことごとく締め出す。

それはベルナットにとって、手慣れた作業だった。

(懐かしいな、この感覚も)

片手にはやや余る長剣を両手で構え、ベルナットは半眼のまま敵を見据える。

対峙する先。白い鱗を持つ翼竜は未だに四肢を鎖で繋がれ、一端につき二人、合計八人の屈強な奴隷によって抑え込まれていた。

本来ならば、試合開始の合図と共に奴隷たちは一斉に逃げ出す手筈だが、ここで一つ問題が起きた。

やおら天を仰いだ翼竜は甲高い咆哮を放つと、奴隷たちが怯んでいる隙に鎖の拘束を力ずくで振り払ってしまったのである。

結果、哀れな奴隷たちは闘技場の中を四方八方に振り回され、ある者は壁に叩きつけられて絶命し、またある者は頭から観客席やバルコニーに頭から突っ込んで、ぴくりとも動かなくなってしまった。「なんて力だ……」

瞠目するベルナットの前で、翼竜は後ろ脚にしぶとくしがみついていた奴隷を尾で叩き潰すと、更にその死骸を爪で真つ二つに引き裂いた。

生々しい断末魔の絶叫と共に、真つ赤な鮮血と臓物が石畳の上に撒き散らされる。

舞台の上で繰り広げられるグロテスクな光景を見て、観客たちは

一斉に喜びの声を上げた。

度し難いことだ、とベルナットは思った。彼らは闘鶏や闘犬となんら代わらない感覚で、奴隷たちの戦いを眺めているのだ。

胸中でふつふつと憎悪が沸き上がるのを感じつつ、ベルナットはふと視線を上に逸らした。

どさくさに紛れて衛兵たちの手から逃れたのだろう。欄干にかじりついたルシユアが青い顔で舞台を見下ろしていた。

「ベルナット……！」

かすれかけた声を耳にしながら、ベルナットは僅かに口元を緩ませる。

そつだ。ここはもう自分の戦場ではない。

ベルナットにはやることがあるのだ。自分を必要としてくれる人がいる。

だから　　こんなくだらな場所死ぬなんてことは、絶対に許されない。

「早く！　試合を始めるんだ！」

ケットシーの声を受け、呆然としていた鐘打ち係が慌ててバチを手にする。

遅れて、甲高い金属音が闘技場内に響き、それを合図としたかのように翼竜は頭からベルナットに向かって突進を開始した。

本来、翼竜は空から獲物を狩る生き物だ。しかし、闘技場に繋がれたこの魔獣は翼の皮膜が破られ、飛行能力を失ってしまったている。

ただし、空を飛べなくなったからといって翼竜の戦闘力が落ちる訳ではなかった。

多くの肉食動物がそうであるように、翼竜もこと瞬発力においては魔獣最速のナイトメアに勝るとも劣らない。

ベルナット自身が気づいた時にはもう、地を這う魔獣は驚くほどの速さで彼の眼前まで肉薄していた。

「……っ！」

ベルナットは悲鳴を押し殺しつつ、地面を蹴って真横へと身をか

わした。

直後、砲弾のような勢いで放たれた翼竜の頭突きが石壁を抉り、闘技場全体がずしんと音を立てて揺れる。

震動に立ち見していた客の数人が転倒し、観客席から細波のようなどよめきが上がった。

（あれに直撃したらまずい……！）

ベルナットは背筋に冷たい汗を伝わせた。

剣一本で戦わなくてはならないベルナットと違い、相手は数多くの武器を持っている。

自らの巨体を生かした突撃。鉄板を易々と引き裂く爪。鞭のようなしなりを見せる尾。

そして。

壁の凹みから頭を引き抜いた翼竜は、佇むベルナット目掛けて大きく顎を開いた。

真っ赤に塗れた啞内で、半環状にずらりと並んだ剣歯が不気味に輝く。

「危ない！」

ルシユアの悲鳴が響く中、ベルナットは片膝をついて噛みつきを避けると、右腕一本で開口した翼竜の下顎目掛けて剣を振り上げた。

丁度、唇を縫いとめるような形で長剣の先端が硬い鱗を貫き、翼竜の下顎から上顎を刺し通す。

通常、竜の鱗には鉄の武器などろくに通じない。

だが、ベルナットの扱っている剣は四軍将レオパルトの半身。朽ちぬ折れぬ砕けぬと評された名剣『スティングガー』である。

これは蓮の零式軍刀とまともに打ち合えるほどの逸品だ。翼竜の鱗程度ならば易々と突破できた。

「これなら……！」

やれる。例え、相手が凶悪な魔獣であろうとも倒せる。

ベルナットは長剣の柄を両手で握り直すと、苦痛に身をよじる翼竜の動きに合わせ、一息に顎を斬り払った。

血飛沫が舞い、真つ二つに引き裂かれた魔獣の啞内から、悲痛な声が漏れる。

翼竜は激痛の余り、地面の上を無茶苦茶にのたうち回った。舞台の石畳に罅が入り、闘技場全体が細かく震える。

慌てて距離を取るベルナットだが、ここは狭いコロッセオの中だ。巨大な魔獣から逃れることは出来なかった。

「ベルナット、尻尾が！」

ルシユアの声に気付いた時には、もうベルナットの横手に長大な翼竜の尾が迫っていた。

咄嗟に剣を盾にしたベルナットだが、衝撃までは殺しきれず、体ごと吹き飛ばされて闘技場の壁に激突してしまう。

痛みの余り意識が吹っ飛びそうになるのを、ベルナットはきつく奥歯を噛みしめて堪えた。

油断はしていないはずだった。しかし、翼竜の攻撃は範囲が広く、全てが一撃必殺だ。神経を張り詰めていたからと言って、避けられるような代物でもない。

地に膝をつくベルナットの前で、翼竜は鋭く尖った鉤爪を振り上げた。

「っ！」

同時に、観客たちの間から漏れる声にならない声。

叩きつけられた爪撃を、ベルナットは地面を転がることで辛うじて回避した。

それでも完全には避け切れず、紙一重分切り裂かれた肩から真つ赤な血が滲み始める。

（まづい……！）

出血は僅かだ。しかし、焼けつくような痛みのでいで左肩から先がじんと痺れて動かない。

その上、慌ててベルナットが石畳から立ち上がった時には、翼竜は己の肉体を半回転させ、先ほど痛烈な威力を見せた竜尾を振りかざっていた。

魔獣の知力がそれなりに高いことは、ナイトメアの如月と触れ合ったことでベルナットもよく知っている。

恐らく、翼竜は尾による一撃が有効打と考え、これを立て続けに繰り返してきたのだろう。

「……が、猿知恵だな」

バルコニーから響く寂びた声。仰いで確認するまでもない。

ベルナットが尾による初撃を食らったのは、まだ翼竜の動きに慣れていなかったからだ。

逆に言えば、一度見た技が来ると分かっているのならば、余裕を持って対応することが出来る。

ベルナットは三角飛びの要領で闘技場の壁を蹴ると、竜尾の一撃を回避し、目の前に晒された尾の中ほどへと右腕一本でスティンガーを振り下ろした。

ざくり、と音を立てて肉の半ばまで埋まる刃。たちまち暴れ始める翼竜を尻目に、痺れの取れた左手で剣の柄を握り直す。

「はあっ！」

渾身の力を込めて振り抜かれた太刀が、翼竜の尾を中ほどから断ち切った。

追って、切断面から吹き出た鮮血が闘技場の舞台を濡らし、つんざくような絶叫が空気を震わせる。

ベルナットは再度、距離を取って剣を構えた。その姿を翼竜の血走った眼が捉える。

怒りのまま咆哮と共に突撃した翼竜だが、これもベルナットにとっては既に見切った攻撃だ。

「行け、ベルナット！」

ルシユアの声援を背に受け、ベルナットは翼竜の頭部目がけて剣閃を放った。

スティンガーの先端が捉えたのは竜の右眼孔である。ベルナットは一瞬、動きの止まった翼竜の眼を即座に剣先で抉り抜いた。

たまらず身を仰け反らせ、苦悶の呻きを上げる翼竜。と同時に、

柔らかい首元が無防備に晒される。

当然、その隙を見逃すようなベルナットではない。

(この翼竜を倒すためには)

速度と威力と正確さを兼ね揃えた一撃が必要となる。

かつての経験から、ベルナットは剣闘士時代に対翼竜用の技を開発していた。

例え相手が強大な翼竜であろうとも、容赦なく息の根を止める「屠龍の一斬」。

そして、扱う剣がこのスティングーならば、その威力は紛れもない必殺となる。

「ふっ……」

ベルナットは短い呼気と共に、頭上に振り上げた剣を遠心力を用いて真横に構えた。

体を捻る。踏みしめた石畳がみしりと軋む。振り絞った力の全てが、腕の先に凝縮されていく。

対する翼竜は白い鱗を真っ赤に濡らしながら、割れた啞内を開き、真上から食いかかってきた。

不思議と恐怖は感じない。未だ、ギリギリの死線を彷徨っているというのに、心は酷く落ち着いたままだ。

交錯の刹那、ベルナットは体を前傾させて翼竜の牙を回避した。直後、限界まで引き絞られた体が石畳を蹴り、一本の矢となって

地を翔け抜ける。

金色の髪が空を流れ、舞い上がる砂埃の中で、鈍色の刃が美しい閃光を描いた。

しん、と。

決着を予感した観衆たちが一斉に静まり返る。

一瞬の交錯の後、剣を振り抜いた体勢のまま地に膝をつくベルナットの後背で、翼竜は引き裂かれた喉笛からおびただしい量の鮮血を噴き出した。

追って、その巨体がぐらりと傾き、地響きと共に倒れ伏す。

勝負は決した。誰の目にも明らかな形で。

同時に観客席から爆発した大喝采が、再び王座を奪還したチャンピオンを覆い包んだ。

商談？

「いやあ、流石はベルナット・クーガだ。剣の腕は錆びつくどころか、ますます冴え渡っているね」

日の当たるバルコニーから闘技場内の貴賓室へと移動したケットシーは、ぴくぴく嬉しげにひげを揺らしていた。

貴賓席、と名付けられてはいるものの、実際のところその部屋は食堂であった。

巨大な丸テーブルには精緻な刺繍の施されたテーブルクロスがかけられ、その上には人の顔よりも大きい丸皿が幾つも置かれている。それぞれの皿に盛られているのは拳大ほどの大きさに切り分けられた肉塊だ。香ばしい匂いはふんだんに用いられた調味料のものだろうか。

湯気立つ肉塊は見た目こそ牛肉そっくりだが、実のところ、この肉は先ほどベルナットに息の根を止められた翼竜の代物だった。

ケットシーは舞台の上で死んだ獣　獅子や虎、稀に小型の魔獣を闘技場内の厨房で捌き、その肉を勝者である剣闘士と共に食らうのを趣味としている。

とはいえ、旨そうに竜肉に被りつくケットシーとは対照的に、ベルナットは青白い顔のまま動けず、隣席のルシユアはそんな彼を不安そうに慮っていた。

「ベルナット、肩の怪我は大丈夫なのか？」

「ああ……平気だよ。単なるかすり傷だから」

そう言って笑みを浮かべたベルナットだが、表情の端々に滲む疲労までは隠せない。

生死の境を行き来する激戦を終えたばかりなのだ。ベルナットとしてはさっさとベッドにぶっ倒れたい気分だった。

なお、舞台上で猛威を奮った長剣ステインガーは蓮の零式軍刀共々、再び商会側に回収されてしまっている。

一方で、ケットシー側も既に衛兵を引かせており、その代わりと
言うべきか、室内にはエプロンドレスを身に纏った給仕たちが控え
ていた。

「ケットシー、あの娘たちもお前の血縁なのか？」

ベルナットの左隣に座った蓮は竜肉のステーキをつまみながら尋
ねた。

居並ぶ給仕たちはいずれも黒い仔猫亭のサラシナと同じ、頭に黒
い猫の耳を生やしていた若い娘の姿をしている。

蓮が混血の人間と思うのも至極当然だろう。だが、ケットシーは
「いや」と首を横に振った。

「彼女たちは裏街で拾ってきた奴隷だよ。まさか女の子を闘技場に
立たせる訳にもいかないから、商会の手伝いをして貰っているんだ」

「ならば、あの耳は？」

「ただの飾り。まあ、僕の趣味みたいなものさ」

「ふむ。人づてに自前のハーレムを構築しているという話を聞いた
が、別にそういう訳でもないのか」

「いや、何人かつまみ食いしてるからあながち間違いでもないかな。
サラシナもそうやって出来た子供だし」

「……この鬼畜め」

ぼそりと呟いたのはルシユアである。

彼女のケットシーに対する心象は、ベルナットを騙し討ち紛いの
畏にかけたことで底辺付近まで悪化していた。

「お前、そもそも最初からベルナットを剣闘士に雇い直そうだなん
て気はなかったんだな。なにが負けたら剣奴に戻れ、だ。あんな相
手じゃ負けた瞬間、頭から丸かじりにされて終わりじゃないか」

「はっはっは。ベルナットの実力が全盛期と変わらないままだった
ら、翼のもげた竜なんかに負けるはずがない。もし、ベルナット・
クーガが負けて食われるような剣闘士であったのなら……まあ、そ
れまでだったさ」

ケットシーは両手で掴んだ翼竜の肉を食った。肉汁が大皿の上に

飛び散り、毛深い腕が獣脂に塗れる。

このレギオニール地方では一部の煮込み料理や汁物を除き、食事のほとんどを手掴みで食すのが基本だ。

代わりにテーブルの端には手を洗えるよう、水の張られたフィンガーボウルが置かれている。

自らの取り分を瞬く間に胃袋に収めたケットシーは「けつぷ」と噫気を漏らした後、水で汚れた手を濯ぎ、ざらざらした舌で指先の毛づくろいを始めた。

「それに僕はまだベルナットを諦めちゃいない。君が剣闘士に戻るといふのなら、今回の取引を上手く纏めてやつてもいいんだが」
「論外だな」

蓮はケットシーの言葉をすっぱり切り捨てた。その隣でルシユアも大きく首を縦に振っている。

「ベルナット・クーガは解放軍が掲げている旗だ。これを持っていかれては組織として立ち行かなくなる」

「僕自身も剣闘士に戻るつもりはありません。お願いします。どうか取引をして貰えませんか？」

テーブルに手をつき、頭を下げた頼みこむベルナットだが、ケットシーの反応は冷淡だ。

「しかしねえ、錬鋼の一族と戦争している君たちと交易しろってのは中々難しいよ？ あいつらに睨まれたら、この街なんてあつという間に灰塵に帰してしまう。こちらの負うリスクを考えたら、とても対等な条件では取引できない」

「今回、こちらの提供できる交易品はケントリオンの書物やその他調度品、テッセラリウスの鉄鉱石や大荒原の原油などだ。これで…：そうだな、最低でも五千人の人間が一ヶ月暮らせるだけの食糧が欲しい」

「君たちの持ってきた商品の内容は僕も報告で聞いているよ。ただあれで五千人分を一ヶ月つていうと、ちょいとばかりきついね」

「具体的な数字を出そうか」と、ケットシーは懐から上下に十個

近くも玉の並んだソロバンを取りだした。

「最低クラスの食料でも一日で小銀一は必要となる。これが二節（三十日）で小銀三十……つまりは大銀三だ。更にこれを五千人分となると大銀一万五千もの料金が必要になる訳だね」

ケットシーは爪の先でばちばちと器用にソロバンを鳴らした。

ルガル帝国で発行されている帝国銀貨には大小の二種類があり、大銀貨は小銀貨の十倍の価値を持っている。

とはいえ、このレギオニール地方において、プリマス以外の諸都市で貨幣が流通することは少ない。

人口における魔族の比率が多いトリブヌット。レギオニール地方最大の都市レガティア。通貨として用いられているのはせいぜいこの二都市くらいなものだ。

「一方、君たちの持つてきたケントリオン産の本は大体、平均で一冊当たり大銀六十。これが百数冊あつて大銀六千と少し。ルガル帝国フラミア産の調度品、これが合計で大銀三千ちよつと。テッセラリウス産の鉄は良質なものが揃っているけど、大荒原の火のつく水と合わせても大銀千に届かないくらい。まあ、全部で買い取り価格は大銀一万枚つてところかな」

「ええと、要するに大銀五千枚分が足りないってことですか？」

「対等な商売ならそうなるね。でも、残念ながら僕は君たちと対等な商売をするつもりはないんだ」

「このデブ猫め。また十倍の値段で売るとか言い出すつもりだろ」

「いや、二倍で構わない。ただし、取引はこれっきりだ。僕も錬鋼の一族に睨まれるのは嫌だからね。それでも、どうにか十日分の食糧は確保出来るはずだろ？」

「……確かに」

ベルナットはしたり顔で頷く。ルシユアも渋い表情をしつつ、なにも言い返せない。

一方、蓮はそんな二人と一匹のやり取りをやや呆れ交じりに眺めていた。

(前々から分かっていたが、こいつらどうも人が良過ぎるな)

最初に高値を吹っかけ、無理難題を並べ、その上でまるで良心的な価格であるかの如く値をつり上げる。

冷静になって考えれば二倍の価格で商品売りつけられるのだから、暴利には変わらない。

それを舌先三寸で丸めこんでしまうのが、商人の恐ろしいところなのだが。

「おい、ケットシー」

蓮が声をかけると、ケットシーは実に愛くるしい動作で首を傾げた。

「なにかな、サカキ君。ひょっとして売値を下げろって言いたいのかい？」

「いや、ただ一つ聞きたいことがあってな。この闘技場に休憩室はあるか？」

「うん？ そうだね。一応、怪我をした剣闘士の手当てをするような場所が用意されてるけど」

「そうか。なら、ベルナット。ルシユアと一緒にしばらく休んでろ」

「え？ でも、まだ交渉が」

「俺が纏めておく」

有無を言わせぬ口調に、ベルナットはぐっと押し黙った。

基本的におつむの弱いベルナットだが、こと直感に関しては常人よりも優れている。

蓮の台詞に込められた真意までは分からずとも、求められている行動は理解できた。

「分かった。それじゃあ、後は頼むよ。正直に言っと、起きてるのも割と限界なんだ」

「しばらく寝てていいぞ。交渉が終わったら起こしに行く」

「うん。じゃあ、ルシユア。すまないけど肩を貸してくれないか」

「はえっ!?!」

「実は途中で足を痛めたらしくて、救護室まで付き合ってくれろと

嬉しいんだけど」

「あ……そ、そうだな。そういうことなら仕方ない。うん」

なにか自分に言い聞かせるかのごとく、こくこくと頷くルシユア。ベルナットは一瞬すまなそうに目を伏せたものの、すぐさま気を取り直し、ケットシーに頭を下げた。

「それじゃあ、ケットシーさん。今日はこれで失礼します」

「うむうむ。体を労わりなよ、ベルナット。一応、僕も君のファンだからね」

「……ありがとうございます」

酷く複雑そうな表情を最後に、ベルナットはルシユアと連れだつて部屋を退出する。

残された蓮は二人の後ろ姿を見送った後で、再度ケットシーへと向き直った。

「さて、これでようやく落ち着いて話が出来るといふものだ」

その口元には、先ほどまでなかった冷笑が浮かんでいた。

商談？

翼竜の肉が片付けられた後のテーブルには口直しのためか、さっぱりした味の果実酒が用意されていた。

猫耳の力チユーシヤを頭に付けた給仕たちが、開栓されたばかりの酒瓶を傾け、分厚いガラスのコップに琥珀色の液体を注ぎ込む。

ケットシーは鮮やかな色合いをしたグラスを手にすると、アルコール分の低いシードル（リンゴ酒）を一息に飲み干した。

「しかし、仮にも同じ組織に身を置く仲間を邪魔者扱いして追い払うだなんて、君もまた厚かましい性格をしてるねえ」

「お前にだけは言われたくない」

ぶつきらぼうに答える蓮は既にグラスの中身を空っぽにしている。給仕が遠慮がちに瓶を掲げると、蓮は無言でテーブルの上にグラスを滑らせた。

「ケットシー、お前はなにか一つ勘違いしているようだが言っておくが……」

「注ぎ直されたシードルをちびちび啜りながら、蓮は言った。

「今の解放軍は飢えた獣だ。もし食糧が尽きれば、真っ先に太った豚に食らいつくだろう」

「にう。サカキくん、それはひょっとして僕を脅してるつもりなのかな？」

「脅しているのはお前ではなく、プリマスという街そのものだ。お前は錬鋼の一族ばかりを気にしているようだが、軍事力を持て余しているのは解放軍も同じなんだよ。想像してみろ、ケットシー。外壁すらないこの街に数千の兵が進撃したらどうなると思う？」

「プリマスを焼き払えば民心を失うことになるよ？ それでもいいのかな？」

「なにも街を焼かずとも構わん。こちらは『解放』を声高に叫びながら、財貨を溜めこんだ商人どもの倉を襲撃すればいいだけだ。こ

のプリマスで抑圧されている人々は、諸手を挙げて解放軍を迎え入れるだろうさ」

「……なるほど。ベルナツトを遠ざけた訳だ。あの正義漢にはこんな話を聞かせられないってことか」

「お人好しは交渉に向かないからな。特に相手がしたたかな商人となれば尚更だ」

「酷い言いようだね。ただ、組織には君のような人物が一人は必要だ。それは認めよう。暴力を振りかざすやり方は気に入らないけれど」

「軍人の商品は暴力だ。そして、暴力というものはなにも振りかざさずとも、取引の場でそつと隣に添えてやるだけでいい」

こつん。テーブルの上に置かれたグラスが乾いた音を立てる。

ケットシーは下顎を脂肪でだぶつく首元へと埋めた。なにか真剣に考え込んでいる様子だった。

蓮の言葉によって、商会は丁度、解放軍と錬鋼の一族の間で板挟みの形になってしまった。

無論、勢力的に強大なのは一族の方だ。しかし、彼らの主力は遠く離れ、逆に解放軍の拠点テッセラリウスはプリマスから約一日の距離にある。

その上、一族側から見ればプリマスが襲われようが焼かれようが、別に助ける義理もないのだ。

「……にう」

たつぷり十分近くもケットシーが頭を抱えている間に、蓮はシールドの酒瓶を三本も空けていた。

給仕の顔にはなにか酷いものを目にしたかのような、いわく形容しがたい表情が浮かんでいる。

やがて四本目の酒瓶を空にした後で、蓮はおもむろに口を開いた。「ケットシー、要するにお前は錬鋼の一族に対する言い訳さえ出来ればいいんだろう?」

「うん? まあ、そうさね」

「ならば、ケントリオン経由で解放軍に食糧を輸出するということは出来ないのか？」

「あ……」

プリマスとケントリオンは長年交易を続けており、鍊鋼の一族もこれを黙認している。

(問題はケントリオン側の了承を取っていないことだが)
ケントリオンとて鍊鋼の一族と敵対している国家だ。解放軍が潰えれば、次の標的となるのは彼ら自身だと分かっているはず。

一度は同盟まで提案してのだから、この程度の毒は飲み干して貰わねば、とても共同戦線など張れるはずもない。

「お前も解放軍にケントリオンの学長が加わっていることは、部下から聞いているはずだ。こちら側から手土産を持って頼みこめば、奴らとて断れまい」

「でもねえ。そういう小汚い手で解放軍に食糧を横流ししてるなんてことを知られたら、僕はおちびのエイブラムスに首を吹っ飛ばされてしまうよ」

「分かった。ではもう一つのカードもくれてやる」

「もう一つ？ それって……」

ケットシーは僅かにテーブルから身を乗り出した。

サラシナからもたらされた情報は二つあったのだ。

「そうか。確か、君たちは四軍将のレオパルトを捕虜にしているんだっただな」

「それ以外にも魔族の虜囚が二百名ほどいる。お前たちはこの捕虜の命を盾に、解放軍と取引を迫られたことにすればいい」

基本的に、この大陸に数ある氏族の多くは自らの同胞を実の親、兄弟の如く大切に扱う。

特に鍊鋼の一族のような氏族間で軍隊を構成しているものはその傾向が強い。

同胞の身柄。それも軍将格の人物を含んだものであれば、十分な交渉材料となるだろう。

「ふうむ、しかし君たちはいいのかい？ 凡百の兵はともかく、レオパルトはあれで將軍としちゃかなり優秀な奴だよ？」

「構わん。先の戦いでレオパルトは片腕と両足を失っている。將としてもう使える状態ではあるまい」

「そりやまた凄まじいな。ベルナットがやったのか？」

「いや、俺がやった」

ケットシーはその瞬間、まるで冷水をぶっかけられたかの如く動きを停止させた。

「どうした。顔色が悪いぞ、ケットシー」

「は、はは、てつきり僕は君のことを単なる軍師だと思っていたんだけどね。まさか、ベルナットに並ぶ剣豪だったとは」

「情報収集が足りんな。解放軍の人材はお前が思っているよりも遙かに豊富だ」

「……サカキくん、君は本当にあの錬鋼の一族に勝てると思っっているのかい？」

「分らん」

蓮はあっさりそう言った。

「まだ手元に渡って来ている情報が少な過ぎるんだ。確かに錬鋼の一族のは屈強で、人間が簡単に立ち向かえる相手ではない。しかし、將の質がレオパルト程度のものであれば、どれだけ強力無比の軍団であろうとも壊滅させることが出来るだろう」

「にう。四軍將の一人を指して『程度』扱いは恐れ入るね。しかし、実際に戦果を上げていく以上、虚勢と見なすことも出来ない」

「まあ、レオパルトが頭脳型ではなく直感型の武将だったこともある。俺はああいう種の指揮官ならば、もっと性質の悪い奴を知っているからな」

蓮は酒杯を傾ける手を止め、眉を寄せたまま中空を睨んだ。

かつて、カイ口要塞を挟んでしのぎを削り合った相手であるハンニバル・バルカは、極めて高いカリスマ性と軍隊の隅々まで己の手足のように動かす知略を持っており、同じ直感型の武将でもレオパ

ルトとは雲泥の差があった。

もつとも、これは流石に比べる相手が悪すぎる。ハンニバルはかつて蓮がいた世界においても有数の名将であり、百年の大戦を生き抜いた英雄だった。

いくら蓮とはいえ、これ程の相手が次々出て来られては流石に手の打ちようがない。

「ただ、軍将の中でもルクレールはレオパルトと正反対の性格という話だ。勝敗の行方は戦場であいまみえてみなければ分からん」

「ベルヴェルク麾下の四軍将はそれぞれ毛色が違うんだよ。軍将の中で頭一つ飛びぬけてるのは筆頭のエイブラムスだけど、他の三人も自分の型に嵌まれば並大抵の相手には負けない。……サカキくん、君は三年前に中央で起きた反乱のことを知っているかい？」

蓮は「ああ」と頷いた。

このレギオニール地方では三年前、オプティアが一時占領されるほどの大規模な民衆反乱が起きたことがあった。

その時、数万人規模まで膨れ上がった反乱勢力を鎮圧したのが、総数一万にも満たない軍を率いた四軍将の面々だ。

最終的に、反乱は一ヶ月で終息。無論、結果は人間側の惨敗であり、反乱勢力のリーダーであった一党は全身の生き血を絞り取られて処刑されてしまった。

そして、この事件以降。越え難い力の差を見せつけられた人々は、魔族に対してトラウマに近い恐怖心を持つこととなる。

「錬鋼の一族の強みは鉄の刃すら通さぬ肉体と、魔獣種に匹敵するほどの怪力だ。対策なしで勝てるような相手じゃないよ」

「問題ない。先に言った情報不足ともども、この点は商会に協力をして貰おうと思っている」

「へっ？ 商会に協力って……」

「分かり易く言おう。食糧、情報、兵器。これらの点に関して商会には解放軍を支援して頂きたい」

「いや、待ってくれよ。しかしね」

「戦争は儲かるぞ、ケットシー」

ふいに切り込むような口調で蓮は言った。

「ここで解放軍を潰えさせるより、鍊鋼の一族と泥沼の戦争を繰り広げさせた方がお前にとつても利があるはずだ。解放軍にテッセラリウスを陥落させられた一族は、武器の供給を外部に頼らざるをえない。既にエイブラムスから交渉を持ちかけられているのだろうか？せいぜい高値を吹っかけてやれ。解放軍はそう簡単に負けん。この俺と、ベルナット・クーガがいる限りはな」

熱もなく、ただ淡々と放たれた台詞だが、ケットシーはそれきり黙りこんでしまった。

博打であった。確かに大陸中央の争いはプリマスに莫大な富をもたらすだろう。だが、一歩間違えればそこには死が待っている。

しばしの間、ケットシーは爪で髭先をしごきながら思索していた。細められた目は、どこか遠くをぼんやりと見つめている。

「……まだ答えは出せないな」

ケットシーは長い沈黙の後で、そう言った。

「もう少し、君ら解放軍の様子を見させて貰いたい。とりあえず二十日分の食料は用意する。君の言う支援も可能な限りは提供しよう。

ただ、以降の取引は状況によりけり、だ」

「それで構わん。だが、用意して貰う食糧は一ヶ月分だ。ベルナットが闘技場で働いた分をきちんと上乘せして貰わなくてはな」

「おいおい、あの程度の活躍で大銀五千もたかる気かい？いくらベルナットが花形だからってそれはないぜ。せめて、あともう一日は働いて貰わなくっちゃ」

「ケットシー、さっきのベルナットの様子を見ただろう。お前が無茶な頼みごとをしたせいで、あいつは疲れ切っているんだ。これで明日も酷使されようものならぶっ倒れかねん」

「ああ、すまない。ところで、そのどこに問題が？」

「勘違いするな。『やめる』と言っているのではない。『やり過ぎるな』と言っているんだ」

「なるほど、了解した。……君は実に友達思いだなあ」
無慈悲な蓮の言葉を受け、ケットシーは満足そうに頷いた。
こうして本人のいないところで、ベルナットの受難は着々と進行
していたのだった。

確執？

プリマスの港町から食糧をかき集め、幾台もの荷馬車に詰め込む作業は、その日の夕刻から翌日の昼過ぎまで行われた。

なお、荷積み作業に駆り出されているのは人間の雇われ奴隷ではなく、シヤム率いる『クラン』第三隊の面々である。

一応、この取引は表向き秘匿されている。それ故、下手に奴隷を使つて情報を漏らすような真似は出来ないのだ。

商会の保有する倉庫内では彼ら傭兵たち以外にも、目録を携えた猫耳の女性があればこれ周囲に指示を出している。

ほつそりした体にエプロンドレスを身に纏つた彼女は、ケットシの娘で黒い仔猫亭の店主を務めるサラシナだ。

剣闘士上がりの者が多い第三隊ではまともに文字を読める人材がないため、彼女も助っ人として荷積み作業に駆り出されていたのだ。

「シヤム、そつちの馬鈴薯は二つ目の馬車にお願い。この干し肉は三つ目の馬車ね。ああ、空豆は一番最後でいいわ」

矢継ぎ早に指示を出す姿は堂に入っており、直属の部下でない第三隊の構成員も黙々と従っている。

「手慣れているな」
感心したように呟く蓮の隣で、サラシナは苦笑を浮かべた。

「一応、酒場の仕入れで鍛えられているのよ。それに私はこれでもクラン第二隊の隊長だしね」

「第二隊の仕事は確か情報の集積と整理だったか。こういう作業はお手の物という訳だな」

「そういうこと。ところで、サカキさん。ベルナットはどこにいるの？ 一応、顔見知りだから挨拶しておこうと思っただけだ」

「あいつなら馬車の中にいる。会いたいのなら止めないが」

「……遠慮しとくわ」

サラシナは同情に満ちた声で言った。

この日も、ベルナットは本人の居ぬ間に交わされた契約によって、闘技場まで連れだされていたのだ。

当然、連日の試合を経たベルナットは疲労困憊の状態で、今はルシユアに看病されつつ泥のように眠っていた。

「父さん、喜んでたわよ。闘技場は大盛況で、入場料が普段の三倍でも満員だったって」

「そいつは良かった。こちらとしては上手く乗せられただけのよう
な気もしなくはないが」

「こと商売に関することであの人に勝つのは無理よ。なんだかんだ
で今回の取引でも相当な利益を上げてるみたいだし」

「だろうな」と蓮は頷いた。

一応、可能な限り譲歩を引き出したつもりだが、榊蓮はあくまで
軍人だ。真正の商人に敵うはずがない。

ただ、蓮は別にそれで構わなかった。このプリマスで欲しいもの
は全て手に入れることが出来たのだ。

その内の一つは食糧。もう一つは商会の協力。そして、あとの一
つは

「なあ、サカキ。馬車の用意は出来たけど、御者はどうするんだ？」

丁度そこで積み込みの作業を終えたシャムが、額の汗を拭いつつ
二人の前に顔を出した。

運ぶ荷が膨大とあって、今回商会側が用意した馬車の数は数十台
にも上っている。

ただ、問題はそれを操る者がいないことだ。例え馬車があっても
肝心の御者が不在ではどうしようもない。

「なにかと用心深いあんなのことだ。まさか忘れてるってことはな
いだろう。ひよっとして、もうどっかから奴隷を借りているのか？」

「いや、御者ならもう来ている」

「へ？ どこに？」

「俺の目の前だ」

蓮の台詞にシヤムは目をぱちくりさせる。

今ひとつ要領を得ていない同僚に、サラシナは声をかけた。

「クラン第三隊はテッセラリウスに転勤。解放軍に協力し、以降サカキさんの指示に従うようにと上からのお達しよ」

「は！？ 聞いてねえぞ！？」

「今言つたわ」

淡々と言い放つサラシナを前に、シヤムは頭を抱えてしまった。

「ちよつと待て！ ちよつと待て！ じゃあ、なにか？ おれたちも戦争に加われってことか！？」

「お前たちに戦闘行為の参加までは求めていない。ただ諜報機関として解放軍に協力してほしいだけだ」

「本気かよ。要するに密偵をやれと？ そんなこと、よくケットシーさんが認めたな！」

「商会にとつても解放軍を内側から偵察できるのは悪い話ではあるまい。この戦争の趨勢はケットシーも知りたがっているしな」

「というわけでシヤム、半節ごとにテッセラリウスまで人を送るから調査書の提出をお願いね。部下任せにして怠けちゃダメよ」

追い打ちをかけるかのような台詞に、シヤムは盛大なため息を漏らすことしかできなかった。

「……分かったよ。でも、いいのか？ 第三隊いなくなったら裏街のクソどもを取り締められなくなるぜ」

「私の第二隊が上手いことやるわ。第一隊の手も借りるつもりだし」

「まあ、賭博所通いのハゲどもと頭のイカれた麻薬中毒者ジャンキーくらいならどうにかなるだろうさ。だが、第八地区の連中はどうする」

シヤムの言葉にサラシナは眉を曇らせた。

現在、プリマス西部の第八地区は商業地の変遷によって、人の住んでいない幽霊街ゴーストタウンとなっている。

ただしそれは表向きの話で、実際には中央で職を失った者たちや犯罪者が徒党を組み、富裕層から金品をくすねる集団を形成していた。

要するに窃盗組織である。もつと簡単に言えば盗賊だ。

彼らは貧しさ故に財を蓄える商家を襲撃し、時には裏街の治安を維持するクランと武力衝突を起こしている。

当然、商会側は対策に苦慮するものの、神出鬼没の盗賊相手ではどうしても後手に回ってしまい、決定打を打てず仕舞いというのが現状だった。

「八区は私たちが手を出すべきじゃないでしょう？　今だって中央に来る馬鹿以外はほとんど放置状態だし」

「そりゃそうだが……ほら、最近はアレがいるだろ」

気を使つてかぼかした表現を用いるシャムだが、既に蓮は八区の抱える問題について詳しく知っていた。

「心配するな。その件に関しては第三隊の貸し出しと交換条件で、俺が片付けることになった」

「へ？　サカキ、あんたが？」

「ケットシーも商会が手を出すより、こちらに任せた方がいいと思つたんだろう。俺自身、少なからず連中の方が気にかかるしな」

「でも、おれたちクランの面々でも手を焼いてるつてのに、あんた一人で大丈夫なのか？　なにせ、今の第八地区に集まつてるのは」

「そうだ。奴らは『解放軍』の名を騙っている。だからこそ、俺が出るんだ」

断固たる口調で言われ、シャムはそれ以上言葉を続けることが出来なくなつてしまった。

プリマス第八地区に居座る人々が解放軍を名乗り出したのは、テッセラリウス陥落の報が広まつた直後のことだ。

彼らは自分たちを人民の味方であると主張し、魔族による支配からの脱却を唱え、正義の名の元にプリマスの商家を襲撃していた。

とはいえ、彼らはテッセラリウスの解放軍となんら関わりがない。蓮の立場から見れば、解放軍を僭称しているだけの賊である。

問題は、この偽解放軍がプリマスに住む人間からそれなりに支持

されていることだった。

プリマス内部でも人間と魔族の格差は存在する。抑圧された人々の眼には、夜盗紛いの集団も義賊のように見えたのだろう。

ケットシーがこの問題を扱いかねているのには、そういった事情もあった。

「……なあ、サカキ。あんたは正直なところ、ケットシーさんのことをどう思っているんだ？」

唐突な質問に蓮は眉を寄せた。

「どう、というの？」

「だから、なんていうか、好きとか嫌いとかさ。ほら、色々あるじゃないか」

「あれを好きになるような奴がいるのか？」

「いや、まあ。それはなんだ。察して欲しい訳だが」

やりにくそうに口ごもるシャムの隣では、サラシナが肩を竦めていた。

「一応、ああ見えて父さんも悪人って訳じゃないのよ。ただ典型的な商売人で、自分の利益しか考えられない性格っただけ。娘である私もなんだかんだで気にかけてくれてるしね」

「お前らの言いたいことはなんとなく分かるさ。確かに、アレは他の魔族と少し違う。ベルナットはケットシーのことを残酷な性格の支配者のように言っていたが、それは奴の一面にしか過ぎんのだろう。……お前たちは日々の糧に飢える人間を前にした時、どう対応するのが最善だと思う？」

不意に尋ねかけられたシャムはしばし腕を組み、考え込んだ後で言った。

「そりゃ、パンとか銀貨とかさ。可能な限りの施しを与えるべきじゃないのか？」

「いえ、その回答は間違いのはずよ。昔、父さんが言ってたわ。飢えた人間に必要なのは金銭を与えることではなく、金銭を稼ぐ手段を与えることだって」

「その通り」サラシナの言葉に、蓮は小さく頷いた。

「人に魚を与えれば一日で食べてしまいが、人に釣りを教えれば一生食べていける。まあ、奴がお前たちに与えたのは釣り竿ではなくグラディウス闘士剣だっただろうがな」

プリマスの闘技場は単なる娯楽場ではなく、ある面においては貧民救済用の機関だった。

ケットシーは行き場を失った孤児を剣闘士として育て上げ、闘技場内で実戦経験を積ませた後、商会に属する傭兵や衛兵として雇い直している。

当然、この過程の間には数割の確率で死者も出るが、裏街の一角で餓死する結末と比べればまだ希望があった。

その上、このシステムにはほとんど無駄がない。剣闘士を育成する費用は闘技場からの利益でほとんど賄えるし、『クラン』の傭兵たちは情報収集、裏街の管理と、それぞれ間接的に商会の利益となる仕事を請け負っているからだ。

「金の亡者。守銭奴。悪辣な拝金主義者。それらはケットシーに対する評価として、間違っていないのだろう。だがな、アレはお前たちが思っている以上にこのプリマスという街と、そこに住む人間のことを考えている。少なくとも、俺は今のあいつと敵対したくないな」

「……そうか。それだったらいいなだ」

シヤムは露骨にほっとした表情を浮かべた。

「俺もあんたやベルナットとは戦いたくないよ。出来れば解放軍とプリマスには仲良くやって欲しい」

「なんだ。妙な質問をすると思えば、そんなことを心配していたのか」

「そりゃ心配するさ。あんたらは魔族の支配から人間を解放するのが目的だろ？ このプリマスが標的にならないって保証はないじゃないか」

「まあな。ただ、今の解放軍はオプティア以西を拠点とする鍊鋼の

一族を見据えている。プリマスと事を構えるほどの余裕はない」

「なら、連中を倒した後は？」

「それはその時になってみないと分からん」

投げやりな台詞を受け、シヤムは肩をすくめた。

丁度そこで、荷積み作業を終えた傭兵の一人が三人の元へやってくる。

シヤムは部下と二言、三言交わした後で、再び蓮へと向き直った。

「そういえばサカキ、あんた帰りの手段はあるのか？」

「問題ない。外に馬を待たせている。お前たちはベルナットを連れて先にテッセラリウスに戻っている」

「分かった。なら、先に出てるぜ。順調に行けば明日の早朝には着くんじゃないかな」

「現地には要氷堂という男がいるはずだから、以降はそいつの指示に従ってくれ。俺の名前を出せばすんなり事が進むはずだ」

「ああ、それと」蓮はシヤムに指示を出した後、すぐさまサラシナに向き直った。

「サラシナ。例の件、頼んだぞ」

「例の件って……あなたが言う火山で採れる黄色い石のこと？ 一応、探させてみるけどそんなもの何に使うの？」

怪訝そうに尋ねるサラシナの前で、蓮は「いずれ分かるさ」とかすかに口元をつり上げた。

蓮が商会に取り寄せを頼んだのは、天然で採取される硫黄鉱物である。

これにあと二つほど材料を加えれば、錬鋼の一族に対する特效薬が完成する。

例え鋼鉄の皮膚を持つ相手であろうとも、容赦なく死に至らしめることの出来る毒の薬が。

「兵士、武器、食糧。この三つさえ揃えば……」

鬱蒼と茂った前髪の奥で、蓮は冷たく瞳を輝かせた。

これでようやく 戦争を始められるというものだ。

確執？

商会の倉庫から食糧を載せた馬車が発つを見送った後、蓮はその足でプリマス西部の第八地区へとやって来ていた。

活気に満ちていた中央市街と違い、この近辺は崩れかけたあばら家が多く、人の住んでいる形跡もほとんどない。

ただ、街の各所には未だ住居に耐えうるであろう石造りの家や、然程損傷の酷くない木造家屋もちらほら残っていた。

元々、治安の悪化によつて住民たちが東へ移る前まで、ここはプリマス第一の商業地として繁栄していたのだ。

それが今では人の住まわぬ幽霊街ゴーストタウンと化し、寒々しく放置された家屋が取り残されるばかりとなつてしまつてゐる。

しかし、この地区全体が完全に無人化したのかといえば、そういう訳でもなかった。

現に蓮は廢墟の街を奥へ行くごとに、どこからか視線が集まつてくるのを感じていた。

一応、この地に住む人々もいるのだ。警戒心が強く、余所者に姿を見せないだけで。

(……そろそろか)

無人の街中を歩き通して約一時間。蓮は傾きかけた夕陽を見上げた。

地にオレンジ色の斜光がかかる頃合になると、寂れた街頭は急激に雰囲気を変えた。

長く伸びた影が闇を形作り、その奥からひそひそと囁く声が聞こえ始める。

部外者を見つめる瞳の数は一層多くなり、朽ちかけた柱の向こうや破れた屋根の下には、はっきりとした人の気配があつた。

蓮はなお姿を見せぬ住人たちに対し、まるで挑発するかの如く入り組んだ細い路地へと歩を進めた。

途端、周囲の音が不自然に静まり返り、代わりにかすかな足音が朽ちた長屋の間を反響する。

「おい」

それから数分後。ふいに背後から呼びとめる声を受け、蓮は足を止めた。

振り返れば、廃墟の街に似つかわしい薄汚い革鎧を身に纏った男たちが、腰から剣を提げた物々しい格好で立ちはだかっている。

ぼさぼさに伸びた乱れ髪に、垢の積もった顔。更には麻薬で濁った瞳と、明らかに堅気とは思えぬ雰囲気だ。

次いで、正面から回り込んだ数名が蓮の退路を塞いだ。これで丁度、路地を前後に挟み撃ちされたような形になる。

「なにか用か？」

にも関わらず平然とした様子の蓮を前に、男たちは一瞬、鼻白むかのように足を止める。

だが、続く言葉は蓮にとってもやや予想外だった。

「なあ、あんた。ひよっとして要氷堂って人の知り合いか？」

「……なんだと？」

蓮はぴくりと片眉を跳ね上げた。

刹那、強化された脳髓が断片的な情報を集め、一つの推察を作り上げる。

テッセラリウス陥落前後に出現し、解放軍を名乗り始めたという組織。

魔族の商人ばかりを襲い、人間の町民には義賊扱いされているという集団。

そして、軍服を身に纏った蓮の姿から、要氷堂の名を連想したという点。

「そうか、お前たちは」

蓮はその場に集った男たちの顔をざっと眺め回した。

歴戦の軍人である蓮は、彼らからある一つの共通点を見出していた。

すなわち、張りつめた表情の奥で瞬く恐怖と委縮の色。

男たちの体からは、紛れもなく『負け犬』の臭いがしていた。

「お前たちは氷堂と共に戦い、そして、三穂槍平原での戦闘から逃げ延びた連中か」

淡々と放たれた蓮の言葉に、ある者は息を呑み、またある者はさつと地面に目を伏せた。

かつて、蓮の副官である要氷堂は解放軍に加わる以前、独自に小規模の部隊を結成していた。

彼らの一部は三つ穂槍平原におけるレオパルトとの交戦で倒れ、また一部はテッセラリウスに連行された後、鉱山での戦いを経て解放軍に参加している。

しかし、ごく少数の例外は平原での戦いから逃げ延びた後、中立地帯であるプリマスに隠れ潜んでいたらしい。

（だが、結局はろくな職に就くことも出来ず、かといって解放軍に戻ることも出来ず、夜盗崩れの集団になった……というところか）
別段、珍しい話ではない。行き場を失った敗残兵が犯罪に走るのはよくあることだ。

それでもいざ実例を目の当たりにすると、なんともやるせない気分になる。

蓮はくしゃりと軍帽に手をやり、盛大にため息を漏らした。

「情けない……情けない話だな。一度はあの錬鋼の一族に剣を向けた人間が、今度は商人相手に弱い者いじめか？ まさか解放軍を偽称している阿呆どもが、氷堂の元部下だったとは」

「あ、あんた。やっぱりカナメさんの知り合いなのか？」

「俺は氷堂の上官。解放軍参謀の榊蓮だ。この第八地区を拠点としてプリマスを荒らす賊どもの討伐に来た」

突き放すかのような台詞を受け、男たちは一斉にざわめきだす。

「なんであんたらが魔族の肩を持つんだよ！ 解放軍は人間たちの味方で、魔族を殺すのが役目じゃ」

「誰が喋っていいと言った」

瞬間、問答無用で放たれた鉄拳がわめく男の右頬を貫いた。情けない悲鳴と共に倒れる同胞の姿を見て、男たちは一様にぎよつとした表情を浮かべる。

だが、蓮は委細構わず腰から軍刀を抜き放つと、凍えた瞳で男たちを睥睨した。

「貴様らが氷堂の部下ならば、間接的とはいえ俺の部下でもある。

……おい、全員そこに整列しろ。踵を揃えて背筋を伸ばせ。顎を上げて正面を見ろ！ 従わん奴はぶち殺すぞ！」

鬼教官ばりの大喝は、男たちの心胆を一斉に寒からしめた。

元より、彼らは戦場から逃げ出した臆病な人々だ。将官である蓮の威圧を受けて、反発出来るほどの根性はない。

数秒後、従順な牛の群れの如く横一列なつた男たちを前に、蓮は軍刀の先端をゆらりと持ち上げた。

「上出来だ、ゴミども。いいというまで口を開くな。俺が何故お前らに顎を上げると言ったか分かるか？ ……くだらんことをほざく馬鹿の首を、容易く斬り落とせるようにするためだ」

研ぎ澄まされた刃に喉仏をなぞられ、男たちはごくりと唾を飲み込む。

「貴様ら家畜以下のカスに、戦場で重要なことを一つ教えてやる。

それはな、恐怖の余り前線から逃亡するような兵士は速やかに処刑しなければならんということだ。戦場における恐怖は他者に波及する。それ故、軍というものは腰抜けが一人いるだけで機能を失ってしまう。これが複数人いるようであるようなら最悪だ。もうその軍隊は軍隊ですらない。ただの臆病どもの集まり……要するに貴様らのような連中に成り下がってしまう」

とん、と刀身の背に当たる部分を肩に乗せつつ、蓮は冷たい笑みを浮かべた。

「喜べ、貴様ら虫けらに二つの選択肢をくれてやる。一つ、この場で全員俺に斬り殺される。一つ、この場で全員自害する。さあ、どっちがいい？」

「そ、そんな！」

一人の青年がなにか言いかけたものの、無言で放たれた拳は容赦なく彼の意識を刈り取ってしまった。

男たちがびくりと身を竦める一方で、蓮は倒れた青年には目もくれずに淡々と言葉を続ける。

「さつさと選べ。答えを出すまで三秒だけ待つてやる。三、二、一

—

ゼロ、と言う前に蓮は肩に担いでいた刀を振り下ろしていた。

ひゅつと風を切り裂いた刃が男の一人を急襲し、その肩に鋼の牙を突き立てる。

たちまち男は断末魔の悲鳴を上げると、激痛に身を捻りながら地面へと倒れ込んだ。

流石に他の面々もこの成り行きには顔色を変えた。臆病者の彼らとはいえ、ここまでされて黙っていられるほど大人しくはない。

「く、くそつ！ こんなところで死んでたまるか！」

一斉に腰の鞘から抜剣した男たちに対し、蓮は無表情のまま真改を正面に構えた。

「よろしい。ならば、かかってこい」

その言葉を合図として、両者は廢墟の街中で交錯した。

蓮は真正面から斬りかかって来た男の顔面に肘鉄を見舞い、鳩尾に軍刀の柄を埋めて無力化する。

更に続く面々を大外刈りで地面に引き倒し、掌底で側面の壁に叩きつけ、裏拳の一発を横つ面に浴びせて沈黙させた。

それは戦闘というよりも単なる制裁だった。所詮、民間人に毛が生えた程度の兵士ではいくら数を揃えようとも、強化人間である蓮に敵うはずもないのだ。

結局、十数名いた男たち全員が地に這いつくばるまでかかった時間は三十秒ほど。

無様に呻き声を上げる彼らに対し、蓮は額に汗一つかいていなかった。

「いいぞ、童貞どもめ。戦い方を思い出したようだな」

蓮は抜き身の刃を鞘に収め、倒れ伏した男の手を掴んで引き起した。

元より、蓮に男たちを殺すつもりはなかった。最初に肩を抉られた男もただの峰打ちである。

男たちは顔に出来た青あざを押さえたまま、驚きの表情で蓮を見上げた。

「あ、あんた……」

「少々、乱暴なやり方になってしまったが許せよ。俺は不器用でな言葉で他人の心を動かす方法を知らんのだ」

世の中には蓮の主であった皇帝たる少女や、かつての宿敵ハンニバル・バルカ。

そして、解放軍の旗頭であるベルナット・クーガのように、他者を惹きつける天性の輝きを保持している者もいる。

だが、蓮自身に無条件で他人を信用させてしまうようなカリスマ性はない。

だからこそ、蓮はこのような回りくどい手を用いて、彼らに喝を入れたのだった。

「おい、お前。氷堂の部隊からこのプリマスに逃れて来たのはこのいる面子で全てか？」

「い、いえっ！ まだ南の古い灯台跡に何人か仲間がいます！」
気をつけの姿勢で立ち上がった男は反射的にそう答えた。

いかにも『やき』を入れられた新兵らしい反応に、蓮はつい苦笑を浮かべそうになってしまう。

「分かった。お前たちは先にテッセラリウスに向かえ。現地には氷堂の奴もいるから、プリマスで俺と出会った経緯を話せば居場所を用意してくれるはずだ」

「でも、俺たちは魔族相手に逃げちまって。今さら、どの面下げて戻ればいいのか……」

「敵前逃亡に対する懲罰はもう与えただろう。それともなにか？」

お前ら顔の形が変わるまで殴られ続けたいのか？」

拳を握り固める蓮の前で、男たちは一斉に首を横に振った。

「もうこりこりです。勘弁して下さい」

「ならば、回れ右だ。駆け足でテッセラリウスに戻れ。……返事はどうした、豚ども」

「は、はい」

「声が小さい！ 聞こえんぞ！」

「はい！」

「よし、行け。もう二度とこんな馬鹿な真似をするなよ」

「はい！」

まるで逃げるかのような勢いで駆け出す男たちを見送った後で、蓮は小さくため息を漏らした。

（解放軍は人間たちの味方で、魔族を殺すのが役目 か）

先ほどのシャムの言葉といい、今の男たちが言い放った台詞といい。

大同小異こそあれ、解放軍はこのような殺伐とした印象をテッセラリウス内外の人々に与えているらしい。

だが、蓮は魔族の中にもライムやケットシーのような、人間に害なす存在とはいえない者たちがいることを知っている。

蓮個人としてはこれら中立的な立場の魔族たちまで敵に回したくなかった。

しかし、この大陸におけるヒトと魔族の確執は想像以上に深い。

全ての人民が蓮と同じような考えを持っている訳ではないのだ。

「……なにか、対策を立てざるをえんか」

呟きながら蓮は海沿いの方角へと足を向けた。

この地区の南部には、市街と同じく老朽化して使われなくなった古い灯台がある。

そこがプリマス第八地区に巣食う賊徒たちの拠点だった。

プリマス第八地区の戦い？

それから更に数分後、灯台が見える岬の丘へと辿り着いた蓮はそこで足を止めていた。

既に日はほとんど沈みかけ、今はもう水平線の向こうに半円状の夕陽が見えるだけだ。

海から吹きこむ風が伸び放題の前髪を揺らし、その奥で、蓮はかすかに目をすがめた。

潮風に混じって届くかすかな異臭。それは彼にとって、海のすえたような匂いより遙かに嗅ぎ慣れた代物だった。

（血臭だと？）

それだけではない。鉄の武器同士を打ちつけ合う金属音までもが、灯台の周囲に響いている。

恐らく、蓮より先に灯台へ乗り込んだ者がいるのだ。そして、その人物は偽の解放軍相手に、大立ち回りをしているらしい。

「なにやら、面白いことになっているじゃないか」

蓮は口元をつり上げつつ、灯台の麓まで歩を進めた。

丁度そこで、崩れかけた尖塔から黒い人影が地面に向けて放り出されてくる。

蓮はすぐさま落ちて来た男の襟首を掴むと、反転して落下の勢いを殺しつつ、その体を地面へと降ろした。

「おい、お前」

尋ねかけた蓮はそこで口を噤んだ。

男は既に絶命していた。ただし、それは傍から見ても尋常な死に方ではなかった。

その人物には頭部がなかった。丁度、肩から上にかけての部分が欠落していたのだ。

恐らく、人間の頭部を人參かなにかのように引っこ抜いたらこんな具合になるだろう。

(これは……)

明らかに人間業ではない。間違いなく、魔族の力によるものだ。蓮は背筋に薄ら寒いものを感じつつ、灯台の内部に足を進めた。

プリマス第八地区に残る灯台は四角い箱型の建造物に、尖塔を組み合わせた作りをしている。蝋燭を一本だけ立てたケーキを想像すると分かり易い。

しかし、現在。石材を積み上げて作られた灯台内部の壁は、どす黒く濁ったストロベリーソースで塗り替えられていた。

通路の端に視線をやれば、元は人間だったと思われる肉塊があちらこちらに転がっているのが見える。

それらの大半はまるで巨大な肉叩きで潰されたかのように、骨ごと粉碎され、無残な屍と化していた。

「酷い有様だな」

むせるような血の臭いの中、蓮は口元を押えつつ上層階へと向かう。

夕陽に照らされ、オレンジ色に輝く血溜まりの上で、軍靴の底がぴちゃぴちゃと音を立てた。

断続的に階下へと届くのは剣戟の音ではなく、凄惨な悲鳴と断末魔の声ばかりだ。

蓮が脳漿の斑点で彩られた階段を昇り始めてすぐ、それらの音も全て途絶えた。

人の気配はもう数えるほどしかない。代わりに、濃厚な死の香りが辺り一面を覆っていた。

(近い、な)

恐らく、襲撃者はこの灯台に侵入した後、賊を殺害しつつ上層を目指したのだろう。

数は一人。血だまりに残る足跡から察するに、どうやら単騎で乗り込んで来たらしい。

にも関わらず殺戮はほとんど一方的に行われていたのか、ほとんどの死体にはろくに抵抗出来た様子もなかった。

余程の実力に開きがなければこつはならない。もし相手が魔族だとしたら、間違いなく族長級の力は持つている計算だ。

「ん？」

かつん。灯台の内部に反響する乾いた音。軍靴の先が血塗れの階段を昇り切った。

蓮が偽解放軍の一員らしき人物と対面したのは、丁度その時のことだった。

正面から伸びた通路の上。暗闇に沈んだ空間に、幽霊の如く浮かび上がった男の姿がある。

いや、正確には少し違った。

よくよく見れば、男の頭部は背後から伸びた鋼鉄の腕によって拘束されていた。

頭蓋に絡みついた五本の指がちりと彼の肉体を支え、その全身を宙に吊り上げているのだ。

男の顔は頭部を鷲掴みにされている恐怖で醜く歪み、安っぽい皮のズボンには矢禁の跡まで残っていた。

「腑抜けめ。一体どこへ逃げようというんだ？」

不意に、奇妙な深みを持つ重低音の音が通路を覆った。

「た、たすたすたすたす」

「貴様ら、仮にも解放軍を名乗っているのだから。なのに、なんだその様は？ 己おれに一太刀でも浴びせてみたらどうなのだ？」

蓮は見た。宙吊りにされた男の後背、通路の奥の闇に、血塗れの長剣をぶら下げた全身鎧フルプレートが立っているのを。

錆びた青銅の色をした刺々しい意匠の甲冑に、十字の紋章の刻まれた胸板。

兜の頂きで尻尾の如く揺れる銀の飾り紐と、背中に背負った巨大な鉄鞘

男の頭部を拘束する籠手は、幾重にも板金を重ねたかのような独特の形をしている。

（錬鋼の一族だと？ しかもこいつは……）

一般的に錬鋼の一族の多くは二メートルを超える長身を持っている。

だが、目の前の板金鎧は蓮よりもやや背が低い程度と、一族の兵士にしてはかなりの矮躯だ。

にも関わらず、蓮はその鎧姿から軍将であるレオパルト以上の重圧を感じていた。

「助けて！ 助けて下さい！」

佇む蓮の姿に気付いたのか、男は目から涙を溢れさせつつ、必死に命乞いをする。

とはいえ、流石に距離が遠過ぎる。蓮が男の元に駆けつけるより早く、板金鎧は己の前腕部へと力を込めていた。

「死ぬ」

冷たい声が男の最後を宣告した。

直後、凄まじい圧力に男の頭部がみしみしと軋みを上げ、蒼く鬱血した顔面が不気味に変貌する。

頭蓋骨のささやかな抵抗はたった一秒で終わった。男の頭部は圧搾機にかけられたかの如く爆砕され、周囲に鮮血と脳漿を撒き散らしてしまった。

「さて、と」

ざりざりと石臼を挽くかのような音を立て、籠手に包まれた指先が頭蓋骨の破片をすり潰す。

既に新たな人影に気づいていたのだろう。板金鎧は佇む蓮へ兜越しの視線を向けた。

「まだ生き残りがいたとはな。お前がこいつらの首領か？」

「いや、俺はただの見物人だ。ここの連中とは関係ない」

「そうか。ならば、己がお前と戦う理由もない訳だ」

蓮は眉を寄せた。ここは問答無用で襲いかかられてもおかしくない場面である。

「妙な男だな。何故、俺の言葉を容易く信じる」

「勘違いするなよ。己はお前の言い分など知ったことではない。た

だ、ここにいた雑魚どもとお前とでは、顔つきが別物だと思っただけだ」

「なるほど、いい目をしている。だが、少しばかり用心が足りないな」

「……なに？」

板金鎧が怪訝そうに聞き返した刹那、蓮は腰の鞘から抜き放った軍刀を真横に一閃させていた。

居合の技と神経加速装置。その二つを用いた、常人には反応すら出来ない神速の一斬である。

板金鎧にとつての救いは両者の間にかなりの間合いがあったことだ。

おかげで彼は放たれた刃を、咄嗟に左手の剣で受け止めることが出来た。

「貴様！」

板金鎧は怒声を上げると、すぐさま右の拳を振り上げた。

対する蓮は身を翻し、再び相手から距離を取る。その口元には笑みが浮かんでいた。

(今の一撃に反応出来るのなら間違いない)

現在、このプリマスに留まっている錬鋼の一族はごく少数だ。

その中でも、族長格の戦闘力を持つ者はただ一人だけのはず。

蓮は急速に警戒心を強めつつある板金鎧に対し、確信を持って言い放った。

「その矮躯。そして、その戦闘力……貴様、四軍将筆頭のエイブラムスだな」

びく、と板金鎧の構えた長剣の先端がかすかに揺れる。

しかし、それだけだ。鎧姿に動揺と言えるほどの隙はなかった。

四軍将筆頭、エイブラムス。

レギオニール地方を支配する錬鋼の一族において、大王ベルヴェルクの右腕と知られる名将である。

蓮も今まで何度かその名を耳にしていたが、実際にその姿を目的

当たりにしたのはこれが初めてだ。

やがて、僅かな沈黙の後、板金鎧は表情の見えぬ面頬の奥から、妙にかすれた笑い声を漏らした。

「賊の噂を聞いて来てみれば、まさか本物を釣り上げるとはな。己の名を察しながら仕掛けて来たということは、貴様テッセラリウスを落とした解放軍の一党か」

「その質問に答える義理はない」

「ハ……！ いいぞ。ならば、貴様の体に直接聞く。手足の数本ももがれば、その舌も少しは従順になるだろう！」

言つて、エイブラムスは片手に携えた剣を上段に振りかざした。対する蓮は正面から力任せに叩きつけられた刃を、軍刀の先端で軽く受け流す。

鋼が鳴る。噛み合った刃と刃が火花を散らす。金切り声を上げて互いの刀刃が離れる。

一端、間合いを空けた両者はすぐさま体勢を変えながら、次の一手を繰り出していた。

「しっ！」

先手を取った蓮は低く身を落とし、下段から対敵の両足を切り払いかかる。

一方のエイブラムスは剣一本で斬撃を受け止め、その隙に右腕を蓮の側頭部目がけて突き出していた。

途端、ぞつと背筋に走る死の悪寒。

咄嗟に首を捻った蓮の真横を、エイブラムスの籠手が唸りを上げて通過する。

直後、数本の黒髪だけ捉えた掌底が通路の側面を抉り、石造りの壁を粉々に打ち砕いてしまった。

（馬鹿力め！）

いくら古びて風化しかかっているとはいえ、石の塊がまるで砂糖菓子かなにかのようだ。

元より相手は人間の頭部を素手で握り潰す怪物である。同じ族長

格のレオパルトと比べても、その腕力は頭一つ飛びぬけているらしい。

蓮が崩れる壁面から距離を取る一方で、エイブラムスはお構いなしに懐へと踏み込んでくる。

この男の戦法は右の剣と左の拳による連携だ。そして、より驚異的なのは剣よりも拳の方だった。

対策としては距離を取ってしまえばいいだけの話だが、蓮の背後は階段である。下手に後退すれば、そのまま転落する危険性もあった。

ならば、まず必要なのはこの地形の不利を逆転させること。

蓮は振り下ろされた剣を捌いたところで、逆に間合いを詰め、エイブラムスの懐へと飛び込んだ。

「血迷ったか！」

エイブラムスは即座に左腕を突き出して迎撃する。掴まれば先ほど死んだ男の二の舞だ。

しかし、蓮は臆することなく前に出ると、左手でエイブラムスの手首を掴み、一瞬でその死角に回り込んだ。

更に相手が重心を崩しかけている状態で足払いをかける。結果、エイブラムスは転倒こそしなかったものの、大きく体勢を崩すこととなった。

「っ……貴様、妙な真似を！」

慌てて身を起こしたエイブラムスだが、既に両名の位置は入れ替わっている。

正確には蓮が合気の技と歩法を用い、エイブラムスの後方に回り込んだのだ。

こうして有利な位置を手にした蓮は存分に間合いを生かすと、小刻みに板金鎧へと打ちかかった。

逆に階段の手前まで追い詰められたエイブラムスは、なかなか自分の思うように動けない。

雨あられと続く連撃を捌き、受け続け、耐え凌ぐだけで精一杯だ。

「調子に乗るな！」

たまりかねたエイブラムスは平突きで剣を突き出すも、蓮はそれを下方から渾身の力で跳ね上げた。

結果、既に幾合もの打ち合いで疲労していた刃は甲高い金属音と共に、中ほどからへし折れてしまう。

勿論、その隙を見逃す蓮ではない。すかさず小手を返すと、大上段からエイブラムスの頭部目がけて刃を振り下ろす。

ざりっ　と金属の削れる確かな感触があつた。

（浅いか……！）

蓮は内心で小さく舌打ちをした。

咄嗟に盾にしたのだろう。苦痛のうめきを上げるエイブラムスの左前腕部からは、真つ赤な血が溢れ出していた。

しかし、これは好機だ。蓮は弱った相手へさらに追撃をかけるべく、軍刀を閃かせる。

きいん。乾いた音を立て、板金鎧の手元に残っていた長剣が下段からの切り上げに弾き飛ばされた。

「貴様、よくもベルヴェルク様に頂いた剣を！」

激昂しながらも腕を振りかぶるエイブラムスだが、既に蓮は間合いの外へ逃れてしまっている。

ただし、この時、彼の狙いは蓮本人ではなかった。

エイブラムスは自らの拳で、左方の壁面を打ち砕いていた。

「おい！？」

流石の蓮もこれには瞠目した。

この灯台は元々、廃棄されてから長い時間が経っている場所だ。その上、先ほどの戦闘で既に一部の壁は崩れかかっている。

これ以上の損傷を受けては、建物自体が崩れ落ちかねなかった。

「ふざけた真似を。死なば諸共のつもりか？」

「いや、死ぬのは貴様一人だ」

エイブラムスは更に一撃、握り固めた拳で石の壁を強打する。

途端、振動が建物全体に広がり、まず天井の一部が過負荷によつ

て陥没した。

追って、その重量を支え切れなくなった床が傾ぎ、通路の一角が下層を巻き込みつつ沈み込み始める。

崩壊は目に見えていた。しかし、現状で建物内から逃れる方法は存在しない。

（ならば！）

蓮は床ごと体を傾がせながらも、外壁に当たる右方の壁面を素早く軍刀で切り抜いた。

四角く切り抜かれた壁の向こうには、宵闇に包まれた大地が見える。

地面までの距離は十メートルほど。一般人ならばともかく、身体強化を受けた蓮にとって然程驚異的な高さではない。

「ちっ……待て！」

蓮は背中にかかる声を無視して、即席の脱出口へと身を躍らせる。遅れて、廃灯台の崩れ落ちる轟音が宵の岬に重く鳴り響いた。

プリマス第八地区の戦い？

蓮が脱出した後も、灯台の崩壊はしばらく続いた。

元々、この灯台は下層に四角い箱型の建造物を。上層に灯台本体ともいえる尖塔を持っている。

エイブラムスのなりふり構わぬ攻撃はあくまで下層の一部を破壊しただけだ。しかし、支えを失えば上層部が崩れるのは自明の理である。

結果として、灯台は瞬く間に尖塔を含めた全体の三分の一ほどを失い、岬に大量の瓦礫を積み上げることとなった。

（流石にくたばったか？）

危ういところで室内から脱した蓮と違い、エイブラムスは最後の時まで通路に残っていたはずだ。

蓮は岬の果て。月光に照らされた石くれの残骸を一瞥する。

彼が灯台の外へ退避した時にはもう完全に日が没し、空にまばらな星々が瞬き始めていた。

廃街の夜は静かなものだ。海から波のさざめく音がかすかに響いているだけに過ぎない。

べたつく潮風に黒髪をそよがせながら、蓮は僅かに目を細めた。

瓦礫の下で、なにか動く気配があった。

「……しぶとい奴だな」

小さな呟きが漏れた直後、崩れた石材の一部が吹き飛び、その下から錆びた青銅色の板金鎧がゆらりと身を起こす。

あれだけの崩壊に巻き込まれたにも関わらず、エイブラムスの姿は以前と全く変わらなかつた。

全身を覆う装甲も砂礫に汚れているだけだ。蓮に斬られた右腕の傷以外は、損傷らしい損傷もない。

それでも、エイブラムスは酷い屈辱を感じているのか、全身から鋭い刃のような殺気を放っていた。

「貴様、本当に人間か？ まさかあの高さから飛び降りて無傷とは」
「五点着地で衝撃を分散しただけだ。お前こそあの崩壊でよく生きていたな」

「ハ……！ 貴様は己を、ひいては鍊鋼の一族を見くびり過ぎだ」

「そうか？ 実際、お前と同格のレオパルトはただの雑魚だったぞ」
蓮は口元をつり上げ、挑発するかのような台詞を口にす。

この大陸では氏族ごとの仲間意識が強い。同胞を侮辱されることは彼らにとって耐えがたいことのはずだ。

果たして、効果は靦面だった。エイブラムスは押し殺した声で、蓮に尋ねかけた。

「貴様がレオパルトを殺ったのか？」

「奴め、まるで道化だったよ。猪突猛進だけが能の阿呆だったからな。いいようにこちらの手の内で踊ってくれた」

「己はな、貴様が、貴様自身の手で、レオパルトを殺ったのかと聞いているんだ」

「ああ。だとしたらどうするつもりだ？」

軍刀を構える蓮には答えず、代わりにエイブラムスは己の背にかけられた鉄鞘へと手を伸ばした。

ちん。甲高い金属音が鳴り、刀身を留めていた金具が跳ね上げられる。

エイブラムスは分厚い籠手で剣の柄を握り締めた。今、彼の手の中にあるのは彼が最も頼りとする武装だった。

「なるほど。あのレオパルトを仕留めた猛者であるならば、ここまでするのも道理だ。どうやら、貴様を生かして捕えることは諦めざるをえんらしい」

背負った鞘から肉厚の刃が引き抜かれ、宵闇の空に輝く月が鈍色の刀身を妖しく照らす。

エイブラムスが鞘から取り出した剣は異様に長大な奇剣だった。なにせ、刃渡りの長さだけで成人男子の身長ほどもあるのだ。

ただし、その刃は鈍ら同然に潰れてしまっている。これではま

もに肉を斬ることすらできないだろう。

(……あれは)

だが、蓮はその、むしろ剣の形をした金棒といった方がいいであろう武器を見た瞬間、怖気にも似た感覚を感じていた。

逃亡兵たちが拠点として用いていた灯台内には、幾人が力任せに潰されたかのような死体があった。

あの惨劇は目の前の男によって成されたはずだ。そして、彼の手にはうってつけの武器が握られている。

錬鋼の一族が持つという、自らの半身たる武装。

身構える蓮の前で、エイブラムスは両腕で握った大剣を軽々と頭上に掲げた。

「死した盟友へせめてもの手向けだ。　　噛み千切れ、己の半身よ」

直後、大上段から振り下ろされた刃が一瞬で蓮の眼前まで迫った。

その勢いといったらまるで砲弾かなにかのようだ。蓮は早々に軍刀で迎え撃つことを諦めると、その場から大きく横に飛んだ。

が、エイブラムスは巧みだった。彼は地面に叩きつけた刃を反動で無理矢理跳ね上げ、蓮の体を横薙ぎの形で払いにかかったのである。

「ちっ！」

蓮は咄嗟に神経加速装置を発動させ、暴風の如き斬撃を紙一重で受け止めた。

それでも衝撃までは殺しきれず、体ごと崩れた灯台の残骸付近まで弾き飛ばされてしまう。

外套をはためかせながらも一回転して着地した蓮は、そこで僅かに顔を歪めた。

脇腹から滲み出る鈍痛。どうやら今の交錯であればらの骨にひびでも入ったらしい。

だが、一呼吸置いている間はない。目の前には既に大剣を振り被るエイブラムスの姿があった。

(面倒な奴……！)

迫る刃を躲しつつ、蓮は地を蹴って板金鎧から距離を取った。

エイブラムスの半身と思しき大剣は蓮の技量を持ってしても受けるのが困難だ。

下手に手を出し、剣同士をかち合わせれば先ほどのように力負けしてしまう。

故に蓮は繰り出される連撃をいなしつつ、ひたすら好機を伺った。一瞬で構わなかった。もしエイブラムスがほんの一瞬でも手を止めれば、蓮はその隙を狙って彼の首を切り落としていただろう。

しかし、実際にはエイブラムスが息切れするより早く、状況は新たな局面を迎える。

「あら、エイブラムスさん。なにか揉め事ですか？」

突然、岬に新たな人影が現れたのは丁度その時だ。

咄嗟に横目で様子を伺った蓮は、思わず言葉を失ってしまった。

(……なんだ、あれは)

闇夜に浮かび上がる人影は三つ。内一つは錬鋼の一族と思しき、赤銅色の板金鎧だ。

恐らく、他種族との混血なのだろう。その下半身は人型ではなく、ギリシア神話に描かれるケンタウルスのような栗毛の馬体だった。

一方、上半身を構成する甲冑は凹凸の少ない流線的な形をしており、兜からは鹿の角をあしらった脇立が突き出ている。

武器は片手に携えた戦斧^{バルディッシュ}。飾り気のない無骨なフォームが、なんと物々しい。

「おやまあ、将軍ともあろうものが珍しく苦戦してますなあ」

軽薄そうな声で呟いたのはその隣、ミミズクの頭部を持った長身の魔族である。

こちらも純粹種ではないのか、胴部は朽葉色の鎧姿で、背中からは二対の翼が飛び出していた。

手に持つ武器は四メートル近くも長さがある歩兵槍^{バイク}だ。それとは別に接近戦用の長剣を一本ずつ、腰の左右にぶら下げている。

このエイブラムスの部下らしき二人はいかにも風格があり、それ

それ族長級の実力者であることは間違いないように思えた。

だが、蓮の目を惹いたのは彼ら二人ではない。

その背後に佇む、三人目の人影だ。

「……長官殿、何故ここに」

どこか悪戯を見咎められた子供のような声色で、エイブラムスはその人物に視線を投げかける。

いや 果たして、それを人物と言っているのだろうか。

なにせ、それには手がなかった。足がなかった。目鼻立ちが存在していなかった。

そもそも、それは人間の姿からは大きくかけ離れていた。

宙に浮かぶ二メートルほどの大きさをした石板。難解なヒエログリフの刻まれた奇怪な口ゼツタストーン。

それが、岬に出現した異形の姿であった。

(どういふ生き物なんだ、あれは)

逼迫した状況にも関わらず、蓮はつい石板姿の魔族を細かく観察してしまった。

今まで遭遇した魔族は姿形こそヒトからかけ離れていたものの、生物としての枠は超えていなかった。

だからこそ、蓮も人間と異なる進化を辿った種として納得が出来たのだ。

しかし、これは違う。あまりにも既存の生物学の定義を逸脱し過ぎている。

「珪素生命体？ いや、まさかな……」

うめきを漏らす蓮の前で、石板は「あらあら」と声に笑みを滲ませた。

「どなたか知りませんが、あまりレディの顔をじろじろ見るものはありませんよ」

「……失敬」

闇夜に響く声は優しい老婆のそれに似ていた。外見との乖離が甚だしく、逆に不気味だ。

（何者だ、こいつは。まさか、バシレウスの派遣した調停者か？）
元々、四軍将の筆頭であるエイブラムスがこの街に来ていたのはルガル帝国の大使を出迎えるためだった。

長官殿という呼び方、護衛が二人付いている事実から考えても、あの石板がルガルの重鎮であることはほぼ間違いない。

分からないのはそのような重要人物が、何故わざわざプリマス第八地区に迷いこんで来たのかだ。

同様の疑問を抱いたのか、エイブラムスは一度矛先を収め、ミミズク頭の魔族へと尋ねた。

「フレットナー。何故、長官殿をここに連れて来た」

「夜の散歩ですよ」

答えたのは石板本人である。フレットナーと呼ばれたミミズク頭はその隣で肩を竦めていた。

「あたしは止めたんですがねえ。どうにも女のわがままには弱くて」

「私はこの外見ですから繁華街を歩くのが難しいんですよ。ですから、人の少ないこの地区に来たんですが……そしたらこの騒ぎですよっ？」

「將軍、そいつはなんなんですか。随分と、その、親しそうに見えるんですが」

フレットナーは丸く開いた鳥目をぎよろつかせ、蓮を睥睨する。

エイブラムスはちつと小さく舌打ちをした後で答えた。

「恐らく、解放軍の幹部だ。レオパルトを殺つたらしい」

「本当ですかい？ あの人、人間にやられるような腕前じゃなかったはずですけど」

「見た目で判断するな。この男、下手をしたら己より強いぞ」

「ホ……そいつはすごい。ならば、二人がかりで行った方が良さそうですね」

「いや、三人がかりだ。ブラッドレー、お前も加われ」

「了解」

重苦しい返答と共に、馬人型の魔族が戦斧を掲げた。

その隣ではフレットナーが槍を水平に構え、逆方向ではエイブラムスが再び大剣の先端を蓮の喉元に向けている。

そして、やや離れた位置に浮かぶ石板は一人、高みの見物を決め込んでいた。

(……四対一、か)

さしもの蓮も、軍刀を握る手に冷や汗が滲むのを感じた。

相手は自身と同等の実力を持つ敵を含めた、族長格の魔族が三人更に、その後ろには実力未知数の空飛ぶ石板が控えている。

しかもひらけた岬には逃げ場がなく、救援が来る見込みもない。

正に、絶体絶命の状況であった。

プリマス第八地区の戦い？

四対一、といっても実際に蓮と戦う姿勢を見せているのはエイブラムス、フレットナー、ブラッドレーの三人だけだ。

この三名はそれぞれ武器を構えたまま、じわりじわりと包囲網を狭めてきている。

一方、蓮は下手に動くことも出来ず、その場に留まったまま相手の出方を伺っていた。

(出来れば、一度この場を離れたいものだが……)

流石の蓮も族長格三人と一度に戦うのは骨が折れる。

なにより、長物を持つ相手に対してこの広い野外は極めて有利だ。遮蔽物がない以上、彼らは存分に間合いを生かして戦うことが出来た。こうなると軍刀一本の蓮はただの的になってしまふ。

「さあて、さてさて。では、そろそろ始めるとしましょうか」

おどけるような口調と共に、ミミズク頭の魔族は長槍の先端を軽く持ち上げた。

闇夜の中、ぎよろりと瞬く丸い瞳が不気味な笑みの形に歪む。

「行きますよ、人間のお方。レオパルト將軍を倒したという実力、見せて頂きましょう！」

フレットナーは歩兵槍バイケを派手に一回転させると、挨拶代わりとばかりに鋭い刺突を繰り返した。

蓮は咄嗟に左手で腰の鞘を掴むと、突き出された穂先を弾く。既に視界の端では、他の二名も己の武器を振り被っていた。

ほぼ同時に前後から襲ってきた戦斧と大剣の挟撃を、蓮は体を捻り、軍刀で攻撃の軌道を逸らしながら回避する。

問題は、ここからだ。

敵が多対一に関して素人ならば、好き勝手に攻撃を仕掛けようと
して勝手に自滅するはず。

特に槍や斧などの獲物は他人と息を合わせずらい。広い攻撃範囲

が仇となり、武器同士が衝突を起こし易くなってしまふのだ。

「フレットナー！」

「分かってますとも！」

が、エイブラムスは呼びかけ一つで他の二人の動きを制すと、自らは勢い良く大剣を振り上げた。

すぐさま身を翻して迫る刃を回避した蓮だが、逃げた先に待つのはブラッドレーの掲げた戦斧だ。

同時に、背後から放たれたミミズク頭の刺突が喉を狙ってくる。

驚くほど息の合った連携だった。

(こいつら……！)

神経加速装置を用いているにも関わらず、蓮はまるで反撃の糸口を掴めないでいた。

巧妙なことに、エイブラムスたち三人はそれぞれ己の最も得意とする距離を維持している。

大剣を持つエイブラムスは近距離から相手の懐に飛び込み、戦斧を携えたブラッドレーは中距離から牽制。

そして、長槍を構えたフレットナーが遠距離から相手の死角を突くという、役割分担まで成されている。

この陣形は全くと言っていいほど隙がない。元々、エイブラムス一人でも手一杯なのだ。

その上、斧と槍の連撃を捌かなくてはならないのだから、蓮が息切れするのも無理はなかった。

「ちっ……」

左下段より振り抜かれた大剣。右上段より放たれる戦斧。更に正面から突き出された徹甲弾の如き槍撃。

蓮は三方からほぼ同時に迫り来る鋼鉄の唸りを、軍刀の刃で弾き、鞘を用いて逸らした。

それでも完全には捌き切れず、掠めるような一撃にざくりと頬の肉を持っていかれてしまう。

もっとも、受けた傷の痛みなど大したことはない。滅茶苦茶な動

きに限界まで酷使された肉体の方が悲鳴を上げている。

神経加速装置の最大稼働時間は十分。そして、今まで無為に浪費してしまつた時間はその半分以上だ。

蓮としては、ここで一つ博打に出るよりほかに手はなかった。

「ホオウ！」

差し当たつて干渉するのは、遠方から突きこまれた槍の一撃。

蓮はこれを軍刀の鞘で絡め取ると、側面から迫るエイブラムスの方向へと逸らした。

当然、エイブラムスは自らに迫る槍の穂先を避けなくてはならない。ほんの一瞬だが、確かな隙が生じてしまう。

その間に、蓮は限界まで体を沈めた。地面に身を伏せ、獲物を狙う獅子のように筋肉を引き絞る。

そこでようやく蓮の意図に気付いたか、エイブラムスは緊張に満ちた声を上げた。

「長官殿！」

「えっ？」

完全に無警戒だつたのだろう。石板が不意の警告を噛み砕くより早く、蓮はその体を斬り捨てていた。

ほんの直前まで、両者の間にはおよそ十数メートルほどの距離が離れていた。

だが、蓮はこれを一秒にも満たぬ間に踏破し、疾走の勢いのまま空飛ぶ石板を真つ二つにしたのだ。

辻斬りの如き一撃を見舞つた蓮は背後を振り返らぬまま、その場から駆け去る。

追つて、エイブラムスの怒声が夜の岬に轟いた。

「逃がすな！ 殺せ！」

たちまち、ブラッドレーとフレットナーの両名は放たれた猟犬の如く、蓮の背へと食らいついた。

本来、錬鋼の一族は人間と比べて鈍足だ。しかし、混血である彼らは単純な素早さにおいてもヒトを凌駕している。

蓮が灯台の麓を離れ、廃屋の並ぶ市街地へと駆け込んだ時には、もう互いの距離はほとんど詰まっていた。

「よくもやってくれましたね！」

朽ちかけた屋根を踏み越え、ミミズク頭が蓮の頭上からその行く手を阻む。

同時に、追いつがってきた馬人の魔族が、斧を片手に路地の出口を塞いだ。

(……よし)

前後から挟まれるという状況にも関わらず、蓮は内心でほくそ笑んでいた。

三対一と二対一では明確な差がある。特に三人の中で最も手練れのエイブラムスが脱落したのは大きい。

おまけに、この細い路地裏は長物を扱う相手にとって戦いづらい戦場だ。

その事実気付いたのか、フレットナーは丸い眼球を不快そうに歪めていた。

「参りましたねえ。誘い込まれた、ということですか。どうもあなたは単純な戦闘力以上に油断ならない点をお持ちのようだ」

「そいつは褒めているのか？」

「勿論ですとも。あたしたち三人と渡りあうだなんて、あなた本当に人間ですか？」

「人間だよ。一応な」

「ふうむ。ヒトの中にもこのような強者がいるとは。どうやら根本的に物の見方を変えねばならないようですねえ」

フレットナーはくるりと回した槍を、おもむろに地面へと突き刺した。

代わって腰から二本の長剣を抜き放ち、両の手に構える。

路地裏での戦いへ臨むにあたって、より扱いやすい武器へと切り替えたのだ。

蓮の背後では、馬人の魔族も戦斧の柄をやや短めに握っていた。

「ブラッドレー、さっさと片付けますよ。相手は獣人種の大王だと思いなさい」

「承知」

ブラッドレーは頷き、そして、二人はほぼ同時に蓮の前後から強襲をかけた。

しかし、この時点で彼らは間違いを犯していた。本当に相手が格上だと理解しているのならば、エイブラムスの到着を待つべきだったのだ。

結局のところ、彼らは最後まで互いの間に開いた実力の差を正しく認識をしていなかった。

二対一というこの現状ならば、油断をせず、全力をもって挑むことで勝てる。

そんな根拠のない思い込みが、彼らの敗因であった。

そして、無謀な行いにはそれなりの代価が支払われる。

蓮は手始めに正面へ突っ込むと、双剣を構えたフレットナーをその両手に携えた武器ごと袈裟がけに斬り捨てた。

更に、血飛沫を上げて倒れ込むミミズク頭を蹴り飛ばし、その場で反転。地擦りの構えから猛然とブラッドレーへと襲いかかる。

当然、馬人の魔族はこれを戦斧で迎撃するが、跳ね上がった刃はそこで突如下方へと軌道を変えた。

首元を狙うと見せかけたフェイントである。これに引っかけたブラッドレーは派手に斧を空振りしてしまった。

直後、山成りの軌道を描いた剣閃が二本の前足を纏めて切り飛ばす。馬人の魔族はなんら抵抗することも出来ず、うめき声と共に地面に崩れ落ちた。

「こんなところか」

とん、と肩に刃の背を寄せ、蓮は周囲の様子を確認した。

足を切断されたブラッドレーは最早身動きが出来ず、完全に無力化されている。

だが、もう一方のフレットナーは胸元から鮮血をこぼしながらも、

地面に突き立てた槍を杖代わりに立ち上がった。

武器越しに斬撃だったため、辛うじて致命傷には至らなかったのだろう。それでも、ともに戦えるような状態ではない。

フレットナーは口元から逆流する鮮血にむせながらも、赤く染まった嘴から乾いた笑い声を漏らした。

「は……はは。夢なら早く覚めて欲しいものですねえ。あたしとブラッドレーの二人がかりで手も足も出ないなんて……」

「安心しろ。すぐさま本当の夢にしてやる」

言って、躊躇うことなく軍刀を振りかざした。

が、蓮はそこでぴたりと動きを止める。背後から近づく足音に気付いたためだ。

振り返れば、倒れた馬人の背後。路地の先に、大剣を携えた板金鎧の姿があった。

「貴様ツ！」

間髪入れず飛びかかって来たエイブラムスに対し、蓮もまた軍刀を閃かせる。

噛み合う鋼鉄。鮮烈な刃と刃の交錯を経て、この夜、二人は三度真っ向から対峙した。

「驚いたな。もう少し時間がかかるかと思ったが、大した俊足じゃないか。どうやら、鍊鋼の一族全てが『のろま』という訳ではないらしい」

「己も予想外だったよ。まさかこの短時間で二人を倒すとは」

エイブラムスは忌々しげに舌打ちをして、重傷を負った副官たちへと視線を走らせた。

「フレットナー、油断をしたのか？」

「すみません。本気で行って負けました。この男、化け物です」

「己より強いのか？」

「分かりません」

要するに、まだ力の底を見ることが出来なかったということである。

エイブラムスは「そうか」とだけ答えた。どの道、彼のすべきことは変わらない。

「大した男だな。純正の人間でさえなければ、己の部下に欲しいところだ」

「生憎と俺の主は一人だけだ。誘われたところで断っていただろうさ」

「なるほど。そこまで解放軍の長、ベルナット・クーガとやらに入れ込んでいる訳か」

「少し違う。だが、それをお前に言ったところで分かるまい」

蓮にとってベルナット・クーガはあくまで手を貸している対象に過ぎない。

彼の主はただ一人。この世界ではもう会えぬであろう少女だけだ。「……さて」

蓮はそこでふいに空を見上げた。朽ちかけた屋根が立ち並ぶ向こうに、星々の煌めきが見える。

蓮としてはここでエイブラムスを倒し、他二人の副長も殺害しておきたいところだった。

しかし、それを出来ない事情がある。度重なる連戦、不利な状況下での激闘によって、神経加速装置の稼働時間が限界に達しようとしているのだ。

無論、装置抜きで戦うことは出来るが、なにせ相手は四軍将筆頭のエイブラムスである。

恐らく、単純な実力のみでの戦いでは蓮と同等。いや、むしろ相手の方がやや有利だろう。

となれば、蓮が取るべき選択は一つしかなかった。

「悪いな。時間切れだ、エイブラムス」

「なに？」

怪訝そうな声を上げる板金鎧の前で、蓮はぐっと身を沈める。

直後、全身のばねを用いて飛び上がった蓮は、一息に廃墟の屋根へと着地した。

風化しかけた石材の上から大地を見下ろせば、路地に取り残されたエイブラムスが忌々しげに頭上を睨みつけていた。

「貴様、逃げる気か」

「ああ、こちらにも色々と事情があるんだ」

「そうか。ならば、その首。今この時だけは預けておく」

「構わん。次は戦場であいまみえよう」

捨て台詞一つ残し、蓮はすぐさま廃屋から廃屋へと飛び移って、その場から離れた。

蓮が本気で逃走した場合、脚力で劣るエイブラムスは絶対に追いつけない。

あっさり見逃されたのは、そのことを本人もよく理解していたからだろう。

とはいえ、いくら頭の中で理解していても、感情的な衝動というものには抑えがたいはずだ。

その点、エイブラムスは激怒していても、心の中にそれを制するだけの理性を併せ持っている。

ああいう手合いは厄介だ。蓮は自らの経験からそのことをよく知っていた。

（まあ、それでも今日のところは良しとするか）

エイブラムスとその副官二人は仕留め損なつたものの、ルガル帝国から派遣されたという使者は斬り殺したのだ。

これでベルヴェルクとエルニシアが和平することもない。しばらくは一族の本隊を西部に釘付けに出来るだろう。

と、そのような考えを巡らせていた矢先のことだった。

第八地区を離れ、いよいよプリマスから脱しようかというところになって、一つの影が蓮の眼前に立ちはだかった。

闇の中、裂けた月に照らされ、ぼんやりと輝くその姿は、

「こんばんは、いい夜ですね」

宙に浮かぶ石板の形をしていた。

プリマス第八地区の戦い？

現在、大陸には幾百もの氏族があるが、その中でも魔族と呼ばれる種の生物は厳しい階層社会ヒエラルキーを築いている。

まず最下層が『眷族』と呼ばれる一般的な人民。氏族を構成する基本単位であり、大半はこの眷族が占める。

そして多数の眷族を支配し、統括するのが『族長』の役割だ。当然、その実力は眷族とは比べ物にならない。

更に多くの場合、族長には補佐として『副長』が付随する。これは眷族よりも頭一つ抜きん出た立場に置かれることが多い。

今まで榊蓮が撃破してきたのは、全てこの族長、副長、眷族の内のどれかに当たる。

だが、魔族の中には更にその上。複数の族長を支配する階級があった。

すなわち、『大王』。

大陸に住まう生物たちの頂点に立つ、絶対的な強者の存在が。

「全く、人の体を撫で斬りにしてそのまま逃げ去るなんて酷いじゃありませんか。私、こんな乱暴を受けたのは初めてですよ」

廃家の屋上で蓮と対峙した石板は、優しげな老婆の声でそう言った。

先ほど上下に分割されたにも関わらず、その肉体には既に傷一つない。

蓮は背筋にうすら寒いものが流れるのを感じつつ、行く手を塞ぐ石板に尋ねた。

「貴様、何者だ？」

「あなたは自ら名乗りもせず女性に名を尋ねるのですか」

「そうだが？」

「……礼儀のなっていない方ですね」

石板は呆れたように呟いた後で言葉を続けた。

「私はルガル帝国政務長官。『千識板の一族』が大王。名をドロ―ティアと申します」

「どうぞ、お見知りおきを」とドロ―ティアは丁寧な挨拶を述べる。

一方、蓮はその瞬間、稲妻に打たれたかのように全身を緊張させていた。

(大王、だと)

この大陸に大王と称される存在はそう多くない。

レギオニール地方においては僅か二人、ミストリア地方に至ってはたったの一人だ。

例外として、変則的な連邦帝国制を採用しているルガル帝国のみが、皇帝バシレウスを含めた十名ほどの大王を抱えている。

恐らく、ドロ―ティアはその中の一人だ。少なくとも、こんな港町の外れにいていい相手ではない。

(いや、だがある意味では妥当なのか……)

冷静に考えれば、帝国が和平を結ばせようとしているのは大王同士の間である。

となると、彼らと同列の人物が出張るのが自然だ。その点、ルガルの政務長官は肩書きとして十分だろう。

蓮は浮遊する石板を睨みつけたまま、軍刀の柄を握る手に力を込め、ぐつと身を沈めた。

神経加速装置を使うことは出来ないが、かといってドロ―ティアをこのまま見逃すわけにもいかない。

調停役である彼女には、ここで死んで貰わなくては困るのだ。

「あら、やる気ですか？ 逃げるなら止めませんでしたのに」

険しい殺気を向けられていながらも、ドロ―ティアはどこか楽しげな雰囲気を出していた。

「おもしろい方だ。どうやら、あなたは魔族の恐ろしさというものをご存知ないらしい」

「ああ。なにせ、今まで戦ってきた奴らは全て俺より格下の相手だ

「つたからな」

「そうですね。先ほどの戦闘も見させて貰いましたが、あなたは人間であるにも関わらず、多くの魔族よりも優れた力を持っている」「覗き見とはいい趣味じゃないな。そもそも貴様、一度は上下に断たれたというのに、何故平然としていられる」

「あらあら、人間の武器で私を殺せるとでも？ 愚かな方だ。勇敢な者というのはすべからく無知なのです。世の中には必ず、自分よりも強い存在がある。あなたは幸か不幸か、そういった存在に行き当たっていないだけに過ぎない。何故、ヒトが絶滅戦争より以降、長きに渡り奴隷の身に甘んじているのか。それは人間と魔族の間に決して埋めることの出来ぬ力の差があるからなのです。 若者に世の道理を教え込むのは老人の務めだ。ヒトと我々とを隔てる不登の絶壁。それをこの私が、あなたにご教授して差し上げましょう」

ドロローティアがそう言い放った直後、蓮の足元がぐらりと傾いているかの如く沈み始めている。

おまけに、地盤の液状化はおよそ蓮の位置から見える市街全てに引き起こされていた。

（なんだ、これは！？）

蓮が瞠目している間にも、石造りの壁が崩壊して、朽ちた家々が倒れながら地面に引きずり込まれていく。

上空ではただ一つ、難解な文字の刻まれた石板だけが、悠々と空を飛んでいた。

「この近辺が人のいない地区で助かりましたよ。私も無駄に死人を増やしたくはありませんからね」

「殊勝な心がけだな！」

蓮は軍刀を抜き放つと、崩れかけたあばら家の上から、一息に空中のドロローティアへと飛びかかった。

一閃、放たれた刃が石板姿を袈裟がけに両断し、裂かれたドロローティアの肉体が砂となって崩れ落ちる。

(やったか?)

瓦礫と化した木造家屋の上に着地した蓮は、敵の姿をあらためるべく背後へと振り返った。

と、そこで不意に真横から響く、なにか乾いたものがへし折られたかのような音。

直後、右腕から焼けつくような痛みが這い上がり、蓮は思わず手から軍刀を取り落としてしまった。

「ぐ……」

痛みの余り全身を硬直させる蓮の眼に映ったのは、肘から先がおかしな方向に曲がった自らの右腕だ。

その上、軍服の袖には蛇のように蠢く砂の塊が絡みつき、肉と骨とを纏めて圧迫している。

蓮は状況を把握するなり、左手で地面に突き立った刃を引き抜くと、右腕を拘束する砂礫を斬り払った。

ざくり、と頭を落とされた蛇は力を失い、ばらばらの砂粒となって消えてしまう。

(なんだ、今のは)

右腕を折られた。訳が分からない。一体なにが起きたというのか。混乱する蓮の背後では、再び元の形状を取り戻したドロートイアが楽しげにくすくすと笑い声を上げていた。

「いい顔ですね。あなた、まるで幽霊に出会ったみたいな顔をしていますよ?」

「正にそんな気分だ」

蓮は舌打ち一つ漏らして、一帯を呑みこむ底なし沼から離脱を図った。

別に侮っていた訳ではない。仕掛けた以上、手傷を負う覚悟もあった。

だが、それで分かったことといえば相手が正体不明の怪物ということだけだ。

(ここは一度、撤退するしかない)

恐らく、今の蓮では例え神経加速装置があつたとしても、あの石板に傷一つつけることは出来ないだろう。

ならば、これ以上の戦闘は無意味だ。負け試合に付き合う義理もなければ道理もない。

蓮は折れた右腕を庇いながら、地面に吞まれつつある廃屋を伝つて街の外周部に向かった。

「あら、まさかこの私から逃げられるとも思っているのですか？」
しかし、『千識板の一族』が大王ドロティアはそれを易々と許すような相手ではない。

蓮は背後から響く声に振り返つた。夜空に浮かぶ石板が凄まじい速度で追いかけてきている。まるで悪夢のような光景だ。

(化け物め！)

右腕から激痛が滲む。焼けつくような焦燥感が背中を焦がす。

蓮は百年の大戦の中で生きた軍人だ。感情と呼べるものは長期の前線生活によつて半ば麻痺している。

それでも、背後から迫る石板に対してはなにか腹の底から形容しがたい代物が沸き上がってくるのを感じた。

ヒトは、未知なるものに対して等しく同じ思いを抱く。

すなわち、『恐怖』という感情を。

「開きなさい、大地よ」

不意に闇夜をドロティアの声が覆う。

その直後、蓮の足元から半径十メートルほどの大地がなんの前触れもなく半球状に陥没した。

当然、蓮は全く抗うことも出来ず、一瞬だけ体を宙に浮かせた後、抉り抜かれた地面の中央へと突き落とされてしまう。

「ちっ……！？」

すり鉢の底から見た景色はまるで蟻地獄の中のようなだった。

おぞましいことに、なだらかな傾斜からはまるで蛆のように砂の触手が生え、獲物を求めるかのごとく蠕動している。

半球の外周部にそびえ立っているのは、巻き上げられた土によつ

て作られた六本の柱だ。

そして、肝心のドローティアといえば、陥没した地面の直上に一人悠然と漂っていた。

「うふっ。小蟻の気分はどうです？」

「最悪だ」

「そうですか。では、次はモグラの気分を味あわせてあげますね」
楽しいな声が放たれ、同時に、外周に並び立つ列柱が次々と崩壊し、土砂となつてすり鉢の中へ倒れこんで来る。

このままでは内部にいる蓮も生き埋めだ。しかし、脱しようにも地表までが遠すぎる。

慌てるな。

蓮は自身に言い聞かせつつ、外套に降りかかる砂礫をそのままに、息を整えた。

戦場で重要なことは常に冷静さを維持することだ。恐慌状態に陥る者ほど、死神によく好かれる。

状況を理解する。空間を把握する。自らの保有する戦力を認識し、それに沿って打開策を構築する。

蓮は右腕はだらりと下げたまま、両足に力を込めた。それは例えるならば、自らを一本のばねとする作業だ。

冷めた黒の瞳が頭上から降り注ぐ砂の雨を。その向こうで自らを見下ろす石板を睨みつけた。

「ふっ……！」

短く呼吸を漏らし、蓮は宙へと飛び上がった。

一息に地上へ至ることが出来ないのであれば、足場を用いられない。

蓮は都合良く空中に浮かぶ足場　すなわち、ドローティアの石板姿へと着地した。

突然の衝撃を受けたドローティアが悲鳴を上げて面喰ってる間に、その体を踏み台にして地上へと脱出する。

遅れて、崩れた柱がぼっかり開いたすり鉢を埋め立てる。

蓮は肩にかかった砂埃を払いつつ、夜の闇へと駆け出した。

既に背後からはドローティアの怨嗟の音が響いていた。

「女の顔を足蹴にするなんて！」

どうやら彼女にも顔に当たる部位はあるらしい。もっとも、人間の眼でそれを見分けろというのは無理な話だ。

（厄介な奴……！）

逆鱗に触れてしまったのか、地面の液状化した地区を抜け、街はずれに出てもドローティアの猛追は続いた。

このプリマスは街壁がない代わりに、外部から獣や盗賊が入って来れぬよう、周囲に簡単な柵を築いている。

蓮の脱出手段はその向こうにあった。ここからならば、もう残る距離はあと僅かだ。

「逃がしませんよ！」

闇に轟く怒声と共に、盛り上がった地面が太い触手となって、辺りに立ち並ぶ廃屋を無差別に薙ぎ倒す。

この時点で蓮はドローティアの異能が大地に干渉し、これを制御する力だと察していた。

無論、原理は分からない。だが、そういうものだとは理解さえすれば、まだ対策の取りようがある。

ドローティアの力の及ぶ範囲は広いものの、反面、異能の行使から発現までは一秒近くも時間差があった。

ならば直線の軌道を取らず、相手から捕捉されにくいジグザグの回避行動で攪乱すればいい。

実際、この動きを徹底してからというものの、ドローティアの追撃はことごとく狙いを外していた。

それでも、蓮が渡っているのは極めて薄っぺらい氷の上だ。一歩でも足を踏み外せば、そこには死が待っている。

（見えた！）

だからこそ、ようやく視界の先に防護柵が映った時は流石の蓮も緊張を解きかけてしまった。

そして、そのほんの僅かに警戒心の緩んだ一瞬を、ドロ―ティアは見逃さなかった。

「っ……………」

突如、背後から忍び寄る殺気に蓮は振り返る。

見れば、追走してくる石板の下半分がほどけた毛糸玉のように砂状の紐へと変わっていた。

ワイヤーと化したそれは凄まじい速度で距離を詰めると、たちまち蓮の左足を絡め取る。

蛇に巻きつかれたかのような感触に身が凍った。すかさず軍刀を閃かせる蓮だが、それも一歩遅い。

砂の紐は刃に断たれる寸前、左足の膝から下を力任せにへし折っていたのだ。

「ちいっ……………」

右腕に続き、左足からも燃え上がる激痛。蓮は衝撃に目の前が真っ赤に染まるのを感じた。

軍人という職業柄、痛みには慣れてはいる蓮だが、それでも額から噴き出す脂汗を止めることは出来ない。

体勢を崩して地面に倒れ込みつつも、蓮は左手の軍刀で防護柵の一部を斬り払った。

そのまま柵の反対側へと転がり出れば、もうそこは柔らかい草の生い茂った街の郊外である。

「来い！」

間髪いれず、蓮は草原の奥の闇に向けて声を張り上げた。

時間がない。背後からは邪魔な柵を跳ね飛ばした砂の触手が迫って来ている。

蓮は軍刀を支えに立ち上がると、折れた足を引きずりつつ無様に地面を這いずった。

「あらあら、そんな状態でどこに行こうというのです？ 力が有り余っているのですら、残る腕と足も折って差し上げましょうか？」
まるでじわじわと獲物を追い詰めるかのように、背後からは余裕

の音が響いてくる。

ありがたい、と蓮は思った。どうやらドロローティアはこちらの足を潰したことですっかり油断しているらしい。

確かに、現状ではもう蓮自身が走って逃げることは叶わない。

それでも、決してこの場から離脱するための手段がなくなつた訳ではないのだ。

常人の数倍近い聴力を誇る蓮の耳は、既に遠くから近付いてくる蹄の音を捉えていた。

「如月！」

蓮がその名を呼んだ直後、黒の疾風が草原を駆け抜けた。

主人の呼びかけに応えた如月だが、賢い彼は敵の前で足を止めるような愚行を冒さなかった。

故に、両者の影が交わつたのはほんの刹那のことである。

だが、蓮はその瞬間に白銀の鬣を掴み、片足で地面を蹴って如月の背に飛び乗っていた。

「えっ……？ ま、待ちなさい！」

この展開は相手にとつても予想外だったのだろう。追いかけてくる声には焦りが滲んでいた。

とはいえ、それも無理からぬことだ。いくらドロローティアの飛行速度が速かろうとも、相手は魔獣最速のナイトメアである。

両者の勝負は僅かな時間で決着した。石板の放った触手は如月の尾に触れることすらできなかった。

蓮は激しく揺れる馬上にしがみつきながら、四肢から響く痛みに荒い息をこぼしつつ、背後へと振り返る。

プリマスの街が、浮遊する石板の姿が、どんどん遠ざかり、やがてちっぽけな点となって消えた。

（……逃げ切った）

蓮は堪え切れず、安堵のため息をついてしまった。

思えば、あまりにも細い退路であった。しかし、蓮はその道を抜けきった。

如月も危機が去ったことを感じたのか、主人の体を労わるかの如く徐々に速度を落とし始めている。

「すまん。お前に助けられた」

蓮はそつと黒馬の首を撫でる。如月はブルルツとくすぐったそうに息を漏らした。

だが、激戦に次ぐ激戦。更にその果ての死闘によって最早、体力が限界に達していたのだろう。

精神の緊張が途切れた途端、蓮の意識はそこでぶつつり闇に呑まれてしまった。

敗將の帰還

重傷の榊蓮が如月の背に揺られつつ、テッセラリウスへと到着したのは翌朝のことである。

奇しくも丁度その頃、テッセラリウスはプリマスから届いた物資を受け取り、歓喜に沸いているところだった。

そこに半死半生状態の蓮が現れたのだ。当然、彼らの興奮は一転して混乱と驚愕に変わった。

スクローファを一刀の元に斬り伏せ、レオパルトを一撃で戦闘不能にした蓮の実力はもう解放軍の内部にも知られつつある。

それがまるで擦り切れた雑巾のような有様で帰還したのだから、彼らが戸惑うのも無理のない話だった。

「司令、一体なにがあつたのですか？」

蓮の副官である氷堂は声に不安を滲ませつつ尋ねた。

鉾山の麓に建てられた宿舎には、いくつか士官用のベッドが置かれている。

右腕左足に添え木を施された蓮は、その中の一つに腰かけたまま氷堂、及びライムと対面していた。

なお、ベルナットとルシユアは現在、物資の運び込みを指揮しているからこの場には不在だ。

加えて、彼らには蓮の負傷で動揺している人々を落ち着かせるという役割もあつた。

「それが少々厄介な相手につつかかってしまつてな。どうにか逃げ切つたものの御覧の有様だ」

満身創痍ながらも、蓮は口元に皮肉気な笑みを浮かべて見せた。

その格好は普通の軍服から軍帽、外套、上着を取り払つた格好に変わっている。

上にワイシャツ。下にカーキ色のズボンという姿は、手足に巻いた包帯と相まってまるで別人のようだった。

「ライム、お前ドローティアという名の魔族について知っているか？」

「ドローティア？」怪訝そうに聞き返したのは氷堂の隣に控えた、学生服の女性である。

「サカキさん。それはまさか、ルガル帝国の政務長官、ドローティア閣下ですか？」

「ああ、そいつだ。軽くプリマスでやりあった。久々に死ぬかと思っただぞ」

「えっ……ドローティア閣下は大王の一人ですよ？ 普通の人間が戦って生きて帰れるはずがないのに」

「だろうな。俺もあの化け物から逃げ切れたのは奇跡としか思えん」
蓮はどこか苦々しげに述懐した。

最終的には追撃を振り切ることが出来たものの、それも手元にナイトメアという逃亡手段があったからこそだ。

おまけに相手には油断があった。もし最初からドローティアが本気だったら、蓮は少なくとも十回以上殺されている。

「司令、そのドローティアとやらはどんな相手だったのですか？」

「空飛ぶ石板だ」

「……は？」

「冗談ではないぞ。ライム、お前ならあいつのことについて多少は知っているんじゃないのか？」

「ええ、まあ」

ライムはどこかためらいがちに頷く。

レギオニール地方の東端に位置するケントリオンは、冬ヶ岳を挟んでルガル帝国と国境を接している。

この二国の関係は良好で、使節のやり取りも盛んに行われており、ライム自身もあの石板姿の大王とは面識があった。

「ドローティア閣下はルガル帝国の政務長官です。神秘を司る王であり、古代種『千識板の一族』の一人とされています」

「古代種？」

「氏族ごとの種類の一つですよ。ケントリオンの分類学ではこの大陸の氏族を主に魔獣種、獣人種、魔人種、古代種の四つに分けて考えているんです」

「魔獣と獣人はなんとなく分かるがな。魔人種や古代種というのはなんなんだ？」

「魔人種とは大自然と結合し、二本の足と二本の腕を持つ氏族のことです。ちなみにこの種族は特殊な力を扱うことでも知られていて例を上げると、錬鋼の一族が持つ自らの肉体から武器を作り出す能力。私たち、冰雪姫の一族が持つ冷気を操る能力などがそれに当たります」

ライムはぴんと立てた人差し指の先に小さな氷の粒を作り出した。「この魔人種は人間や獣人種に比べて繁殖力が低く、絶対数が少ないのが特徴です。ただし、獣人種が人間の三倍近い力を持っていると言われているのに対し、魔人種の大半は人間が十人がかりでも相手にならないほど屈強です。その力ゆえ、彼らは支配階級にいることが多いですね」

「ん？ ということは、ライムさんもひょっとしてかなり強いんですか？」

「当たり前です。あのですね、氷堂さん。私はこう見えて冰雪姫の族長ですよ。錬鋼の四軍将ほどは行かずとも、並みの眷族よりは遙かに戦う力に優れているのです」

「それはどうでもいいから話を続ける」

「……何故この人は弱っている時でさえ、こう自分勝手なんでしょうか」

「司令ですから」

答えにもなっていない氷堂の台詞に、ライムはため息を漏らす。

最初こそ無体な扱いに逐一憤慨していた彼女だが、ここ最近はこのぞんざいな対応にも慣れ切ってしまった。

「それでは説明を続けます。それぞれの種族は基本的に同一の特徴を持っているんですが、古代種だけは完全に別物です。五百年以上

前、神秘の時代からこの大陸に生息し続けている彼らは、姿も生態系も氏族ごとに異なります。唯一、共通している点は個体数が極めて少ないということ。そして、その大半が大王級の実力者ということとです」

「ライム、このレギオニール地方にその古代種とやらはどれだけいる？」

「一人もいませんよ。そもそも古代種の大半は大陸の各地に隠棲していて、滅多に表舞台に現れることはありません。ドローティア閣下は例外ですが、それでもあの方がルガル帝国の領外に出てくるのは珍しいですね」

「ああ、その件についてなんだが――」

蓮はそれから手短かにプリマスで入手した情報、ルガル帝国の介入で西部の戦線が収められようとしていることを二人に伝えた。

話を聞いた氷堂とライムは徐々に顔色を蒼褪めさせ、やがて、揃ってうめき声を上げる。

もし停戦が成され、西から二万の軍勢が押し寄せたら、貧弱な解放軍に抗う術はない。

「和平、ですか。また厄介なことになりましたね」

「全くだ。ハンニバルの阿呆が好き勝手やっているせいで、こちらまでいらん気苦労をさせられる」

「ハンニバル？ 司令、まさかあのハンニバル・バルカが大陸に来ているのですか？」

「ああ。なんでも、今は革命軍などと名乗ってミストリアの魔族ども相手に暴れているらしい」

「それはすごい。もしあの方を味方に引き込めれば百人力、いえ、千人力以上ですよ！」

氷堂はたちまち目を輝かせた。かつての大戦でしのぎを削り合った者同士として、『雷神』の実力を身にしみているのは彼も同様である。

一方、普段は冷静沈着な男の珍しい興奮姿を、ライムは訝しげに

眺めていた。

「誰です、そのハンニバルという方は？」

「知り合いだ」

「また投げやりな説明ですね。出来れば詳しい話が聞きたいのですが」

「それを話すとすると時間がかかる。今はハンニバルという男が、俺と同程度の指揮力を持つ軍人だという点だけ理解しておけばいい」
「分かりました。ただ、一つだけ教えてください。その方は人間なのですか？」

「少なくとも見た目はな」

蓮はややぶつきらばうに答えた。

正確に言うと、ハンニバル・バルカは遺伝子改造によって作られたレジエンドモデルと呼ばれる人造人間の一種だ。

この科学の産物である生命体をヒトとして扱うか否かは、蓮の世界においても決着がつかっていない。

ヒトがヒトを造るという行為自体は永らく禁忌とされていたものの、共和国は大戦の最中でその禁を破っており、帝国側も前線の人手不足から『強化戦兵』と呼ばれる生物兵器を造ろうとしていた過去がある。

その後、様々な事情から共和国の『L計画』、帝国の『戦兵計画』は共に頓挫したが、既に製造された人造人間に関する問題は棚上げされたままだった。

「ただまあ、ハンニバルは俺と違って完全な善人だ。ついでに言えばどが付くほどのお人好しでもある。どうせ、現地の人間が迫害されているのを見て我慢できなくなったのだろう」

「となると、ハンニバル将軍も解放軍と同じ目的　魔族の暴力による支配からの脱却を目指しているんでしょうか」

「恐らくな。そして、人間たちに魔族という共通の敵がある以上、革命軍と連携を取るのもそう難しくはないだろう」

「……そうですね」

魔族、として一括りにされると、人外種のライムとしては微妙な気分である。

しかし、大陸における氏族の大半は人間を脆弱で、支配されるべき存在として見ている。

なにせ、ライム自身もこのテッセリウスに来る前までは、人間を愚鈍で救い難い生き物だと思っていたくらいなのだ。

ケントリオンを統治する『氷雪姫の一族』は表向き人魔平等を唱えているものの、根底での人間に対する偏見がなくなった訳ではない。

だからこそ、ライムは思う。これは仕方のないことなのだ、と。もし魔族がヒトによって打倒されれば支配の構造は逆転するだろう。

今まで人間たちが舐めていた苦汁を、今度は魔族側が味わうこととなる。

因果応報。それは当然の成り行きだ。

ここは強者が弱者を踏み躪る、弱肉強食の世界なのだから。

「ライム」

ふいに寂びた声をかけられ、ライムははっと顔を上げた。

「あ、すいません。少し考え事を」

「魔族と人間の関係について、か？」

「……ええ、まあ」

あっさり自身の不安を言い当てられ、ライムは再び俯いてしまう。

蓮は「ふむ」と顎に手をやった。丁度、その点は彼も気にかかっていた部分だったのだ。

「今のところ人間と魔族は互いに偏見を抱いている。この偏見という名の溝がある限り、両者が歩み寄ることは出来ないだろう」

「分かっています。しかし、一体どうしたらその偏見を取り除くことが出来るのか……」

「ライム、偏見というのはどこから来る？」

「無知、ですね」ライムは自身の経験からそう結論を下す。

「人間と魔族はそれぞれお互いの事をよく理解していないのです。だから相手を完全に別個の生物だと思つて、共存を諦めてしまふ」
「その通り。だから、ライム。お前が教える」

「……はい？」

「お前の肩書きは確か大学の学長だろう。つまりは教師ということだ。違うか？」

「い、いえ。確かにそうですが、しかし」

「なにも人間に対して魔族の素晴らしさを教え込めといっている訳じゃない。解放軍の面々は言葉の読み書きが出来ん連中が大半だ。

お前にはそいつらにソフィアラ語を教え込んで欲しい」

「なるほど、それは名案ですね。簡単な触れ合いから徐々にお互いのことを理解していくという訳だ」

すかさず相槌を打つ氷堂に、蓮は言った。

「ちなみに氷堂、お前もやるんだぞ」

「えっ……し、司令。それはどういうことですか!？」

「ライム一人では相手が魔族だからと、気兼ねする奴が出るかもしれないだろうが。お前もソフィアラ語の読解くらい出来るだろ」

「ですが、自分は司令と違って教鞭を取った経験などありませんよ?」

「あんなもの適当にやっておけばどうとでもなる」

とても教師をやっていた人間のものとは思えない台詞である。

ライムは呆れたように額を押さえ、小さくため息を漏らした。

「あなたの考えは理解しました。確かに現状ではそれが一番の方法のように思えます。明朝から学舎の準備に取り掛かるとしましょう」
「任せた。細々したことは氷堂と詰める。他に語学の出来る人間がいたらそいつも引き抜いて構わん」

「了解です。……でも、サカキさん。今この大変な時期に啓蒙活動などしては構わないのですか？」

「どうせしばらく戦争は行えん。なにせ俺がこの様だからな。それにこれからの戦略については幾つか考えがある」

蓮は難しい顔つきのまま、膝の上にかけられた毛布をじっと見つめていた。

オプティアからレガティアまでは遠い道のりだ。各都市の攻略には綿密な計画が必要となる。

それにミストリア地方での動乱が、この地へどのような影響を及ぼすのかも見極めなくてはならない。

問題は山積みだ。敵は強大で、未だ解放軍の勢力は脆弱である。行き当たりばつたりの作戦行動では瞬く間に敗北を喫してしまうだろう。

「会議室の地図を持って来てくれ。詳しいことは後で解放軍の主要な面子を集めて話す」

それでもプリマスで過ごした数日間、最低限必要な手札は揃いつつある。

士官、兵員、武器、食料、情報

後はこれらをどう扱い、勝利へと結び付けていくかだ。

トレヴィア攻略戦

解放軍が神蓮の活躍でプリマスの協力を取り付けた丁度その頃。

大陸の西方ではハンニバル・バルカ率いる革命軍が草原の都コロニアを発ち、敵の本拠モンティアナを目指して、ミストリア中部の密林地帯へと差し掛かっていた。

この一帯は『竜の背骨』と呼ばれるでこぼこした山地を抱えており、ところどころに高低差の激しい地域が点在している。

そして、山岳から吹きこむ風は雨を伴い、麓の低地に多種多様の樹林を構築していた。

元々、この地方を指すミストリアという呼称は『冷たい風の吹く大地』という意味だ。

『軍団』を意味するレギオニールや、『大王』を意味するルガルと比べるとなんと長閑な印象のこかを受ける。

ただし、それはあくまで外部から見た場合の話であり、現地に住む人々にとってここが地獄であることに変わりはない。

この地を支配するのは魔獣の一種である蟲たち。知能こそ低いものの、ヒトの数倍近い戦闘力を誇る生物である。

今まで、ミストリアに生きる人々はこれら蟲たちに対し、なんら有効な手立てを打つことが出来ずにいた。

そう、今までは。

草原の都コロニアと靈樹の都モンティアナの間にはトレヴィアという街がある。

主な名産品は『人間』という特異な場所だ。街の内部には広い牧

場が建てられ、日々多くの人間が生産されていた。

このトレヴィアの支配者は『地蜂の一族』と呼ばれており、その名の通り巨大な蜂の姿をしている。

彼らは巨体故に空を飛ぶ能力こそ持たないものの、顎の一噛みは岩をも砕き、尾針の一刺しは象をも殺す。

密林の狩人と呼ばれる彼ら相手では、牙も爪もない人間などただの案山子も同然だ。

相手になる、ならないの問題ではない。そもそも彼らに立てつこうとすること自体が愚かなことなのだ。

地を這う蟻が人に挑むことがないように。森に生きる人々は決して蟲たちに抗わない。

それは絶対の常識。決して曲がることのない世界の理。

だが、しかし。

英雄と呼ばれる存在は、その常識を容易く覆す。

トレヴィアに到着した革命軍五万名が『地蜂の一族』一万と交戦に入ったのは、その日の昼過ぎのことであった。

「堪えろ！ 堪えろ堪えろ堪えろお！」

トレヴィア周辺の拓けた大地で軍勢を指揮しているのは、禿げ上がった頭に深紅の羽根冠を被った、巖のような大男である。

顔に色鮮やかな化粧を施し、片手に先端の尖った丸太を持った彼は、一見して部族の戦士であることが分かる。

このミストリア地方では、少ない場合でも数十から、多い場合は百名以上の人々が一つの部族を形成しているのが常だ。

これら部族の中には魔族と同じく、人々を統率する族長と呼ばれる存在がいる。

前線で一族の部隊を率いるカバツサーも、その族長の一人だった。

「踏ん張れ！ 盾から手を離すな！ お嬢の槍隊は一体なにをやっている！？」

カバツスヤーは同胞たちを励ましつつ、背後を振り仰いだ。

現在、このトレヴィア周辺では革命軍の歩兵隊と、人の背丈ほどの体躯を持つ巨大昆虫、『地蜂の一族』が真つ向から激突していた。体が丸々隠れるほど大きな合板の盾を構えた人間たちと、それを圧殺しようと押し迫る蜂たちの大群。

他の地域と比べて大男の多いミストリア地方の住民だが、盾一枚で怪力を誇る蟲たちを押し止めるのは並大抵の労力ではない。

だからこそ、カバツスヤーは必死に味方を鼓舞する。前線が崩れれば後方の槍隊。更には最後方の弓隊も壊滅してしまう。

そうなつては、今日ここまで積み上げて来た勝利が全て水の泡だ。死ね！ この化け物め！」

カバツスヤーは盾の隙間から顔を出しかけた地蜂の頭部に丸太を叩きこんだ。

頭を潰された蟲はピギィと情けない悲鳴を立て、地面に崩れ落ちる。

だが、その後ろからは既に幾体もの新手が押し迫って来ていた。

「カバツスヤー、下がれ！」

と、そこでカバツスヤーの背後から声が投げかけられ、後方で待機していた槍隊が前線へと突撃を始めた。

彼らの持つ槍は大木を丸々一本切り出して作られており、槍といふよりもむしろ破城槌と言った方がいいような形状をしている。

部隊の先頭に立つのは、透き通るような白い肌に炎を象った戦化粧を塗りたくった小柄な少女だ。

若草色の髪の上に橙色の羽根飾りを差し、体には革をなめして造られた鎧を身に纏い、両手には鉄製の壺刀を携えている

「遅いぞ、お嬢！」

「すまん！ だが、その呼び方はやめろ！」

カバツスヤーと同じ族長の一人。ノルン族のウルザはそう吼えた

てた。

同時に、大盾隊の向こうから現れた槍隊が鋭い穂先を揃え、蟲どもの軍勢へと襲いかかる。

横一列に並んだ巨大な破城槌は容赦なく敵陣を蹂躪し、幾体もの蟲たちを無残な屍へと変えた。

「ぶっ殺せ！」

ウルザは興奮に身を包んだまま、敵の真っ只中に踊り込んだ。

両手の蛮刀を振りかざして次々蟲どもの首を切り落とし、敵が反撃してくるようならば素早く身を屈め、槍袞の奥へと退避する。

同時に素早く自軍に視線を走らせ、兵たちの疲労の度合いを確認する。こういった役目は視野の広い彼女にしか出来ないことだ。

やがて、ウルザは突撃の足が鈍って来たところで蛮刀を頭上へと振り上げた。

「盾隊前へ！ 槍隊は退けい！」

族長の号令を受け、ざっと波が引くかのように槍を抱えた兵士たちが一斉に退却する。

対し、怒りのまま追撃をかけようとした蟲どもの軍勢は、入れ替わりで前面に出て来た大盾隊に出足を挫かれてしまう。

再び部隊の先頭に立ったカバツスヤーはその隙を見逃すことなく、後方の部隊へと声を張り上げた。

「弓隊援護射撃 てえっ！」

槍隊が退く傍ら、大盾隊の頭上を越え、幾本もの矢が敵陣へ雨霞と降り注ぐ。

それもただの矢ではない。人の背丈ほどもある長弓から放たれ、先端には鉄の鏃が用いられた特製の矢弾である。

これら死の雨は地蜂の一族の硬い外殻を突き破ると、彼らの胴体を貫いて地面に串刺しにした。

（勝てる……！ この戦い、勝てるぞ！）

ウルザは息を切らせつつも、悲鳴を上げる蟲たちを見てぐっと拳を握りしめた。

戦端が開かれてから現在に至るまでの間、革命軍は密集陣形を活用して戦いを有利な方向に進めている。

現在、こちら側の被害はせいぜい千かそこらだろう。対し、魔族側はもう半分近くの兵を失っているはずである。

にも関わらず、退却に移らないのは彼らの知能が低いせいか。

いや それとも、未だに彼らの指揮官たる族長が健在だからだろうか。

「デスラベルの奴が来ないな」

敵の攻勢がやや弱まって来たのをいいことに、ウルザはひょっこり前線へと顔を出した。

デスラベルは『地蜂の一族』の族長だ。当然、他の蜂どもとは比べ物にならない戦闘力を持つ。

カバツスヤーは指揮を続けながら、小柄な体躯の少女へと振り返った。

「ウルザ、休んでいないのか？」

「あいにく、私は他の連中ほどやわじゃない。それよりあのクソ虫はいつまで奥に引っ込んでいるつもりだ？」

「どうか。一匹だけ早々に逃げ出したのかも知れんぞ」

「それはあり得ん。あいつはこの街をエルニシアに任せられている。連中にとって女王の命令は絶対だ」

「ならばその内、前線に来るだろう。まあ、来れば殺すだけだがな」

「来れば殺す、か。ちよつと前まで奴の名を聞いただけで悲鳴を上げていた男が、でかい口を叩くようになったものだ」

「からかうようなウルザの台詞を受けたカバツスヤーは「なんのことなか？」と誤魔化しつつ、ぼりぼり頬を掻いた。

ほんの一ヶ月ほど前まで、彼らは蟲たちの脅威に怯え、震えるばかりの毎日を送っていた。

それが逆に相手を追い詰めるほどまで至ったのは、彼らの背後で一人の男が動いていたからに他ならない。

ハンニバル・バルカと名乗ったその男はまず最初に数ある氏族を

纏め上げ、大規模な軍隊を作った。

そして、人々に陣形を構築し、各々が自らの役割を果たす戦法。すなわち『軍団』という概念を教え込んだ。

今までミストリアの戦士たちは各々が小さな盾と槍を持ち、背中に弓を担いで戦っていた。

だが、ハンニバルはそれぞれの兵士を専門化させ、攻防に優れた軍隊を作り上げたのだ。

この専門化された兵士はそれぞれ大盾兵、大槍兵、長弓兵に分かれており、会戦において無類の強さを誇った。

ただし、それはあくまで正面からの戦闘に限られる。

確かに武器と防具の大型化は軍勢の破壊力と防御力を格段に跳ね上げたが、一方で機動力を犠牲にしまっている。

見る者が見れば、この陣形の弱点が側面からの攻撃であることに気付けただろう。

そして、『地蜂の一族』の族長デスラベルはその弱点を見抜くだけの知能を有していた。

「っ……なんだ!？」

突如、部隊の側面から上がった悲鳴が前線まで響き渡った。

同時に、陣中まで届く戦の音。危急を告げる角笛が高らかに鳴る。慌てて戦場の横手を確かめようとしたカバツサーの肩に、すかさずウルザは飛び乗った。

「おい、お嬢!？」

「私が見る! お前は台になってる!」

自分の娘ほどの年齢しかない少女から手酷い台詞を投げかけられ、カバツサーは閉口してしまった。

一方、ウルザはそこどころの騒ぎではなかった。この陣形の弱点は彼女自身もよく知っている。

焦りを押し殺しつつ、目を凝らしたウルザの視界に飛び込んできたのは、軍勢の側面から現れた敵の奇襲部隊だ。

おまけに押し寄せる蟲たちの中には、真っ赤な甲殻を持つ一際巨

大な女王蜂が混ざっていた。

「ああ、くそ……。デスラベルの奴め、横から回り込んできた！」
「なっ、なに！」

「戦場への到着が遅れたのはそういう訳か。見かけに寄らずせこい真似をするものだ」

「感心している場合か！ このままじゃいいようにやられるぞ！」
「黙れ、ハゲ」

カバツスヤーの禿頭をはたき、ウルザは羽根のような軽やかさで地面へと着地する。

「指揮官が浮足立つな。私たちは私たちの役割を果たせばいい」

「だが、今この時にも同胞たちは……！」

「ハンニバルがこの展開を考えていないはずがない。そして、あの男は私たちに自らの持ち場を離れるなど言った。ならば、私たちの仕事は一つだ。全力で目の前の敵に当たり、これを駆逐する」

「しかし、それでは横手の敵に押し潰されるぞ！」

「……カバツスヤー、お前はもう少しものを考える。ハンニバルが組織したのはここに三つの部隊だけではないんだぞ」

その一言に、カバツスヤーははっとなった。

そう。確かにもう一つ、ハンニバルは切り札となる部隊を作り上げていた。

密集陣形の弱点は機動力だ。それ故、速さで掻き回してくるような相手には同じだけの機動力を持った部隊が必要となる。

この部隊の兵数はおよそ二千と、軍勢の中では最小であるものの、単純な突破力でいえば他三隊とは比べ物にならない。

何故なら、彼らは戦場を駆ける稲妻だ。速さと重さを兼ね揃えた、決して止めることの出来ぬ迅雷だ。

そして、デスラベル率いる一隊が軍勢の側面に食いついたまさにその瞬間、彼らは更にその後方から動き出した。

森の中より鬨の声を上げて現れたのは、手に手に槍を持ち、厚皮の鎧を身につけ、獰猛な性格の蜥竜に跨った騎兵たち。

率いる将は、『雷神』ハンニバル。

「突、撃イ！」

戦場の隅々まで轟き渡る号令と共に、ハンニバルの騎兵隊は敵陣目掛けて突撃を開始した。

それは正に雷霆のような猛進であった。背後をつかれた蟲どもは槍を振りかざす騎兵に対し、まるで抵抗することが出来なかった。

鋭く尖った鉄槍が蜂の頭部を砕き、追って、蜥竜の脚が倒れた胸部を踏み潰す。

一人、先頭に行くハンニバルは肩に羽織った軍服をマントのように翻しながら、軍勢の奥に潜む女王蜂へと肉薄した。

その手に握られた異様な長剣 アイムソード 『フランベルク』が一振り、二振りされる度、蟲たちはろくな抵抗も出来ずばたばたと倒れていく。

強襲を受けたデスラベルは泡を食って尾針を振りかざしたものの、そこにもう相手の姿はない。

既にハンニバルは機械化された長剣を手に、蜥竜の背を蹴って宙へと飛び上がっていた。

「焼き尽くせ！」

振り下ろされた機甲剣の真つ赤に燃え上がる刀刃が、デスラベルの頭部を深々と抉る。

直後、戦場に女王蜂の甲高い断末魔が響いた。フランベルクの『ヒートパイプ赤熱振動刃』がデスラベルの甲殻を引き裂き、内側から彼女の血肉を焼き尽くしてしまったのだ。

一拍の間を置き、デスラベルは真つ赤に染まった甲殻の隙間から蒸気を噴き出しつつ地面に倒れ込んだ。

その姿を見て、戦士たちは一斉に歓喜の声を上げ、逆に蟲どもは悲鳴と共に撤退を開始する。

ハンニバルは息絶えた女王蜂の上に直立すると、頭上に剣を掲げつつ全隊に号令を發した。

「追討しろ！ 一匹でも多く敵を殺せ！ 奴らに人間の強さを思い

知らせてやれ！」

言われるまでもない。相手は恨み積もった怨敵である。人々は一個の殺戮兵器と化し、逃げる蟲たちの背後へと食いついた。

その姿を見送ったところで、ようやくハンニバルは安堵の息をつく。

例え万全の態勢で戦いに臨んだとしても、勝利の際に押し寄せる感情は如何ともしがたかった。

「よし、勝ったぞ。また勝った」

「嬉しそうですね、少将」

快哉を叫ぶハンニバルの隣には、弓隊を指揮していたはずのジャンヌがいつの間にかひっそりと佇んでいた。

劇的な勝利を得たにも関わらず、その顔に浮かんでいるのは相変わらずの無表情である。

とはいえハンニバルは気を悪くした様子もなく、人形のような反応しか見せない副官の頭にぽんと手を乗せた。

「嬉しいに決まっているだろう。ここ五十年以上、サカキの奴がカイ口要塞に籠もっていたせいで決定的な勝利は掴めなかったんだ。

思い出したぞ、ジャンヌ。無様に潰走する相手を見る時の気分はこういうものだったな」

そう言って、ハンニバルは笑みを浮かべた。

北アフリカ戦線司令の榊蓮は間違いなく彼にとっての好敵手だったが、あの鬼謀の將軍相手に苛々させられたことは一度や二度ではない。

その点、今回の戦いは徹頭徹尾ハンニバルの思い通りに進んだ。彼は押し込まれた敵が側面から攻撃してくることも、完全に読み切っていたのだ。

「やれやれ、お前さんはまた美味しいとこだけ持って行くね」

追撃戦が一段落した辺りで、肩を揉みつつ現れたのは前線の指揮を取っていたウルザである。

恐らく、逃げ惑う敵を多数切り倒してきた直後なのだろう。その

瘦身は蟲たちの体液に白く染まっている。

少女は顔にこびりついた液体を拭うと、指先に移ったそれを見て「うっ」と嫌そうな表情を浮かべた。

「参ったな。全身に精液をぶっかけられたような気分だ」

「はっはっは。そんなことを気にしているようでは、まだまだ『お嬢ちゃん』だぞ?」

ウルザの後ろで笑い声を上げているのは、同じく前線から戻って来たカバツスヤーである。

「やったな、バルカ。これでモンティアナまではあと一歩だ」

「おう。だが、とりあえず二、三日はここで休憩だな。いい加減、部隊を休ませなければならんし、この地の人々を救い出す作業もある」

「ああ……うむ。そういえば、例の『牧場』の方には?」

「前もってゲオルグの奴を飛ばした。今頃は目的地を制圧しているだろう」

ハンニバルは努めて淡々とそう言った。

このトレヴィアには人間用の牧場があり、平時十万人近くもの人々が檻に囚われ、家畜として扱われている。

これらの一部はレギオニール地方のプリマス港や、更にその東にあるルガル帝国へと輸出され、莫大な富を生み出していた。

知性の高い蟲たちの中には金銀宝石でその身を飾り立てるものや、豪華な様式の建物を好むような連中も多い。

彼らにとって、トレヴィアを中心とした奴隷交易は外部から財貨を取り入れるための貴重な収入源であった。

蟲が、人を、飼う。

その事実には、ハンニバルはおぞましさを感じずにはいられない。

トレヴィアなどは逆転した支配構造の典型的な一例だ。この地方には似たような施設がいくらでも転がっている。

これら全てを討滅するためにも、早急にミストリアの中核たる『靈樹の都』モンティアナを陥落させることが必要だった。

「失礼します、將軍」

「うん？」

と、そこでハンニバルは聞き慣れた声に顔を上げる。

見れば、ハンニバルやジャンヌと同じ灰色の軍服を身に纏った中年の男が、彼の眼前までやって来ていた。

男の体つきは細いものの、背丈は平均よりやや高く、長身の部類に入るハンニバルとほぼ同じ程度だ。

髪は砂漠の大地に似た黄土色。こけた頬と不健康そうな顔色のおかげで、なんとなく病弱そうに見える。

ただ、その落ち窪んだ碧眼だけはぎらぎらと異様な輝きを持っており、油断のならない人物という印象を周囲に与えていた。

「どうした、ゲオルグ。なにかあったか？」

尋ねかけるハンニバルの前で、軍服姿の男は「いえ」と短く返答した。

男の名はゲオルグ・マイズナー。ハンニバルやジャンヌのようなレジェンドモデル「人造偉人」ではないが、大戦初期より北アフリカ戦線に加わっている古参の軍人である。

このゲオルグは革命軍の本隊が地蜂の一族と決戦を迎えている傍ら、別働隊を率いてトレヴィア内部に侵入し、囚われた人々を解放するという役割を担っていた。

「救出作戦自体は上手く行きました。ただ、救い出した人々の中に將軍に会わせるといふ者がおりまして」

「おれに？」

ハンニバルは怪訝そうに眉を寄せた後で、尋ね返した。

「そいつは女か？」

「はい。女です」

「美人か？」

「はい。美人です」

「よし、会おう」

楽しみに手を叩くハンニバルをウルザはじろりと睨みつけた。

その反対ではジャンヌが無表情ながらも、どこか呆れたような雰
囲気を発している。

「相変わらずですね、少将」

「おい、ジャンヌ。人を色情魔のように言うなよ」

「違うのか？ 全く、うちの部族の娘が何人手を出されたことか…
…」

「女の誘いは断らない主義でね。それが美人とあつては尚更だ」

「お前、いつか毒を盛られるぞ？」

「フ、自分で毒杯をあおるより、そういう死に様の方が悪くないか
もな」

全く懲りた様子を見せないハンニバルに、両者は揃つてため息を
漏らした。

ただ、唯一ゲオルグだけはハンニバルのふざけた対応にも顔色一
つ変えていない。

そもそも、これは助けられた民間人が軍の司令官に礼を述べたが
つている、というだけの単純な話ではないのだ。

「ところで将軍、実は一つだけ問題が」

「問題？」

首を傾げるハンニバルに、ゲオルグはやや硬い面持ちで言葉を続
けた。

「その者、人間ではなく魔族です」

至光の一族

結論から言うと、ゲオルグの言葉は半分正解で、半分間違いだっ
た。

トレヴィアでは城壁すらない街の中に点々と石造りの館が散らば
っている。

この石を積み立てただけにしか見えない建物が、人間たちの育成
されていた牧場だ。

正確には石洞の奥に地下へと通じる穴があり、人々はそこに囚わ
れ、蟲たちによって管理、飼育されていたらしい。

ハンニバルの前に現れた少女も、そんな虜囚の内の一人だった。

「お初お目にかかります、司令官殿。この度は私たちを救って頂き、
ありがとうございます」

そう言って、少女は優雅に一礼をした。

気品のある物腰や端正な顔立ちを見るに、彼女も元は美しい女性
だったのだろう。

だが、長い監禁生活によって頬はこけ、体つきもすっかり痩せ衰
えてしまっている。

金色の髪も泥と砂に汚れ、明るいオレンジの瞳は濁ったまま、身
に纏った襤褸の布きれから覗く手足はまるで棒のようだ。

ただ、その口元にはうつつすらと笑みが浮かんでおり、將軍である
ハンニバルを前にしてもまるで物怖じしたような様子はなかった。

「革命軍司令、ハンニバル・バルカだ。お名前を聞いてもいいかな、
お嬢さん」

「はい。私はアーリア・エリュシオン。『至光の一族』が末裔です」
真つ向から挑むような視線を向けられ、ハンニバルは「ほう」と
声を漏らす。

子供っぽい好奇心を宿した瞳は、少女の髪から飛び出した三角形
の耳へと向けられていた。

アーリア・エリユシオンは純正の魔族ではなかった。そして、同時に純正の人間でもなかった。

要するに彼女は半魔族だったのだ。ハンニバルにとって混血の人間と対面するのは、これが初めての経験だった。

(それにしても、至光の一族か……)

この大陸には賢者の国ケントリオンに住む『氷雪姫の一族』を初めとして、ごく僅かだが人間に対して友好的な魔族もいる。

至光の一族などはその代表格だ。彼らは二百年前の『絶滅戦争』と呼ばれる戦乱で、人類解放のために戦ったと言い伝えられていた。とはいえ、多くの魔族相手に『至光の一族』単体では多勢に無勢であり、奮戦虚しく彼らは敗北を喫してしまったらしい。

その後、この一族は他の氏族によって徹底的に狩り尽くされ、現在では人々の間に口伝として名を残すのみとなっている。

既に滅びたといわれる伝説の一族。混血とはいえその末裔を名乗る者が現れたとあって、革命軍の面々はにわか騒ぎ始めた。

「至光の一族、ね」

と、そこでアーリアの前に進み出たのは、ハンニバルの左隣に控えていたウルザだ。

いきなり「私は伝説の一族の末裔です」などと言われたところで、頭ごなしに信じられるはずはない。

彼女は腰から愛用の蛮刀を抜き放つと、幅広の刃を少女の足元に突き立てた。

「聞いた話じゃあ、至光の一族は自らの体に出来た傷を一瞬で癒したというじゃないか。すまないが、是非とも私たちの前で実演してくれないか？」

「ええ、分かったわ」

アーリアはなんの気負いもなく頷くと、蛮刀を引き抜き、その刃でもって自らの腹部をかつ切った。

呆気にとられたのはウルザの方である。彼女はただ少し脅しつけて化けの皮をはごうとしただけなのだ。

その場に集った部族の戦士たちも、少女の腹から地面にこぼれおちる血潮を見てさつと顔色を変える。

ただ、ハンニバルを始めとした元共和国軍の面々だけは、むしろ興味深そうにアーリアの様子を眺めていた。

「……これは、すごいな」

ハンニバルはうめくような声で呟いた。

刃で肉を切った瞬間こそ足元をよろめかせたアーリアだが、驚くべきことに彼女の傷は一秒の間も置かず、みるみる再生を始めていたのだ。

居並ぶ人々が一斉に感嘆の声を上げる中、とうとうアーリアの傷は何事もなかったかの如く、綺麗に塞がってしまった。

「どうですか？ これで私が至光の一族の血を引いている証明にはなったかと」

アーリアは青白い顔に微笑を浮かべかけたものの、流石に体力の限界に達したのか、そこでぐらりと体ごと倒れかけてしまう。

慌てて支えようと手を伸ばしかけたウルザだが、その前に素早く駆け寄ったハンニバルが少女の細い体を抱きとめていた。

「おい、大丈夫か？」

「……すみません。少し立ちくらみが」

「無理をするな。それと、さっきみたいな真似は禁止だ。おれは女が傷つくところを見て喜ぶような性質でもないからな」

「でも」

「でももくそもない。今は体力を回復させる。話はそれからだ」
きつぱりと強い口調で言われてしまい、少女は目を伏せる。

しばし逡巡するような気配を見せたものの、結局アーリアはハンニバルの言に従った。

「分かったわ。どうも、あなたはかなり強引な性格のようね」

「でなければ司令官などやってられんさ」

事もなさに嘯いて、ハンニバルはアーリアを腕の中から解放した。

「ウルザ、この娘のことを頼む。女同士でないと色々手の回らないこともあるだろう」

「……了解」

なんとなく自分がないがしろにされているような気分になったのか、むくれた様子で応えるウルザ。

ハンニバルは苦笑を浮かべつつ、その頭にぽんと手を乗せた。

「拗ねるな」

「ふんっ」

ウルザは小さく鼻を鳴らした。白い頬はかすかに朱に染まっっている。

仮にも部族の族長である彼女だ。部下の前で子供扱いされるのは愉快な気分ではない。

とはいえ、最初こそ反発していたウルザだが、今ではハンニバルの好きなようにさせてしまっていた。

この男の手の平は妙に温かく、安心した気分させられる。日々、族長の責務に追われるウルザにとって、それは短い安らぎの時間だった。

「私はノルン族の族長、ウルザだ。よろしく頼む」

ハンニバルの手に若草色の髪を撫で回されながら、ウルザはそう言っただけで自己紹介を終えた。

それから約半日が過ぎ去った後。体を休め、身を清めたアーリアはトレヴィア内に築かれた天幕へとやって来ていた。

現在、革命軍はこの地に留まり、人々の救出と街の復興に全力を傾けている。

街の内部には動物の皮を継ぎ合わせて造られた天幕が幾つも並べ

られ、炊き出しと衣料品の配布を行っていた。

なにせ、この地に監禁されていた人々は着のみの服すら持っていないような有様だったのだ。物資はどれだけあっても多過ぎるということはない。

アーリアも当初は寝床用の襪褌布を身に纏っていたが、悪臭に耐えかねてウルザから借りた木綿の貫頭衣へと着替えていた。

「おおつ、こりゃあまたすごい美女が出て来たな」

そう言っつて、小さく口笛を吹いたのは天幕の下の絨毯に腰を降ろしたカバツスヤーである。

確かに彼の言う通り、全身の汚れを落として、きちんとした格好をしたアーリアは正しく天女のような美しさであった。

細い足首から股間まですらりと伸びた足。ウエストはきゅっと絞まっつており、その癖、胸の上では豊かな双丘が柔らかな膨らみを見せている。

やや薄めの唇は薔薇色に濡れ、オレンジ色の瞳も活力を取り戻し、セミロングの形に整えられた頭髮は体内に混じる『至光の一族』の血によるものか、ほのかに温かな光を放っていた。

「面白い体質だな。夜中に寝にくくないのか？」

「とうに慣れたわ」

アーリアは尋ねかけてくるハンニバルに、どこか悪戯っぽい笑みを向けた。

先ほどまでは敬語で会話していたアーリアだが、ハンニバルの手柄を知つてからは砕けた口調へと変わっている。

この場を集つた面々も特にそれを咎めなかった。そもそも、部族の戦士たちですらまともに敬語を使っている者はいないのだ。

「まあ、とりあえず座りなよ。アーリアも夕飯食べるだろ？」

一足先に羊の敷物へと腰を降ろしたウルザに誘われ、アーリアは「ええ」と頷く。

現在、天幕の下で食事を取っているのはハンニバル、ジャンヌ、ゲオルグという元共和国軍の面々である。

そして、それと向かいになるような形でカバツスヤー、ウルザ、アーリアの三名が並んでいた。

車座になった彼らの前には半透明の液体が注がれた椀と、チーズにも似た乳白色の塊の盛られた皿が置かれている。

アーリアは甘い匂いに誘われて、椀に手を伸ばした。ぐっと飲み干すと、ほのかな甘味が口の中に広がり、胃がぼかぼか暖かくなる。「これ、蜂蜜酒だったのね。おいしいわ」

「多分、外に輸出するつもりだったんだろうな。貯蔵庫にあったんで有難く頂戴してる」

ウルザは自らも蜂蜜酒を傾けつつ、火に焙られた白い塊を小さくちぎっては口の中に放り込んでいた。

彼女に習って皿の物体に手を伸ばし始めたアーリアだが、こちらは大きく味がなく、半熟の卵白を食べているような気分になる。

「こつちの白い塊はなにかしら。不思議な味がするけど」

「子供だよ」

「子供？」

「蜂のな」

ウルザの回答に、アーリアは思わず啞内の物体を吐き戻しそうになってしまった。

青白い顔のまま口元を押さえるアーリアを見て、ハンニバルは「あー」と声を上げた。

「ほら、やはりこれが普通の女子の反応だろうが。平然と食べてるお前らがおかしいんだよ」

「なに？ これは木の根や皮よりずっと栄養価が高いんだぞ」

「ええ、それに向こうの合成食糧に比べれば味もまともですしね」

「すかさず反論したのは『おかしな女の子』扱いされたウルザとジヤンヌである。」

元々、両者とも食事を選び好みするような性格ではない。それに蟲の幼虫は貴重なタンパク源だ。

古くからこの地に住む者にとって、蜂の子というのは滅多に食べ

られないごちそうなのだった。

「アーリア、きついんなら無理して食べなくてもいいんだぞ。私が貰うから」

「……いえ、食べるわよ。ちょっと驚いただけ」

と、やせ我慢をしつつ、アーリアはぶよぶよした蜂の子のステーキを口の中に放り込んだ。

柔らかい肉を奥歯で噛みしめると、なにか形容しがたい味が舌の上に広がり、酷くやるせない気分させられる。

そうして多大な精神力を消費しつつ、蜂の子ステーキを胃の中に収めた後で、アーリアは既に食事を終えていた一堂へと向き直った。

「ハンニバル、革命軍の幹部はここにいる人たちで全員？」

「いや、他にも幾人か部族の族長がいる。だが、人を集めてするよな話なのか？」

「少し確認したいことがあるの。あなたたちが、魔族の大王についてどこまでの知識を持っているのか」

やや硬い口調で言われて、ハンニバルは眉を寄せた。

基本的に大陸の魔族は強力な上下社会を築いている。大王というのはその中の頂点に立つ存在だ。

そして、この地方における大王級の魔族はただ一人しかいない。

すなわち、大陸四帝の一人。『千枚翅の一族』が女王、『飛蝗帝』エルニシアである。

「おれも話には聞いている。魔族の大王というのは他の連中と比べて別格の力を持っているらしいな」

「そうね。でも、安心していいわ。エルニシアははつきり言って、彼らの中でも最弱と言っていていくらいの存在だから」

「そうなのか？　だが、年老いた族長たちのほとんどは飛蝗帝の名を異常なくらいに恐れていたぞ？」

「当たり前よ。だって、エルニシアがその気になればここにいる人間たちの軍隊なんて一日で全滅しちゃうもの」

「……なんだと？」

アーリアの言葉に、むっとした表情を浮かべたのはカバツスヤーである。

なにせ、ハンニバル率いる革命軍はここまで破竹の勢いで勝利を重ねて来たのだ。

にも関わらず、この強大な軍隊が一日で全滅するなどと言われている不愉快な気分になるのも無理はない。

ただ、他の面々はカバツスヤーほど短慮ではなかった。彼らはアーリアの言葉に、まだなにか隠された部分があると気付いていた。「アーリア、どうということだ？」

先を促すハンニバルの前で、アーリアはしばし言葉を選ぶかのような様子を見せた。

「……私も先祖からの言い伝えで聞いたただけなんだけど、エルニシアは『黒死の風』を運ぶ王なのだそうよ」

「『黒死の風』？」

「そう。エルニシアは飢餓と疫病を司る魔王。彼女は自らの眷族たちを通して、人々の間に凶悪な伝染病を広げることが出来るの。もし飛蝗帝がその羽根を広げれば、革命軍だけじゃない。この地方の生きとし生けるもの全てが恐ろしい病魔に侵され、やがては死に至ってしまおうでしょうね」

アーリアの台詞は形容し難い悪寒を伴って、その場に集った面々の心腹に染み渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4299v/>

人外魔境戦記譚

2012年1月8日02時49分発行